

人間豹

江戸川乱歩

青空文庫

猫ねこぞく属の舌

神谷芳雄はまだ大学を出たばかりの会社員であった。しかも父親が重役を勤めている商事会社の調査課員で、これというきまつた仕事もない暢のんき気な身の上であつたから、飲み覚えた酒の味、その酒を運んでくれる美しい人の魅力が忘れがたくて、つい足しげくその家へ、京橋に近いとある裏通りの、アフロディテというカフェへ通よいつづけたのも、決して無理ではなかつた。

しかし、もし彼がもつと別のカフェを選ぶか、そのウエートレスと恋をするほども足しげく通よわなかつたなら、あのような

身の毛もよだつ恐ろしい運命にもてあそばれなくてすんだに違いない。彼がこの物語の主人公、怪物人間豹ひょうを知ったのは、実にカフェ・アフロデイトにおいてであつたのだから。

ある冬の、殊ことさら寒い夜ふけのことであつた。神谷はまたしてもカフェ・アフロデイトの片隅かたすみのテーブルに腰をすえて、ウイスキーをチビチビとなめながら、ウエートレスの弘子とさし向かいで、もう三、四時間ほども、意味もない会話を取りかわしてた。

「きようは変だね、まだ十一時なのに、僕のほかには一人もお客さんがいないじゃないか」

ふだんから、なんとなく陰気な、客の少ない、その代りにはゆ

つくりと落ちつきのあるカフェであつたが、今晚は殊に、まるで空き家にも坐すわっている感じで、薄暗い電燈でんとうといい、シーンと静まり返つた様子といい、なんだかゾツと怖こわくなるほどであつた。

「魔日まひつていうんでしよう、きつと。そとは寒いでしょうね。でも、邪魔じゃまがなくなつて、この方がいいわね」

弘子は恰かつこう好こうのよい唇くちびるをニツとひらいて、神谷の好きな八重齒やえばを見せて甘えるように笑つた。

すると、ちようどその時、入口のボーイが客を迎える声が出て、コツコツと靴くつの音をさせながら、一人の男がはいつてきて、一ばん隅すみつこのシユロの鉢植はちえの蔭かげのボックスへ、人眼ひとまなこをさけるように腰をおろした。

神谷はその男が歩いているあいだに、風采ふうさいや容貌ようぼうを見てとることができたが、彼はまっ黒な背広を着た、ひどく瘦せ型の、足の長い男で、その顔はトルコ人みたいにドス黒く、頬ほおが瘦やせて鼻が高く、びっくりするほど大きな、何かの動物を連想させるような両眼が、普通の人よりはずっと鼻柱に近くせまって、ギラギラと光っていた。年配は三十歳ほどに見えた。

神谷はそれからまたしばらく、弘子と楽しい密語をささやきかわしたが、そのあいだも、シユロの葉蔭の客が、なんとなく気になつて仕方がなかつた。彼はこんな変てこな感じのする人間を、まだ見たことがなかつた。

弘子も同じ心とみえ、話しながら、絶えずその方をジロジロと

見ていたが、とうとう我慢ができなくなったように、ささやき声で訴えた。

「いやだわ、あの人、さいぜんからあたしの顔ばかり見ているのよ。ほら、あの葉蔭から、大きな眼で、あたしの方をじっと見つめているのよ。気味がわるいわ」

なにげなくその方を見ると、なるほど、シユロの葉の隙間に、すきま螢ほたるび火のように異様に光る眼が、猫ねこが鼠ねずみを狙ねらう感じで、射るよう
に弘子に注がれている。

「あれ初めての人？」

「ええ、そうよ。あんな人見たことないわ」

「失敬なやつ」

神谷は聞こえよがしに舌打ちして、相手の眼を睨にらみつけたが、すると、先方でもそれに気づいて、鋭い視線を神谷に向けた。

「なにくそ、まけるもんか」

と彼は酔っていたので、睨みつくらでもする気になって、じつと眼をすえて、しばらく睨み合っていると、不思議なことには、相手の眼中の螢火がだんだん強く輝きだし、しまいには眼の前一杯に、えたいのしれぬ妖ようこう光がひらめき渡って、クラクラと眼ままいを感じないではいられなかった。そしてなんともいえぬ悪寒おかんが頸くびすじ筋をゾーツと這はいまわった。

「あんなやつ、気にするのよそうよ。君も向こうを見ないでいる方がいい、あいつどうかしているんだよ。あたり前の人間じやな

いよ」

「ええ、じゃあ、もう見ないわ」

しかし、やがて、無関心を装っているわけにはいかないことが起こった。

「ねえ、弘ちゃん、あたし困っちゃったわ」

怪しい客の相手をしていたウエートレスが、まっ赤に酔った顔をして、二人のテーブルに近づくと、声を落として言った。

「あの人からねえ、どうしてもあんたに来てほしいっていうのよ」

「いやよ、そんな失礼な。あたしは、芳よっちゃんのお相手してるんじゃないませんか」

「ええ、そりゃわかかってるわ。だから番が違うからってお断りし

ただだけれど、聞かないのよ、酔っぱらっちゃって、乱暴しかねないのよ。ちよつとでいいから、顔を出してくんない？」

それを聞いていると、神谷はムカムカと癩かんしやく癩やくが起こつてきた。

「だめだつて言いたまえ。人の話している相手を横取りするやつがあるか。ぐずぐず言つたら僕が行つてやるよ」

すると、ウエートレスは一度帰つて行つたが、すぐ引つ返してきて、

「じゃあ、そのお客さんに会いたいわつていうのよ。こちらへ押しかけそうにするのを、やつととめてきたの、弘ちゃんごしやう後生ごしやうだから……」

と、泣きそうに言う。

「よし、じゃあ僕が行ってやる」

神谷は立ち上がって、「あらいけませんわ」と二人の女がとりますがるのを、つきのけるようにして、ツカツカと、シユロの蔭のボックスへはいっていった。

「僕に用事があるそうですか」

と、酔っているものだから、少しばかりウルサがたに詰めよつた。

男は、グラスも、ウイスキーの瓶^{びん}も、テーブルの上に倒してしまつて、恐ろしい眼をすえて、皿のビーフステーキを、めちやめちやに切りきざんでいたが、神谷の声を聞くと、ヒョイと顔を上

げてニヤニヤと笑った。

「ええ、用事があるんです。用事というよりはお願いなんです。僕、あの子が好きになっちゃったんです。会わせていただけませんか」

案外おとなしく言われたので返事に困っていると、

「会わせてください。でないと、僕、自制力を失ってしまうかもしれない。僕を怒らしちゃいけないのです。ごらんなさい。僕の口を、僕の口を」

見ると、彼は歯ぎしりを嚙かんでいるのだ。奥歯をギリギリいわせて憤怒ふんぬをかみ殺しているのだ。そして、じつとこちらを見つめている眼が、大きく大きくひらいて、また異様な燐りん光こうが燃えは

じめた。

「だって君、それは無理じゃないか。あの子は僕の馴染なじみなんだぜ。それを横取りしようなんて」

神谷は虚勢を張った。

「いけませんか。いけませんか」

男はせき込んで尋ねる。

「ええ、困りますね」

「ああ、僕を救ってください。僕は自制力を失いそうです。もし自制力を失ったら……」

彼は齒を気味わるく鳴らしながら、何を思ったのか、拳骨げんこつを作っていきなりテーブルをなぐりつけた。幾度も幾度もなぐりつ

けているうちに、指の関節が破れて、血が流れはじめた。そのテ
ーブルにしたたった血の上を、無残にもさらになぐりつづける。

彼は彼自身の心と戦っているのだ。歯を食いしばったり、指を
傷つけたりして、何かしら兇きようぼう暴な衝動を抑えおさつけようとして
いるのだ。だが、それにもかかわらず、ともすれば、こみ上げて
くるけだもののような怒りが、彼の全身をワナワナと震ふるわせ、両
手の五本の指が何かつかに掴みかかるように、醜くキューツと曲がっ
てくるのだ。そして、眼は一そう青く燃えたち、歯はガチガチと
鳴る。

神谷はそれを見てみると、我慢にも虚勢が張っていられなくな
った。酔いもさめきって、心の底まで冷えわたるような、なんと

もえたいの知れぬ恐怖に、震えあがった。

「弘ちゃん、ちよつとここへ」

思わず知らず呼んでしまった。

「なによ」

すぐうしろで、弘子の声が答えて、彼女は、やけな調子で、ボツクスへのめり込むと、男の隣へ腰かけた。

「ああ、君、君は弘ちゃんていうの？」

男の相好が、実に突然に、ガラリと変ってしまった。彼は弘子の肩を抱いて、ニヤニヤしながら、お詫^わびでもするように話しかけるのだ。

「僕ね、恩田っていうんだ。君に、贈り物がしたいのだがね、う

けてくれるかい」

彼は前に見はっている神谷の方を、気まずそうに盗み見ながら、大きな口をペタペタいわせてささやいた。そうだ、この恩田という怪人物の口は、実に大きかった。もし思い切つてひらいたら、耳まで裂けて、あの骨ばつた顔じゆうが、口になつてしまうのではないかと疑われた。唇はそんなに厚ぼつたくなかつたが、非常に赤くて、絶えずヌメヌメと濡ぬれているように見えた。

恩田は自分の指から奇妙な形の指環ゆびわを抜きとり、辞退する弘子の手を無理にとつて、その指にはめてしまった。

「美しい弘ちゃんにはじめて会つた記念です。大切にしてください」

彼は指環をはめたついでに、弘子の手をギュツと握りしめながら、実に独りよがりなわがままな調子で言うのだ。

神谷はムツとしたが、恩田のさいぜんの形相を思い出すと、恐ろしくて手出しがでしなかつた。狂人の痴態として見のがすほかはなかつた。

狂人は、ころがつていたウイスキーの瓶を取つて、こぼれ残りの酒をグラスにつぐと、

「弘ちゃんのために、プロージツト！」

と、叫んで、それをグツと飲みほして、長い舌をペロペロと舐めまわした。異様に長いまつ赤な舌であつた。だが彼の舌は、長いばかりではなかつた。赤いばかりではなかつた。そのほんとう

の恐ろしきは、やがて、彼がビーフステーキを口に持っていった時に、ハッキリとわかった。

それは決して、酔った神谷の幻覚ではなかった。弘ちゃんともう一人のウエートレスも、ちゃんとそれに気づいていて、あとでまっ青になって話し合ったことであつた。

恩田はフォークで、ポタポタと赤い血のしたたる、厚ぼつたい牛肉の一片をつき刺すと、口をグワツとひらいて、赤い舌をヘラヘラと動かして、それをさもうまそうにたべたのだが、その時、^{びんしよう}敏捷に動く舌の表面が、電燈の光を受けてまざまざと眺め^{なが}られた。

ああ、あれが人間の舌であろうか。まっ赤な肉の表面に、針を

植えたような一面のささくれ。それが、舌を動かすたびに、風に吹かれた草むらの感じで、サーツと波打って逆立つのだ。決して人類の舌ではない。猫属の舌だ。神谷は猫を飼ったことがあるので、そういう舌の恐ろしさをよく知っていた。兇暴な肉食獣の舌、猫か虎か、でなければ豹の舌だ。

巨大な両眼に燃える蛍光といい、黒ずんだ骨ばった顔といい、まっ赤な猫舌ねこじたといい、敏捷な身のこなしといい、黒い豹！　そうだ、この男を見ていると、熱帯のジャングルに棲すむ、あの孤独で兇暴な陰獣を、まざまざと連想しないではいられぬのだ。

おれは果たして正気なのだろうか。この怪物は酔眼すいがんをまどわす幻影なのではあるまいか。それともおれは今、悪夢にうなされ

ているのかしら。

神谷は見ているのも恐ろしくなつて、眼をそらそうとしたが、そらそうとすればするほど、かえつて、眼に見えぬ糸で引き戻されるように、いつの間にか、相手のけだもののような口辺を凝視しているのであつた。

闇^{やみ}にうごめく

恋人を保護したいばかりに、恐ろしい思いをこらえこらえて、怪物と同じボックスに対座していたあいだが、どんなに長く感じられたことか。だが、恩田はやっぱり、時々ギリギリと歯を齧^かみ

鳴らしてはいたけれど、これというきようぼう兇暴なふるまいもせず、一時頃ごろまで、弘子の顔に見とれながら、飲んだりたべたりしていたが、もう看板だからと断られると、さも残り惜おしそうにして、弘子に繰り返し繰り返しサヨナラを言って、案外おとなしく立ち去った。神谷はホツとして、青ざめている弘子をなぐさめておいて、一ひと足遅あしれてカフェを出た。

人通りのまったく途絶えた、夜ふけの裏町には、氷のような黒い風が、悲しげな音を立てて吹きすさんでいた。神谷は突然さぶく沙漠の中へほうり出されたような淋さびしい気持になって、帽子をおさえながら、タクシーを拾うために、近くの大通りへと歩いて行ったが、ヒョイト、その町角を曲がると、大通りの青白い街燈の下に、

さいぜんの恩田が立っているのが見えた。

カフエでは、丸めて脇わきの下にかかえていたので、それとわからなかったが、いま見ると、彼は背広の上には不似合いな、黒のインバネス・コートを着て、巨大な夜の怪鳥けちようの姿で立っているのだ。風が吹きすぎるたびごとに、そのインバネスの裾すそや袖そでが、ヒラヒラと、コウモリの翼のようにひるがえっている。

神谷は怖こわいもの見たさに、じっと立ち止まって、西洋の古い物語に出てくる魔法使いみたいな恩田の姿を見つめっていると、彼は突然、黒い風に向かって、妙な叫び声を立てながら、だだっ子のようにじだんだを踏みはじめた。ただの寒さしのぎではない。気が違いそうに昂奮こうふんしているのだ。どうにもならない衝動を、そ

うしてまぎらしているのに違いない。

神谷は、不思議な引力のようなもので、怪人に引きつけられていた。どこまでも、この男の跡をつけてみたいという気持を、おさえることができなくなった。怖ければ怖いほど、その正体が見届けたかった。間もなく恩田は一台の空き車を呼び止めて、その中に消えた。神谷もイライラしながら、あとから来た自動車に飛び乗った。

「あの前の車を、どこまでもつけてくれたまえ、なるべく先方に悟られないように。料金は君のほしだけあげるから」

深夜の大道は、なんの邪魔物もなく、尾行にはおあつらえ向きであった。二台の車は風を切って矢のように走った。

新^{しんじゆく}宿^{しゆく}までは窓外の町並に見覚えがあつたが、それから先はほとんど見当がつかなくつた。車は場末^{ばすえ}へ場末へと道を取つて、いつの間にか人家もまばらな田舎道^{いなかみち}へはいつていたが、やがて四、五十分も走つたと思う頃、やつと前の車が停車した。

神谷は先方に気づかれぬよう、半丁も手前で自動車を降りて、運転手にここはどこだと尋ねると、なんでも荻窪^{おぎくぼ}と吉祥寺^{きちじようじ}の中ほどらしいとの答えであつた。

「じき帰つてくるからね、君はヘッドライトを消して、ここに待つてくれたまえ」

と命じておいて、急いで恩田のあとを追つた。

街道の両側には、大入道のように聳^{そび}えた巨木の並木のあいだに、

チラホラと人家があつて、ところどころにボンヤリ常夜燈がついている。すかして見ると、恩田の黒いコウモリのような姿は、その街道の半丁ほど先を、大股おおまたに歩いて行く。

ちようど彼の黒い影が、一つの常夜燈の下を通りかかった時であつた。突然、行く手から一匹の犬が走り寄つて、けたたましく吠え立ほてた。

恩田は足を上げて「シツ、シツ」とそれを追つたけれど、そうすればするほど、犬はますます吠え立てるのだ。犬とても、彼の異形の風体には、脅おびえないではいられなかつたのであろう。

この小動物の執拗しつような攻撃に、怪人はまたしても激情のじだんだを踏みはじめた。足を交互に上げて、両手を胸の前で握りしめ

て、ここからは聞こえないけれど、おそらく例の歯ぎしりを噛か
でいるのに違いない。実になんともいえない無気味な気違い踊り
をはじめた。

それを見たら、人間ならたちまち震えあがつて逃げ出すのであ
ろうが、犬は逃げるところか、かえつてますます勢い烈しく挑み
かかった。

すると、次の瞬間、ああ、実に恐ろしい事が起こったのだ。神
谷はその時のすさまじい光景を、いつまでも忘れることができな
かった。

怪人は、異様に鋭い叫び声を立てたかと思うと、パツとインバ
ネスの羽根をひろげて、まるで一匹の猛獣のように、哀れな犬に

飛びかかって行った。

薄暗い常夜燈の下に、人と犬とは黒い一つのかたまりとなつて、鞠まりのようにころがりまわつた。人も犬もはや声さえ立てず、恐ろしい沈黙のうちに闘つた。

だが、この段違いの争いは長くはつづかなかつた。黒いかたまりが、パツタリ動かなくなつて、ソロソロと立ち上がったのは恩田の影であつた。立ち上がると、そのまま振り向きもしないで、立ち去つた彼のあとに、グツタリと横たわっているのは、可哀かわいそうな犬の死骸しかいだ。

神谷はその犬の死骸に近づいてみて、さらに戦慄せんりつを新しくした。犬は無残にも口を引き裂かれて、まっ赤な血のかたまりにな

って倒れていたのだ。ああ、なんとという怪物だろう。あいつは人間ではない。人間がこんな残酷なまねをするものか。それにこの恐ろしい力はどうだ。あいつは犬の上顎うわあごと下顎うげあごに両手をかけて、メリメリと引き裂いたのに違いないが、なみなみの力でそんなことが出来るものだろうか。

神谷は相手のあまりの残虐ざんぎやくにおじけづいて、よほどそのまま引つ返そうかとも思ったが、彼の執念深い好奇心は、怖こわさに打ち勝って、両手に脂汗を握りしめながら、またも怪人の跡を追った。

しばらく尾行して行くと、恩田は街道をそれて、雑木林ぞうきばやしの中の細道へ曲がった。そのまばらな雑木林の遥はるか向こうに、星空を

くぎつて、一とむらの森のようなものがある。その中にチラチラとあかりが見える様子では、立木に囲まれた人家に違いない。恩田はあの原中の一軒家へ帰るのであろうか。

街道の常夜燈を遠ざかるにつれて、雑木林の中は、だんだん闇が濃くなって、その闇の中に黒い影を尾行するのは非常に困難であつた。

だが、やがて雑木林を出はざれると、どうしたことか、つい今しがたまで、おぼろげながらも見分けられた恩田の影を、パツタリと見失ってしまった。まぎれやすい林の中では、ちゃんと尾行していたのに、闇とはいえ眼界のひらけた星空の下に出てから、突然彼の姿が消えてしまったというのは、実に異様な感じであつ

た。

その辺は田や畑はなく、一面に荒れ果てた草むらになっていて、道らしい道もなく、よつゆ夜露にぬれたかれくさ枯草が気味わるく足にまとい、ともすればみずたま水溜りに踏み込みそうで、歩くのも難儀であったが、神谷は、せつかく折角ここまで尾行した怪物を、このまま見捨てて帰るのも残り惜しく、お星空にすかして、四方を見廻しながら、向こうの木立ちの中のあかりを目標に、おぼつかなく進んで行った。

ふと気がつくくと、二、三間向こうの草むらが、サワサワと鳴っていた。風かしら、風に枯草がなびいているのかしら。だが風にしては一か所だけに音がするのは変だ。彼は少し無気味になって、立ち止まって耳をすましましたが、空にはやっぱり風が吹き渡ってい

るのに、さいぜんの物音はパツタリやんでしまった。

歩きだすと、また同じ方角から、サワサワと音が聞こえてくる。立ち止まると、パツタリやんでしまう。われとわが足音に脅おびえているのかしら。いや、どうもそうではなさそうだ。試みに、足音を盗んでソツと歩いてみたが、やっぱりサワサワと草むらを分けて風の吹き過ぎるような音がする。

都会の雑ざつ沓とうから遠く離れた武蔵野むさしのの深夜は、冥府めいふのように暗く静まり返っていた。音とっては空吹く風、光とっては瞬またたく星のほかにはない。その、この世とも思われぬ暗闇くらやみの草原に、風とは別の物音が絶えてはつづいているのだ。

神谷はあまりの無気味さに立ちすくんだまま、動けなくなつて

しまった。そして、音のした方角をじつと見つめてみると、草むらのあいだに、りん燐のように青く底光りのする二つの玉が現われた。この寒い時分、ほたる螢がいるはずはない。蛇へびでもない。闇にも光る猫属の眼だ。あの黒い豹ひょうの眼だ。

二つの光るものは、だんだん光を増しながら、じつとこちらをにら睨みつけて動かなかつた。あいつだ。怪物はなぜか草むらに身を横たえて、神谷の姿をうかがっているのだ。

実に長い長いあいだ、異様な暗中の睨み合いがつづいた。神谷はもう氣力が尽きそうであつた。恐ろしさに失神せんばかりであつた。

その時、ああ、その時、地上に伏した怪物が、人間の声で物を

言ったのだ。まるで地獄の底から響いてくるような、陰気な声で物を言ったのだ。

「おい、すぐに帰りたまえ。おれは君なんかに干渉されたくないのだ」

そして、燐光を放つ両眼が向きを変えて見えなくなると、黒い影が低く地上を這^はったまま、サーツと草を分けて遠ざかって行った。彼は一度も立ち上がらなかつた。立って走るのではなくて、両手を地面につけて、けだもののように駈^かけ去ったのだ。

神谷はわずかに残る氣力を振りおこして、もときた道へと、息のつづく限り走った。十数年も忘れていた少年の心に帰って、何かに追っかけられでもするように、死にももの狂いになって逃げた。

走っても走っても、逃げきれない悪夢の中のもどかしさを感じながら。

怪屋の怪

神谷芳雄は、その翌日から一週間、風を引いて熱を出して寝込んでしまった。怪物を尾行して夜ふけの寒い風に当たったためでもあったが、一つには、あのあやしい^{りんこう}燐光に射られ、物の怪^{ものけ}の魔気を感じたせいであつたかもしれない。

会社を休んでしまったほどだから、むろんカフェ・アフロデイトをおとずれることもできず、そのあいだに弘子の身の上などの

ようなことが起こっているのか、少しも知らなかったが、やっと起きられるようになって、久し振りの弘子のえがおを楽しみに、カフェへ行ってみると、意外なことが起こっていた。

弘子は三日ほど前、銀座の資生堂まで買い物に行つてくると家を出たまま、それつきり行方不明ゆくえになって、警察にも訴え、実家の方でも血眼ちまなこになって探しているのだが、いまだに消息がわからないというのだ。

あの弘子が、神谷以外の男を愛して、駈かけ落ちをしたなどとは想像できないし、ほかに家出をしたり自殺をしたりするような原因は、少しもなかった。

彼女は誘拐ゆうかいされたのにちがいない。だが、銀座のまん中で、

女給をさらうというような無茶なまねをする男が、今の世にあるだろうか。あまりに人間離れのした非常識ではないか。

しかし獣類の世界では……おお、そうだ、獣類の世界では、そんな事は日常茶飯事だ。本能の命ずるままに、何をしでかすかしたものではない。この犯人は、きつと、あいつに違いない。草むらを蛇のように這って行ったあの恩田のやつに違いない。

神谷はいつかの晩のウエートレスをとらえて、あいつはその後やってこなかったかと尋ねてみたが、一度もこないという返事であった。いよいよ疑わしい。弘子に対するあれほどの執心を、指環まで与えたほどの愛情を、そのまま諦めてしまうなんて、あり得ないことだ。ここへ足踏みしなかったのは、それよりも、もっ

ともつと貪欲どんよくな陰謀たくを企らんでいたからではないか。弘子をおが巣窟そくくつに連れ去つて、完全に所有してしまおうという、けだものらしい陰謀を企らんでいたからではないか。

神谷はもうそれに違いないと思つた。だが、恩田を警察に訴える勇氣はなかつた。もしそうでなかつたら、取り返しがつかないもつと調べてみなければいけない。彼自身で、もう少しはつきりした証拠しょうこを掴つかまなければいけない。第一、恩田という人物の素す姓じやうも、その住居さえも、ほんとうにはわかつていないではないか。

そこで、彼はその翌日、午後から会社を休んで、心覚えの武蔵野の森の中へ、怪人物の住所を確かめに出かけることにした。

幾度も迷った末、やっと、それらしい森を見つけて、車を降りると、細い枝道を、気味わるい草むらを踏み分けて、目ざす森へと歩いて行つた。

空は一面にどんより曇つて、風もなく、寒さはそれほどでもなかつたけれど、ソヨとも動かぬ草の葉、森の梢が、何かしらこの世のものならぬ感じで、思い出すまいとしても、先夜の恐ろしかつた記憶がよみがえつて、ともすれば逃げ出したい衝動にかられるのを、恋人のためなればこそ、やつとこらえて、ついに草むらを通り越し、薄暗い森の中へと踏み込んでしまった。

そこには、高い常磐木ときわぎにとり囲まれて、異様な建物がひろがっていた。青く苔こけむした煉瓦れんが塀、今時こんなものが残っていたの

かと驚くほど、古風な木造の西洋館、急な傾斜のスレート屋根に、四角な赤煉瓦の煙突がニョッキリ首を出して、さかんに煙を吐はいている。朽くちかけたような陰気な建物に比べて、この煙だけがばかに威勢よく見える。この住人は余ほどの寒がりに違いない。それとも何か特別の理由があるのかしら。

門には赤錆あかさびた鉄板の扉とびらが、さも嚴重に閉まって、覗のぞいてみるような隙間すきまもなく、広い邸内はヒツソリと静まり返って、人のけはいもなかった。

神谷は、煉瓦塀のまわりを一巡してみるつもりで、ジメジメした落葉を、気味わるく踏みながら歩き出したが、ちようど建物の裏手まで来た時、突然、妙な物音を耳にして、ギョツと立ちどま

った。

それは物音というよりは、物の声であつた。だが、人間のではない。人間があんなに恐ろしい唸り声うなを立てるはずがない。動物だ。犬なんかよりはずっと兇きようぼう暴な猛獣の唸り声に違いない。この陰気な屋敷には、けだものが飼つてあるのだろうか。

ドキドキする胸を、じつと抑えるおさようにして、耳をすまして立ちどまっていると、しばらくして、またそれが聞こえた。「ウオーツ」という猛獣の唸り声だ。

と同時に、何かしら、煉瓦塀の内側から、つぶてのように彼の足元に飛んできたものがあつた。彼はハツと顔色を変えて、いきなり逃げ出しそうにしたが、よく見ると、別に危険なものではな

い。投げ出されたのは、丸めたハンカチらしいものだ。

立ち戻つて、足で蹴返^{けかえ}してみると、ハンカチの中から、コロコロと一箇^{いっこ}の指環がころがり出した。おや、なんだか見たような指環だがと、拾い上げようと、しゃがむ拍子に、ヒョイと気がついたのは、ハンカチに赤くにじんでいる文字の形であつた。

血だ！　こんな絵の具なんてあるものではない。確かに人間の血だ。血で書いた文字だ。

大急ぎでひろげてみると、そこには濃淡不揃^{ふぞろ}いな乱暴な文字で、「助けて、殺されます」

としるしてあつた。とつさの場合、指を噛^かみ切つて、その指を筆にして書きつけたものであろう。筆癖などはむろんわからな

つたが、神谷は弘子の字に違いないと思った。邸内に監禁されていて、筆も紙もないものだから、こんな乱暴なまねをしたのである。

ああ、思い出した。弘子に違いない何よりの証^{しやうこ}拠はこの指環だ。これはいつかの晩、恩田が弘子の指にはめて帰った指環ではないか。

と思うと、神谷は気味わるさも怖^{こわ}さも忘れてしまった。弘子は今、あのけだもののために殺されようとしているのだ。救わなければならぬ。命を賭^かけても救い出さなければならぬ。

彼は幾度も落葉に踏みすべつてころびそうになりながら、非常な勢いで門のところへ駈^かけつけると、いきなり拳^{こぶし}をかためて、扉^{とびら}

の鉄板を乱打しながら、

「あけてください。誰かいませんか」

と叫びつづけた。だが、いくら叩たたいても、叫んでも、邸内からはなんのこたえもない。

神谷はもう、あとさきを考えている余裕がなかった。いきなり扉とびらの棧いんに足をかけると、なんなくそれを乗り越えて、建物の入口らしい箇所へ駆けつけ、そのドアを叩いた。

すると、今度は、存外早く手ごたえがあつて、

「誰だつ、そうぞうしい」

とどなりながら、中からドアをひらいたものがある。

檻おりの中

ドアをひらいて顔をさし出したのは、頭もひげもまつ白な、折れたように腰の曲がった、背広姿の老人であった。

相手が案外弱々しい老人だったので、神谷は拍子抜けがして、やや穏かな口調で、

「こちらは恩田さんのお宅ですか」
と先まず尋ねてみた。

「ハイ、わしが恩田ですが、あんたはどなたですな」

老人は人殺しなどの行なわれる屋敷とも思われぬ、ゆったりした調子で答えて、神谷と閉め切った門の扉とを、ジロジロと見比

べた。

「いや、僕は若い方の恩田さんに会いたいのです。いつか京橋のカフェでお眼にかかった神谷というものです」

「若い方というと、ハハア、せがれ 倅のことですか。倅なら今あいにく留守るす中じゃが」

老人は空そらうそぶいて取り合おうともしない。こいつ油断がならないぞ。ヨボヨボしたおやじだけれど、眼の色が唯ただもの者ではない。

「じゃ、お尋ねしますが。お宅に若い娘が来ていやしませんか。弘子というカフェのものです」

思いきつて、尋ねてみた。

「若い娘？ わしや知りませんな……だが、立ち話もなんじゃ、

こちらへおはいりなさらんか。ゆつくりお話しを聞きましよう。門を乗り越したりして、けしからんお方じゃが、まあそれはそれとして」

突然、老人がニヤニヤと愛想よくなつた。変だ。何かわけがあるのに違いない。だが、のぼせ上がった神谷は、それまで気がつかず、誘われるままに、老人のあとについて、家の中へはいつて行つた。

通されたのは、窓が高く小さくて、まるで牢獄ろうごくのように陰気な洋室であつた。

「わしは老いぼれた学究でしてな。世の中の交際もしておらんで、お客をもてなす部屋もありませんのじゃ」

いかにも老人の言う通り、それは実に異様な部屋であった。一方には大きな本棚ほんだなに、金文字の褪せた古ぼけた洋書がギツシリ詰まっているかと思うと、一方の棚には、薬剤であろう、レッテルを貼りつけた大小さまざまのガラス瓶びんが、ほこりまみれになって並んでいる下に、実験台のようなものがあつて、たくさんを試験管、フラスコ、ビーカー、蒸溜器などが、雑然と置いてある。

また別の一隅には、ガラス張りの棚があつて、何かの動物の、人間のよりは平べったい髑髏どくろが、三つも四つも、眼の窪くぼにほこりを溜めてころがっているかと思うと、その下の段には、外科医の使うような、無気味な銀色の道具箱が、半ば赤錆あかさびになって、ズラリと並んでいる。ガラス棚の横手には、大きな口クロみたいな

器械が据えつけてある。

まるで中世紀の煉金術師の仕事場だ。

部屋のまん中には、村役場にでもありそうな、ニスのはげた机があつて、そのかたわらに二脚の毀れかけた椅子がほうり出た。老人はその椅子に腰かけて、神谷にもかけるように勧めた。

「さア、お掛けなさい。倅も今に帰るでしょう。倅が帰らないと、わしには何もわかりませんのでな。ごらんの通り、こんな研究に没頭しとりますので」

神谷は、もつと奥の方へ踏み込んでみたかつたけれど、そうもならぬので、セカセカとまた同じことを繰り返して尋ねた。

「ほんとうにご存知ないのですか。いくらなんでも、同じ家の中に、よその娘が閉じこめられているのを、あなたが知らないはずはないでしょうが」

「え、え、なんとおっしゃる。娘が閉じこめられている？ そりや何かの間違いでしょう。わしにせよ倅にせよ、そんな悪者ではありません。いったい何を証^{しょうこ}拠^こに、そんな言いがかりをなさるのじゃ」

老人は底光りのする大きな眼で、睨^{にら}みつけながら、きめつけた。「証拠が見たいとおっしゃるのですか。証拠はこれです。今、お宅の中から堀^{へい}のそとへ、これを投げたものがあるのです」

神谷は言いながら、さいぜんの血染めのハンカチを取り出して、

老人の眼の前にひろげて見せた。

老人はそれを読みとると、さすがにギョツとした様子であつたが、なにげなく笑い出して、

「アハハハハハ、これを家から投げましたと？ あんたは夢でも見たのじゃないか。この家には倅とわし二人きりで、その倅が外出しているのじやから、今はわしがたった一人です。わしがこんなものを投げるはずもなし……」

「では、これをごらんなさい。あなたの息子さんが弘子さんという女給にやった指環ゆびわです。これも見覚えがないとおっしゃるつもりですか」

老人は指環を見ると、一そうギョツとしたようにみえた。白はくぜ

髯むすこにうずまつた息子と同じようにドス黒い顔が、サツと赤らんだかと思われた。だが、彼はあくまでも白しらを切つて、

「知らんよ。わしや、そんなもの……だがね、お前さんが、そんなに疑うなら、一つ家探しをしてみたらどうじゃ。わしが案内して上げててもよい」

と意外なことを言い出した。神谷は用心しなければならなかったのだ。老人の言葉の奥には、どのような恐ろしい企たくらみが隠されていたかもしれないのだ。しかし、彼は弘子の安否が確かめたさに、何を考えるゆとりもなかった。

「それじゃあ、ご案内ください。僕もこうしてお訪ねしたからには、すつかり安心して帰りたいのです」

神谷は立ち上がって、せわしく老人を促した。うなが

「では、こちらへおいでなさい」

老人はさもしぶしぶのように、ヤツコラサと椅子いすを離れ、二つに折れた背中に両手を組んで、ヨチヨチと部屋を出た。

薄暗い廊下を少し行くと、外側に門かぬぎのついた頑がんじょう丈な板戸があつた。

「先まずこの中を、見てもらいましようかな」

老人は言いながら、門をはずして、先に立ってその部屋の中へは行って行った。

神谷はつづいてはいったが、部屋の中は薄暗くて、少しも様子がわからない。

「窓を閉めてあるのですか」

「さようじゃ。今窓をあけますから、少し待っててください」

老人は薄闇うすやみの中で、何かゴトゴトいわせていたが、やがて、ボタンと大きな音がしたかと思うと、部屋の中が、突然まっ暗になつてしまった。

「どうしたんですか」

驚いて声をかけると、老人がどこか遠くの方で笑い出した。

「ハハハハハ、どうもせんよ。お前さんに、しばらくそこで御休息を願おうと思つてね。まあ、ごゆつくりなさるがいい。ハハハハハ」

そして、彼の声はだんだん遠くへ聞こえなくなつて行つた。

ハツと気がついて、部屋の入口へ突進したが、もう遅かった。

厚い扉とびらがピツタリ閉まって、そこから門をかけたのであろう、押

せども引けども、ビクとも動かなかつた。

神谷は迂闊うかつせんぼん千万にも、罨わなにかけられたのだ。老人は薄暗がり

を幸いに、窓をあけると見せかけ、彼の油断している隙すきに、廊下

に出て、そこから門をかけてしまったのだ。

彼は幾度も、全身で扉にぶつつかってみたが、なんの効果もないことがわかったので、今度は手さぐりに、窓はないかと調べてみたが、まわりはすっかり板張りになっていて、窓らしいものは一つもなかつた。三畳敷きほどのまったく採光設備のない物置きのような部屋だ。いや、ただの物置きにしては、あまりに頑丈す

ぎる。もしかしたら、これは動物を入れるための檻おりに類するものではないだろうか。どうもそうらしく思われる。ああ、彼はまるでけだもののように、檻の中へとじこめられてしまったのかしら。

ねこねずみ
猫と鼠

神谷は、まったく脱出の見込みがないとわかると、烈はげしい後悔にうたれて、闇やみの中にグツタリとうずくまってしまった。

早まったことをした。あせる前に、先まず自分の力を考えてみるべきであった。それに相手が老いぼれおやじと油断したのが間違이었다。あいつは、老いぼれどころか、おれをこの密室にとじ

こめた手際は、若者も及ばぬすばやさではないか。

だが、おれはこれから、いつたいどうすればいいのだろう。

もしこの檻おりのような密室を破る力がないとすれば、ほかに手だてはありはしない。誰に知らせるすべもなく、このまま飢え死にするばかりではないか。

ああ、それにしても、弘子はどこにいるのだろう。おれが彼女を救い出そうとしたばかりに、こんな目にあつていとも知らず、やっぱり同じ監禁の憂き目を見ていることであろうが、彼女の牢屋ろうやは、ハンカチをほうることができたほどだから、あの裏手の方の、どこか窓のある部屋に違いない。

だが、変だな、彼女がおれの姿を見るなり、足音を聞くなりし

て、あのハンカチを投げたのだとすると、そんな面倒な手数をかけないでも、ただ大声に救いを求めさえすれば目的を達したはずではないか。

猿ぐつわでもはめ^{さる}られているのかしら。いや、猿ぐつわをはめるほどなら、両手を縛^{しば}っておくはずだ。縛られていて、あんな字を書くことはできやしない。

では彼女は、別に誰にという当てもなく、あの文つぶてを投げたのだろうか。そして、通りがかりに拾ってくれる人を待つつもりだったのかしら。どうもそう考えるのが一ばんほんとうらしいようだ。それにしても、うまいぐあいに、ちようどおれの通りかかる時、あれを投げたものだな。いやいや、うまいぐあいではな

い。今になって思えば、かえってそれが悪かったのだ。恩田の家を知っているのは、おればかりだ、そのおれが「ミイラ取りがミイラになった」のでは、もう弘子を救い出す見込みはまったく絶えてしまったといつてもいい。ああ、どうすればいいのだ。

神谷がそうして、闇^{やみ}の中で、ぐちつぽく考えこんでいた時、突然、「ウォーツ」と、けだものの唸^{うな}り声が、今度は非常に近いところから聞こえてきた。どうやら、板壁のすぐ向こう側らしい。

やっぱり猛獣がいるのだ。ああ、そうだ。こんな檻のような密室があるのは、ここの家が猛獣を飼っているからに違いない。東京都内にだって、動物園でなくても、個人で猛獣を養っている富豪がいくらかもある。ここにも、どんな恐ろしいけだものがない

とも限らぬのだ。

そこまで考えた時、あのギョツとする想像が彼を思わず立ち上がらせた。ああ、あの古いぼれめは、ひよつとしたら、その猛獣をここへ追い込むつもりではないのかしら。まさかそんなばかばかしいことが、いや、ばかばかしいといえ、この屋敷そのものがすでにばかばかしいのだ。あんな煉れんきん金術師の部屋が東京の郊外にあることだって、弘子やおれを監禁することだって、みんなありそうもないことばかりだ。そのありそうもないことが、現にこうして起こっているのだから、この先どんな気違いめいた変事が突発するか、知れたものではない。

暗闇くらやみが果てしもない妄想もうそうを産んで、今にも気が狂いそうで

あつた。神谷は彼自身が檻の中の猛獣でもあるように、部屋の中を、あちこちと歩きはじめた。

そうして歩いているうちに、ふと板壁に隙間すきまがあることを発見した。それを見ると、たとえその向こうにどんな恐ろしい猛獣が牙きばをむいていようとも、覗のぞいてみないではいられなかつた。

彼は中腰になつて、隙間に眼を当てた。

ああ、夢ではないのか。そこには、果たして猛獣が……一匹の大きな豹ひょうがうずくまっていたではないか。

それはやっぱり頑がんじょう丈な板壁の、まるで倉庫のような広い部屋であつたが、一方の隅に本物の鉄の檻おりの一部分が見えて、その中に豹の上半身が横たわっているのだ。檻のそとは一面の土間で、

板壁がひどく頑丈なのを見ると、時には豹を檻から出して、部屋の中を散歩させるのかもしれない。

気のせいか、俄にわかに耐たまらない野獣の臭しゅうき気が鼻をついた。臭気ばかりではない。このいやにむし暑いのは、なんであろう。今までは昂こうふん奮のあまり、それとも感じなかつたけれど、隙間に眼を当てていると、その暖かさは、隣の部屋から伝わってくるように思われる。それに、よく見れば、窓からの光線のほかに、かすかに赤い光が、チロチロと動いているように感じられる。ああ、わかつた。ここからは見えぬけれど、寒さを嫌きらう豹のために、ストーブが焚たいてあるのだ。さつき堀へいのそとから眺ながめた煙突の煙は、この部屋から立ち昇あっているのに違ちがいない。

彼は中腰に疲れると、眼をはなしてうずくまるのだが、しばらくすると、不安に耐えられなくなつて、また隙間を覗く。そうして、うずくまつたり覗いたりしながら、なんのまとまつた思案もつかぬ間に、時間はドンドンたつていった。

やや一時間もたつたころ、彼が疲れてうずくまつていた時、突如として、板壁の向こう側から、女の悲鳴が聞こえてきた。長くつづく、死にも狂いの悲痛な叫びであつた。

神谷はそれを聞くと、たちまちその恐ろしい意味を悟つた。そして俄かに高鳴る心臓の鼓動を感じながら、ピヨコンと立ち上がつて、隙間に眼を当てた。

そこには、予期していたものが、いや予期以上に恐ろしいもの

があつた。

豹の檻の前の土間に、一人の若い女が、髪を振り乱し、服は裂けて、肌はだもあらわに、両手で何かを防ぐかつこう恰好かっこうをして倒れている。ここからは見えぬ入口から、駈かけ込んできたのか、いや多分は、何者かにつき飛ばされて、われにもなくこの部屋へ倒れ込んだものであろう。

神谷は一と眼見て、それが探し求めていた弘子であることを悟つた。ああ、彼女は猛獣の部屋に投げ込まれたのだ。やがては、あの豹の檻がひらかれるのである。そして、血に餓うえた猛獣は、舌なめずりをして、彼女の上に這はい寄ることであらう。

彼は声を立てる力もなく、ただ板壁にしがみついて、全身に脂

汗を流していた。

だが、彼の想像は当たらなかつた。弘子を襲うものは、豹ではなくて、むしろ豹よりも残酷な人間であることが、やがてわかつた。彼女が両手を上げて防いでいたのは、その人間に対してであつたのだ。

みるみる視界に現われてきた一人の男。恩田だ。息子むすこの方の恩田だ。いつかの夜、草むらに二つの燐りんこう光を輝かせて、蛇へびのように這つて行つたあの怪物だ。

見よ、彼はやっぱり両手をついて這っているではないか。この怪人にとっては、立つて歩くよりも、けだもののように這はう方が自然なのだ。人間ではない。あの弘子の方へ這い寄つて行く無氣

味な身のこなし、あれが人間であろうか。獸類だ。獸類にしか見られぬ形だ。

怪物の両眼は、昼ながら、二つの青い燐光のように、爛々^{らんらん}とかがやいている。彼がいかに昂奮^{こうふん}しているかを語るものだ。又メ又メと濡^ぬれた唇^{くちびる}は、息をするたびに、裂けるようにひらいて、まっ白な歯が気味わるく現われ、例の猫属^{ねこ}のドス黒い舌が、歯と歯のあいだからチロチロと覗^{のぞ}いている。

怪物は、ちょうど猫^{ねこ}が鼠^{ねずみ}にたわむれる恰好^{かっこう}で、脅^{おび}える弘子の身边に、あらゆる方角から、這い寄ってはパツと飛びすさり、今にも襲いかかろうとしては退^ひきして、この残酷な遊戯を、さもさも楽しげに、できるだけ長引かそうとしているかに見えた。

二匹の野獣

恩田は皺しわくちやになつた黒い洋服を着ていたが、それが彼の精せ悍いかんな瘦やせた四肢ししにピツタリくつついて、そのまま一匹の巨大な黒豹くろひょうであつた。

まつ赤な厚くちびるい唇くちびるが、ヌメヌメと光り、白い齒のあいだから、例のけだもののドス黒い舌が、無気味に覗のぞいていた。

それは窓の少ない薄暗い部屋であつたから、彼の両眼ほたるびの螢火ほたるびのような怪光ようかをハツキリ見てとることができた。青く黄色く燃える眼底ようかの妖火ようかは、彼が激すれば激するほど、その光輝こうきを増して行

くように思われた。

その眼、その口、その四肢をもつて、黒い人間豹は、今や彼の美しい餌食えじきに飛びかかつて行つた。

二人のからだは、ただ見る黒白の鞠まりとなつて、広い土間をころがりまわつた。黒い手と白い手とが、烈はげしくもつれ合つた。弘子はけなげにも、叫び声さえ立てず、死にもの狂いの抵抗をつづけているのだ。

神谷は、そのもつれ合つた二人の姿が、隙間すきまの眼界から消えるごとに、心臓の鼓動も止まる思いがした。彼はわが身の危険も忘れて、幾度も、危く叫びだしそうになつた。だが、この密室の中で叫んでみたところでなんの効果があろう。効果がないのみか、

そんなまねをすれば、かえつて事態を悪化させるばかりだ。彼は歯を喰くいしばつて、脂汗を流して、節穴にしがみついているほかはなかつた。

怪人はまだ充分の力を出してはいなかつた。ただ猫が鼠をもてあそぶように、相手をもてあそんでいるにすぎなかつたが、しかし、か弱い弘子の方では息も絶え絶えの力闘であつた。

掴つかみ合うたびごと、つき倒されるたびごと、ころがり廻まわるたびごとに、服も下着も引きちぎられ、今はもう身を蔽おほうものも残り少なくなつていた。

彼女は少しも声を立てなかつた。泣き叫んでもむだなことを意識してか、それとも、恐怖と疲労のために、干ひからびた喉のどが、も

う声を出す力も持たなかつたのか。

この騒ぎに、檻の中の豹が、刺戟を受けないはずはなかつた。野獣は恐ろしい唸り声と共に立ち上がって、檻の中を右に左に駆けまわりはじめた。そして、彼の昂奮は、二人の人間の格闘が激しくなればなるほど、異様に高まつて行つた。檻の鉄棒に飛びつき昇りつく狂態のすさまじさ。まっ赤にひらいた口をほとばしり出る咆哮の恐ろしさ。

弘子の白い肉体は、幾度となく、恩田のためにつき飛ばされ、或いは自ら逃げ倒れて、床の上どころがったが、最後に倒れかかつたのは、偶然にも、豹の檻の扉の前であつた。

彼女は、その扉の鉄棒に取りすがつて、身を起こそうともがい

ていたが、ふと彼女の白い手が扉の掛金にかかった。そして、極度の激情の際にもかかわらず、彼女はその掛金は何を意味するかを理解したのだ。

弘子はヒョイと振り返って、またもや飛びかかろうと身構えている恩田を睨にらみつけた。まっ赤に血走った眼、大きくふくれ上がった小鼻、鮎ふなのようにひらいた唇、青ざめきつて藍色あいに死相をたたえた顔、その顔で彼女はニヤニヤと笑ったのだ。

神谷は、とっさにその笑いの意味を悟って、思わず眼をつむつた。ああ、とうとう最後の時が来たのだ。何もかもおしまいになる時がきたのだ。

ガチャンと異様な音が聞こえてきた。

神谷はその物音に、ゾツと身震みふるいしたが、見まいとしても見ぬわけにはいかぬ。再び眼をひらくと、すでに檻の扉はひらかれていた。弘子が掛金をはずしたのだ。

豹はと見れば、もう檻の中には影もない。そして、一方の土間に、からみ合つた黄色と黒との一とかたまり、豹は一と飛びに飼主恩田に飛びかかつて行つたのだ。

「ワーツ」という、悲痛な叫び声が、怪人恩田の口からほとばしつた。さすがの彼も、この不意うちには、極度の驚きよう愕がくにうたれた。だが、彼もまた人間の形をした野獣である。本物の豹に縮み上がりはしなかつた。かなわぬまでも闘つた。世にも恐るべき、野獣と野獣の戦いである。

黄色い豹、黒い恩田、白い弘子、今、神谷の眼の前には、この三つの生きものが、世にも恐ろしい巴ともえを描いて、掴つかみ合い、ぶつかり合い、飛び上がり、打ち倒れ、ころげまわり、狂い躍るのであった。彼はこの眼まぐるしい色彩の交錯こうさくに、頭もしびれ、眼もくらんで、もう恐怖を感じる力さえ失っていた。

噛かみ合う赤い口、おお、彼らは噛み合ったのだ。人間の恩田までが、耳まで裂けた口をひらいて、白い歯をむき出して、噛み合ったのだ。そして、燐りんの焰ほのおが燃えるかと疑われる、爛らん々たる四つの眼が薄闇うすやみに飛び違い、すさまじい咆哮が部屋の四壁をゆるがした。

だが、恩田はどうてい本物の猛獣の敵ではなかった。徐々に徐

々に、彼は部屋の隅へとおしつめられて行つた。猛獣の鋭い爪は、恩田の洋服を掻き破つて、彼の肩口へしつかりと喰い入つていた。恩田は両腕に精一杯の力をこめて、豹の顎を支えていたが、その力も衰えはじめた。猛獣の血に飢えた牙は、ジリリジリりと、相手の喉笛へ迫つて行く。

もう一分間そのままにしておいたなら、怪人恩田はこの世のものではなかつたに違いない。神谷と弘子との仇敵は亡びてしまつたに違いない。そして、後日あれほど世を騒がし、人の生き血を流した大害悪をも、未然に防ぐことができたであろう。

だが、幸か不幸か、いやいや、実もつて不幸なことには、恩田の命は死の一步手前で喰いとめられた。最後の一瞬间に救い主が

現われた。

息を止めて見入っていた神谷の鼓膜に、突如異様な衝動が伝わった。眼の前の光景が、グラグラと揺れたように感じられた……銃声だ。誰かが恩田の危急を救うために発砲したのだ。

立ち昇る白煙の下を、猛獣は剥製の豹のようにピンと四肢を伸ばして、一転、二転、三転し、遂に長々と伸びたまま動かなくなつた。

わずかに命を取り止めた怪人恩田は、さすがにグツタリとなつて、急に起き上がる力もない。

すると、神谷の隙見の眼界へ、銃を片手にノツソリと現われたのは、さいぜん彼をこの密室へとじこめた白髪白髯の老いば

れ、恩田の父親であった。息子の危急を救ったのはその父であった。

「檻おりをあけたのは誰だつ、まさかお前ではあるまい。そこな娘さんか」

彼は鋭い眼を光らせて、檻の前に倒れ伏している弘子の半裸体を睨にらみながら尋ねた。

「そうだよ。あいつだ。あいつめ、豹に僕を喰くわせようとして、檻をあけやがった」

恩田が苦しい息遣いで、さも憎々しくどなった。

「ウム、そうか。してみると、この娘はお前の敵かたきだな。いや、それよりも、大事な豹の敵だ。わしはこいつを撃ち殺すとき、どれ

ほど悲しく思ったか、どれほど残り惜しく思ったか」

言いながら、老人は豹の死骸しがいの前にしゃがんで、悲しみに耐えぬもののように、その背中を撫なでながら、長いあいだ黙もく禱とうしていたが、やがて、キツとして立ち上がると、烈はげしい語調で、

「よし、もうお前を止めやしない。思う存分にするがよい。わしの可愛かわいい豹の敵かたきう討ちだ。どうともお前の思うようにするがよい」
と言ひ捨てて、そのまま眼界から消えて行つた。

怪屋の妖火ようか

神谷はほとんどもう氣力が尽きていた。だが、彼は節穴から眼

をはなすことができなかつた。「嫁おどし」の老婆の顔に般若はんにやの面がくつついてしまったように、彼の顔は板壁に密着して離れなかつた。

怪人恩田は、間もなく元気を回復して、舌なめずりをしながら起き上がった。うす黒い顔がひん曲がつて、ゾツとするような笑いが浮かんでいる。彼はおそらく、天下晴れて、この可憐かれんな餌食えじきに復讐ふくしゅうをすることができのを、喜んでいるのだ。

弘子とは見ると、ああ、幸か不幸か、彼女はまだ失神もしないで、真底から恐怖に耐えぬまなざしで、恩田の方を見つめている。怪物は、両眼の燐りんこう光を燃え立たせ、齒をむき出して、ジリジリと彼女の方へ進んできた。

ああ、それから三十分ほどのあいだ、神谷は何を見、何を聞いたのであろうか。地獄の中の地獄であつた。あらゆる恐ろしいもの、あらゆる醜いもの、あらゆる色彩、あらゆる動き、あらゆる音響が、彼の脳髓を痴呆にし、彼の眼を盲にし、彼の耳を耳なえにした。

そして最後に、血に狂つた怪人恩田が、激情の余波のやり場もなく、跳り狂うようにして眼界を消え去ってしまうと、あとには人間の形態を失つたギラギラした色彩が乱れ散つていた。一人の女性の魂が、かつて類例もない苦悩の中に昇天したのだ。かくして神谷は、その恋人の魂と、同時に肉体をさえも、まったくこの世から失つてしまったのである。

彼はクナクナと密室の床に倒れ伏したまま、長い長いあいだ、死人のように動かなかつた。からだじゆうに脂汗を流し、もみくたになつた紙屑かみくずのように動かなかつた。だが、やつとして、彼の肩が波うちはじめた。虫の音ほどのすすり泣きが聞こえはじめた。そして、徐々に徐々にその声が高まり、しまいには、彼は身もだえをして、小児のように泣きわめくのであつた。

いつの間にか夕闇ゆうやみがあたりをこめ、たださえ暗い密室は文目あやめもわかぬ闇となつていた。その暗黒に包まれたまま、彼の泣き声はいつまでもつづいていた。

ふと気がつくつと、誰かしら彼を声高く呼んでいるものがあつた。その上に、暗闇とのみ思つていた密室に、どこからか、一条の赤

い光が射している。彼は反射的にハッと身構えをしながら、声のする方を振り向いた。

「おいおい、君は何を泣いているんじや。何がそんなに悲しいのじや」

声と共に、その声の主の眼と鼻とが、四角にくぎられて宙に浮いているのが見えた。

恩田の父親だ。入口の板戸に、小さな四角の覗き穴のぞがこしらえてあつて、彼は今その蓋ふたをひらいて、ロウソクをかざしながら、密室の中を覗きこんでいるのだ。神谷は、じつと老人の顔を見返しながら、ひとことも物を言わなかった。何を言つていいのかわからなかった。口をきけば、みじめな震え声ふるになりそうだった。

そして、何かしら抑え^{おさ}つけるように、生命の不安が感じられて仕方^おがなかった。

「おや、君のその顔はどうしたのだ」

老人は口ウソクの光に神谷の面^{おも}変^{がわ}りした顔を認めたのだ。

「ハハア、するとなんだな。君は、あれを知っているんだな。だが、どうして？ ああ、そうだ。壁の板に隙間^{すきま}があつたんだな。

そこから、君はあれを見たんだろう。それに違いない。おい、君、見たのか見ないのか」

だが神谷は答えなかった。答えずとも彼の表情がすべてを語っている。

「フン、見たんだな。見たとすると、気の毒だが、君は永久にこ

こから出すわけにはいかぬ。いいか。なぜ出せぬか、そのくらい
のことは説明せんでもわかるじやろう。観念したまえ。ハハハハ
ハ

そして、パタンと無慈悲に閉まる覗き穴の蓋、老人の立ち去る
けはい、室内は元の暗闇にかえった。

老人は、息子の殺人罪を目撃された上は、生かしておけないと
いうのだ。今にも、あの人間豹の息子を彼の密室にさしむけて、
弘子同様の目にあわせるか、或いは老人の銃口が、覗き穴か
ら首を出して、彼を狙いうちにするか。そうでなくても、このま
まほうっておかれたら、やがて飢え死にをしてしまうに違いない。
逃げ出そうにも、この厚い板壁、頑丈な板戸、道具とてな

い一人の力で、どう破ることができよう。

ああ、とんでもないことをした。たとえ恋人を救うためであろうとも、わが力も計らず、人にも告げず、単身この魔境へ踏み込んだのは取り返しのつかぬ失策であつた。先まず警察へ告げるべきであつた。そして有力な助勢を得て、弘子の救助に向かうべきであつた。

だが、それはもう取り返しのつかぬ繰り言だ。ただこの上は、叶かなわぬまでも、この密室を脱け出す方法を考えなければならぬ。そして、彼らの悪事を警察に訴え、弘子の敵かたきを討たねばならぬ。これが恋人へのせめてもの心づくしだ。このまま神谷までが死んでしまったのでは、彼らの悪事は誰知るものもなく、あの恐るべ

き半獣半人の怪物は、永久に罰せられる時がない。それではあまりに不合理だ。彼は当然の処罰を受けねばならぬ。どんなにしても、一度ここを脱出して、恋人の無残な死をつぐなわなければならぬ。

しかし、いかなる手段で？ ああ、いかなる手段で、この密室を脱出したらいいのだろう。

そんなことが果たして可能であろうか。

考えながら、神谷はふと上衣うわぎのポケットへ手をやった。すると、突如として、インスピレーションのように、一つの奇妙な考えが浮かんできた。

「おお、おれはマッチを持っていた。ここにマッチがある」

彼はそれをポケットから取り出して、軸木じくぎの数を調べた上、その一本をシュツとすった。たちまち闇やみを破る赤い光。その光で、密室の隅から隅を見まわしているあいだに、彼の考えはますます熟して行つた。

「そうだ、そのほかに方法はない。一か八かいちばちやつつけてみるのだ」
彼は大急ぎで服を脱ぎはじめた。そしてまっぴだかになると、シャツ、猿股さるまた、ワイシャツ、ネクタイ、ソフトカラアなど薄手のものばかり選り出しよて一とまとめにし、再び素肌すはだに背広を着、オーバーをまとった。それからポケットというポケットをさぐつて、ハンカチ、古手紙、鼻紙、手帳の類に至るまで、燃え易いもの一切を集めて、シャツなどの布類と一緒にし、それを丸めて部

屋の奥の板壁のきわに置いた。

彼はそれに火をつけようというのだ。では彼は悪魔の巢窟そうくつを焼き払うつもりなのだろうか。だが、そんなことをすれば、誰れよりも先に神谷自身が焼け死んでしまうではないか。なんとこの無謀なことを企てたものであろう。彼は引きつづく激情に、気でも狂ったのではあるまいか。

いや、そうではない。彼は一つの冒険を思い立ったのだ。千番に一番という危ない芸当をもくろんでいたのだ。

何本もマッチをむだにして、やっと紙類が燃え上がった。ワイシャツの袖そでに火が移った。と見ると、神谷はいきなり地だんだを踏みはじめた。両の拳こぶしを握にぎって烈はげしく板壁を叩たたいた。そして、何

がおかしいのか、大口をあいて、できるだけの声を立てて、気がいのように笑いだした。

「ワハハハハハ」という無気味な笑い声が家じゆうに響きわたった。

しばらくそれをつづけていると、案あんじょうの定、板戸のそとに足音がして、覗のぞき穴をひらいたものがある。神谷はそれを合図のように、たちまち沈黙して、すばやく、覗き穴から見えぬ入口にうずくまり、板戸のひらくのを今や遅しと待ち構えた。

彼の笑い声に不審を抱いて、様子をうかがいにきたのは、やっぱり恩田の父親であった。見ると、部屋の奥に炎々と燃え上がるかえん火焰だ。打ち捨てておけば、今にも板壁に燃え移りそうに見える。

慌あわてふためいた老人は、何を考える暇もなく、いきなり門かをはずして板戸をひらき、火焰を揉もみ消すために、室内に駈かけ込んだ。今だ！ 神谷は老人の腋わきの下をくぐるようにして、疾風のように廊下へと飛び出した。そして、満身の氣力をふるい起こして、老人のうしろから、パタンと板戸を閉め門をおろした。今や主客顛てんとう倒、老人の方が檻おりの中へとじこめられてしまったのだ。

そうしておいて、神谷は心覚えの廊下伝い、老人の書しよさい齋を通つて、玄関を飛び出した。それから、例の締め切った門の鉄扉てつびをよじのぼり、飛び降り、暗くらやみ闇の森を一目散に駈かけ抜けて、道もない草原へ出た。

空は一面に曇つて星も見えず、寒い風が草むらをザワザワと波

立たせている。振り返れば、まっ黒に眼を圧して襲いかかる魔の森林、その中にチロチロと瞬くは怪屋のともし火か、それとももしや、彼の逃亡を知って追いかけてくる怪物の眼の^{りんこう}燐光ではないのか。

ふとそんな連想をすると、神谷は足もすくむほどの恐怖を感じた。そして、草むらのざわめくのも、風ではなくて、蛇^{へび}のように這い寄る獣人の姿かと疑われ、果ては、見渡す限り、闇の草むらのここにも、あすこにも、無数の蛇のようにギラギラ光る燐光の^{まほろし}幻さえ浮かんでくるのであった。

彼は走った。無我夢中で走りつづけた。咽^{のど}はカラカラに干^ひからびて、舌が石のように干^ほし固まり、心臓は咽のあたりまで飛び上

がつてくるかと感じられた。

道であろうと、なかりうと、方角さえもわからず、ただ走りに走って、しかし、ついに街道に出た。まばらに立ち並ぶ街燈、並木のあいだにチラチラ見える一軒家、その駄菓子屋らしい藁葺きの一軒家までたどりつくと、彼はいきなりガタピシと障子をあげて、その土間へのめりこんだ。

このことが土地の警察署に伝わり、数名の警官が、やや氣力を回復した神谷を案内に立てて森の中の怪屋に向かうまでには、かなりの時間が経過した。そして、彼らが手に手に懐中電燈をかざして、街道から抜け道を伝い、雑木林を抜け出たとき、先頭に立

つ神谷が、何を見つけたのか、ハツと立ちすくんでしまった。

「どうしたんだ、君、何かいるのか」

警官の一人がどなった。彼らも怪人の話を聞いて、この捕物とりものを少なからず無気味に思っていたのだ。

「あれ、あれをごらんなさい。あの火はいつたいなんでしょう」

神谷の言葉に彼方かなたを眺めると、いかにも、森の中の怪屋のあたりとおぼしく、一団の火焰かえんが、大きな狐火きつねびのようにメラメラと燃えている。

「おや、火事じゃないか」

「ウン、そうだ。おい君、君が逃げ出す時に、シャツやなんか火をつけてきたと言ったね。それが燃えひろがったんじゃないか」

警官が口々に言う。

「いや、そんなはずはありませんよ。高が一とかたまりの布切れですもの。老人が踏み消してしまったに違いありません。それにもしあれがもとだとすると、もっと早く燃えひろがっていなければなりません」

神谷は不思議に耐えなかつた。

ともかくも行つてみよう、歩き出して、だんだん森に近づくにつれ、刻一刻火焰かえんは大きくなりまさり、彼らがそこに到着した時には、もう手もつけられない本物の火災になっていた。

パチパチと物のはぜる音、窓という窓から吹き出す赤黒い火焰の舌、ムクムクと舞い上がる黒けむり、早くも棟の一部のくずれ

落ちる大音響、パツと立ち昇る火の粉、森全体が白昼のように明るく、立ち並ぶ木の幹が、みな半面を朱に染めて、クツキリと浮き上がってみえた。

「ウム、やつらは罪跡をくりますために、自分で火をつけたのだ。もう今いまごろ頃はどつかへ行方をくらましてしまったに違いない。おい、誰か署へ帰って、非常線の手配を頼んでくれたまえ。それから消防だ。もうこうなつてはわれわれの出る幕じゃない。ともかくも火を消すことが第一だ」

おもだつた警官の命令に、一人の警官が懐中電燈をふり照らしながら、駈かけ出していった。

残った人々は、火焰を遠巻きにして、怪屋の周囲をグルグル歩

きまわり、怪しい人影もやと眼をくぼつたが、悪人たちがその頃まで現場にうろうろしているはずはなく、あかあかと照らし出された森の中には、なんの怪しいけはいもなかった。

かくして、恩田父子は、殺人罪目撃者に逃げ出された窮余の一策、わが巢窟そうくつに火をかけて、あらゆる罪跡を湮滅いんめつし、いずれともなく姿を消してしまったのだ。

彼らが処罰を恐れて姿をくらましたことは言うまでもない。だが、いかに処罰を恐れたからといって、あの血に飢えた獣人が、これ限りその爪牙そうがを隠して一生を終ることができであろうか。いや、それよりも、彼らの大切な巢窟を焼かしめ、彼らの犯罪をその筋に告げ知らせた神谷に対する怨恨えんこんを、果たして忘れ去る

ことができるであろうか。一匹の野獸を失ったばかりに、平然と弘子の命を断つた彼らだ。それに比べては幾層倍のこの恨みうら、ただ単純に神谷の生命を狙ねらうだけで満足しようとは考えられぬではないか。

神谷は果たして安全でいることができるであろうか。たとえ彼自身の生命は安全であっても、何かしらそれ以上に彼を苦しめ悩ますようなことが起こりはしないであろうか。

また神谷のがわからいえば、恩田父子は、憎んでも憎み足りない仇きゆうてき敵であった。彼は、草の根を分けても彼らを探し出し、この恨みをはらしたいと願った。

深讐しんしゆうめんめん綿々たる対立、ああ、彼らの行く手には、果たしてど

のような運命が待ち構えていたことであろう。

江川蘭子

神谷芳雄が、かつてなにびとも経験しなかったような、奇怪きざ残酷んぎやくな恋人の最期さいごを、マザマザと見せつけられた、あの呪のろうべき日から、一年あまりが過ぎ去った。

その当座は、あまりにも烈はげしかった衝撃にうちのめされて、生れつきの明るく快活な性格が、まったく一変したかと思われた。昼は幻に、夜は夢に、恋人弘子の断末魔の形ぎようそ相そうが、あの人間だか野獣だかわからぬ怪物の顔と重なり合って、ありとあらゆる

地獄の構図をもつて、彼をおびやかしつづけた。もしやあの獣人父子が、ねぐらを奪われた恨みうらみに燃えて、復讐ふくしゅうの爪つめを研いでいるのではないかと、彼は絶えず生命の危険をさえ感じなければならなかった。

だが、時の力は恐ろしい。月日の流れは、いかなる悲しみも、恐れも、憤りいかりも、いつとなく洗い薄めて行くものだ。

その後、人間豹ひょうの親子は、警察のあらゆる捜索そうさくにもかかわらず、まったく消息を断ってしまった。外国へ逃亡したのではないよかというものもあつた。もう彼らの復讐を恐れるには及ばないように思われた。

神谷の脳裡のうりから、一日一日と、野獣の記憶が薄らいで行つた。

いや、薄らいだのはそればかりではない。あれほど熱愛した恋人
弘子のおもかげ倅さえも、その恋人を失った心の痛手さえも、今はおぼろ
に消えて行つた。

それというのが、神谷には新しく、第二の恋人ができたからだ
……いや、彼の薄情を責めてはいけない。彼がその人を恋したの
は、実はかつての弘子を忘れねばこそであつた。

そのころ都では、相對立する二大レビュー劇場が、あらゆる興
行物を圧倒して、若人の人気を独占していた。その一方のレビュー
一団の女王と讃えられる歌姫に、江川蘭子という美しい娘がある。

日本人向きの色っぽい声、ずば抜けて美しい顔、全都の青年男
女を夢中に昂こうふん奮させる、不思議にも甘い微笑、十九の春のふっ

くらと成熟した肉体、その満都渴仰まんとかつごうの人気女優が、神谷の第二の恋人であつた。

それまではレビューというものにほとんど興味を持たなかつた神谷が、ある日なにげなく演芸画報のページを繰つていたとき、江川蘭子の大写真が、ハツと彼の注意を惹ひいた。一刹那いっせつな、死んだ弘子の写真ではないかと感じたほど、この歌姫は、彼のかつての恋人と瓜うり二つであつた。

彼は俄にわかにレビュー・ファンとなつて、毎日のように大都劇場のボックスへ通つた。そうして蘭子の舞台姿を見ることが度重なるに従つて、彼の新しい情熱は、加速度に燃え上がつて行つた。

歌姫江川蘭子には、かつての弘子の、あらゆる美しさ、あらゆる

る魅力が、十倍に拡大されて備わっていた。神谷の生得のあこがれについて、弘子はその影、蘭子こそ、やつと見つけたその本体ではないかと思われた。

神谷は多くの青年たちの競争者として、蘭子を誘い出して一緒にお茶を飲むことを楽しんだ。二人きりのドライブも、二度三度と度重なっていった。もう青年たちは、神谷の敵ではなかった。

神谷は醜い青年ではなかった。会社員とはいえ、前途を約束された重役の息子むすこさんであった。お小遣いにも事は欠かなかつた。その上、彼には気まぐれでない情熱があつた。蘭子の方からも、彼にただならぬ好意を見せはじめたのは、なんの不思議もないことであつた。

神谷はもう、彼女のフィアンセのごとくふるま振舞つて、樂屋も訪問すれば、自宅への送り迎えもする間柄になつていた。こつそりと、郊外の料亭などで、夜をふかしたことも、一度や二度ではなかつた。

彼にとつて、今の蘭子は、いわば昔の弘子の再生であつた。それゆえに、弘子のことは、忘れねばこそ思い出しもしなかつたのであるが、それと一緒に、あの人間獸恩田の恐ろしい記憶まで、ひとしお薄らいでしまつたのは、不思議なほどであつた。彼は今では、そういう怪物がこの世にいたということが、何か荒唐無稽ことうむけなおとぎ話のようにさえ思ひなされるのであつた。

時は花咲く春であつた。人は恋を得て、心も空に浮き立つてい

た。だが、咲きほこる花の蔭かげにこそ、おどろおどろしきあやかしの黒い風が待ち構えているものだ。彼がその存在をふと忘れた時にこそ、魔性ましようのものは彼のすぐうしろにたたずんでいるのだ。やがて或ある日のこと、神谷は、とうとう、あの恐ろしい人間豹ひょうの眼を、ゾツと思ひ出さなければならなかった。

「ゆうべはどうして、僕をすつぽかして帰ってしまったんだい。あんなに約束しておいたのに。楽屋番のおじさんにすつかり恥をかいてしまったぜ」

その翌日、神谷が違約をなじったとき、蘭子はこんなふうに答えたのだ。

「あなた、からかっていらつしやるの。それとも、そんなに忘れ

つぼくなつてしまったの。あたしちゃんと送っていたきましたわ。それはそうと、あなたはゆうべ、車の中で、どうしてあんなにだまっていってしまったの。少しばかり変なぐあいだったわ」

「えっ、僕が君を送ったって？ それ、ほんとうかい。おとこの思い違いじゃないのかい」

神谷はびつくりして聞き返した。

「あら、それじゃ、あれ、あなたじゃなかったの？ でも……」
なんだか、ちつとも物を言わないで変なぐあいではあったけれど、いつも神谷にするように話しかけると相手はそれに受け答えをしたのだし、別れる時には、いつもの通り、恋人同士の長い握手をさえかわしたではないか。あれが神谷でなかったとすると：

…

「そんなこと言つて、あたしを怖こわがらせるんじゃない？　ほんとうに？　ほんとうにあなたではなかつたの？」

いくら念を押しても、神谷の答えは変わらない。

「まあ……それじゃ、あれ、いったい誰だつたのでしようか」

蘭子はふと底知れぬ恐怖にとらわれて、みるみる青ざめて行つた。

はじめて見る彼女の恐怖の表情が、当然とはいえ、なき弘子のそれと生き写しであつたことが、神谷をギョツとさせた。そして、自然の順序として、かつて弘子をそのような表情にまで震ふるえおのかせたところのもの、あの人間豹ひょうの恐ろしい形ぎよう相そうを、思い

浮かべないではいられなかった。

「君は、その男の顔を見なかったの？　顔も見ないで僕ときめてしまったの？」

「ええ、でも、あなただつて、お別れする時まで、ずっとお面を取らないでいらつしやることもあるんですもの……もし少しでも疑えば、その人のお面をとつてみるんだつたけれど、あたし、あなたとばかり思い込んでいたもんだから……」

ああ、なんてくだらないものがはやり出したのであろう、「レビュー仮面」なんて。あんなものが流行するばかりに、こんな間違いも起こるのだ。日頃は彼も、レビュー見物にひとしおの風情ぜいを添える思いつきとして、大いに賛意を表していたその仮面を、

今は呪^{のろ}わないではいられなかった。

仮面時代

「レビュー仮面」。まったくそれは奇態な流行であった。

人間というやつは、昔々から、生れついた生地^{きじ}の顔を、人前にさらすことを、ひどくはにかむ傾向がある。日本では頭被^{かっぎ}、編^{あみが}

笠^さ、頭巾^{づきん}の類が、その時々の人間の顔を隠してきた。西洋でも、

男という男がかつらをかぶった時代がある。女という女が厚い面^ヅ

紗^{エール}をかけた時代がある。仮面舞踏会などが人々に喜ばれるのも、

花見の客に眼かつらが売れるのも、同じ人間心理の現われに違い

ない。

その人間の弱点につけ込んで、考案されたのが「レビュー仮面」である。はじめは不良青年か何かが、気まぐれに、おもちゃのお面をかぶって、レビュー劇場の客席にはいったのがきっかけであった。一人まね、二人まね、チラホラと仮面見物が人の眼を惹くころには、機敏な商人が「レビュー仮面」と銘うって、商標登録を申請し、同一型のセルロイド面をドツと売り出したものである。

若い見物たち、殊ことに学生や商店員たちは、得たりかしこしと、このお面を利用し、その蔭かげに顔を隠して、舞台の踊子を、思う存分野やじ次り飛ばした。女学生は女学生で、このお面のカムフラージュによって、あこがれのボーイッシュ・ガールを、声を惜おしまさず

声援することができた。はてはおとなの男女までも、少しばかり面はゆいレビュ―見物のてれ隠しに、仮面を利用する者が続々とふえて行つた。

今や「レビュ―仮面」は時の寵児ちようじであつた。発売元の出張所が、劇場の入口に設けられ、見物人は、切符と一緒に、その一箇いっこ十銭のセルロイド面を、買わねばならないようなことになつてしまつた。

大劇場の観客席は、階上も階下も、まったく同じ表情をした、仮面の群衆によつてうずめられた。見物席の何千人というお揃いそろの顔が、どんなすばらしい舞台よりも、一そうすばらしい見ものであつた。

その上、「レビュー仮面」の表情というものが、又、実に巧みにできていた。それは、お神楽かぐらのお多福面をもつと男性化して、口を横に広くひらいて、ニヤニヤと笑わせた、単純な打ち出し面であつたが、その笑い顔が、さもさもおかしそうな表情で、お面をかぶつた同士が顔を見合わせると、お互いのお面の中で、クツクツと笑い出さないではいられぬほど、真に迫つてできていた。

お面の流行が、劇場内の空気をほがらかにしたことは非常なものであつた。舞台の踊子たちは、いつもえがおを絶やさなかつた。それに呼応するように、何千人の見物が、まったく同じ笑顔でニコニコと笑っているのだ。舞台も見物席も、別天地のように明るくなった。お面の噂うわさにひきつけられて、レビューぎら嫌いの人々まで

も、続々と見物に押しかけてきた。どの劇場も、レビューとさえいえば満員であった。つまり、「レビュー仮面」は、もう今では、劇場経営者のマスコットとさえなってしまったのだ。

いや、そればかりではない。劇場内の「レビュー仮面」は、やがて徐々に街頭に進出しはじめた。

銀座の夜をそぞろ歩きする過半の人々が、同じ笑いの表情に変わって行った。電車の中も、地下鉄の中も、同一表情の男女によつてうずめられた。大げさにいえば、東京じゅうが、同じセルロイドの顔でニコニコと笑い出したのである。

そういう流行が或る程度に達すると、一方に弊害へいがいの生ずるのは止むを得ないところであった。横着ものが、お面に隠れて、さ

まざまのいたずらをはじめたというのは、さもありそんなことであるが、更に困ったことには、このお面が、悪漢たちの大つぴらな覆面として役立つことがわかってきた。仮面の万引、仮面の空巢狙い、^{ねら}はては「仮面強盗」という名称さえも、新聞の社会面に現われはじめた。

前章の、江川蘭子が、まったく見知らぬ男と車を共にし、握手までかわしたという椿事^{ちんじ}も、そういう仮面流行の際であったからこそ、起こり得たことであつた。

「くだらないお面なんかはやるもんだから、そういういたずらを思いつくやつが出てくるんだ。君、よつほど注意しなくちやだめだぜ。もしそいつが悪人だったら、握手ぐらいですみやしない

んだから。これからは、充分僕だつてことを確かめてから車に乗るんだぜ」

神谷は、もしや獣人恩田の仕業しわざではないかと、かすかな疑いを抱いたものだから、それとなく、くどいほど注意を与えた。

蘭子も、すっかり脅おびえてしまつて、それから充分気をつけてはいたのだけれど、まさか人間豹ひょうなんて怪物が、この世に存在しようとは思ひもよらず、それに、相手の欺瞞ぎまん手段が巧妙をきわめていたので、或る夜のこと、ついまたしてもにせものの車に乗り込んでしまった。

「ラン子、今夜は家へ帰る前に、ちよつと寄り道をしようね」

蘭子が神谷と信じていた、その仮面の男が、暗い車内で、風を

引いたような声で言った。

「ええ、でも、どこへ寄るの？」

「ウン、じき近くだよ。ちよつと君を驚かせることがあるんだ。むろん、嬉しくつて驚くことなんだよ」

「そう、なんでしようか。思わせぶりね」

「ウン、ウン、思わせぶりさ。フフフフ、君、きつと驚くぜ」
蘭子は、やつと男の声がいつもと違っているのに気づいた。

「あら、あなた、風引いたの。声が変わよ」

「ウン、春の風だよ。陽気があんまりいいんで、風を引いちやつた」

「あなた、だあれ？……神谷さんなんでしようね」

「ハハハハハ、何を変なこといつてるんだ。きまつてるじゃないか。それとも誰か、ほかにも迎えにくる人があつたのかい」

「そのお面、取ってくださいさらない。気味がわるいわ、ニヤニヤ笑つていて」

「ウン、これを取るのかい。取つてもいいよ。だが、ちよつと待ちたまえ。君に見せるものがあるんだ。ほら、これ、君に上げるよ」

男は言いながら、ポケットから小さなサックを取り出して、パチンと蓋ふたをひらいて蘭子の前にさし出した。薄暗い豆電燈にも、キラキラと五色に光る、一カラットほどのダイヤモンドの指環ゆびわだ。

「まあ、美しい。これ、あたしにくれる？」

レビュー・ガールは贅ぜいたく沢たくに慣れていなかったので、数万円はするであろうこの高価な贈り物に、すっかり昂こうふん奮ふんしてしまった。「ウン、貰もらつていたくだよ。つまりエンゲージ・リングつてやつさ。受けてくれるかい」

「ええ、受けたげてよ。ありがと」こみ上げてくる嬉うれしさに、いつしか仮面のことも忘れてしまつて、「あたしを驚かせるつていの、これ？」

「いいや、これはつまりプレリユードなんだ。ほんとうに君をアツといわせるものは、まだ別にあるんだよ。大切にあとまで取つておくんだよ」

そんな会話のあいだに、車はいつしか、劇場から程近いはまちよ浜

町の、とある意気な門構えの家へ着いていた。

あらかじめ言つてあつたものとみえて、仮面のままの男を怪しみもせず、女中が案内したのは、奥まった六畳と四畳半の小座敷である。

氣取つた塗り物の円卓を中にはさんで、座につくと、やがて運ばれるお茶、お菓子、そして、お酒。だが、男はまだ仮面を取ろうともしないのだ。

「ここ待合でしょう。おかしいわね。あたしこんな服なんかで、変でしょう」

断髪洋装のレビュー・ガールと待合の小座敷とは、いかにも変てこな取り合わせであつた。

「ウン、そんなことどうだっていいよ。さあ、さっきの指環お出し、僕がはめて上げるから」

「ええ」

蘭子はいわれるままに、その指環のサックを差出したが、ふと心づいて、

「あら、まだお面かぶっていらつしやるの。お座敷の中でおかしいわ。取ったげましょうか」

「まあ、いいから、手をお出し、指環の方を先にしよう」

男の薄黒い毛むくじやらの手が、ニユツと伸びて、蘭子の左手を掴み、指環をはめようとした。その手を一と眼見ると、彼女はギョツとして、思わず中腰になった。

「いけない。放してください。あなた誰です……神谷さんじゃない……早く、早く、そのお面を取って、顔を見せてください」

「ハハハハハ、そんなにせき立てなくなつて、いま見せてあげるよ。ほら、君とエンゲージした男っていうのは、つまり僕なのさ」

片手では、もう指環をはめてしまった蘭子の手をグツと握つたまま、一方の手で、「レビュー仮面」をむしり取つた。その下から現われたのは、蘭子には初対面であつたけれど、まぎれもない人間豹^{ひょう}、恩田の痩^やせた黒い顔であつた。

「ハハハハハ、ずいぶん苦勞をしたもんだよ。神谷君とそっくりの服を注文したり、髪をオール・バックにしたり、声を作つたりさ。だが、君がエンゲージ・リングを受けてくれたので、僕はや

つと安心したよ。まさか君は、その指環を返そうとはいうまいね」
蘭子は恩田の恐ろしさをまだ知らなかった。ただ、なんとなく
いやらしい男と感じたばかりだ。

「あたし、人違いをしましたの。これをお返しします。そして、
もう帰りますわ」

彼女は指環を抜いて卓上に置き、いきなり立ち上がって帰りそ
うにした。

「だめだめ、その襖ふすまには錠前がついているんだ。錠かぎは僕が持つて
いる。ほしければ鍵を上げないものでもないが、それには条件が
あるんだよ」

「じゃあ、あたし、ベルを押して、ここの女中さんを呼びますわ」

「呼んだって来やしないよ。君が少しぐらい大きな声を立てたつて、誰もこないことになっているんだ」

蘭子は青ざめた顔をゆがめて、もう泣き出しそうになっていた。「まあ、いいから、そこへ坐りたまえ」^{すわ}

恩田が彼女のそばへ寄りそつて、肩に手をまわして、グツとおしつけると、蘭子はクナクナと座蒲団の上にくずおれてしまった。

恩田の大きな両眼は、渋面を作った少女の顔を、飽かず見入りながら、怪しい燐光^{りんこう}に輝きはじめた。口は大きくひらいて、夏の日の犬のように、ハツハツと、苦しげにあえいだ。そして、まっ白な鋭い歯のあいだから例の刺^{とげ}のある異様に長い舌が、一匹の無気味な生きもののようにうごめくのが眺^{なが}められた。

蘭子はその時はじめて、この男が普通の人間でないことを悟った。けだものだ。人間の形を借りた猛獣だ。

あまりの恐ろしさに、もう気力も尽きたかと感じたが、しかし、こんな野獣の餌食えじきになるのは、考えただけでも耐えがたい汚辱おじよくであつた。ない力をふりしぼつても、この危急をのがれなければならぬ。

「いけません。あたし、どうしても帰ります」

「だが、僕は帰さないのさ」

野獣が人間の言葉で嘲りあざけながら、なおもその無気味な顔を、彼女の眼の前に近づけてきた。

「ね、ラン子、僕は執念深いのだよ。一度思いこんだら、君がど

んなに逃げまわっても、どんなに警戒しても、結局目的を達しないではおかぬのだよ。よく考えてごらん。君は命が惜しくないのかい」

言いながら、彼の熱い頬ほおが彼女の頬に触れ、蜘蛛くものような五本の指が、彼女の背中を這はいまわるのが感じられた。

ゾーツと、からだじゅうの産毛うぶげが逆立ち、血流が逆流した。蘭子はもう無我夢中であつた。何かしらえたいの知れぬ叫び声を発しながら、狂氣の力をふりしぼって、立ち上がりざま襖ふすまに向かつて突進した。

メリメリと恐ろしい音がして、襖に穴があいた。

蘭子は無理やりにそこを押しくぐって、廊下にころがり出した。

「誰か、助けてください」

悲鳴を聞きつけて、女中たちが駈かけつけてきた。

消え失せる花売娘

結局、獣人恩田の企ては失敗におわった。彼はレビュー・ガールというものを、甘く見すぎていたのだ。一箇いつこのダイヤモンドは充分彼女の貞操ていそうを買い得るものと誤解していたのだ。

それが案に相違して、蘭子の勢いがあまりに烈はげしく、ついに襖けやぶを蹴破る騒ぎに、さすがの恩田も辟易へきえきして、なにげなくその場を取りつくり、無事に蘭子を帰宅させたのであった。それ以上

騒ぎが大きくなって、警察沙汰ざたにでもさされては、恩田自身が危いのだ。だが、その翌日、蘭子から一部始終を聞き取った神谷青年は、このことを警察に告げ知らせないわけにはいかなかった。恩田はその筋のお尋ねものの恐るべき殺人犯人だったからだ。

さつそく、浜町の待合が取調べられたことはいうまでもない。しかし、その待合は恩田とはなんのかけり合いもないことがわかった。恩田の名も、彼の住所さえも知らなかった。

それから五日ほどは、別段のこともなく過ぎ去った。恩田はどこともしられぬ彼の巣窟そうくつに潜み隠れているのであろう。警察の手を尽した捜索も徒労におわった。気丈の蘭子は休みもしないで舞台に立った。劇場では、この人気女優の身辺を気遣って、屈強

の男を護衛として、出勤の送り迎えをさせることになった。神谷も毎日会社を早引けにして、蘭子の楽屋部屋に入りびたり、注意をおこたらなかった。

それにしても、なんという呪わしい廻り合わせであつたらう。神谷と恩田は、異性に対する嗜好しこうが、符節を合わすように、ピツタリと一致していたのだ。でなくて、先には弘子を、今また蘭子を、申し合わせでもしたように、同時に恋するということがあるだろうか。

いやいや、そうではないかもしれない。恩田父子が神谷を仇きゆう敵てきと狙ねらっているのは、疑つてみるまでもないことだ。すると、

今度の蘭子の場合、ただ偶然の嗜好の一致だけでなく、神谷

の熱愛するものを奪い取り、責めさいなんで、それを彼に見せびらかし、限りない苦惱を与えて、ひそかに快哉かいさいを叫ぼうという下心ではあるまいか。

思いめぐらせば、めぐらすほど、人間獣の奥底知れぬ執念に、神谷は心も凍る恐怖を感じないではいられなかつた。

今にも、今にも、あいつは必ず再挙を企てるに違いない。蘭子から眼を放してはいけない。

命をかけても恋人を守らなくてはならぬ。願わぬことながら。彼は敵の襲来を疑うことができなかつた。

すると、果たして、浜町の事件があつてから六日目の夜、人間豹ひょうは、まったく護衛の人々の意表に出た、思いもかけぬ手段によ

つて、再び江川蘭子の誘拐ゆうかいを企てたのであった。

その時、レビュー劇場の舞台では「巴里パリの花売娘」の一場面、
夾竹桃きょうちくとうの花咲き乱れる花園に、花売娘の一隊が登場して、歌
いつ舞いつしていた。

十数人のコーラス・ガールの中に、ひとときわ美々しく着飾つて、
声も顔も仕草しぐさも群を抜いた一人、それがこの場面の主人公、江川
蘭子らんし扮するところの花売娘であった。

見物席は先にもいう仮面時代、満員を通り越した大群集の、顔
という顔が、判で押したように、まったく同じ笑い顔であった。
その仮面の下から、太い声、甲高い声、種々さまざまの声援が、
舞台の歌を消すほどのすさまじさで、ただ一人、江川蘭子に集中

していた。

蘭子得意の場面である。

彼女はしずしずと、コーラス・ガールの列を離れ、舞台の中央に進みいで、手に持つ花籠はなかごを軽く揺り動かしながら、呼びものの「花売娘の唄うた」を歌いはじめた。

それが彼女の人気の源となつたところの、甘くて艶つやっぽい肉声が、管絃樂かんげんがくの伴奏とのつかず離れぬ交錯こうさくに、或あるいは高く、或いは低く、或る時は怒濤どとうと碎け、或る時はいささ川とささやき、曲節の妙を尽して数千の観客を魅了していったとき、突如、実に突如として、「巴里の花売娘」が、舞台から消えうせてしまったのである。江川蘭子が煙のように見えなくなつてしまつたのである。

見物は、あまりの不思議さに、しばらくは静まり返っていた。まったくその意味を了解することができなかった。もし天勝の舞台なれば、さして不思議がることはなかった。「消え失せる花売娘」という大魔術であったかもしれないからだ。

だが、レビューの台本に、歌いもおわらぬ歌姫が、かき消すごとく見えなくなってしまうなんて筋書のあるうはずはなかった。

「これはただごとではないぞ」

見物たちの頭に、何かしら恐ろしい予感がひらめいた。

だが、見物たちよりも、幾層倍いくそうばいの驚きにうたれたのは、本人の江川蘭子であった。夢中に歌いつづけていた時、突然、立っている床が、足の下から消えてゆくような衝撃を感じた。クラクラ

と目まいをおぼえて、彼女は横ざまにうち倒れてしまった。

ふと気がつくのと、彼女のまわりから舞台も見物席も消えうせて、そこははじめじめと薄暗い穴蔵のような場所であった。

ああ、わかった。どうかした拍子に、せり出しの板が落ちて、

奈落へ落ちてきたのだ。ここは舞台の下の奈落なのだ。いや、そ

うではない。せり出しの板が落ちるなんてことが、起こりそうな

道理がない。きつと誰かがいたずらをしたのだ。あらかじめせり

出しの台がはずれるように細工をしておいて、彼女がなにげなく

そこへのるのを待ち構え、ロク口を逆に廻まわして、エレベーターを

おろすように、突然、彼女のからだを舞台から消してしまったのだ。

では、そんなつまらないいたずらをしたのは、いったい誰であろう。

蘭子はとつさにそれと悟つて、宙吊りになつた四角な板の上に倒れたまま、ひよいと顔を上げて薄暗がりの奈落の中を透かして見ると、案の定、そこにうごめく三人の人影があつた。

せり出しの板がおりきつてしまったとき、そのうちの一人が、幽霊のように彼女の身边に近づいてきた。ああ、あいつだ。闇にも光る二つの燐光。けだもののような息遣い。恩田だ、人間豹だ。彼は嚴重な警戒のために、蘭子の身边に近づく隙がないものだから、こんな突飛な誘拐手段を考えついたのだ。そして、彼の右手にハンカチを丸めたような白いものが握られている様子で

は、彼は蘭子を麻酔させた上、意識を失った彼女をかついで、この奈落を逃げ出すつもりに違いない。

廻り舞台さえ必要のないレビューの興行であつたから、その時まわ奈落には、係りの者の影も見えなかつた。

舞台の下に、このような悲劇が行なわれているとも知らず、見物は身動きもせずおしだまつていた。この次には、どんな恐ろしいことが起こるのかと、手に汗を握つて静まり返つていた。

すると、果たして、どこからともなく、絹を裂くような悲鳴が、場内一杯に響きわたり、その末は細く細く糸のように消えて行つた。蘭子が何かしら恐ろしい目にあつているのだ。

見物席は、階上も階下も総立ちになつた。泡立つ波あわのようなざ

わめきが起こつた。だが、それはなんとという奇怪な光景であつたろう。この恐ろしい刹那^{せつな}、総立ちになつた数千の見物は、彼らの胸^{むな}騒^{さわ}ぎに引きかえて、その表情は、揃^{そろ}いも揃^{そろ}つた笑い顔であつた。セルロイド製「レビュー仮面」のほがらかなえがおであつた。その数限りもない笑いの面は、江川蘭子の恐ろしい運命を、さもおかしくて堪^{たま}らぬように、声を揃^{そろ}えて笑いこけているかのように見えた。

暗黒劇場

その夜、大都劇場の観客は、かつて彼らを有頂天^{うちようてん}にしたいか

なる大レビューにもまして、華やかに、物狂わしく、躍動的な、前代未聞の大芝居を、手に汗を握り、胸おどらせながら、嵐あらしのごとき激情をもつて見物したのであつた。

その大芝居の主役は人間豹と江川蘭子、脇わきやく役は蘭子の恋人神谷青年、その他大勢のコーラス・ガールには、制服姿いかめしいおまわりさんたち。

血のグランド・レビュー、序曲は、江川蘭子扮ふんするところの花売娘が、独唱なかばに、せり出しの台が下降し、突如として舞台上から消えうせるといふ、異様な場面であつた。

彼らは遥はるかの地底から聞こえてくる、蘭子のゾツとするような悲鳴を耳にした。夾きょうちくとう竹桃の咲き乱れた舞台面は、映写機の廻か

転いてんが停止したように、しばらくのあいだ、ヒツソリと静まり返ってしまった。十数名のコーラス・ガールは、背景の前に横隊を作ったまま、人形のように動かなかつた。オーケストラは鳴りをひそめた。ただ、舞台中央にポツカリとひらいたせり出しの穴だけが、悪魔の口のように物恐ろしく目立ってみえた。

そうして、見物席と舞台とが異様な静寂にとざされていたあいだに、舞台下の奈落ならくでは、一匹の野獣が麻醉剤に気を失った美しい女優を小脇こわきにかかえて、穴蔵くらやみの暗闇の世界を、気ちがいのように走っていた。

奈落には幾つもの出入口があつたが、恩田が目ざすのは、劇場裏手の空き地に抜けている通路であつた。彼は道具方を買収して、

そのこのドアの鍵かぎを手に入れていた。そとの暗闇には部下の自動車が待ち構えているはずだ。

彼は蘭子の両足を、コンクリートの床に引きずりながら、走りに走ってドアに達した。そして、ドアに手をかけ、一、二寸ひらきかけたかと思うと、彼はハツとしたように又それを閉めてしまった。

ああ、なんということだ。いったい何が起こったのだ。いつも淋さびしいそのドアのそとに、黒山の人だかりではないか。制服の警官もまじっていた。恩田がドアを細目にひらいたとき、そのすぐ前にギョツとする制服の背中があつて、その警官がドアの音を怪しむように振り向きさえしたではないか。あとでわかったのだが、

ちようどそのとき、ドアのそこには酔いどれの喧嘩けんかがあつて、その一人が血を流して倒れていたのであつた。

恩田はもときた道をまた走り出した。そして、電動室の前までくると、そこのおぼろな電燈の下に、彼が買収した道具方の男が立っていた。

「どうしたんです。どこへ行くんです」

その男が恩田の狂乱のようすを見て、驚いて尋ねる。

「だめだ。あつちからは出られない」

怪人があえいだ。

「アツ、いけねえ。お聞きなさい、あの足音を。人が来たんだ。

一人や二人じゃねえ。早く逃げなくっちゃ」

「だが、どこへ？ どこへ逃げればいいんだ」

「だめです。逃げ道なんかありやしない。あの裏口のほかは、どつちへ行つたつて人の山だ」

「じゃあ、君、頼む、上の配電盤室へ行つて、電燈を消してくれたまえ。この建物を暗闇にしてくれたたまえ。その間に、おれは見物席へまぎれ込むから。お礼は約束の三倍だ」

最後の手段であつた。

「よし、引き受けた。早くこちらへお逃げなさい。舞台裏への近道だ」

男は言い捨てて、先に立つて駈^かけ出して行く。恩田は執念深く恋人をかかえたままそのあとを追つた。

舞台ではコーラス・ガールの花売娘たちが、一か所にかたまつて、恐怖におののいていた。見物席は総立ちになったまま、不安にぎわめいていた。

「幕だ、幕だ」

どこかで叫ぶ声が、かすかに聞こえてきた。だが、どうしたところか どんちよう 綴帳はなかなかおりにこないのだ。

すると、突然舞台が くらやみ 暗闇になった。

「ああ、幕の代わりに照明を消したんだな」と思う間もあらせず、再びパツと明るくなった。そして、今度は客席の電燈という電燈が、一時に消えてしまった。

舞台裏から、意味のわからぬ数人の怒号が、入りまじって響い

てきた。

たちまち客席が昼のように明るくなった。舞台効果のために消してあつた電燈までが、ことごとく点火されたのだ。

そして、次の瞬間には、建物全体の電燈が、稲妻のように、無気味な明滅めいめつをはじめた。見物たちの不安な心臓の鼓動と、調子を合わせて、光と闇の目まぐるしい転換がはじまつた。

静まり返つていた見物席に、恐ろしい騷擾そうじょうが起こつた。劇場当事者をののしる怒号が、合唱のように湧わき立つた。男性のわめき声、女の金切り声、子供の悲鳴。

電燈がパツとついたときには、何千という人間が、まったく同じニコニコ顔で笑つていた。そのえがおの下から、怒り、罵ののし、

泣き、叫ぶ、千差万別の激情がほとばしるのだ。

やがて、物の怪のような光の明滅が、パツタリ止まったかと思うと、長い暗闇がきた。巨大な劇場全体が、舞台も、客席も、廊下も、死の暗黒に包まれてしまった。

見物席の怒号は一そう烈はげしくなった。

不安に耐えきれなくなった気の弱い人々、婦人客などは、闇の中を、津波のように木戸口に向かって殺到した。踏みつけられて悲鳴を上げるもの、押し倒されて泣き叫ぶもの、椅子いすの倒れる響き、物の裂ける音。

だが、しばらくすると、その騷擾のただ中に、再び場内は昼のように明るくなった。そして、もう無意味な明滅は繰り返されな

かつた。

ふと見ると、まばゆい電光に照らし出された舞台に、異様な人物が立ちはだかつている。

乱れた頭髮、ドス黒い顔に異様に輝く両眼、まっ赤な唇くちびるのあいだから覗のぞいて見える牙きばのような白歯、皺しわだらけになつた黒い背広服。

「あいつだつ、あいつが犯人だつ、蘭子をかどわかしたやつは、あの男だつ」

突如として、見物席の中に、つんざくような叫び声が起こつた。一人の青年が、例の仮面をつけたまま客席の通路を舞台目がけて、風のように走っていた。走りながら、なおも叫びつづけた。

「諸君、こいつが、有名な人間豹ひょうだつ、女給殺しの大悪魔だつ」
それは、見物のあいだにまじつて、愛人江川蘭子を見守つていた神谷青年であつた。先には弘子を、今またこの新しい愛人を、けだもののために奪われようとして、半狂乱となつた神谷芳雄であつた。

花吹雪ふぶき

恩田は何事かに手間取つていたために、暗闇くらやみのあいだに舞台から客席へと、まぎれ込む計画に失敗し、意外に早く点ぜられた照明の中で、ハツと立ち往生してしまつたのだ。彼はその醜い野

獣の姿を、はれがましくも、衆人環視の中にさらさなければならなかつたのだ。

しかも眼の前には、彼を指さし、彼の正体をあばき立て、彼の旧悪をどなり散らしながら、駈かけ寄ってくる仮面の人物がある。

人間豹はみじめにも狼ろう狽ばいしながら、毘わなにかかつた野獣のように、舞台の上を右に左に走りまわつた。引き返すこともできない。進むこともできない。舞台裏には係りの若い者が通せんぼうをしてがんばっている。前には見物の人の山だ。

横に逃げられないときまれば、縦に逃げるほかはない。彼はついに豹の本性を現わして、舞台の額縁の柱の裏がわを、すさまじい勢いで、搔かき登りはじめた。

人間業わぎではない。別に足場とてもない漆喰しつくの円柱だ。それを彼は一匹の猫ねこのすばやさで、みるみる天井へと姿を消してしまつた。

舞台の上方、一文字幕いちもんじまくの蔭かげには、蜘蛛手くもてになつて、あらゆるからくり仕掛けが張りめぐらしてある。浅黄幕あさぎまくの太い竹竿たけざお、照明の電球を取りつけた棚たな、本雨の水道管、紙の雪を降らせる籠かご。人間豹はそれらの棚や竹竿を伝わって、舞台中央の天井まで逃げおおせることができた。彼はそこの照明棚にうづくまると、古いお芝居の化け猫そつくりの形ぎようそう相そうで、爪つめを磨とぎ、牙きばをむき、燐光りんこうの燃える両眼をらんらんとかがやかせて、遙はるか眼下に群がる人々の氣勢をうかがうのであつた。

「誰か、あいつを捕えてください。あいつはきつともう蘭子を殺してしまつたのです。殺人鬼です」

神谷が舞台に飛びあがつて、悲痛な声で叫ぶ。

場内にいあわせた二人の警官が駈かけつけてきたけれど、おまわりさんとて、木登りはおぼつかない。

「おい、誰かあそこへ登る者はないか」

道具方の兄いの中から、腕つぶしの強そうな、敏びんしょう捷しょうな若者が躍り出した。

「あつしが行きましょう。向こうの梯子はしごから登りやわけはねえんです。行ってあいつを引きずりおろしちまいましたよ」

彼は人々をかき分けて、梯子のところへ飛んでいった。さすが

に慣れたものであつた。彼は人間豹にも劣らぬすばやさで、垂直の梯子を駈^かけのぼると、天井の細い棚^{たな}をヒヨイヒヨイと伝いながら、みるみる恩田の方へ近づいていった。

客席からは、一文字幕が邪魔をして、この絶好の活劇を見ることはできなかつたけれど、その幕が嵐^{あらし}のようにすさまじく揺れるはためくのを見ると、そこに起こっている鬪争^{はげ}の烈しさが、まざまざと想像された。

天井で雪紙の籠^{かご}が揺れるたびに、舞台には時ならぬ五色の雪が、ふんぷんとして降りしきつた。立ち並ぶ夾^{きょう}竹桃^{ちゅうとう}の造花の上に、逃げまどう花売娘たちの上に、舞台に押し上がった見物の仮面上に、警官の帽子や肩章の上に、美しい五色の雪が降りしきつた。

雪ばかりではない。レビューの最終場面に用意してあった金と銀との幅広いテープがキラキラと輝きながら、一本、二本、三本、ほどけて天井から垂れ下がってくるかと見る間に、たちまち、篠しのつく雨の烈しきで、数十本、数百本の金銀の帯が、へんぽんとして舞台目がけてふりくだった。

背景も、舞台上を右往左往する人々も、覆おおい尽すかと思われる金銀の雨、五色の雪、その目もあやにきらびやかな舞台の天井には、花を降らせる大格闘が、猛獣の咆哮ほうこうを伴奏に、いつ果てるともなくつづけられた。

舞台には、降りしきる雪紙が、いつかうず高くつもっていた。ふと気がつくとき、その雪の上に、雨滴のようにポトリポトリと、

したたっているものがあつた。まっ赤な雨であつた。したたるたびに、雪紙はみるみる血の色ににじんで行く。

「アツ、やられたつ。血だ、血だ」

人々は愕然^{がくぜん}として叫び出した。

天井では、豹^{ひょう}の爪^{つめ}が、勇敢な道具方の若者を傷つけていた。その傷口から吹き出す血潮^{ちしお}が赤い雨となつて、雪紙を染めたのだ。

若者はもう死にも狂いであつた。このままじつとしていたら、絞め殺されるばかりだ。どうせ死ぬ命なら、この怪物を道連れに、一か八か^{いちばち}、命がけの冒険をやつてみようと決心した。

彼は、息も絶え絶えに喉^{のど}を締めつけられながら、無我夢中に相手のからだにしがみつくと一緒に、今まで棚^{たな}にかけていた両足を、

パツと宙に浮かせた。

さすがの怪物も、この捨て身の不意打ちに抗する力はなかつた。なんとも形容のできない悲痛な咆哮が天井にこだましたかと思うと、組み合つた二人のからだは、降りしきる雪紙の中を、ともえ巴に回転しながら、舞台上の上に墜つ落らくした。

だが、野獣は生来身軽である。はげ烈しい物音を立てて墜落したかと思うと、アツと驚く人々の前に、彼はたちまち立ち上がつていた。見れば、いつの間につけたのか、彼の醜い顔は、例の笑いの仮面に蔽おほわれている。

一方、殊勲の若者は、不幸にも、けだものの身軽さには敵しがたく、相手の下敷きとなつて、グツタリと横たわつたまま、身動

きさえしなかった。その死骸しかいのようなからだの、毒々しく血潮に染まった胸のあたりを、みるみる雪紙が埋めて行く。

「それっ、逃がすなっ」

舞台の人々は、立ちあがった恩田を目かけて、一とかたまりになつて突き進んだ。

名状しがたき混乱、倒れた一人の上に、十重とえはたえに折りかさなつた人の山、その過半数は例のセルロイド面をつけたままだ。

笑いの面の蹴しゅうきゆうせん球戦だ。

「さあ、抑おさえたぞ。こいつだ。こいつだ。警官、こいつを縛しばつてください」

叫び声に、人の山がくずれた。

見ると、そこに、五色の雪紙にまみれて、一人の仮面の男が、もう一人の仮面の男を組み敷いていた。

組み敷いたのは神谷芳雄だ。組み敷かれているのは人間豹ひょうに違いない。だが、人間豹にしてはなんと弱々しい姿であろう。さすがの彼も、さいぜんからの格闘に疲れ果てて、非力の神谷青年に名を成さしめたのであろうか。

「仮面を！ 早く仮面を取ってください」

両手のふさがった神谷が、かたわらの人に呼びかける。

「よし、おれが取ってやろう」

一人の若者が、下敷きになつてもがいている男の顔に飛びついて、笑いの仮面をはぎ取った。

「アツ……」

たちまち起こる驚愕きょうがくの叫び。

「人違いだ。これは恩田じゃない」

神谷青年は、飛び起きて、キョロキョロとあたりを見まわした。道具方やコーラス・ガールを除いては、どれもこれも、仮面の人々だ。それらの仮面が、本人たちの意志に反して、さも神谷の失敗を嘲あざけるかのように、ニヤニヤと笑っている。

「皆さん、仮面を取ってください。犯人はあなたがたの中に混っているのだ。早く、仮面を取ってください」

神谷の叫び声に、人々は急いで顔に手をやった。仮面さえはずしてしまえば、もうしめたものだ。人間豹は、この舞台の群集の

中に混っているのは間違いのないことなのだから。

だが、ああ、その時、今一瞬にして怪人を発見捕縛ほぼくするばかりとなつたそのとき、たちまちにして、場内は、またしてもまつ暗く闇らやみとなつてしまった。配電室に潜ひそんでいた恩田の味方が、危機一髪の瀬戸ぎわに、彼を救つたのである。

舞台裏の怪異

「みなさん、仮面を取ってください。曲くせもの者は見物席の中へまぎれ込んだかもしれませぬ」

劇場の係り員が、大声でどなつた。何千という見物たちの型に

はめたような一様の笑い顔が、たちまち消えて行つた。そして、取り去られたお面の下から、老幼男女、美醜さまさまの生地きじの顔が、さらけ出された。

人々はお互いに隣席の人物を、疑い深く眺ながめ合つた。あのとりすました顔をしている男が、もしや人間豹なのではあるまいか。こちらにニヤニヤ笑っているやつもなんだか怪しいぞ。誰も彼も、自分のすぐ間近に恐ろしい殺人鬼が潜んでいるように感じた。

劇場全体を、死の静寂が占領した。人々は、今にもワーツと叫んで、逃げ出したい気持で一杯になりながら、しかし逃げ出す気力さえもなく、棒立ちになつたまま身動きもしないでいた。そして、幾千という眼が、ただ眼だけが、極度の恐怖に脅おびえながら、

ジロジロと見かわされていた。

だが、客席にも、舞台にも、舞台裏にも、あの特徴のある恩田の顔は、まったく見出すことができなかつた。

やがて近くの警視庁から駈かけつけた十数名の警官が、劇場係員の協力を得て、楽屋から舞台裏、天井から奈落ならくの隅々まで搜索したけれど、ついに獣人の姿を発見することはできなかつた。恩田ばかりではない。被害者の江川蘭子も、いつの間はどこから運び出されてしまったのか、影さえも見えなかつた。

レビューは開演なかばにして中止するほかはなかつた。満員の見物たちは、木戸木戸に立ち並んだ警官に、不愉快な首実検をされて不平たらたら帰り去つた。

見物が一人もいなくなると、再び入念な搜索が繰り返されたが、やっぱりなんの得るところもなかった。どの出入口から逃げ去ったという見当さえ、まったくつかなかった。

一時間以上のむだな努力の後、警官たちは一と先ず引き上げて行った。レビュー・ガールや劇場係り員たちも許されて帰宅した。あとには、墓場のように淋しくなった建物の中に、たった七人の宿直員が心細く居残っているばかりであった。

こういう事のあったあとだからというので、鳶の者や力自慢の道具方など、選りすぐった七人の者が、寝ずの番を仰せつかったのだ。

彼らは楽屋口に近い、畳敷きの部屋に一とかたまりになって、

徳利とつくりからじかの冷酒を呷あおりながら、無駄むだぐち口くちを叩たたいていた。

「おいらあ、どうも、あいつがまだ、この小屋ん中のどつかの隅つこに、隠れているような気がしてしようがねえんだがね」

「よせやい。おどかしつこなしだぜ。あれほど探していなかつたんだもの、今いましろ頃まで隠れているはずはないよ。ねえ君」

すると三番目の男が首をかしげながら、

「ウン、だが、どうとも言えないね。なにしろ芝居の舞台裏や奈落らくときちや、ごみ溜ためみてえなもんだからね。隠れようと思えば人間一人、どこへだって隠れられるからね」

また別の一人が、

「もし隠れているとすりや、奈落だぜ。ほら、あん時、みんなし

てやつを抑えつけたと思つたら、もうどつかへいなくなつていたね。変じやねえか。いくらすばやいつたつて、あんなに早く逃げ出せるわけがねえ。やつは、あん時、せり出しの穴へ飛び込んだのに違いないぜ。やつこさん、今ごろ、この縁の下あたりでモゾモゾしてるんじやねえかな」

議論は容易に尽きなかつたが、話せば話すほど、七人の者はだんだん、人間豹がまだこの劇場内に潜んでいるという考えに、支配されて行つた。

ほかのどんな建物より、空っぽになつた劇場ほど、異様に物淋しいものはない。見物席の何千という椅子に、たった一人も人間が坐つていない有様を考えただけでも、何かしらゾツとする

感じであつた。まして深夜、あんな怪事の起こつたあと、死に絶えたような大建築物の中に、生きているものといつては、たった七人……と思うと、さすが力自慢の兄たちも、決してよい気持はしなかつた。

「それはそうと、君、あいつがまだ小屋の中にとすると、蘭子はどうしたんだろう」

「むろん、一緒にいるだろうじゃねえか」

「生きてかい？」

誰も答えるものはなかつた。人々はギョツとしたようにだまり込んで、不安な眼を見かわすばかりであつた。

そうだ、けだものは、あの美しい女優を殺さなかつたとは言え

ないのだ。どこかその辺の暗闇くらやみの中に、血みどろになった蘭子の死骸しがいがころがつていないとは限らないのだ。

「アーアー、いやだいやだ。おい、みんな、そんな話は止よにしようじゃねえか」

誰かがやけに大きな声を出した。

「シツ……ちよつとだまつて」

すると隅っこにいた一人が、突然恐怖に脅おびえた眼を光らせて、一同を制した。

「あれはなんだろう……ほら……君たちには聞こえないのかい……あの声」

思わず澄ます一同の耳に、どこか遠くの方から、かすかに、か

すかに、女の悲鳴らしいものが聞こえてきた。

「おい、あの声、蘭子じゃねえか」

「ウン、そうらしい。どこだろう」

気早やの若者たちはもう立ち上がっていた。

「奈落ならくのようだぜ」

「いや、舞台裏かもしれない」

「おい、みんな、行ってみよう」

人々はドカドカと廊下へ出て、草履ぞうりをつっかけるのももどかし

く、先を争うように走り出した。大部分は奈落へ降りていったが、

二人だけ舞台裏に廻まわった者がある。若い道具方とその友だちの鳶とび

の者だ。彼らは決して奈落の闇やみを恐れたのではなかった。さいぜ

んの悲鳴を舞台裏からきたものと信じていたのだ。

道具建てを取りかたづけた舞台の上は、原っぱのように広々としていた。高い天井から裸電燈が幾つか下がっている。開演中の照明とは違って、公園の常夜燈みたいに、薄暗くたよりない感じだ。

廻り舞台の大きな二重円形が、まる出しに見えている。その両側の道具置場には、幾筋かの細い通路を残して、書き割、さまざまの張り物、藪やぶ葎だたみなどが、ゴチャゴチャと詰め込んである。

両人は廻り舞台のまん中に立って、どこを探したものかと、しばらく躊躇ちゆうちよしてはいたが、すると、またしても異様な叫び声が聞こえてきた。

「アワワワワ」というようなかん高い声が、何かに蓋ふたされているように、陰にこもって舞台の広い空洞にこだまするのだ。

「おい、やっぱりここだぜ」

「ウン、あっちの方から聞こえてきたようだね」

二人は足音を盗んで、それとおぼしき道具置場の細い通路へはいって行った。

藪やぶだたみ

藪やぶををかきさがしたり、書き割を動かしてみたりして、抜け目なく眼をくばりながら、グルツと一巡したけれど、どこの隅にも人影らしいものもない。

「こいつあ、どうもキテレツだわい。確かに、この辺から聞こえてきたんだがなあ」

「だまって。相手に聞かれちやいけねえ。しばらくここで待って
みようじやねえか」

二人はささやきかわしながら、その細くて薄暗い通路にしゃが
んだ。

彼らのうずくまったすぐ前には、藪畳が三枚ほど立てかけてあ
つて、その奥に、或る日本舞踊の道具に使われる、張り物の大き
なお釈迦さまの坐像ざぞうが、大入道のようにボンヤリと見えていた。

「おや、今なんだかガサガサって音がしたじやねえか」

ねずみ
「鼠だらう」

「鼠なもんか。どうやら、この辺くさが臭いぜ」

突然、彼らはハツと息を呑のんで、眼と眼を見合わせた。ごく間

近くから、「ウーン」という妙な唸りうな声^けがして、パタパタと何かを蹴りつける音が聞こえたからだ。

「オイ、見ろ、あの中が怪しいぜ」

「ウン、そうだ、用意はいいか」

「やつつけろ！」

二人の眼が、そういう意味を伝え合った。そして、呼吸が揃そろうと、彼らは立ち上がるや否や恐ろしい勢いで、そこにある張子はりこの仏像へ飛びついていった。

軽い張子のお釈迦さまは、一ひと突きで横ざまに倒れてしまった。

同時に、仏像の体内に隠れていたものが、眼の前に暴露された。

まっ黒な人影が、スツクと立ち上がって、こちらを睨にらみつけた

まま、逃げだそうともしない。その男の顔のあたりに、りん燐のよう
に底光りのする二つの丸いものが、じつと動かなかつた。ひょう豹の眼
だ。果たして、そこには恩田が隠れていたのだ。

恩田の足元に、肌も露あらわになつて花売娘が倒れていた。いうま
でもなく、江川蘭子である。猛獣はその可憐かれんな餌食えじきとたつた二人
で、さいぜんからずつと、この仏像の体内ひそに潜ひそんでいたのに違ちが
ない。

道具方と鳶とびの者は、相手があまりに落ちつきはらつていたので、
無気味さに、手出しもできず立ちすくんでいた。

長いあいだ無言の睨み合いがつづいた。

「お前たち、二人つきりか」

異様に陰気な声が響いてきた。人間豹が物を言ったのだ。

「何をっ！」

鳶の者が、虚勢を張って、これも低い声で応じた。

「お前たち、おれの力を知らないのか」

薄闇うすやみの中に、牙きばのようなまっ白な歯が、浮き出して見えた。

二つの燐光が油を注いだように、爛々らんらんと燃え立った。

怪人は、両手で空を掴つかむようにして、ジリジリと前へ進んできた。

「畜生ちくしょうっ、やつちまえ」

鳶とびの者は、やけくそにわめきながら、黒い影に組みついて行った。道具方もおくれではない、隙すきを見て怪物の足にからみつい

た。

「オーイ、早く来てくれえ、曲者くせものをつかまえたぞお」

組みつきながら、二人は声々に、奈落ならくの人たちの応援を求めた。

とら
虎

人とけだものの格闘であつた。無気味な咆ほう哮こうと意味をなさぬ
わめき声が入れまじり、三つのからだともえが巴ともえに乱れて、床板の上を
ころげまわつた。

二人と一人ではあつたけれど、人間はけだものの敵ではなかつ
た。いつの間にか、恩田の鋭い爪つめが若者たちの頸くびを掴んでいた。

「どこだ、どこだ」

「あ、あすこだ。あすこに掴み合っている」

ドカドカと、大勢の足音が近づいてきた。奈落に降りていた若者たちが、さいぜんの叫び声を聞いて駈かけつけたのだ。

いかな猛獣とて、七人もの若者を向こうに廻まわして戦う力はない。危ないと見て取った恩田は、搦からみついていた二人の手をつき放して、パツと飛びのくと、いきなり道具置場の中へ逃げこみ、そこに立てかけてあった書き割の表面を、パリパリと駈かけ上がった。たちまち天井の闇やみの中に姿を消してしまった。

「逃げたぞ、出入口を用心しろ」

「誰か警察へ電話をかけろ」

一人が電話室へ走って行く、残る人々は梯子はしごを持ち出して、幾枚も重ねて立てかけてある書き割の頂上へ登っていったが、どこへ隠れてしまったのか、もうそこには物の影もなかった。またしても、舞台裏のさがしものがはじまった。道具類のあいだを、右往左往する人々、直立の鉄梯子を登って行って、天井から下界を物色するもの。奇怪な豹ひょう狩りがは、いつ果つべしとも見えなかつた。

「おい、みんなどこかへいなくなつたじゃねえか」

さいぜんの鳶とびの者と若い道具方の二人が、元の場所に取り残されていた。

「ウン、この広い小屋の中を、これっぽちの人数じゃ無理だよ。

もう止そうぜ。あとはお巡りさんにお任せしちまおう」

「そうだな、じゃあ、おれたちは蘭子を向こうの部屋へ連れてつてやろうじゃねえか。可哀かわいそうに、気絶して、板の間にころがつたまんまだぜ」

「ああ、それがよかろう」

彼らは書き割のあいだを取つて返して、グツタリとなつた蘭子のからだを、両方から抱きかかえ、道具置場を出ようとした。

「おや、変なものが落ちているな。いったい誰がこんなところへ、持つて来やがつたんだらう」

道具方の若者が、足元の藪やぶ敷だたみの下敷きになっている、一匹の大きな虎とらの縫いぐるみを発見してつぶやいた。

「こいつあ、一幕目に着て出るやつだね、縫いぐるみっていうんだらう。いつもここいらにおっぽり出してあるんじゃないか」

鳶とびの者が答えた。

「いや、そうじゃねえ。これは衣裳部屋にしまつてあるんだからね。こんなところへ来ているのはおかしいよ」

「今夜の騒ぎで、誰かがウツカリ持ち出したんじゃないかい」

「ウン、そんなことかもしれない」

二人はなにげなくそこを通り越して、楽屋口への暗い廊下を、エツチラオツチラ歩いて行つた。

すると、実に奇妙なことが起こつたのだ。藪畳がガサガサと鳴つたかと思うと、今までその下敷きになっていた、虎の縫いぐる

みが、ムクムク動き出したではないか。

無心の衣裳いしやうが独りひとで動き出すはずはない。動くからには中に人間がはいっているのだ。その辺がひどく薄暗い上に、藪畳の下になつていたので、二人の者は、縫いぐるみに中身があろうなどとは思ひも及ばなかつたけれど、実はその中に何物かがはいつていたのに違いない。

やがて、縫いぐるみの猛虎もうこは、ムツクリと起き上がると、遠ざかつていく二人のあとを追つて、ノソノソと歩きはじめた。

本物の毛皮を使った、贅ぜいたく沢な縫いぐるみ。それが四つん這ばいになつて薄暗い廊下を歩いて行く姿は、生きた虎としか見えなかつた。

二人のものが元の日本間にはいって、その辺を取りかたづけ、蘭子の寢床を作っているあいだに、虎は部屋の前をソツと通りすぎて、俳優の下駄箱げたばこの並んでいる蔭かげに、グニヤリと身を横たえた。そうしていると、ちよつと見たのでは縫いぐるみとしか思えない。しばらくすると、楽屋口の大戸のそとに、大勢の靴音くつおとがして、何か言いながら、戸を叩たたきはじめた。それを聞きつけて、道具方の若者が、部屋を飛び出してきた。

「どなたですか？　もしや警察のお方では……」

大きな声で尋ねると、そこからは警視庁のものだという返事があつた。若者は掛け金はずして、ガラガラと大戸をひらいた。

「あいつが見つかつたそうだね。どこにいるんだ。早く案内した

まえ」

十人あまりの警官が、ドツとなだれ込んできて、若者に急いそがしく尋ねた。

「まあ、どうかこちらへ」

若者が先に立って、蘭子の寝ている部屋へ案内する。おまわりさんたちは、ドヤドヤとそのあとについて行った。

「おい、こんな所に虎とらがいるじゃないか。物騒だね」

一人の警官が、下駄箱げたばこの隅に長くなっている縫いぐるみを、眼ざとく見つけて 冗じょうだん談を言った。

「おや、おや、またこんなところに落つこちていやあがる。変まだなあ……なあにね、こりや舞台上で使う縫いぐるみですよ。喰くいつ

きやしませんよ」

若者も冗談を返した。

だが、その言葉が終るか終わらないに、作りものの衣裳いしやうとばかり思っていたその虎が、ヒョイと四つ足で立ち上がったのである。

「ワア……」

さすがのおまわりさんたちも、驚きの叫び声を立てないではいられなかった。彼らは廊下の隅ひにひと塊かたまりになって立ちすくんでしまった。

「ハハハハハ、ざまあ見ろ」

どこからか嘲ちやうしやう笑しょうの聲が聞こえてきた。

そして、猛虎もうこは一と飛びすると、まだあけたままになっている

楽屋口のそとへ、疾風のように駈^かけ出して行った。

「あいつだ。あいつが縫いぐるみを盗み出して、途方もない変装を思いつきやがったんだ。早く、追いついてください。あいつが曲^{くせもの}者^{もの}です」

道具方がわめいた。

警官たちは、ソレッツとばかり、戸口に殺到した。

戸外には氷のような月光が溢^{あふ}れていた。その月光の中の垣^{たん}々^{たん}たるアスファルト道を、一匹の猛虎^{もうこ}が、まるで奇怪な幻^{まぼろし}のように走っていた。

警官たちはときの声を上げてそのあとを追った。だが、虎の逃げ足は恐ろしく早かった。みるみる追うものと追われるものの距

離が隔たつて行く。そして、月光の町を幾曲がり、いつしか追手^{おつて}は野獣の姿を見失つてしまった。

「おい、あれは、やっぱりほんとうの虎かもしれないぜ。人間が四つん這い^ばになつて、いつたい、あんなに早く走れるものだろうか」

警官たちは、不思議な夢をでも見たように、茫然^{ぼうぜん}として月光の中に立ちつくしていた。

悪魔の足跡

その夜、神谷芳雄は、大都劇場を見物たちが残らず立ち去つた

あと、警官の捜索が終るまで居残つて、手に汗を握るようにして、その結果を待つていたが、人間豹ひょう恩田はもちろん、江川蘭子までが、どこから逃げ去つたのか、影も形もないとわかると、もうがっかりしてしまつて、夢遊病者みたいなかつこう恰好で、フラフラと劇場を出た。

失望に眼もくらんで、どこをどう歩いたとも知らず、それでも無事にわが家にたどりつくつと、出迎えた女中に物もいわず、家人に挨拶あいさつもせず、離れ座敷の居間にはいつて、そこに取つてあつた床の中へ、ころがりこんでしまった。

ああ、なんとということだ。悪魔はまたしても彼の恋人を奪い去つたのだ。いずれは蘭子も、かつての弘子と同じ目にあうのであ

ろう。いや、ひよつとしたら、彼女はもう生きてはいないかもしれぬ。

手も足も離れ離れに血みどろになった、ゾツとするような幻影が、まざまざと^{まぶた}瞼の裏に浮かんでくる。

「おれはどうしたらいいんだ。畜^{ちく}生^{しょう}つ、おれはどうしたらいいというんだ」

血のにじむほど唇^{くちびる}を噛^かんで、彼はやり場のない憤怒^{ふんぬ}にもだえた。「あいつにかかつては、警察でさえ、手も足も出ないではないか。それを、このおれに、どうすることができるというんだ。相手は人間ではない、一匹の野獣だ。その野獣がおれの恋^{こい}敵^{がたき}なのだ。チエツ、おれはけだものを相手に、一人の女を争っていたんだ」

彼は蒲団ふとんの中で、むやみに寝返りをうちながら、いつまでも甲斐なき物思いにふけた。

やがて、疲労のあまり、ついウトウトとしかけると、そこには恐ろしい悪夢が待ち受けていた。彼の眼の前に、白い蘭子の肉体と、骨ばった人間豹ひょうのからだだが、あらゆる姿態をつくして踊り狂っていた。そして、最後には、夢の世界が鮮かな血潮の色に塗りつぶされた。彼はまっ赤な夢を見たのだ。まっ赤な殺人の夢を見たのだ。

コトコト、コトコト、いつまでもつづく妙な物音が、ふと彼の眼をさました。風かしら、いや、風ではない。誰かが庭から窓の雨戸たたを叩いているのだ。

「誰だっ」

どなりつけても、答えはなくて、音はやっぱりつづいてる。

神谷は寝間着ねまきのままはね起きて、手早く窓の障子しょうじと雨戸とをひらいてみた。まさか、そんなものがいようとは、夢にも考えていなかった。何か軒にぶら下がっていて、それが雨戸を叩くのではないかと調べてみるために窓をあけたのだ。

だが、雨戸をくつて、ヒョイとそとを覗のぞくと、彼は驚きのあまり、思わず蒲団の上に飛びしきった。

そこには、降りそそぐ月光を背に受けて、思いもよらぬ恐ろしい物の姿が、じつとこちらをうかがっていたのだ。

そのものの輪郭りんかくを縁取る毛は、月光のために銀色にかがやい

て見えた。全身、毛におおわれたものであつた。本来四つ足で這うべきやつが、ちようど犬がお預けをするように、前脚を宙に浮かせて、ニュツと突つ立つていた。それは一匹の大きな虎であつた。

神谷はあまりに意外な動物の出現に、恐れるよりは、あつけにとられてしまった。いつか、動物園の檻おりを抜けだした虎の話聞いたことがある。その非常に珍しい出来事がいま起こつたのであろうか。そして、町から町をさまよつた猛獣が、偶然にも彼の部屋の窓へやってきたのであろうか。

だが、妙なことに、この虎は、人間とそっくりに雨戸をノックする術を心得ていた。それに、こいつはなぜ後脚で立ち上がつて

いるのだろう。

「アハハハハハ、驚いたかね」

突如として、虎とらが物をいった。

神谷はそれを聞くと、心底からたまげてしまった。夢にしてもなんとという変てこな夢であろう。

「神谷君、君はこの声を忘れたかね。忘れるはずはないんだがね。思い出してみたまえ、ほら、一年ほど前、カフェ・アフロデイテで、君がはじめて聞いた声だ」

虎が陰気な声でしゃべりつづけた。

わかった、わかった、こいつは人間豹恩田ひょうなのだ。それにして

も、彼はいつの間に猛虎もうこの姿になったのだろう。今までは、虎が

人間に化けていたのかしら。

「だまつているね。おれの名を口に出すのが、君は怖こわいのかね。それじゃ名乗ってやろう。おれは恩田だよ。君の愛人を奪おうとした恩田だよ」

そこまで聞くと、神谷は、すべてを了解することができた。こいつは芝居に使う虎の縫いぐるみをかぶっているのだ。そういう変装をして搜索の眼をのがれ、劇場を抜け出してきたのに違ちがいない。

「き、貴様、蘭子を、どこへ隠したのだ」

神谷は精一杯の氣力をふるい起こしてきめつけた。

「隠しやしない。蘭子は、もうちゃんと自宅へ帰っているよ。ど

つさり護衛がついてね。君はその後の出来事をまだ聞いていないとみえるね。おれはしくじったのだよ。とうとう隠れ場所を発見されてね。蘭子を取り戻されてしまったのだよ。ハハハハハ。だが、なんでもないんだ。ちよつと失敗したというまでのことさ」

「それはほんとうか」

「ほんとうとも。ほんとうだからこそ、ちよつと君に警告するために、やってきたんだよ。なに、じき帰るから心配しないでいい。ここで君を掴み殺すのはわけはないがね。それじゃ、あんまり惜しい気がするのだよ。いずれは君も生かしちやおかないつもりだが、それは、もつともつと苦しめたあとのことだよ。ハハハハハ」

虎は月光に頸筋くびすじの毛を震ふるわせて、人もなげに哄笑こうしょうした。
母屋おもやの家人に聞こえはしないかと、神谷の方がかえってヒヤヒヤするほどであった。

「だが、そんなことよりも、君自身もう少し用心しなくてもいいのかね。たとえば、いま僕が大声で助けを求めたら、君の方が危なくはないのかね」

神谷はだんだん大胆になっていた。

「ウフフフフ、大声を立てるんだって？ 君はそんなことできやしないよ。家族の命が惜しいだろうからね。もしここへ誰かが飛び出してきたら、おれは容赦なく掴み殺してしまおうぜ」

「いったい貴様は僕になんの用事があるんだ」

「おお、そうそう、すっかり忘れていたよ。蘭子のことさ。おれは一度失敗したくらいで、あの女を諦めあきらやしな。諦めないということを、君に告げ知らせにきたんだ。どうせ君はあらゆる防ぼうぎ禦手段を講じるだろう。そうして君がやつきとなればなるほど、おれにとつては思つう壺ぼだぜ。つまりだね、君が死にももの狂いに守つている愛人を奪い取つて、君を思つう存分苦しめてやりたいのさ。ハハハハハ、じゃあ、せいぜい用心したまえ」

言い終ると、彼は突然四つん這ばいになつて、月光の中を、本物の虎とらとそつくりの歩き方で、ノソノソと庭を横ぎつて行つた。そして、パツと一と飛びすると、その堀へいを飛び越えて、恐ろしい姿を消してしまつた。あとには、やわらかい土の上に、まざまざ

と猛獣の足跡が残っていた。

神谷は全身脂汗に濡れて、その恐ろしいものを見送ると、今さらむだとは知りながら、警察に電話をかけて、ともかくもこの事を訴えておいた。

その夜は、まんじりともしないで、夜の明けるのを待つて、彼は江川蘭子の自宅へ出かけていった。

蘭子は無事であった。床についてはいたけれど、それはゆうべの激動に熱を出したまでのことであった。

神谷はなにかと彼女を慰めながら、縁側の向こうの狭い庭を眺めていた。眺めているうちに、彼の眼が飛び出すばかり大きく大きく見ひらかれて行った。

彼はそこにゾツとするようなものを見つけたのだ。庭の土の上に、彼の家の庭に残っていたのと寸分違わない、大きなけだもの足跡が、三か所ほど、ハッキリと印せられていたのであった。

屋根裏の息遣い

中庭に面した六畳の座敷に、蘭子と、蘭子のお母さんと、神谷とが、怪しい足跡におびえて、顔を見合わせていた。

「神谷さん帰らないでね。あたしお母さんと二人きりじゃ、とても怖くていられやしないから」

ゆうべの激動のために、病人みたいに青ざめている蘭子が、猫

に魅み入いられた小こ鼠ねずみかなんぞのように、縮みあがってしまったて、キヨロキヨロと定まらぬ視線で、あたりを見まわしながら、歎たんが願んした。

「いいとも、僕は当分会社なんか休んで、君の護衛を勤めるよ。それはいいけれど、変だなあ。あいつは、わざわざここまできて、何もしないで帰ったのかしら。お母さん、ゆうべ何か変ったことでもありませんでしたか」

神谷が尋ねると、蘭子の母は、オドオドしながら、まるで内しよ話みたいな低い声で答えるのだ。

「ちつとも気がつきませんでしたよ。でも、あれからずっと刑事さんが二人も、この部屋に詰めきっていらしたのですよ。そし

て、昼間は危ないこともあるまいとおっしゃって、つい今しがたお帰りなすつたばかりなのです。いくらあいつでも、刑事さんがいるとわかつては、手出しがでしなかつたのでございましょう」

「ああ、そうでしたか。それはいいぐあいでした。もし刑事がいなかろうもんなら、今度こそ取り返しのつかないことになつていたかもしれない。じゃあ、あいつ、雨戸のそこから立ち聞きしただけで、スゴスゴ引つ返したのですね」

神谷は言いながら、じつと庭を眺^{なが}めていたが、たちまち、何を発見したのか、ハツとしたように顔色を変えた。

「お母さん、ちよつと、あれをござらんさい」

彼はまるで、すぐ近くに人間豹^{ひょう}が立ち聞きでもしているような、

おびえたヒソヒソ声になって、

「あの足跡をよくごらんさない。縫いぐるみのこしらえもんだけれど、足跡の前うしろはちゃんとわかるようにできています。あの足跡、みんなこちらを向いているじゃありませんか。向こうむきのは一つもないじゃありませんか」

「おや、そうですね。どうしたんでしようか」

お母さんは、まだその恐ろしい意味に気がつかない。

「つまり、あいつは、塀へいを乗り越して、縁側えんがわのところへやってきたきり、引っ返していないのです。来た足跡だけで、帰った足跡がないのです」

「まあ！」

蘭子とお母さんとは、ゾツとしたように顔を見合わせた。

「あたし怖いわ。^{こわ} 神谷さん早く警察へそういつてくださらない。

あいつは、きつと、このうちのどつかに隠れているんだわ」

「慌^{あわ}てることはないよ。いざといえれば隣近所があるんだからね、

たとえば、あいつがここに潜^{ひそ}んでいるにしたところで、昼間ノコノ

コ出てくる気遣いはありやしない」

神谷は言いながら、縁側に出て、オズオズと縁の下を覗^{のぞ}いてみ

た。覗いたかとおもうと、「アッ！」と低い叫び声を立てて、あ
とじさりをした。

「いるの？ 縁の下に」

蘭子たちはもう中腰になって、まっ青な顔で逃げ支^{じたく}度をしてい

た。

いたのだ。縁の下の奥の薄暗い地面に、一匹の猛虎もうこが、グツタリと横たわっていたのだ。

神谷は一瞬間ためらっていたが、勃ぼつぜん然と湧わき上がる憎悪ぞうおにわれをわすれて、庭に飛びおけると、身構えをして、縁の下を覗き込みながら、どなりつけた。

「恩田、出てこい、卑怯ひきようなまねをするな。さあ出てこい。きょうこそは逃にがさないぞ」

だが、神谷の意気込みにもかかわらず、虎とらは返事もしなければ、身動きもしなかった。

眠っているのかしら、いや、そんなはずはない。変だぞ。ああ、

そうだ、もしかしたら……

神谷はそこに落ちていた棒切れを拾って、思いきつて、縁の下
の虎を突いてみた。動かない。妙にクナクナした手応えだ。

「なあんだ。皮ばかりじゃないか。あいつ、こんなところへ虎の
縫いぐるみを脱いで行つたんですよ。大丈夫、逃げなくつても大
丈夫です」

彼は座敷の二人を安心させておいて、その虎の皮を縁の下から
引きずり出した。

「これですよ。ごらんなさい」

頸くびのところを掴つかんでブラ下げると、それはちようど大きな虎とらの
死骸しがいのように見えた。

「でも、神谷さん。あいつはそれを脱いでから、いったいどうしたんでしよう。やつぱり、どっかに隠れているんじゃない？　そして、夜になるのを待っているんじゃない？」

蘭子は居たたまれないように、ソワソワしていた。

縁の下のもつと奥の方の、そこから見えない隅っこに、あいつは息を殺してうずくまっているのかもしれない。それとも、天井裏の闇やみの中に、じつと機会やみのくるのを待っているのかもしれない。いや、ひよつとしたら、その押入れの中ではないのかしら、そこをあけると、蒲団ふとんを積み重ねた奥の方から、あいつの無気味な眼が、燐りんのように燃えて、じつとこちらを睨にらんでいるのじゃないかしら。

「神谷さん、お気の毒ですけど、すぐ近くに公衆電話がございませから、このことを警察へお知らせくださいませんか」

お母さんに言われるまでもなく、神谷もそれを考えていたところであった。彼はさつそく公衆電話へ飛んで行って、警視庁と大都劇場事務所とへ、事の次第を知らせた。

やがて、間もなく、捜査課の人たちがやってきて、蘭子の家の縁の下から天井裏に至るまで、嚴重な搜索を行なったが、例の虎の皮と足跡とのほかには、なんの手掛りを発見することもできなかった。人間豹ひょうはどこにも潜ひそんでいないことが確かめられた。

警官がひとまず引き上げて行くと、そのあとへ、大都劇場の人たち、蘭子の友だちなどが、ドヤドヤとお見舞いに来た。その人

たちの賑にぎやかな話し声が、さいぜんからの恐怖を、しばらくのあいだ忘れさせてくれた。

午後になつて、事件以来蘭子の劇場への送り迎えを命ぜられて
いる熊井という柔道家の若い事務員がやってきた。それと引き違
いに、賑やかな人たちは帰つて行つて、あとには、蘭子親子と、
神谷と、熊井の四人だけが残つた。

淋さびしくなると、蘭子の心に、どうにもできない不安がよみがえ
つてきた。もう日暮れには間もないのだ。日が暮れて、この世が
闇にとざされると、あの化物がのさばりはじめるのだ。今夜もき
つとくるだろう。いや、くるのではなくて、もうちやんとこの家
のどこかにいるのかもしれない。警官たちは誰もいないと断言し

だが、相手はあの怪物のことだ。どんな意外な隅っこに、人目のがれて隠れていまいものでもない。

彼女は話の最中に、ふと聞き耳を立てて、まっ青になるようなことがたびたびであった。そればかりでない。しまいには、わざわざ立って行って、部屋の隅に背伸びをして、じつと耳をすましたりした。

「まあ、お前どうなすつたの？ 気味がわるいじゃないか」

母が叱ると、蘭子は「シツ」と唇に指を当てて、ソツと元の座に戻ってきて、おびえきつた調子で言うのだ。

「聞こえるのよ。荒い息遣いが聞こえているのよ。きつとあいつは、あの天井板の上に潜んでいるんだわ。あたし、どうしましょ

う。ここの家にいるのは怖いわ。どつかへ行きましようよ。あいつが、どうしても追っ駈かけてこられないような、遠くの遠くの方へ逃げましようよ」

「何をいつてるんだ。それは君の気のせいだよ。天井裏から息遣いなんか聞こえてたまるものか。なんにもいやしないよ。いるはずがないんだよ」

神谷は蘭子の臆おくびよう病しつかを叱しかつたが、考えてみると、彼女をこのままこの家に置くのは、いかにも危険な話であつた。彼は寸刻も蘭子のそばを離れず守護するつもりであつたし、また警官の護衛を依頼するのでもできないことではなかつた。しかし、相手は人間ではない。変幻自在の怪獣なのだ。大都劇場で、何千という群集

を向こうにまわして戦ったやつだ。どんな護衛も彼の前には無力にひとしい。

「一ばんいいのは、君が完全に行方ゆくえをくらましてしまうことだ。あいつの手の届かないところへ逃げてしまうことだ。だが、蘭子ちゃんの親しんせき戚や友だちの家じや、すぐあいつに気づかれるだろうし、といつて、僕にも君をかく匿まってくれるような人の心当たりはないのだが……」

神谷が困惑していると、柔道家の熊井青年が、口を出した。

「僕はいまフツと思ひ出したのですが、いいことがありますよ。これならもう大丈夫ですよ……しかし、神谷さん、聞いてやしないでしょうか」

彼はささやき声になって、ソツと天井を眺めた。この男もやっぱり、人間豹がまだどこかに潜んでいるかもしれないと考えたのだ。

「大丈夫だと思うが、なんなら、賑やかな表通りを歩きながら話しましょうか」

神谷も万一を氣遣っていた。

「ああ、それがいい。じゃあ、お母さんに留守番を願って、三人で表へ出しましょう」

熊井もたちまち賛成して、促すように立ち上がった。

蘭子の女中奉公

蘭子の家を出て、細い通りを半丁ほど行くと、賑やかな電車通りがある。神谷と、熊井と、蘭子の三人は、その大通りの人道を肩を並べて歩いていった。

「蘭子さん、あんた田舎娘いなかむすめになりませんか。いや、お手のものののメイク・アップでもって、ぽつと出の田舎娘に変装するんですよ。できるでしょう」

熊井青年は実に突飛とつぴなことを言い出した。

「そりやできないこともないけれど、そうして、どうしようというの？」

蘭子は毎日の送り迎えで、この豪傑ごうけつ青年とは仲よしになって

いた。

「まったくお誂あつらえ向きの話があるんです。実は僕の母がその本人から頼まれて、そういう田舎娘を探しているんですがね。なかなか思ったようなのがないのです。ちよつと風変りな奉公口なんですよ」

「まあ、あたしご奉公するの？」

「ええ、そうですね。うまい考えでしょう。あんたがいま知り合いのところへ逃げたんじゃあ、結局、恩田に見つかつてしまふにきまつていますよ。そこを裏をかいてですね、敵の思いも及ばない大飛躍をやるんです。田舎娘に化けて、まったく関係のない他人の家へ奉公しちゃうんです。ねえ、神谷さん、どうでしょうね、

この考えは」

神谷はハタと膝ひざを打ちたいほどに感心した。いかにもレビュー劇場の事務員らしい、奇想天外、突飛とつぴ千万の考案であったが、それだけに、敵の眼をあざむくには申し分がない。

「そいつは面白いね。なんぼなんでも、蘭子ちゃんが、女中奉公をしようとは気がつくまいからね……しかし、女中さんとなると、使い歩きをさせられるだろうが、そいつがちつと心配だね」

「いや、ところが、堀ほりのそとへは一步も出なくていいんです。その先方の家というのが、またひどく変ってしましてね、ちようどお誂あつちえ向きなんですよ。家のまわりには高いコンクリート堀をめぐらし、その上にビール瓶びんのかけらが針の山のように植えつけて

あろうという実に嚴重な構えで、主人は年がら年中一と間にとじこもったまま、一步もそとへ出ないので。その主人づきのまあ話し相手、小間使いといった役目なんですよ」

「まあ、妙なご主人ね。年寄りのかたなの？」

蘭子も、この奇妙な話につり込まれて、だんだん乗り気になつていた。

「ところが若いのです。蘭子さんと同じ年ぐらいでしょう。いや、ご心配には及びません。その主人というのは娘さんですよ。しかも片輪者なんです。顔に何か不具な箇所かしよがあるとかで、いつも黒い覆ふくめん面をかぶっていて、誰にも素顔を見せたことがないという、極端に内気なお嬢さんです。そんな生活をしているものだから、

話し相手がほしいのですね。もつとも老人の執事しつじかなんかが一緒にいるんだそうですが、老人ではお話し相手になりませんからね」

「お金持ちなんだね」

「そうですね。ご存じかもしれませんが、高梨という高利貸の一人娘ですが、二、三年前に両親に死なれてしまって、今では一人ぼっちの可哀かわいそうな片輪者なんです。お嫁入りはおろか、人に顔を見られるのもいやだといって、そういう孤独な生活をしているんだそうです。今もいうように、お父さんの商売柄、泥棒の用心にかけては、実に嚴重にできている家ですから、蘭子さんの隠れがには持ってこいですよ。いくら人間豹ひょうでも、あの大きな鉄の門を破ったり、針の山みたいな堀へいを乗り越すことはできないでしょ

うからね」

なんとというお誂あつらえ向きな話であろう。この男、豪傑ごうけつ青年にも似合わない、うまい智慧を出したものだ。

「可哀そうだわね、なんだかそのお嬢さんとお話ししてみたいよ
うな気がするわ。ね、神谷さん、あたし思いきって、その高梨さ
んへ奉公しちやいましょうか」

蘭子は孤独な娘さんへの好奇心も手伝って、ますます乗り気で
ある。

「僕もそいつは名案だと思ふね。ちつとばかり突飛とつぴだけれど、そ
のくらのことをしなければ、あいつの眼を逃れるのはむずかし
いかもしれない。恩田が捕えられるまでのあいだ、君はそこに隠

れているか」

神谷もこの奇妙な計画に一種の魅力を感じていた。

「そうなすつちやどうです。あいつが捕まり次第、事情をうちあけて暇を取ってしまえばいいんだから。それと、お母さんが少し淋さびしいだろうけれど、親しんせき戚せきのかたにでもきてもらえばいいじゃありませんか。人間豹ひょうは何もお母さんをどうしようというわけではないんだから」

熊井もしきりに勧めるので、結局思いきって、それを実行することにした。話がきまった。

「僕が送って行くといいんだけれど、それでは相手に悟られるおそれがある。神谷さんも、連れ立って行かない方がいいでしょう。」

心配だったら、それとなく監視する方法はいくらもあるんだから。僕が手紙を書きますよ。田舎いなかの知合いの娘さんだということにして。蘭子さんは変装をして、その手紙を持っていらつしやればいいんです。先方が雇い入れることは間違いありません。僕の母の方からもその事をいわせておきますから」

熊井が具体的の方法を授けた。

そこで三人は一度家に帰って、蘭子のお母さんに、コツソリと相談の次第を耳打ちした。お母さんは最初は気が進まぬ様子であったが、こうでもしなければ怪獣の襲撃を逃れるすべはないと説かれて、不承ふしょう不承ぶしょうに承しょう諾だくをあたえた。信頼しきっている神谷青年の勧めをしりぞけかねたのだ。

たちまち相談が一決すると、熊井は長い紹介状をしたためて蘭子に渡し、蘭子は着のみ着のまま、神谷にともなわれて家を出た。

途中たびたび自動車を変えて、蘭子の親友のSというレビュー・ガールのアパートに立ち寄り、そのお友だちを古着屋へ走らせたりして、すっかり変装を終った。人気女優江川蘭子は忽こっぜん然ぜんとしてこの世から消えうせ、その鏡台の前に立っているのは、安やすめいせんしまもの銘仙すめいせんの縞物しまものにメリンスの帯をしめ、髪は櫛くしまき巻まき同然どうぜんの田舎いなか洋いなか髪いなか、薄黒い顔の両りょう頬ほおがポツと赤らんだ上州あたりからぽつと出の、田舎いなか田舎いなかした、しかしなかなか愛くるしい娘さんであった。「すてき、すてき、それじゃ誰が見たって、わかりやしない。さ

すぐにメーク・アップはお手のもんだね」

「まあ、可愛いわねえ。かわい 神谷さん、蘭子さんのこういう姿も捨てたもんじやないでしょう」

神谷とSとが、冗談まじりに蘭子の変装を批評し合つた。

「さあ、僕はここでお別れだよ。君は一人でこのアパートの裏口を出て、田舎者らしく、タクシーを値切るんだね。そして、幾つも車を替えて、できるだけ大廻りおおまわをして、築地つきじの高梨家へ行くんだ。田舎言葉がばれないようにね」

神谷は蘭子を部屋の隅に呼んで、ソツとささやくのだ。

「あたし、なんだか心細いわ。大丈夫かしら」

「大丈夫だとも、僕は別の車で、先方の家の前まで、君について

行くよ。そして、君が無事に奉公するのを見届けて帰るよ。それから、何か急な用事ができたら、僕のうちへ電話をかけるがいい。僕はすぐに飛んで行ってあげるよ」

間もなくアパートを出たこの可愛らしい田舎娘は、神谷に言われた通り、自動車に乗ったり降りたりを、幾度もくり返して、築地の高梨邸に到着した。別の車に乗った神谷青年が、不思議な尾行をつづけたことはいうまでもない。

覆面令嬢

江川蘭子の田舎娘いなかむすめは、奉公先の高梨家の一丁ほど手前で車を

捨てる、用意の小さな風呂敷包みを小脇こわきに、チヨコチヨコ同家の門前に近づいて行った。

熊井青年が言った通り、その家はまるで城郭じょうかくみたいな嚴重きわまる構えであつた。屋敷を取りかこんだ高いコンクリート塀べいには、ドキドキと鋭いガラスの破片が、ビツシリと植えつけてあるし、見上げるばかりの御影石みかげいしの門柱には、定紋じょうもんを浮彫りにした鉄板の門扉もんぴが、閉めきつたままになっている。

いったいどこからはいればいいのかしらと、見まわすと、門のかたわらのコンクリート塀に、小さな出入口がついているのに気づいたが、そこにも銅板を張りつけた引き戸が、さも嚴重に閉まっています、手をかけてみてもいつかなあきはしない。

やつこのことで、小さな呼鈴のボタンを探し当て、思い切つてそれを押すと、しばらくして、庭に人の足音が聞こえ、扉とびらにカタンと妙な音がした。

あけてくれるのかと思うと、そうではない。扉の上部に、小さな覗のぞき穴が切つてあつて、その蓋ふたがあいたのだ。三寸四方ほどの穴から、一つの眼が現われて、ジロジロとこちらを見ている。

「あの、わたし、吉崎はなというものですが、熊井さんから、この手紙を持って行けといわれましたので」

蘭子がせいぜい、田舎風なアクセントで実直らしくいうと、今度は覗き穴から、ニユーツと老人らしい手が出て、その手紙を掴つかみとつて行つたが、しばらくすると、中から案外やさしい声が聞

こえてきた。

「よくわかりましたよ。お前、奉公しなさるのか。吉崎さんだね。よろしい、よろしい、さあこちらへおはいりなさい」

そして、引戸がガラガラとあいて、その向こう側にはくはつはくぜ白髪白

髯んの老人が、ニコニコ笑いながら立っていた。話に聞いた高梨家の執事なのであろう。

老人のあとから、玉砂利たまじやりを敷きつめた門内の道を歩いて、玄関にはいると、薄暗い廊下を幾曲がりして、奥まった洋室へ案内された。広い家の中は、老人のほかには誰もいないのかと思われるほど、ヒツソリと静まり返っていた。

「手紙で大体のことはわかったが、うちはお百姓なんだね。そし

て、お前さんは女学校を三年までやって中途退学した、
だね。よろしい、よろしい。申し分なしじや。だがね、
このご主人は、お前さんも聞いているだろうが、若いお嬢さんでね、
少し気むずかしいご病人なのじや。今、お目見得めみえをさせるからね、
そのお嬢さんのお気にさえ入れれば、お前さんはきようからでも、
高い給金で奉公ができるのだよ」

老人は長い廊下の道々みちみち、蘭子の吉崎はなに、
丁寧ていねいに言い聞かせた。彼は無地の紬つむぎの着物に、同じ品の黒い羽織を着て、
腰に両手をまわし、背中を丸くして歩いている。

「さあ、ここじや。お嬢さんは寝台の上に横になつておいでな
さるのだが、そのお顔を見ようとしてはいけないよ。もつとも黒い

頭巾ずきんをかぶっていらつしやるから、見ようとしても見えやしないが、なるべく眼をそらすようにしているがいい」

老人は注意を与えておいて、静かにドアをひらいた。

「お嬢さま、熊井に頼んでおきました、田舎出いなかでの小間使いがお目見得みえに参りましたが、通しましてもさしつかえございませんか」

老人がうやうやしく御意をうかがうと、部屋の中から、異様に甲高い、まるで笛のような声が、

「おはいりなさい」

と答えた。

まあ、なんて気の毒な声をしているのだらう。きつと喉のどか口がどうかしているんだわ。蘭子は好奇心にかられながら、老人のあ

とに従つて部屋にはいった。

そこは十五畳ほどの洋間であつたが、中央に丸いテーブルと、婦人用の飾り椅子いすが二脚置いてあつた。その奥の壁ぎわに、古めかしい天蓋てんがいつきのベッドが、物々しくすえられていた。ベッドは薄絹の帷とばりに覆おおい隠されていたが、その絹をとおして、純白のシートと、ぼんやりした人の姿とが眺ながめられた。

「あたし、寝ていて失礼だけれど、勘弁してくださいね。爺じいや、その人に椅子を上げなさいな」

笛のようなお嬢さんの声が、薄絹の向こうからやさしく聞こえてきた。

蘭子は勧められるままに、老人と相對して、つつましく椅子に

かけた。

「爺や、その人にあのことをよく話して」

お嬢さんは老人にこの娘を試験させて、自分はそばからそれを観察するつもりであろう。

「先^まず第一にじゃね」老人は物々しくはじめた。「ここへご奉公するとすると、ご奉公中は一步も家からそとへ出られないということ承知してもらわんけりやなりません。お風呂^{ふろ}はうちにあるし、買物などは、別の女中がいるから、それに頼めばよろしい。どうじゃな、あんたはそういう辛^{しん}抱^{ぼう}ができるかな」

「ええ、わたし構いませんです。わたしそとへなぞ出たくありませんから」

「おお、そうですかい。そと出嫌でぎらいかね。そいつは好都合じゃ。ところであんたの仕事というのは、ご承知の通りこのお嬢さまの小間使いなのじゃが、さつきも言う通り、お嬢さまはご病気なのだから、どんなことをおっしゃっても、お言葉を返してはいけませんぞ。万事おっしゃる通りにしてさし上げるのじゃ。わかったかね」

「あたし、わがままだから、そりや無理ばかり言つてよ」
笛みたいな声が、からかうようにつけ加えた。

「ええ、なんでもおっしゃる通りにいたします」
蘭子はあくまでもつつましやかだ。

「爺や、あたしこのひと気に入りましたわ。なんて柔順な子でし

よう。それに、可愛らしい顔をしているじゃないの」

お嬢さんは、すっかり蘭子がお気に召した様子である。

「それでは取りきめましても」

「ええ、いいわ。早く取りきめてちょうだい。お給金もどつさり上げてね」

「はなさん、お聞きの通りじゃ。親御さんおやごの方へはいずれ詳しく手紙で申し送るとして、お前はきょうからここにすることにすることがよろしい。別にさしつかえはないだろうね。ああ、そうか。よろしいよろしい。ところでお給金じゃが、お嬢さまのお言葉もあるので、これまでの例を破って、月百円ということにきめましよう。不服はないだろうね」

蘭子がお給金などで不服があろうはずはなかった。百円と言えば大した高給だ。この金額から想像しても、わがままお嬢さんのお守り^もはさぞ骨の折れることであろうとは思ったが、ほかの条件はすべて申し分がなかった。第一外出を禁ずるとというのが、人眼を忍ぶ彼女に取って、何よりの好都合であつた。いくらわがままだと言つても、相手は彼女と同年輩の娘さんである。声は笛みただいだけれど、そんなに邪慳^{じゃけん}な性質とも見えぬ。むしろ子供らしい無邪気^{むじゃき}なわがまま者らしく思われる。蘭子は、この様子なら当分ご奉公がつづけられそうに思った。

「では、それでよろしいのだね。とりきめましたよ……お前の部屋は、ここの次の間の小さい洋室じゃ。奉公人にはもつたいない

部屋だが、いつもお嬢さまの近くにいてもらいたいのでね。さあ、その荷物を次の間へ置いてくるがよかろう」

老人の言葉に従って、蘭子はその小部屋の机の上に風呂敷ふろしき包みを置くと、そこに置いてある鏡台の前で、ちよつと身づくろいをして、元の寢室へ帰つてきた。

「お嬢さま、ではわたくしはあちらへ下がりますが、手はじめに何かこの子においてつけになることはございませんか」

老人が立ち上がって尋ねると、お嬢さんはムクムクとベッドの上に起き上がって、天蓋てんがいの薄絹をかき分け、やつとその寢間着ねまき姿を現わした。

見ると彼女の風体は実に異様なものであった。洋風のベッドに

寝ながら、その寝間着は、純和風の袂たもとの長い派手な友禅縮緬ゆうぜんちりめんの長襦袢ながじゆばんで、それに、キラキラ光る伊達巻だてまきをしめていた。そして頭から、婚礼の綿帽子みたいな形の黒い絹すきんの頭巾を、スツポリと、顎あごの辺までかぶっているのだ。

「あたし、お風呂にはいりたいと思うのだけれど、その子に先へ行つて用意させてくれない？」

「はい、承知しました……はなさん、では私についておいで、湯殿を教えてあげるから。お湯はちゃんと焚たきつけてあるから、お前は湯加減を見て、手拭てぬぐいなどをきちんとしておけばよろしいのじゃ」

老人はそんなことを言いながら、また廊下をたどつて、立派な

湯殿へ案内した。

浴槽よくそうも洗い場も一面のタイル張りで、採光がわるいのか、昼間だけけれど、美しい装飾電燈がキラキラとかがやいていた。

老人が立ち去ると、蘭子は裾すそをまくって、タイルの上に降り、浴槽の蓋ふたを取って湯加減を見たり、桶おけに湯を汲くみ出したり、かいがいしく入浴の用意をととのえた。

しばらくすると、次の間になっている脱衣場のドアが静かにひらいて、黒覆面くろふくめんのままのお嬢さんがはいつてきた。

「ちようどよい加減でございます」

蘭子は手を拭ふきながら、脱衣室にあがって、お嬢さんの前に小腰をかがめた。

「そう。ではね、お前も着物を脱いでね、あたしと一緒にお風呂にはいるのよ。そして、あたしのからだを洗ってくれるのよ」

なるほど風変りなお嬢さんであった。小間使いと一緒に風呂にはいるなんて、妙な趣味もあるものだ。それにしても、あの覆ふ面頭巾くめんずきんをどうするつもりなのだろう。あのまま湯の中へはいるのかしら。蘭子はいささか面くらつて、だまつて突つ立っている。と、たちまちわがままお嬢さんの痲癩かんしやくごえ声こゑが響きわたった。

「着物をぬぐのよ。何をぼんやりしているの。早くなさいな」

ああ、これが、月給百円の意味なんだな。どんな無理を言われとも、さからつてはいけないというのは、ここのことなんだな。

蘭子は仕方なく帯を解きはじめた。田舎娘いなかむすめにしてはからだが少

し白すぎやしないかしらと心配しながら、次々と細紐ほそひもを解いて行つた。

「お嬢さま、あなたも着物をお脱ぎなさいませんか」

相手が突つ立つたまま、いつまでも、じつとしているので、そう勧めてみると、令嬢は、やっぱり怒つたような声で、

「いいから、お前おぬぎ。そして先へお風呂にはいりなさい」と命令した。

ああ、このお嬢さんは、不具のからだを恥かしがっているんだな。だが、それなれば、何も小間使いなどと一緒に入浴しなくてもよさそうなものじゃないか。

蘭子は言われるままに、とうとう丸はだかになってしまった。

そして、大急ぎで湯殿へはいろいろとすると、またしてもお嬢さんの声だ。

「まあ、美しいからだをしているのね。お前田舎から出てきたばかりなの？ うそでしょう。ほんとうは大都劇場のレビューに出ていたんじゃない？」

蘭子は雷にでも撃たれたように、ハツと立ちすくんでしまった。世間知らずのお嬢さんと見くびっていたら、この人はまあ、なんて鋭い眼を持つているのだろう。

「江川蘭子。ね、そうでしょう。あたし、ちやあんと知っているのよ」

不思議なことに、お嬢さんの声の調子がひどく変っていた。笛

のように甲高い声が、いつの間にか、しわがれた太い声になっていた。

「すみません……これには少し事情があるのです。決して悪意があつてしたことではありません」

蘭子のはだかのまま、脱衣室のコルク張りの床に坐つて、素直にお詫びをした。もうそうするよりほかに仕方がなかつたのだ。

「なにもあやまることはないよ。その事情つて、なんだね？ もしや、恩田という恐ろしい男の眼をのがれるためではなかつたの？」

蘭子はあまりの不意打ちに、もう口もきけなかつた。

「ハハハハハ、蘭子さん、驚いたかい、可哀かわいそうに、まっ青にな

つているじゃないか。ちつとも不思議なことはないんだよ。僕はお前を知り過ぎるほどよく知っているんだもの」

それは確かに男の声であった。お嬢さんが太い男の声で物をいつているのだ。

蘭子は息がつまったようになって、もう身動きさえできなかつた。

夢を見ているのかしら、気でも違ったのかしら。こんな変てこなことがあり得るのだろうか。それとも、もしや、もしや……蘭子はヒョイとそれに気がつくくと、泣きそうになって、死にもの狂いの声をふりしぼった。

「誰です。あなたは誰です」

「誰でもない。君が会いたがっている男だよ」

頭巾ずきんがかなぐり捨てられた。そして、その下から現われたのは、ドス黒い皮膚、骨ばった輪郭りんかく、爛々らんらんと青くかがやく両眼、赤い唇くちびる、牙きばのような白歯、恩田だ！ 人間豹ひょうだ！

蘭子はそれを一ひと眼見ると、何かえたいの知れぬ叫び声を立てながら、ドアの方へ逃げ出そうとした。

「ハハハハハ、蘭子さん、だめ、だめ、そこには、もうちゃんと鍵かぎをかけておいたよ。ほら、鍵はここにある。欲しいかい。欲しければあげないものでもないぜ。ただちよつとした条件があるけれどね」

正体を現わした人獣は、赤い唇を、ペロペロと舐なめながら、さ

も小気味こきみよげに、ニヤニヤと笑い出した。

蘭子は身の置き所もないように、手足をちぢめて、部屋の隅にすくんでしまった。そして、子供みたいにべそをかきながら、おびえきつた眼で、恩田の様子をうかがっている。

人獣はじつと蘭子を見つめていた。長いあいだ身じろぎもせず見つめていた。だが、やがて、彼の上半身が、蘭子の方へ前かがみになり、その両手が、徐々に曲げられていった。そして、ついには、一匹の豹ひょうが、今にも餌食えじきに飛びかかろうとする、あの無気味な姿勢に変わっていた。

明智小五郎

蘭子はからだを括り猿くくのように丸く縮めて、脱衣室の隅ぎつこに小さくなったまま、じりじりと迫ってくる怪物の恐ろしい形ぎようそ相うを、まるで眼に見えぬ糸で視線をつながれでもしたように、まじろぎもせず見つめていた。

「ワハハハハ」

怪物は長い牙きばをむき出し、ヌメヌメした赤い唇くちを震ふるわせて、身もだえするように哄こうしやう笑わらした。

「蘭子、今おれがどんな気持でいるか、君にわかるかね。おれは恐ろしく愉快なんだぜ。とうとうとつかまえたねえ。もうどんなことがあつたつて、放すもんじやない。だが、ずいぶん苦勞を

させたぜ、君は」

ふりそですがた

振袖姿の恩田は、そんなことを言いながら、両手の指で空気を掴む恰好をして、隅つこの蘭子の上へ、巨大なけだもののように、のしかかって行つた。

「キヤア……助けてえ……」

蘭子は顔じゆうを口にして、死にもの狂いの悲鳴をあげた。

「ワハハハハハ」

怪獣は相手が怖がれば怖がるほど、一そう歓喜に燃えて、なまぐさい哄笑をつづけるのだ。

長い爪の瘦せた指が、今一寸で蘭子の肩に触れようとした。

だが彼女はまだ気力を失つてはいなかった。

「ワア……」と、今にも殺されそうな悲鳴を発しながら、相手の手の下をスリりと抜けて、白いタイルの浴室へ、鞠まりのようにころがり込んで行った。

「ワハハハハハ、いよいよ袋ねずみの鼠ねずみだぜ。知っているかね。この風呂場には、窓というものがないんだよ。君はつまりおれの注文にはまってくれたというもんだ」

そして、野獣らしい黒い裸身が、四つん這ばいになって、ノソリノソリ、タイルの階段を降りていった。

蘭子はいつの間にか、浴槽よくそうの中に首までつかっていた。

人間豹ひょうは、鼠ねこをもてあそぶ猫ねこのように、急に襲撃するでもなく、タイルの洗い場にうずくまったまま、ずうっと首を低くして、ギ

ラギラ光る青い眼で、いつまでもいつまでも、さも楽しげに、湯の中の餌食えじきを睨にらんでいた。

同じ屋敷のそとでは、蘭子の恋人神谷芳雄が、ガラスのかけらを植えつけたコンクリート堀べいのまわりをグルグルと廻まわり歩いていた。

彼は蘭子の女中奉公を、別の自動車で見送って、彼女が邸内にはいるのを見届けてからも、なんとなく気掛りなものだから、三十分あまりも、屋敷の前にたたずんだり、裏手に廻つたり、どこか隙見すきみでもする箇所かしよはないかとさがしたり、そこを立ち去りかねていたが、いつまでそんなことをしていても仕方がないと諦あきらめて、通りすがりの自動車を呼びとめた。

ちょうど彼が自動車に乗りこんだ時分、邸内では、あの浴場の悲劇がはじまっていたのだが、広い邸内の密閉された湯殿の中とて、蘭子がいかに叫ぼうとも、その声は塀のそとまで届こうはずはなかった。それとも知らぬ神谷が、人間豹の眼から恋人を完全に隠しおおせたつもりで、安堵あんどして帰途についたのは是非もないことであつた。

だが、虫が知らせたのであろうか、走る自動車の中で、神谷の心は妙に落ちつかなかつた。これでいいのかしら、何をいうにも相手は魔まし性しょうの人間豹だ。嗅きゆう覚かくのするどい野獣のことだから、長いあいだには、蘭子の隠れがを突きとめまいものでもない。蘭子の安全のためには、彼女を隠すことなどより、人間豹そのもの

を、一日も早く捕まえてしまうのが最善の策である。そうして、ろうごく牢獄にぶち込むなり、死刑に処するなりにしてしまえば、蘭子ばかりではない、世間全体の安堵である。動物園の檻おりを抜け出した野獣みたいなやつが、ノソノソ町を歩いていたので、東京じゆうの人が枕まくらを高くして寝ることができないわけだ。

それについて、神谷は数日以前から考えていたことがある。警察力が頼むに足らぬとすれば、もうほかに手段はない。一縷いちるの望みは有力な民間探偵たんでいの力を借りることであつた。私立探偵といえ、たちまち思い浮かぶのは明智小五郎だ。彼なれば、警察が手古てこずつた難事件をやすやすと解決したという話を幾つも聞いている。殊ことに人間豹ひょうのような怪犯人には、明智こそ似つかわしいの

ではあるまいか。

「ああ君、ちよつと行先きを変えるよ。麻布のあざぶ竜土町りゅうどちようだ。竜土町のね、明智小五郎っていう家へ行くんだよ」

「承知しました。私立探偵ですネ」

運転手が威勢いせいよく答える。

「おや、君はよく知っているね」

「有名ですからね。あたしや、早くあの先生が登場すればいいと、待ちかねているんですよ」

「どこへ登場するっていうんだい？」

「ご存じでしょう。ほら、例の大都劇場の一件でさあ。蘭子を狙ねらっているけだものでさあ。早く明智さんが出て、あの人間と豹の

混血児みたいなえてものを、やっつけてくれりやいいと思つてるんですよ。あたしや、江川蘭子は大のひいきですからね」

「ああ、そうかい。今にそんなことになるだろうよ」

他人の運転手でさえそこへ気がついているのだ。なぜおれはもつと早く明智探偵を訪ねなかつたらうと、神谷はひとしお頼もしい感じがした。

明智小五郎は「吸血鬼」の事件の後、開化アパートの独身住いを引き払つて、麻布区竜土町に、もと彼の女助手であつた文代さんという美しい人と、新婚の家庭を構えていた。その家庭が同時に探偵事務所でもあつた。夫妻ともに探偵好き冒険好きなので、家庭と事務所とを別々にする必要はまったくなかつたのだ。

低い御影石の門柱に「明智探偵事務所」と、ごく小さな真

鍬ゆうの看板がかかっている。そこをはいって、ナツメの植込みに

縁どられた敷石道をひと曲がりすると、小ぢんまりした白い西洋

館。玄関の呼鈴を押せば、直ぐさまドアがあいて、林檎りんごのような

頬ほつぺたをした詰襟つめえり服の愛くるしい少年が顔を出した。これも

「吸血鬼」事件でおとなも及ばぬ働きをした少年助手小林である。

幸い、明智は在宅であつた。神谷はこころよく応接間に通され、

名探偵と初の対面をすることになったのだが、彼がちやうど応接

間へ通つたころ、門前にもう一台の自動車がとまつた。そして、

その中に眼を光らせていたのは、なんと高梨家の執事しゅじと称する、

白髪はくはつ白髯はくぜんの怪老人ではなかつたか。

神谷は少しも気づかなかつたけれど、相手の方では門前をうるつく、怪しげな青年を見逃さなかつた。いや、老人はそれ以上のことさえ知っていたかもしれない。彼は神谷の跡をつけたのだ。そして、彼が明智探偵事務所へはいつたのを見届けたのだ。

老人は車をとめて、少しのあいだ考えごとをしていたが、やがて懷中から手帳を取り出すと、その紙を破り取って鉛筆で何かしたため、それを運転手に渡しながら、

「この手紙をね、こここの家の玄関の戸の隙間すきまから、ソツと投げ込んでくるのじゃ。よいかな。誰にも見られぬよう、充分気をつけてな」

と命じた。

この運転手、ただのやつではないとみえて、妙な命令を疑いもせず、無言のまま車を降りると、忍び足で門内に消えて行つた。

名探偵の憂慮

邸内の応接室では、アームチェアにもたれた明智小五郎の前で、神谷青年が、人間豹ひょう恩田との異様な出会いからのすべての出来事を、くわしく説明していた。

明智は例の、青年時代からの癖で、モジャモジャに伸ばした髪の毛の中へ、右手の五本の指を櫛くしのように突っ込みながら、時々あいつち合あいつち槌ちを打って、非常に熱心に聞き入っていた。なかなかの長話

なので、そのあいだには、美しい明智夫人文代さんが、手ずから飲物を運んで、三度もその部屋へはいつてきたほどであった。

「そういうわけで、蘭子は一時安全であるようなものの、決して油断はできません。それに、やつは僕に対して深い恨みうらみを持っているのですから、僕自身も身辺の不安を感じるのです。そこで、先生に警察とは別に、恩田の隠れがを探偵していただきたいと思つて、お訪ねしたわけですが……」

神谷がそう言葉を結ぶと、明智は何かしら心配らしい顔をして、「その熊井という柔道家ですね、高梨家へ蘭子さんを世話したという、その人の住所はご存知ですか」

と妙なことを尋ねた。

「知っております。浅草の千束町せんぞくちように母親と二人で家を借りて
いるんです」

「電話は利きませんか」

「確か近所から呼出しが利くと思いましたが。大都劇場の事務所へ
聞き合わせたらわかるかもしれません……ですが、何か熊井にご
用がおりなんでしょうか」

神谷青年は、名探偵に奇癖のあることは聞いていたが、これは
少し突飛とつぴすぎると思った。

「いや、詳しいことは、あとで話します。非常に急ぐのです。あ
なた恐縮ですが、その電話で大都劇場へ尋ねてくれませんか」
明智は卓上電話を指さして、せき立てるのだ。

「熊井君の呼出し電話をですか」

「ええ、そうですね……僕はもしかしたら、熊井君親子は、もうどっかへ引越しをしてしまったんじゃないかというような気がするのですよ。もしいてくれれば幸いだが……」

この探偵は一体全体なにを考えているのだろうか、熊井とはきょうのお昼前に別れたばかりではないか。そのとき引越しの話など一度も出はしなかった。それに、熊井には一面識きつねもないはずの明智探偵が、彼の引越しを予想するなんて、まるで狐きつねにつままれたような話ではないか。

神谷は不審に耐えなかつたけれど、明智のするどい眼が、しきりに催促しているものだから、聞き返すわけにもいかず、いわれ

るままに受話器を取って、大都劇場にそのことを問い合わせた。

「わかりましたか。では、そこへあなたから電話をかけて、熊井君なり熊井君の母親なりを呼出してみてください」

「ご用がおりなのですか」

「ええ、用事があるので」

明智はすましこんでいる。

神谷は仕方なく、今聞いた柳屋という酒屋へ電話をつないで、熊井のうちへ走ってもらおうように頼んだ。

「モシモシ、熊井さんでございますか。あの柔道をなさる熊井さんですね。あのかたは、きょうお昼すぎ、急にお引越しなさいましたよ」

「えっ、引越したって？ それ、ほんとうですか」

「ええ、うそなんか言いませんよ。なんだかひどく急なお話でしてね。箆笥たんすだとか台所のものなんか、大抵たいてい古道具屋にお払いになつた様子ですよ」

「で、国へ帰つたというのだね。あの人の国はどちらだったかしら」

「さあ、それはよく存じませんでしたか」といふようなことで電話が切れた。

神谷青年は、まったく度胆どぎもを抜かれてしまった。明智が稀代きだいの名探偵であることは聞いていた。だが、八卦見はっけみではあるまいし、見ず知らずの人間が、きょう引越しすることを、いつたいまあ、

どうして言い当てることができただけであろう。

「国へ帰ったと言うのですか」

「ええ、そうです。しかし、先生はどうしてそれがおわかりになったのでしょうか」

「詳しいことはあとでお話しします。僕はあなたのお話を伺って、あることを心配していたのです。それがいま一部だけの中しました。この上は現場をしらべてみるほかありません。さあ、一緒に参りましょう。お話は自動車の中でもできますから」

明智は何かひどくイライラしている様子で、物問いたげな神谷の表情に答えようともせず、小林少年を呼んで、自動車を呼ぶように命じた。

「実はさつき、お話し中に手洗いへ立ちましたね。あの時玄関の所を通りかかってこんなものを見つけたのですよ、むろんあなたがいらしってからあとで、誰かが投げ込んで行ったものに違いありません」

明智はそう言つて、手帳の切れ端らしい一枚の紙を見せた。それには鉛筆の走り書きで、左のような恐ろしい文句がしたためてあつた。

明智君、君は神谷芳雄が依頼する事件に、断じて手を染めてはならぬ。君はいま美しい妻君と新家庭を楽しんでいる身の上ではないか。冒険はよしたまえ。もしこの忠告を用いずして、事

件の渦かちゅう中に飛び込むようなことがあれば、君は悔いても及ばぬ一大不幸に見舞われるであろう。

「恩田の仕業しわざでしようか」

神谷が驚いて明智の顔を見た。

「むろんです。君は恩田の一味の者に尾行されたのですよ。その尾行したやつが、僕の家へおはいりなすつたのを見て、とっさにこんな脅おどし文句を書いたのです」

「ですが、この一大不幸というのは、一体なにを意味するのですようか」

神谷はこの事件を依頼したことを後悔している口調であった。

「ハハハハハ、ご心配には及びません。僕にはその意味も大方おおかたはわかつていますのです。しかし、そんなことを恐れていては、探偵の仕事はできやしませんよ。僕は脅きょう迫はく状じょうにはもう慣れっこになって、ほとんど無感覚ですよ」

明智は事もなげに言い放った。

そうしているところへ、自動車がきたという知らせがあつたので、二人は急いで部屋を出た。

「小林、君も一緒に行くんだ。ひよつとしたら、ちつとばかり手て強い敵ごわにぶつつかるかもしれないぞ」

明智が玄関へ送つて出た美少年の肩をたたいて言った。

「はあ、お供します」

小林少年は、ハッキリした口調で答えて、さも嬉しうれそうに、駈かけ出して行って自動車のドアをひらいた。

「築地つきじへ行つてくれ」

三人が並んでクツシヨンに腰かけると、明智が行先を命じた。車はたちまち走り出す。

「築地と言いますと……」

神谷はせき立てられるままに、まだ行く先も知らなかったのだ。「むろん高梨の家ですよ。おわかりですか。君は今、どこから僕の家へいらしたのです。築地の高梨家の前からではありませんか。その君に尾行してきた男があつたとすれば……途中ですれ違ちがいに見つけて跡をつけるというのは少しおかしいですからね……」

その男は高梨家から君をつけてきたと思わなければなりません。君は気づかれなかつても、先方ではちゃんと君の挙動を監視していたかもしれせんよ」

「高梨家の人が、僕をですか」

神谷は、明智の考えがあまりに飛躍的だから、妙な混乱におちいって、あとで考えると恥じ入るような愚問を発した。

「そうですね。ああ、君はあの熊井という男をすっかり信じきっているのですね。無理ありません。あの男は蘭子さんの護衛を勤めていたほどですからね。しかし、悪魔の誘惑は、どんな所へでも伸びて行くのです。現に大都劇場の配電盤係りが恩田のためを買収されていたという例もあるくらいです。熊井がやっぱり同

じ手でやられなかったとはきめられませんよ。何よりおかしいのは、彼の突然の引越しです。それも、蘭子さんに奉公口を世話したその午後ですからね。第一、柔道家の青年が女中の世話をするなんていうことが、変てこじやありませんか。あなたはそれを疑ってみなかつたのですか」

飛ぶように走る自動車の中で、明智は丁寧ていねいに説明した。

そこまで聞けば、いくら混迷におちいつているといつても、明智の心配の意味を悟らないわけにはいかぬ。神谷青年はギョツとして、思わず明智の横顔を睨にらみつけた。

「すると、あの高梨家に、恩田の手が廻まわつているとでも……」

「そうですよ。行ってみなければほんとうのことはわかりません

が、脅迫状といい、熊井君の引越しといい、僕にはなんとなくそんなふうに感じられるのです。熊井君は、その高梨のお嬢さんが、不具者で、いつも顔に覆ふくめん面めんをしていと言ったのですね。あれを聞いたとき、僕はハツとしましたよ。僕の思いすごしかもしれませんが。どうかそうであってくればいいと思います。しかしそういう手は、わる賢い犯罪者などがよく用いるものですからね。

僕はかつてそれと同じ手口を見たことがあるのです」

「ああ、あなたはもしや、その覆面のお嬢さんが……」

「ええ、恩田の変装でなければいいがと思うのです」

「畜ちくし生しょうめ！ そうだ。そうにきまっている。ああ、僕はなん

という間抜けだったろう。苦心に苦心をして、蘭子ちゃんを、あ

のけだものの罘わなの中へ落としこむなんて……」

神谷はもうまっ青になつて、自動車の床ゆかに、地だんだを踏むのであつた。

「おい、運転手君、料金はいくらでも増してやるから、もつと急いでくれないか。人の命にかかわることなんだ。早く、もつと早く」

彼は氣違ひのようにわめき立てた。

「しかし、いくら急いでみても、僕らはもう後手ごてを引いているのかもかもしれませんよ」

明智は深い憂慮の色を浮かべて言う。

「どうしてですか。蘭子が高梨家へ行ってから、まだ二時間あま

りしかたっていないのですよ……」

「いや、普通なれば心配することは無いのですが、あなたを尾行したやつがありますからね。そいつは僕を恐れているのです。恐れているからこそ、あんな脅迫状を残して行つたのです。何を恐れるのか。僕の想像力をです。僕が高梨家というものを疑うかもしれない。それが怖いのです。すると、そいつは、僕らの先さきまわ廻りして、高梨家に帰り、いつ襲撃されてもさしつかえないように用意をするかもしれませぬ」

「用意つていいいますと？」

「さあ、その用意を、僕は極度に恐れているのです。むろん先方へ行ってみなければ、わからないことです。杞憂きゆうであつてくれれ

ばいいと思うのですが、わるくすると……」

「蘭子が……」

「ええ、そうですよ。相手は人間じゃないのですからね。前の例でもわかるように、肉食獣にもひどしいやつですからね」

明智はそう呟つぶやいたまま、言いがたき不安の色を浮かべて、だまりこんでしまった。

奇怪なる贈り物

案内知った神谷青年の指図で、車が適当な場所に止まると、三人は急いで降り立ったが、明智は車内であらかじめ書き入れをし

ておいた名刺を小林少年に渡して、

「君は表に待っているんだ。腕時計はあるね。カツキリ十分間だよ、僕たちが高梨の家へはいつてから十分間たつても出てこなかったら、近くの交番へ走るんだ。そしてその名刺を渡して、本署へ電話をかけてもらうんだ。そして、すぐさま僕たちを救い出す手配をしてくれるように頼むんだよ。わかつたかい」

「はあ、わかりました」

「多分そんな事は起こりやしないと思うけれどもね。ただ万一の用意なんだよ」

さて明智と神谷とが、高梨家の門前に近づいてみると、正門脇わきの潜り戸くぐりが半びらきになっていたので、構わずそこからはいつて、

玄関の呼鈴を押した。

だが、いくら押しても手応えてごたがない。格子に手をかけて試みると、ガラガラと大きな音を立てて、わけもなくひらいた。

「ごめんください。ご不在ですか」

何度どなつても、誰も出てこない。

「君は僕が呼ぶまで、ここに待っていてください。僕はこういうものを用意しているから大丈夫だけれど、君に万一のことがあつてはいけませんから」

明智はポケットから小型のピストルを取り出し見せた。神谷が承知の旨を答えると、探偵は靴くつをぬいで、单身薄暗い家の中へはいつて行ったが、やや五分もすると、失望の色を浮かべて戻つ

てきた。

「やつぱり僕の想像が当たりました。誰もいません。湯殿から納屋の中まで調べてみましたが、人のいたけはいはあるけれど、もぬけの殻からです。これはほんとうは空き家なんですよ。恩田が空き家を借りて、必要な部屋にだけ飾りつけをしたのでしよう。応接間と奥の方の寝室らしい洋間だけに家具があつて、そのほかの部屋はがらんどうですよ。ただ不思議なのは、つい今しがた湯にはいったやつがあるとみえて、湯殿の湯がまだ暖かいことです」

明智が委細を説明した。

「どっかに隠れているのではないでしようか。それに、ここの主人というのが果たして恩田だったのでしょうか」

神谷は諦め^{あきら}わるく尋ねるのだ。

「それは間違いありませんよ。ごらんなさい。これはその寢室の小さいテーブルの上に残してあつた賊^{ぞく}の置き手紙です」

やっぱり手帳のきれつ端に、「明智君、一^ひと足違いだつたよ。

お気の毒さま」とぶつきらぼうな走り書きがしてあつた。

「するとあいつは、先生がここへ来られることを、ちゃんと知つていたのですね」

神谷が驚いて言つた。

「そうです。敵に取つて不足のない相手ですよ。だが、実に残念なことをしましたね。これほど智恵のまわるやつですから、いくら探したつて、逃げた先を暗示するような手掛りが残っているは

ずはありません。われわれは一とまず引き上げるほかはないので
す」

「ですが、蘭子はいったいどうしたのでしようか。まさかだまつ
て連れて行かれるはずはありませんが」

「それですよ。僕がさいぜんから心配しているのは。しかし、こ
ういうことになっては、僕なんかの個人の力よりも、組織的な警
察力にたよるほかはありません。僕たちは、すぐにあの車で警視
庁を訪ねましょう。そして、捜査一課長に会いましょう。恒川
課長は心やすいのですよ」

そして、彼らは高梨家の門を出ると、待たせてあった自動車を
駆^かつて、警視庁へと急がせたのである。

その結果、警察は俄かに色めき立って、築地の現場付近を洗い立てたのはいうまでもなく、熊井青年の国元への照会、その他少しでも関係のある方面には、抜かりなく手を廻まわして十二分に捜査を行なったのであるが、まったくなんの手掛りをも掴つかむことができなかつた。恩田の借りていた家の家主をしらべたのはいうまでもない。しかし、高梨という白髪はくはつ白髯はくぜんの老人が、ちゃんと正規の手つづきを踏み、多額の敷金を納めて借り受けたという以外には、何事もわからなかつた。

そうして一夜が明けたのだが、その翌朝、ついに明智の恐れていたものが事実となつて現われたのである。

その朝、神谷芳雄の宅へ、奇妙な贈り物が届けられた。差出人

は誰ともわからない。それを運んできた運送店へ、夜の白々しらしら明けに一台の自動車がとまって、神谷芳雄の所書きを示し、これをすぐに届けてくれと依頼されたとのことである。

贈り物というのは、大型のシナカバンを縦に二つつないだほどの大きな木箱で、その蓋ふたの上には、熨斗のし屋の看板みたいなでつかい熨斗をはりつけ、胴中を、これも水みず引屋ひきの看板みたいなべら棒に大きな水引でくくってあった。

「大きい花瓶かびんかなんかじゃありませんか」

運送屋がそんなことを言っただけで帰ったものだから、つい油断をして、心当たりはないけれど、会社関係の人からの贈り物かもしれないと、書生に手伝わせてひらいて見たのだが……

ひらいて見ると、まず眼を驚かせたのは、箱の表面一杯にひろがっている、おびただしい花束であった。それを見たとき、神谷青年はある予感にうちのめされて、心臓は早鐘はやかねをつくように騒ぎはじめたのだが、といって、見ないわけにはいかぬ。ソツと花束をかきのけて行くと、ああ、果たして、果たして……名探偵の予言はむごたらしくも的中したのだ……そこには、全裸体の江川蘭子の死骸しがいが、まるで蠟人形ろうじやうのように美しく横たわっていたのである。

その白蠟はくろうのようなからだのうちに、ただ一か所美しくないところがあった。蘭子を殺したものは、美しくない部分であった。喉のどのところは、パツクリと口をあいた赤黒い傷痕きずあと。それは何か猛

獣のするどい牙きばでもって喰くいちぎられたように見えた。

ふと気がつくくと、死骸の胸の上に、一封の手紙がのせてあつた。神谷は無我夢中でその封を切つたが、そこには昨夕明智の宅へ投げこまれたものとそっくりの筆跡で、左のようないまわしい文句がしたためてあつた。

神谷君、君はあまりに考えのない軽はずみをした。君が明智探偵を訪ねさえしなければ、こんなことは起こらなかつたのだ。

また、明智君が、昨夕の警告に従つて、手を引きさえすれば、蘭子は無事でいられたのだ。君は取返しのかぬ失策をしたのである。明智君にもよろしく伝えてくれたまえ。いずれ充分お

礼はするからとね。

諸君の所謂『人間豹』より

第二の棺桶かんおけ

棺桶配達事件は、被害者が帝都興行界の花形江川蘭子であつた上に、殺人者が世人を戦慄せしめていた怪物人間豹とわかつていたので、その騒ぎは一と通りでなかつた。その日の夕刊は、あらゆる激情的な形容詞を濫費して、ほとんど社会面全ページをこの報道でうずめた。被害者蘭子の写真、明智小五郎の写真などが、

見世物のようにデカデカと掲載せられた。

事件の中心となつた神谷の家の騒ぎは申すまでもない。神谷家お出入りの人々が右往左往する。蘭子の親戚しんせきのもの、大都劇場の事務員が駈かけつける、警察官がドカドカとやってくる。神谷青年はその警官の取調べを受けた上、父親には油をしぼられる。お母さんには泣かれる。とうとう病人のようになつて一と間にとじこもってしまったが、やがて騒ぎも静まり、午後となり、夕方となり、気分が落ちついてくるに従つて、恋人を失つた悲痛、怨おんて敵人間豹への憤怒ふんぬが、今さらのように彼の胸をかきむしつた。どうしたつて、このまま泣き寝入りするわけにはいかぬ、草の根を分けても恩田親子を探し出して、かならず恨うらみをはらさねばな

らない。彼はもうじつとしていられなかった。相談相手は明智小五郎のほかにはない。それに明智にはけさからの出来事を報告しなければならぬのだ。神谷はそそくさと外出の用意をして、家人にも告げず、わが家を抜け出したのである。

タクシーを拾って明智の事務所へ急ぐ道すがら、賑にぎやかな大通りの角々に、夕刊売子の鈴の音、「江川蘭子殺人事件」の貼はり紙だが神谷は車を止めて夕刊を買う勇氣はなかった。顔をそむけるようにして、デカデカと赤インキの丸々をつけた貼り紙の前を通りすぎた。

明智は待ちかねていたように、彼を応接室に通した。テーブルの上には幾枚かの夕刊がひろげてある。そこには、蘭子の生前の

写真が、さまざまのポーズでもって頼笑ほほえんでいるのだ。

「僕はあなたにお詫わびしなければならぬ。こういうことになつたのは、僕があいつを見くびっていたからです。警告状を黙殺して、築地の家を襲つたりしたからです。なんとも申しわけありません」

明智は率直に詫わびた。

「いや、先生の失策だとは思いません。あの場合あはするほかはなかつたのです。先生だからこそあいつらの奸かんけい計を見破つてくだすつたのです。蘭子はいずれこんなことになる運命でした。先生の御助力がなければ、あれの死期がいくらか遅れたかもしれませぬ。しかし、それはただ苦しみを長くするばかりで、どうせ助

かりっこはなかつたのですからね。それよりも、僕は蘭子の敵^{かたぎ}が
取つてほしいのです。先生の力で恩田父子の隠れ家突きとめて
いただきたいのです」

神谷青年は決して明智を恨^{うら}んではいなかった。感謝こそすれ、
恨むべき筋は少しもなかつたのだ。

「それはおつしやるまでもない。僕はけさからそのことでいろい
ろ活動していたのですよ。君から電話があつたし、警視庁の知合
いの者からも詳しく事情を知らせてくれたし、そればかりではな
い、殺人鬼みずから又しても僕に挑戦してきているので、自衛の
意味からも、僕はじつとしていられないのですよ」

「え、すると、あいつは又挑戦状をよこしたのですか」

「そうですよ。ごらんなさい、これです」

明智はポケットから一葉の封筒を取り出して、中の書翰箋しょかんせんをひろげてみせた。

明智君、君の驚いている顔が見えるようだ。おれの力がわかったかね。おれは約束したことは必ず実行してみせるのだ。用心したまえ。おれは君にきつとお礼をすると約束したっけね。どんなお礼だかわかるかね。名探偵さんの泣きつ面つらが拝見したいものだね。

「お昼時分、コツソリ玄関へほうりこんで行ったのです。あいつ

はもう、僕のうちのまわりに網を張っているのですよ。こうして話していることも、どつかの隅からちやんと聞いているかもしれない。ハハハハハハ」

明智は事もなげに笑ってみせた。

「しかし、このお礼というのは、一体なにを意味するのでしょうか。もしなんだと、僕は大変ご迷惑をおかけしたことになるのですが」

神谷は無気味な挑戦状を読むと、もう気が気ではなかった。

「おおかた想像がつかないではありませんが、なあに、少しも心配することはないのですよ。僕の方には敵の智力に応じてそれぞれ用意があるのですからね。ばかばかしい子供だましの手品を使

うやつには、僕の方でもそれに輪をかけたトリックでもって対抗するばかりですよ」

明智の様子は何かしら楽しそうにさえ見えるのだ。神谷は職業的探偵家の神経に一驚を喫しないではいられなかった。

「ですが、あいつは僕をこそ恨むべきではないでしょうか。あいつらの巢窟そうくつを焼き払ったのも、大切な豹ひょうを銃殺したのも、みんな僕のせいなんですからね。それに今度だって、先生に事件を依頼したのは僕じゃありませんか。僕をほうっておいて、先生に復讐くしゅうを企てるなんて」

「それはむろん君も恨んでいるでしょうが、あいつらの悪事の第一の邪魔者は僕なのです。まずとりあえず邪魔者の方から始末を

つけようというわけでしょう。それに僕のところには、あいつには見逃せない誘惑物があるのですからね」

明智はそう言つて、ちようどそこへお茶を運んできた文代夫と顔見合わせた。似ている、似ている。文代夫人は弘子や蘭子とソツクリの顔立ちではないか。

ああ、では人間豹ひょうは、眼早くも、この美しい明智夫人を、次の獲物えものと狙ねらっているのであろうか。名探偵自身の若い奥おくさんを誘ゆう拐かいしようとしてもいうのであろうか。

「では、あいつは……」

神谷はぶしつけにも文代さんの顔をじつと見つめながら、あまりのことに、それとも言いかねて口ごもった。

「そうですね。少し突飛とつびだけれど、けだものには人間の常識なんてありやしないのだから、至極単純に、感情のままに動くのですよ。この挑戦状の文句は、ほかに解釈のしようがないじゃありませんか」

言われてみると、いかにもその通りであつた。なんという面白い思いつきであろう。けだものの情じょうよく慾よくを満足させることが、そのまま名探偵への復讐手段となるのだ。あいつの考えそんな事だ。

「もしそうだとすると……ああ、僕はなんだか恐ろしくなってきました。大丈夫ですか。僕は今までの経験で、あいつの力をよく知っているのです。あいつは人間ではないのです。悪魔です。悪

魔の智恵と力を持っているのです」

奥さんはよくそんな平気な顔でいられますね、と言おうとして、ぶしつけに心づいて呑みこんでしまった。

「そんな相手でしたら、面白うございますわ。明智はこのごろ、大きな事件がないと言ってこぼし抜いていたのですもの」

文代さんはそんなことを言って、可愛いかわい八重やえ齒ばであてやかに笑ってみせた。

これはまあ、見かけによらない、なんて大胆な奥さんだろう。

神谷はあつけにとられてしまった。彼は文代さんが「吸血鬼」の事件で、明智の助手の女探偵として、どんなに勇ましい働きをしたかということ、少しも知らなかったのだ。

「何よりもあいつの隠れがを突きとめなければなりません。先生には何か成算がおありなんですか」

神谷が尋ねると、探偵は落ちつき払って答えた。

「突きとめるまでもありません。先方からやってきますよ。僕はそれを待っているのです」

「いつですか」

「たぶん今夜。もうその辺をうろついているかもしれませんよ。ほら、お聞きなさい。僕のうちの犬がひどく吠ほえているじゃありませんか」

いつの間にか日が暮れて、窓のそとはまっ暗になっていた。その辺一帯は屋敷町で、どこからか洩もれてくるピアノの音のほかに

は、ひっそりと静まり返った淋^{さび}しさである。そのうちに、けたたましい犬の鳴き声、それがたちまち近づいてくると思う間に、まるで弾丸のように応接室へ飛び込んできたものがある。

「まあ、S、お前どうしたの！」

たくましい愛犬を抱きとめた文代さんの両手は、ベツトリと恐ろしい血潮であった。

Sは女主人の腕の中で、一と声異常な鳴き声を立てたかと思うと、そのままグツタリとなつてしまった。したたる血潮がたちまちジュウタンをまつ赤に染めて行く。

「いったいどうしたんでしょう。この傷は？」

文代さんが少し青ざめて、意味ありげに明智探偵の顔を見つめ

る。

いかにも異様な傷であつた。背中一面、点々とむしり取つたようになつて、頸筋くびすじの一とえぐりが致命傷らしく見えた。決して噛みつかれたのではない。何かしらするどい爪つめのようなものでひつ搔かかれた傷痕きずあとだ。だが、人間ではない。人間の爪がこんなにするどいはずはない。

「あいつだ！ Sはあいつにやられたんだ。文代、用心しなさい」
スツクと立ち上がった明智の手には、すばやくポケットの小型拳銃けんじゆうが握にぎられていた。と、申し合わせたようにやさしい文代さんの右手にも、どこに隠していたのか、同じピストルが。

「お前は居間に隠れているんだ。ドアに鍵かぎをかけて、決してあけ

るんじゃないぞ」

言い捨てて、明智は戸外へ飛び出していった。文代さんは命じられた通り、二階の居間へ駈^かけ上がったて行く。すると、どこから出てきたのか、栗鼠^{りす}のようにすばやい小林少年が、明智のあとを追って、廊下を走り出て行く黒い姿が眺^{なが}められた。

神谷もじつとしているわけにはいかなかった。オズオズと玄関に出てみると、明智と小林少年とは、植込みの柴折戸^{しおりど}から、裏庭の方へ廻^{まわ}つたらしい。門のそとは淋しいといつても、時々はタクシーの通る往来だ。まさか門のあたりに隠れているはずはあるまいと、わざとその安全な方角を選んで、彼はノコノコと歩いて行った。

だが、敷石道を五、六歩行くと、もう恐ろしくて歩けなかった。両側のナツメの植込みが、まっ黒な蔭かげを作つて、そこに何かしらただならぬけはいが感じられたからだ。見まいとしても不思議な妖気ようきが彼の眼をその方へ引きつけて行つた。植込みのもつとも暗い蔭、その地上三尺ほどの闇やみに、ああ、忘れもしない、あの青く燃える二つの螢ほたるび火が、じつとこちらを見つめていたではないか。

神谷は、それを見た刹那せつな、あとで考えると気恥かしくなるような、なんともえたいの知れぬ叫び声を立てながら、一目散に玄関の方へ逃げ帰つたのだが、逃げながら振り返ると、怪物の方でも驚いたらしく、黒い影が、植込みをザワザワいわせて、門の方へ、

怪しい風のように飛び去って行くのが感じられた。

「神谷さん、どうしたのです」

叫び声を聞きつけて、明智と小林少年とが、玄関へ戻ってきた。「やつがいたのですか」

神谷は、門外を指さして、「あちら、あちら」とかすれた声で告げ知らせた。

勇敢な二人は、それを聞くと、矢のように門のそとへ駈け出して行った。だが、しばらくすると、別段のこともなく帰ってきて、

「何もいませんよ。思い違いじゃありませんか」

と、疑わしげに神谷の青ざめた顔を見るのであった。

「間違いじゃありません。確かにあいつでした。まだその辺の路地かなんかに隠れているかもしれないよ。すぐ警察へ電話をかけてはどうでしょうか」

「いや、それには及びません。いくらおまわりさんが来たって、捕まるやつじゃない。それは今までのたびたびの経験で、君もよく知っているでしょう。ここへ警察なんか飛び出してきては、かえってぶちこわしですよ。まあ見ててごらんさい。僕に少し考えがあるんだから」

明智はそれ以上搜索しようともせず、呑気のんきらしいことを言つて、サツサとうちの中へはいつてしまった。神谷も仕方なくそのあとに従ったが、玄関を上るか上がらないに、ドヤドヤと門内には

いつてくる人の足音がして、大きな荷物が担かつぎ込まれた。

「明智さんはこちらですね。これにご判を願います」

トラックの運転手みたいな男がどなっている。見ると、ドアのそとに、二人の男が何か大きな物を担いでいる。箱のようなものだ。長さ一間ほどもある細長い箱のようなものだ。それがドアをつきのけて、ニユーツとこちらへはいつてくる。

神谷はギョツとして立ちすくんでしまった。

第二の棺かんおけ桶だ。

けさ彼のうちに起こったことが、ソツクリそのまま再現したのだ。おれは夢でも見ているのかしら。いや、そうではない。夢なんかじゃない。すると、あの棺桶の中には、今度は誰の死骸しがいがは

いつているのだろう。

「奥さんは？　奥さんはどこにいらつしやるのでしよう」

神谷は変なうわごと譚言みたいなことを言つて、キヨロキヨロとあたりを見まわした。

「二階ですよ。今に降りてきますよ」

明智は無神経な返事をして、運転手のさし出す書付に判を押し、いまわしい荷物を応接間へ担ぎ込むように命じている。

「いいんですか。その箱の中、ご存じなんですか」

神谷は、今にも恐ろしいことが起こりそうに思われて、気が気ではなかった。

「ええ、知っていますとも。今お眼にかけますよ」

明智は落ちつき払っている。どうも変だ。この男はほんとうに明智探偵なのかしら。もしかしたら例の魔術でもって、いつの間にか、あのけだものが、明智に化けているのではないかしら。でなければ、こんな恐ろしい棺桶なぞを、ニヤニヤ笑いながら、うちの中へ持ち込むはずはないのだが。

明智は運転手たちが帰ってしまうと、応接室の窓々のブラインドを念入りにおろし、その上にカーテンを引いて、そこから隙見すきみのできないようにおいて、用意の釘抜きくぎぬで木箱の蓋ふたをひらきはじめた。

キイ、キイ、といやな音を立てて、一本ずつ釘がゆるむにつれて、蓋の一方が持ち上がって行く。そして、その隙間から、蔭に

なつた箱の内部が、徐々に暴露されてくるのだ。

その棺かん桶おけの中に、一体どんなものかはいっていたか、神谷青年がそれを見て、どのように驚いたか。いや、彼が驚いたのはそればかりではなかった。その夜、明智の事務所には、次々と実に異様なことが起こつたのだ。神谷はまるで狐きつねにでもつままれたように、あつげにとられて、名探偵の演出する奇妙なお芝居に見とれているほかはなかった。

獣人对獣人

それから一時間ほど後のこと、明智探偵事務所の門前に、一台

の空き自動車がとまったかと思うと、門内の闇やみの中から、誰かが急ぎ足に歩いてきて、ドアをひらいて待っている運転手に助けられ、無言のまま車内にはいった。運転手が大急ぎで自席に帰って、パツと車内燈を点じる。そのおぼろげな光に照らし出されたのは、見覚えのある洋装、明智夫人文代さんであった。彼女はクツシヨンの隅に身を隠すようにして、なぜかじつとうなだれている。

この物ぶつ騒そうな折も折、もう八時を過ぎた今時分、彼女は一体どんな急用が起こったというのであろう。いくら気丈な女探偵だといっても、これは少し冒険すぎはしないだろうか。人間豹ひょうはまだ執念深く、その辺の闇に身を潜ひそめていないものでもない。もし彼女のこの不用意な外出を、あいつに悟られでもしたら……

いや「したら」ではない。もうちゃんと悟られてしまったのだ。けだものは、果たしてそこに待ち伏せしていたのだ。

やがて車が音もなくすべり出すと、それを待ち構えてでもいたように、黒い風みたいなのが、サツと飛び出してきて、いきなり自動車の後部へしがみついたではないか。いうまでもない、あいつだ。遠ざかって行く自動車のうしろに、陰火いんかのような二つの螢ほたるび火が見えていた。「注、当時の自動車は箱型で、後部にすがりつくことができた」

だが、いつまであんな恰かっこう好でしがみついていられるものだろう。やがて車は明るい街路へ出るに違いない。交番の前も通るに違いない。そうすれば、文代さんは害を受けないですむのだ。早

く明るい大通りへ出ればよい。

ところが、これはまあどうしたことであろう。車は意地わるくも、まるでわざとのように、淋さびしい町、淋しい町とえらんで、しかもだんだん郊外の方へ出て行くではないか。

車のうしろが大写しになって、人間豹の醜しゆうかい怪かいな顔が、闇の中で、ドス黒い舌を吐はいて、ニタニタと笑っている。

もう旧市内を離れて、淋しい場ばすえまち末町だ。そのゴミゴミした町と町のあいだに、大きな森のようなものが見える。昔、その辺がまだ村であった時分の鎮守の森が、そのままちゃんと残っているのだ。

実に意外なことには、文代さんの自動車は、その鎮守の森の闇

をめがけて、まっしぐらに突き進んで行くではないか。まるで、殺人鬼の注文にそっくりはまりでもしたように。

車がとまったのは、社殿の前の広っぱであった。杉や檜の大樹がまわりを取り囲んで、たださえ暗い闇夜の空を、一そう暗く覆い隠している。その身の毛もよだつ静寂の中へ、可哀かわいそうな文代さんは、昔話にある人身御供ひとみごころみたいに、ほうり出されたのである。はてな、こいつはあんまり話がうますぎやしないかな。

だが、情慾じょうよくに燃えたけだものには、そんなことを考える余裕はなかった。恩田は一匹の巨大な猿ざるの恰好かつこうで、地上に飛び降りると、いきなり客席のドアをひらいて、異様な唸り声うなを立てながら、車内へ躍り込んでいった。

クツシヨンの隅には、美しい文代さんが、やっぱりうなだれたまま坐^{すわ}っている。驚いて叫び声を立てるだろう。か弱い腕で抵抗を試みるだろう。恩田は残忍な期待に燃えて、文代さんに掴^{つか}みかかって行つたのだが、相手は声を立てるところか、身動きさえもしないではないか。おや、氣絶しているのかしら。だが、それにしても……

恩田は両手を伸ばして、文代さんの肩を、ギユツと抱きしめたが、すると、何に驚いたのか、彼は「ギャツ」というような怒りの叫び声を立てたかと思うと、いきなり文代さんのからだを、軽々と車のそとに掴み出し、さも腹立たしげに地べたに投げつけて、その上を、めちやくちやに踏みつけるのであった。

それは文代さんではなかったのだ。いや生きた女ではなかったのだ。文代さんの衣裳いしやうをつけた、一個の冷たい蠟人形ろうじやうにすぎなかったのだ。

「畜ちく生しやうめ、畜生め！」

恩田がやけになって、その文代さんらしいものを踏みつけたのも無理ではない。

ああ、そうだったのか。さいぜん明智の事務所へ運ばれた棺かんのお桶けようの木箱の中には、神谷が恐れたような死体ではなくて、このマネキン人形がはいつていたのだ。手品には手品をもつて酬むくいると言った明智は、あらかじめこのことあるを察して、昼のうちにはちゃんとマネキンを注文しておいたのに違いない。そして、

その思い切ったトリックが、まんまと効を奏したのだ。人形が自動車に乗って外出するなんて、いかな悪魔も思いも及ばないことであつた。

「フフフフ、ご苦労さまだつたね」

恩田のうしろに、黒い影が立って、突然声をかけた。

さすがの怪物も、この不意うちには、ギョツとしたらしく、身構えをして振り返つた。

「貴様、運転手だな」

「そうだよ。君をここまでお連れ申した運転手だよ」

黒い影は腕組みをして、落ちつき払っている。

「お前、おれが怖くはないのか」

恩田が無気味に低い声で、押しつけるように唸った。

「フフフフ、怖いのはお前の方だろうぜ。おい、同僚、一つおれの顔をよく見てくれ。おれを誰だと思っているのだね」

運転手が、眼深まぶかにかぶっていたソフトを取って、自動車の窓のところへ、ヒョイと顔を出してみせた。

恩田がゾツと身震みふるいしたのも無理ではなかった。

そこには、もう一人の恩田がいたのだ。黒く骨ばった顔、もじやもじやした頭髮、まっ赤な唇、その唇のあいだから覗のぞいている野獣の牙きばのような白歯、皺しわくちやになった黒の背広、何から何までソツクリそのままの人間豹ひょうが、もう一匹、闇夜やみよの森の中に出現したのだ。

二匹の人獣は、淡い車内燈の光の前で、寸分すんぶん違わぬ顔と顔とを突き合わせ、牙をむき、敵意に燃えて睨にらみ合った。

恩田の顔には、けだものが鏡の前に立たされたような驚愕きょうがくの表情があつた。お化けにでも出つくわしたような恐怖の色が、まざまざと読まれた。

「お前、いったい誰だ？」

おびえた声で尋ねた。

「お前の兄弟分さ」

「ばか言え。ほんとうに誰だ？」

「当ててみたまえ」

恩田は気持を落ちつけるようにして、しばらくだまっていたが、

突然恐ろしい形ぎょうそう相そうになって叫んだ。

「貴様、変装しているんだな。わかつたぞ、わかつたぞ、貴様明智だろう。明智小五郎だろう」

「ハハハハハ、やっとわかつたか。お察しの通りだよ。君をこんな目にあわせる人間は、僕のほかにはありやしないよ。ところで、どうだね、僕の変装ぶりは？ 誰が見たって、君とソツクリだろう。この変装でもって、君のおやじさんの眼をあざむくことはできまいかしら。君はどう考えるね」

「なに、おれのおやじだつて？」

「そう、君のお父さんだよ。君を捕縛ほぼくしたただけでは少し物足りないからね。ついでに親子もろとも引つくくって警察の方へ引き渡

してやろうかと思うのだよ」

「君一人でかい」

力にかけては十人力の人間豹、一人と一人の争いなら、ビクともするものではない。

「いや、必ずしも僕一人ではないがね」

「それじゃあ、貴様……その辺に仲間が待ち伏せしているんだな」
俄にわかに恩田の形相が険悪になったかと思うと、いきなり両手をひろげて飛びかかろうとした。

「いや、そいつはいけない。正当防衛の意味でなら、僕は君を銃じ殺ゆうざつする決心でいるんだよ。手を上げたまえ」

明智の仕草しくさがすばやかだったので、相手は用意の拳けん銃じゆうを取り

出す隙すきがなかった。さすがの野獣も言われるままに「お預け」みたいな恰かつこう好をしなければならなかった。だが、そうしていなながらも、彼は隙もあらば飛びかかろうと、油断なく眼をくばっている。

「諸君、もう出てもよろしい。早くきてこいつを縛しばってください」
 明智の声に応じて、闇やみの木蔭こかげから、四、五名の私服警官がバラバラと飛び出してきた。

「恩田、神妙にしろ」

そのうちのおもだった一人が、昔ふうの掛け声で、恩田の背後から組みつくつと、つづく二人の警官が、捕ほじ縄ようさばきもあざやかに、たちまち人間豹ひょうを、身動きもできぬように縛り上げてしまっ

た。

「それでは、こいつは諸君に預けましたよ。僕はまだもう一人のやつを探し出さなければならぬ」

明智はピストルをポケットにおさめながら、静かに言った。

「承知しました。いずれ課長からお礼を申し上げるでしょう。それでは僕らは急ぎますから」

一人の私服が自動車の運転台に飛び乗ると、停止していたエンジンの響きはじめた。残る人々は、人間豹をこづき廻まわすようにして、狭い車内へ押し込んだ。

自動車は、明智のたたずむ前を、静かに元来た道へと引り返して行った。

鉄管の迷路

それから又一時間ほどの後、明智探偵事務所門前の、まっ暗な道路を、影のようにさまよう人物があつた。

彼はさも人眼をはばかりるように、軒燈を避けて、暗い塀の蔭を、足音を忍ばせながら一定の距離を行ったりきたりしている。黒い背広を着た、瘦やせた男だ。うっかり軒燈に近づいた折に、よく見ると、そいつはあの醜悪な人間豹ひょうの顔とそっくりであつた。むろん明智の変装姿に違いない。だが彼は自分のうちの前を、どうしてこんなうさんくさい様子でさまよっているのであろう。

「はてな、おれの誤算だったかしら。もうやってきてもいい時分だがな。あのおやしさん、せがれ倅がいつまでも帰らなければ、心配でたまらなくなつて、きつとこの辺を探しにくるに違いないのだが、この見込みはずれないつもりなんだが……」

明智はそんなことを考えながら、しきりと闇の中をすかしてみるのであつた。

彼は恩田に化けて、恩田の父親が探しにくるのを待ち構えていたのだ。彼が出発の時から、すいきよう酔狂な変装をしていたのも、実はこの目的のためであつた。たとえ親子であつても、この暗闇の中で、変装に気づくはずはない。それに、彼は変装術にかけては、充分自信を持っていた。

「おや、うちへ電話がかかってきたようだな」

明智はふと聞き耳を立てた。確かにわが家やの電話のベルの音だ。「誰からだろう。文代は二階の居間に鍵かぎをかけてとじこもっているはずだから、小林が電話口へ出ているに違いない。何か急な用事かしらん」

彼はうちの中へ飛び込んで行くわけにはいかなかった。そのうちにも、恩田の父親がやってくるかもしれない。もしうちへはいるところを見つけれでもしたら、ぶちこわしだ。

そのとき、彼が遠い邸内の電話のベルに注意したというのは、何か虫の知らせのようなものであったかもしれない。なぜといって、その電話こそ彼に取って致命的なものであったからだ。それ

を聞き得なかつたばかりに、思いもよらぬ失策を演じなければならなかつたからだ。だが、それはのちのお話である。

じつと辛抱^{しんぼう}して、暗闇^{くらやみ}をさまよいつづけているうちに、とうとう手ごたえがあつた。ボロボロの着物を着た、はだしの乞食^{こじき}みたいな男が、闇の中から浮き出してきて、しばらくのあいだ、じつと彼の方をすかして見ていたかと思うと、いきなりツカツカと近づいてきて、彼に、何か紙切れみたいなものを手渡すのであつた。

このものといっしよに帰れ、急に相談したいことが起こつた。

紙切れを軒燈に近づけてみると、鉛筆の大きな文字で、そんなことが書きつけてあった。見覚えのある筆蹟ひっせきだ。恩田の父親に違いない。

「間違いないだろうね。お前、恩田っていう人だろう」

乞食みたいな男が、念を押すように言った。して見ると、こいつは恩田の顔を知らないのだな。知らなくても間違う気遣いがないほど、恩田の顔には特徴がある。その特徴を教えられてきたのに違いない。明智はもうビクビクすることはなかった。

「ウン、間違いないよ。だが、おれのおやじは今どこにいるんだい、うちにいるのかい」

「うちだか、どこだか知らねえ。おれは芝浦しばうらで頼まれたんだよ」

ハハア、すると、あいつらの巢窟そうくつは芝浦付近にあるんだな。

「芝浦つていや、ずいぶん遠いじゃないか。歩いて来たのかい」

「そうよ。モチよ。だがおれの足は電車よか早いんだからな」

「だが、おれはそうはいかんよ。どうだ円タクを奮発しようか」

「おれあ円タクなんぞ嫌きらいだ。だが、お前が困るなら乗ってやつてもいいよ」

それにしても、恩田老人はなんとというひどい使いをよこしたものであろう。これで見ると、今あいつらのそばには、気の利いた手下もいないとみえるわい。

明智はソフト帽を眼深くまぶかして顔を隠しながら、円タクを拾った。そして、乞食と並んで車内に腰をおろした。車は乞食の言葉に従

つて、芝浦の方角に疾走する。

「お前に手紙を頼んだ人は、確かにおれのおやじだろうね。お前その人の風体を言ってみな」

明智は念のためにそれを確かめようとした。

「なんだか知らねえが、おれにちよいちよい小遣いしてくれる親切な爺じいさんだよ。顔じゆう白いひげを生やして、眼のギョロツとした、瘦やせつぽちの小さな爺さんだよ」

「ウン、それなら間違いない。で、その人は芝浦でおれの行くのを待っているのかい」

「そうよ。鉄管てつかんながや長屋で待っているんだ」

「鉄管長屋って？」

「お前、知らねえのかい。爺じいさんはちよくちよく鉄管長屋へ遊びにくるんだぜ。ほら、あすこにウントコサころがつている水道の鉄管のとき。おれなんかも、その鉄管長屋に古く住んでいるんだよ」

ルンペンどもが、水道用の大鉄管をねぐらにしていることは周知の事実だ。すると恩田父子はその鉄管の中を、一時の隠れがにしているというわけであろうか。

そんな話を取りかわすうちに、車は芝浦の闇やみにさしかかっていた。

「どこへ行くんですよ。もうこの先には町がないんですが」

運転手がげん顔に尋ねるので、そこで車を降りることにした。

車を降りて、果てしもない暗闇のなかへさまよい出した。さすがにルンペンには慣れたもので、見えぬ道をグングンと先に立って歩いて行く。眼が慣れるに従って、曇った空がだんだんほの白く見えてくる。そのおぼろな反射光が、地上のものを、うっすらと墨絵のように浮き上がらせている。

「ここだよ、今爺さんを探すからね」

ルンペンの言葉に瞳ひとみをこらすと、これはまあなんというおびただしい鉄管の行列であろう。黒い地上に、とり別けてまっ黒に見える巨大な円筒が、眼路めじの限り、遥かはるの彼方かなたまでギツシリと並んでいるのだ。

「オーイ、爺さんいねえか。今帰ったよう」

ルンペンが大声にどなると、たちまち地上の各所から「やかましい」「静かにしろ」などという叱りしか声わが湧くように起こった。

まったく人気もないように見えた鉄管の中に、おびただしい住民が、一日の休息を取っているのだ。なるほど安眠妨害に違いない。だが、無神経なルンペンは、又しても大きな声を立てる。

「オーイ、爺さん、いねえかよう」

すると、どこか地の底の方から、かすかに、かすかに、

「オーイ」

という返事が聞こえてきた。

「どうもだいぶ奥の方らしいぜ。お前頭をぶっつけねえように用心しなよ。おれの後からついてお出でよ」

案内のルンペンはそういつて、一つの鉄管の中へもぐり込んで行く。明智も仕方なく、四つん這ばいになって、そのあとからゴソゴソとついて行つた。冷たい鉄の匂においがする。

長い鉄管を一つ出抜けると、すぐに又別の鉄管の口があいていゝる。それをいくつもいくつも這い進むうちに、実に困つたことが起こつてしまつた。明智はいつの間にか案内者を見失つたのだ。何も見えないまっ暗ななかだから、見失つたのではなくて、けはいを感じなくなつてしまつたのだ。

「おい、どこにいるんだ」

小さな声で呼んでみても、自分の声が鉄管にこだまするばかりで、返事がない。難儀なことには、ルンペンの名前を聞いておく

のを忘れた。呼ぼうにも呼びようがないのだ。さすがの名探偵も、鉄管長屋というものが、これほど奇妙な場所だとは知らなかった。耳をすますと、どつか遠くの方からいびきの聲が聞こえてくる。無人の境きょうではない。人間がいることはいるのだ。しかしもう方角がわからなくなってしまった。鉄管は必ずしも並行ならに列んでいていけないので、幾つも幾つもくぐり抜けているあいだには、迷路の中に迷い込んだのも同然になる。

そのうち、鉄管の口と口とのあいだに、少し広い隙間すきまのある場所へ出たので、明智はその地面に立って、ニュツと鉄管の海へ頭を出してみた。すると、驚いたことには、四方八方鉄管の海へある。暗さは暗し、どの方角へ進んだら一ばん早くそとの地面へ

出られるかも、ほとんど見当がつかない有様だ。

ともかくも、でたらめに見当をつけて、又ゴソゴソと這^はい出したが、しばらく行くと、なんとなく周囲がざわめき出したような感じがした。方々でボソボソと話し合う声が聞こえる。何事が起こったのか、聞き耳を立てると、ややはっきりした声が聞こえてきた。

「オイ、こん中に人間豹^{ひょう}が逃げ込んでいるんだってよ」

「人間豹てなんだい」

「おめえ知らねえのか。この頃、世間で騒いでいる大悪党だよ。江川蘭子を殺した恐ろしいけだものだよ」

そんなことがかすれかすれに聞こえてきた。

まだ明智はその恐ろしい意味をはつきりと悟らなかつた。

「人間豹がいるなんてばかなことがあるもんか。あいつはちゃんと捕縛ほぼくされているのじゃないか」

うかつ迂闊にもそんなことを考えていた。

そのうちに、鉄管人種の騒ぎはだんだん大きくなって行くように見えた。あつちでもこつちでもどなり声が響きはじめた。

「オーイ、みんな起きろよう。こん中へ人間豹が逃げ込んだつてよう」

「人殺しがいるんだつてよう」

それらの声々が、鉄管にこだまして、物ものすご凄くとどろきわたつ

た。

明智はやつと、彼の恐ろしい立場を了解した。

「人間豹はほかにいるんじゃない。このおれが人間豹だった。もしこの中に恩田の人相風体を知っているやつがいたら、たちまちおれが人間豹にされてしまうに違いない」

実になんとも形容のできない困惑であつた。急に顔のメイク・アップを落とそうとしたつて、油か、せめて水がなければどうなるものでもない。

「こいつは大変なことになつてしまつたわい」

もうこの上は、捕物とりものなど断念して逃げ出すほかに思案はない。

彼は、人声から遠ざかるように、遠ざかるようにと注意しながら、鉄管から鉄管へと、無茶苦茶に這い出した。

すると、たちまち恐ろしい障害物にぶつつかってしまった。

「アツ、痛え、誰だ、誰だ」

明智と鉢合わせした男が、相手の胡散うさんくさい態度に気づいて、

大声にわめき出した。

「オーイ、みんな、ここにいたぞお。人間豹ひょうの野郎がここにいたぞお」

明智は物も言わず大急ぎで反対の方へ逃げ出した。だがそれが一そう事態を悪化させる結果となった。逃げるからにはテツキリ人間豹に違いないという確信を与えてしまった。

「逃げた、逃げた。吉公、お前の方へ逃げたぞ。とっつかまえろっ」

かようにして、鉄管迷路のめくら滅めつぼう法な鬼ごっこがはじまつた。逃げた、逃げた、汗びっしりになって逃げまどつた。

明智はこんな変てこな立場は、生れてはじめてであつた。追われるものの心持がつくづくわかつたような気がした。

逃げて逃げて、ヒョイと気がつくと、ああ助かつた。とうとう鉄管の迷路を抜け出すことができたのだ。もう眼の前にはなんの障害物もない。一面の黒い広っぱだ。

ホツとして、ノコノコそこを這はい出した途端、彼の耳元で、「ワーツ」

という喊かんせい声が上がつた。ハツとして首をすくめながら、そとの様子をうかがうと、助かつたと思つたのは、束の間の空頼みで

あつたことがわかつた。ルンペンどもは前もつて明智の逃げ道を察し、そのの出口に一ひとかたまりになつて、手に手に得物えものを持つて待ち構えていたのである。

明智はとつさにそのけはいを察して、すばやく首を引つ込めると、元来た方角へ逃げはじめた。だが、行く手にも無数の敵が待ち構えている。一つの鉄管を駈かけ抜けるたびに、次に這い込む鉄管を、用心深く選択しなければならなかつた。

「はてな、こいつはどうも変だぞ。このルンペンどもの執拗しつようさはどうだ。何かあるんだな。ああ、もしかしたら……」

明智は暗い鉄管の中を急ぎながら、ヒョイとそこへ気がついた。どうかして、恩田老人が明智の正体を看破したのかもしれない。

そこで、老人自身は身を隠しながら、ルンペンどもを使囀しそうして、反対に探偵を苦しめようとしているのかもしれない。それには、明智が獣人恩田に変装しているのが、もっけの幸いではないか。「面白い。そういうことなら、何をノメノメこんなやつらに捕まるものか」

明智はかえって勇氣百倍した。「魔術には魔術をもつて」一つ鼻をあかしてやろうと考えた。

彼は逃げるのをやめて、鉄管のまん中にうずくまった。そして、背後から近寄る足音に聞き耳を立てた。

来る、来る。荒い呼吸が聞こえる。コンコンと鉄管の壁に当たる物音。敵は二、三人の様子だ。

「おい、確かにこつちへ逃げたぜ」

「構わねえ、まっすぐに行つてみる」

シウシウというささやき声だ。

先頭の黒い影が、ムクムク動いてくる。そして、三尺ほどの距離になったとき、ハツと明智の影に気づいて身構えした様子だ。

「誰だつ、そこにいるのは？」

少々おびえたような掛け声である。

明智はだまつていた。だまつたまま、右手の握り拳こぶしをかためて、相手の胸板とおぼしきあたりに狙いねらいを定めていた。

「返事をしねえな。さては貴様だな。おい、やつつけろ」

黒い影が風のように飛びかかってきた。

待ち構えていた明智の拳げんこつ骨が、ハツシとばかり相手の胸を撃つた。倒れる相手にのしかかつて行つた。

「おい、押えたぞ。確かに人間豹ひょうだ。手を貸してくれ。おれはみんなを呼び集めるからな」

そうルンペンめかして叫んだのは明智小五郎自身であつた。彼が押えているのは、とっさの当て身に眼まわを廻した先頭のルンペンだ。それとも知らぬあとの二人は、声に応じて、彼らの仲間の上に飛びかかった。二人がかりで押えつけた。

「よし、ここは引き受けた。早くみんなを呼びねえ」

言われるまでもない。明智は鉄管と鉄管との隙間すきまに立ち上がった、大声にわめき立てた。

「オーイ、捕まえたぞお、人間豹を捕まえたぞお……」

そして二つ三つ鉄管を潜り抜けると、別の隙間に立つて、同じように叫び、又その次の隙間へと、仲間を呼び集めるふうを装いながら、だんだんと鉄管の列の端へと遠ざかって行つた。

ルンペンどもは明智の闇やみの中の声に指図されて、あとからあとから、捕物とりもののあつた鉄管へと急ぐのだ。そして、明智がソツとそとの広っぱへ這はい出したときには、もうその辺に敵の影さえなかつた。

明智はともかくも闇の中を市街の方に急ぎながら、ルンペンたちの不思議な襲撃について、その奥に潜ひそんでいる意味について、烈はげしく思考力を働かせた。

ルンペンたちの中に、たとえ恩田を見知っていたものがあつたとしても、あの暗闇の中で、それと気のつくはずはない。すると、人間豹の姿をした明智が鉄管の中へ潜り込んだのを知るものは、彼をここに案内した低能児みたいなルンペンと、それから彼に手紙を書いた恩田の父親の二人のほかにはないわけである。

だが、恩田老人にせよ、低能児ルンペンにせよ、味方の秘密を暴露するわけがない。ルンペンどもを使喚しそして彼を襲撃させる理由がない。

それにしてもおかしいのは、恩田老人がわが子呼び寄せておきながら、まったく姿を現わさなかつたことだ。いや、そればかりか、わが子が襲撃を受けてあの窮地に立っているのに、まるで

救助のけはいさえも見せなかつたことだ。明智にしては、なんとなく恩田老人に一杯喰くわされたような感じがするではないか。そういう奇妙な感じを与えると、何か深い意味があるのではないか。

もし恩田老人が、明智の変装を気づいたとしたら……呼び寄せの手紙に従ってやってきたのが、わが子ではなくて、わが子に変装した探偵だと悟つたとしたら……

そうだ。それに違いない。そう考えれば、すべての謎なぞが解けるのだ。変装と知りながら、それを真実の殺人鬼恩田として、正義心の強いルンペンどもの前に投げ与えるとは、なんとという皮肉な報復手段であろう。明智は敵を翻ほんろう弄ろうしている気で、実は敵のた

めに翻弄されたのではないか。いかにも怪老人の考えつきそのような「魔術」ではなかったか。

いや、待てよ。どうもまだ腑ふに落ちないところがある。いったい、会いもしない老人が、どうして明智の変装を看破することができたのであろう。それでは、あの低能児みたいなルンペンが曲く者せものかしら……そんなはずはない。あれだけのあいだ、自動車に肩を並べていて、それを見破り得ないほど愚かな明智ではない。

暗闇くらやみの広っぱを横ぎりながら、あれかこれかと思ひめぐらすうちに、やがて、ある恐ろしい考えが、火花のように明智の頭ひらに閃ひらめいた。

「アツ、そうだったのか」

明智は思わず声を出して眩つぶやいたほど、激しいショックを受けた。「すると、すると……ああ、おれはとんでもないことをした。だが、なんとという悪魔の智恵だ」

さすがの名探偵も、ある恐ろしい幻影に戦せんりつ慄りつしないではいられなかった。

「もう間に合わぬかもしれない。だが、間に合わぬにもせよ、手を尽すだけは尽してみなければ」

彼はやにわに、闇の中を、石ころ道につまづきながら、飛ぶように駈かけ出した。市街を目ざして鉄砲玉みたいに走り出した。

広いコンクリートの橋を越すと、もうそこに人家があつた。やがて、廃墟はいきよのような深夜の電車軌道。その四つ辻つじにポツンと公

衆電話が建っている。彼はそのドアを引きちぎるようにして、ボックスにはいると、ポケットの小銭を探りながら、いきなり受話器をはずした。

裏の裏

一方明智探偵事務所では、明智が人間豹ひょうに変装して、自動車に文代さんの身代り人形を乗せて出発すると、事件依頼者の神谷青年も一ひと先まず自宅に引き上げて行つたので、あとには明智夫人の文代さんと助手の小林少年と女中の三人きりであつた。

文代さんは小林少年に表と裏の戸締まりを嚴重にするように命

じておいて、自分は二階の寢室へとじこもり、内側から鍵かぎをかけ
て万一の用心をしていた。ベッドの枕元の小卓には、たまをこめ
た拳銃けんじゅうさえ用意してあつた。

異様に緊張した長い長い夜であつた。主人の思い切つた計略は
うまく凶に当たるであらうか。もしや失敗するようなことはない
だらうか。恩田ばかりでなく、その父親までも一と晩のうちに捉とら
えようなんて、あんまり慾よくばつてはいないかしら。明智の手腕を
信じきっている文代さんではあつたが、さすがに案じないでは
いられなかつた。

夜の十時頃、出先の明智から電話があつて、小林少年が電話口
に出ると、「恩田は首尾よく捕えたから安心せよ。これから父親

の方を捜索に出かける。少し遅くなるかもしれない」ということであつた。電話が非常に遠くて、よく聞き取れないほど低い声であつたが、小林少年は別に疑うこともなく、それを二階の文代さんのところへ取り次いだ。

ところが、ちようどその電話のベルが鳴つた時には、読者も知るように、当の明智小五郎は、人間豹ひょうになりすまして、すぐ事務所の前のの暗い道を往つたり来たりしていたのだ。それはいうまでもなくにせ電話であつた。だが、何者がなんのために、そんないたずらをしたのであろう。このいたずらの奥には、どのような恐ろしい意味が隠されていたのであろう。

それはともかく、また一時間ほどたったころ、玄関のベルがけ

たたましく鳴り響いた。この夜ふけにお客様があるわけではない。先生がお帰りに違いないと思うと、小林少年は飛ぶように玄關に駈かけつけてドアをひらいた。

そこに立っていたのは、果たして明智探偵であつた。だが、これはまあなんといい変てこな風体であろう。出かけて行つた時そのままの、醜悪な人獣のメイク・アップ、薄黒く塗くまつて隈くまをつけた骨ばつた顔、まっ赤な唇、牙きばのような入歯を含んだ恐ろしい口。その異様な風体の上に、小脇こわきには一人の洋装の女がグツタリと抱えられている。

小林少年はそれを見ると、ハツとして思わず逃げ腰になつたが、よく考えてみれば、実はなんでもないことであつた。明智が抱え

ているのは、生きた人間ではない。恩田を捕えるためにおとりに使ったマネキン人形にすぎないのだ。

「お帰りなさい」

小林少年は丁ていねい寧に主人を迎えた。

「この人形をね、さいぜんの木箱の中へ入れておいてくれたまえ。あとから人形屋が取りにくるんだからね」

明智は小林に人形を渡すと、靴くつを脱いで上にあがった。

人形の木箱は、暗い廊下の突き当たりあたりに置いてある。小林がエツチラオツチラ、マネキンを運んで、その木箱のところへ行くうしろ姿を、明智はなぜかじつと眺ながめていたが、やがてツカツカとそのあとを追って行って、うしろから少年に抱きつくようなかっこ恰

好^うをしたかと思うと、そのこのドアをひらいて、女中部屋へはいっていった。

探偵は一体なんのために、そんなまねをしたのか。実に奇妙なことであつたが、しばらくすると、彼は一人で女中部屋を出て、二人の寝室へあがって行つた。

「あら、お帰りなさい」

階段の上で、パツタリと文代さんに出会つた。彼女は主人の帰宅らしい様子なので、とじこもっていた寝室をあけて、お迎えのために今下へ降りようとしていたところであつた。

明智は「ああ」と答えたまま、先に立って寝室にはいつて行つた。

「小林も誰もいませんんでして？」

文代さんはけげん顔に尋ねる。

「いや、小林には少し用事を言いつけたんだよ。いいからここへ来たまえ」

変装用の入歯のために、明智の声はまるで別人のように聞こえた。

「いやですわ、そんな恐ろしい姿で。早く顔をお洗いなさるといわい」

「いや、それどころじゃない。ともかく部屋へはいりたまえ。君に話があるんだ」

そして、二人は寢室へはいった。寢室と言っても、そこは文代

さんの居間と兼用になつていたので、部屋をカーテンで仕切つて、一方にベッド、一方にはデスク、テーブル、化粧鏡、数脚の椅子いすなどが整然と列ならんでいた。それをデスクの上の卓上燈が、薄ぼんやりと照らし出している。

「いや、そのままがいい。暗い方がいいんだ」

文代さんが、壁のスイッチを押して天井の電燈をつけようとすると、明智はなぜかそれを止めて、大きな肘ひじ掛椅子かけに腰をおろした。文代さんはそれに相對して、小型の椅子につく。

「お疲れなすつたでしょう。でも、人間豹ひょうの身代りがうまくいき
ましたのね」

文代さんが、大胆不敵な計略を讚美するように言った。

「ウン、僕が運転台を飛び降りて、やつの前に現われた時は、実に痛快だった。そっくりそのままの人間豹が二匹、顔と顔とを見合わせたんだからね」

明智は、シェードの蔭かげになった醜怪な人間豹の顔で、ニタニタと笑った。

「驚きましたでしょう」

「ウン、みじめな顔をしたぜ。それに、僕のピストルが狙ねらいを定めているんで、やつこさん手も足も出ないのだ。そのまま合図をして、待ち伏せていた刑事たちに引き渡したんだがね」

「じゃ、今頃は警視庁の地下室でうめいていますわ」

「君はそう思うかい」

明智が変な言い方をした。

「でも、そうとしか——」

「ウフフフフ……ところが、そうじゃないんだよ。君に話したいというのは、そのことなのよ。実はね、恩田は逃げたのだよ」

「まあ……」

文代さんの美しい顔が、ギョツとしたように話し手を見つめた。

「恩田はね、高手小手に縛しばられ、五人の刑事に守られて、あの自

動車で警視庁へ、連れて行かれるところだったのさ。しかし、警

官の捕縄ほじょうは、少なくとも人間豹には、少し弱すぎたんだね。恩

田が両腕に力をこめて、ウンとやると、プツツリ切れちまった。

それは自動車が貯水池の横の淋さびしい場所にさしかかった時だった

がね。刑事たち驚くまいことか、アツと言って飛びかかってきたが、自由になった人間豹に、五人だろうが六人だろうが、敵かないっこはないからね。それにやつこさんたち、悲しいことに飛び道具を持っていなかった。そこで、刑事たちは散々な目にあつて、一人残らず自動車からほうり出されてしまったんだよ」

「じゃ、恩田は、その自動車を操縦して逃げましたのね」

「そうだよ。実にいい心持で逃げ出したのだよ」

「でも、そのとき、あなたは、どこにいらつしやいましたの？」

「僕？　つまり明智小五郎だね。その僕は森の中で恩田を刑事たちに引き渡すと、今度は恩田の父親を探しに出掛けたというわけ

さ」

文代さんは、妙な顔をして、マジマジと話し手を見つめた。入歯のせいとはいえ、今夜の明智は、なんだか他人のように思えて仕方がなかった。それに、この変てこな話しぶりはどうしたのであろう。

「つまり明智小五郎だね」なんて、いつもはこんなきざ気障な言い方をする人ではないのだが。

「それから、恩田の方はどうしたかというとね」明智はなかなかじょうぜつ饒舌であった。「その自動車でもって、芝浦へ走ったのだよ。

芝浦の水道鉄管置場に、恩田のお父さんが待ち受けていようという寸法なのさ。そこで、親子が相談の上、一人のルンペンに手紙を持たせて、明智の……つまり僕のだね、僕のいる所へよこした

のだ……」

「まあ、それじゃあなたは……」

「僕はそのとき、このうちの前をぶらついていたんだよ。そうしていれば、きつと恩田の父親が探しにくると思ってるね。僕は恩田に変装して、やつの身代りを勤めていたんだからね。ところが、おかしいじゃないか。恩田の方ではこの計略をちゃんと知っていたんだ。恩田を捕えた時、僕がつい口をすべらせたもんだからね」

「……………」

文代さんはもう合あいづち槌をうつことができなかつた。何かしらえたいの知れぬ恐怖が、背筋に迫ってくるようで、身動きもできなかつた。

「で、僕はルンペンの案内で、芝浦埋立地へ出かけて行つた。明智のやつ、今頃はおそらく、あの鉄管の中でルンペンどもの虜とりこになつてゐることだろうよ。なぜつて、あすこには、鉄管を塹ねぐらにして二、三十人も、ルンペンがいるんだからね。そいつが人間豹ひょうを見つけたら、ただではおくまいからね」

話し手は、そこでまた醜しゆうかい怪かいな顔をニユツと突き出して、薄気味わるくウフフフと笑つた。

「誰です。あなたは誰です？」

文代さんは、まっさおになつて、この奇怪な人物を凝視ぎようしした。誰ですと聞くまでもない。これが明智自身でないとすれば、もう一人のやつにきまつてゐるのだ。人間豹恩田にきまつてゐるのだ。

「フフフフ、誰でもない、君の亭主だよ。君の可愛い亭主だよ」
彼はふてぶてしく言いながら、ノツソリ立ち上がって、文代さんに近づいてきた。ああどうして今までそれに気づかなかつたのであろう。明智の変装なれば、こんなに眼が光るはずはない。怪物の両眼はまるで青い焰ほのおのように燃えているではないか。彼の情慾ようよくにつれて、その火焰かえんが刻一刻燃え熾さかつて行くではないか。文代さんは、痺しびれたようになったからだから、最後の力をふりしぼって、サツと立ち上がると、悪魔の手の下を潜くぐり抜け、廊下へ飛び出して行った。

「小林さあん、誰か、早く来て……」

だが、不思議なことに、うちの中はシーンと静まり返って、誰

も答えるものはなかった。

「小林？ ああ、あの小僧かね。女中部屋にいるんだよ。僕が連れて行って上げよう」

怪物は、すばやく文代さんのあとを追って、恐ろしい力で彼女を抱きしめたまま、無理やり階段を降りて行った。

「さあ、見るがいい。小林も女中も、あの態だ。よくお寝やすみになつているんだよ」

彼は女中部屋のドアをあけて、文代さんに中を覗のぞかせた。見れば、彼のいう通り、二人のものは、床の上に長々と、気を失つて倒れている。むろん悪魔の麻酔剤の効果である。

文代さんは叫ぼうとした。叫んで近隣の救いを求めようとした。

だが、いつの間にか、彼女は、唾おしになっていたのだ。怪物の手の平が、ギョツと鼻口を覆おおつて、呼吸さえ思うようにはできなかつた。

「コレコレ、そんなにジタバタするんじゃない。いい子だからね。今に樂にしてあげるからね」

恩田は文代さんをしめつけたまま、まるで人形でもあつかうように自由自在にした。

「君はお人形さんになるんだよ。ほら、ここにちようど人形箱が置いてある。この中へ、今度は君がお人形さんの身代りになってはいるのだよ。すると、僕が二階の窓から合図をする。その合図に従って運送屋がこの箱を受取りにくるんだよ。運送屋というの

は、つまり、僕の手下なんだがね。それからトラックでもって、運ぶ先は、さあ、どこだろうね、当ててみるがいい」

恩田はもう有頂天うちようてんになって、しゃべりちらした。目的物を獲か得くした嬉うれしさと、獲得の手段のすばらしさに夢中になっていた。

仇敵きゆうてき 明智探偵が智恵をしぼって用意したカラクリを、すつか

りそのまま逆に利用してやるのだ。明智の変装も、マネキン人形も、その木箱さえも。なんとまあ素敵な報復手段であろう。

文代さんは気絶するほど弱い女ではなかった。それだけに、この侮辱が一倍はげしく心を打った。なんともいえぬ嫌悪けんおの情にガクガクと身内の震ふるえるのをどうすることもできなかつた。

けだものの体臭、けだものの呼吸、けだものの筋力。彼女は真

実の豹ひょうを感じた。彼女の顔の上に猛獣の顔があつた。らんらんと青光りする眼が、ヌメヌメした赤い唇が、そのあいだから覗のぞいているするどい牙きばが、びっくりするほど大寫しになつて、一、二寸の距離に迫つていた。

彼女はその赤い唇が、トンネルみたいにパツクリとひらくのを見た。すると、暗いトンネルの中から巨大な舌がペロリと現われた。ああ、その舌！　彼女はまざまざと見た。そのドス黒い舌の表面に、まるで針の山のようなするどい突起物が、一面に生え茂つて、それが舌の運動につれて、風にざわめく葦あしに似て、サーツとなびくのを。

黒い糸

薄暗い廊下の隅に棺桶かんおけみたいな大きな木箱が置いてある。明智が恩田を欺あざむくために買い入れた例の等身大の人形の箱だ。その中に、今は人形ではなくて、麻酔剤に正気を失った美しい文代さんが、横たわっている。

人間豹は、木箱の蓋ふたをその上からソロソロとかぶせながら、舌なめずりをして、独りごとひとごとのようつぶやに呟くのだ。

「ウフフ……そうしていると、君はまるで人形そっくりだね。美しい人形め。ちつとばかり窮屈だが、しばらく我慢するんだぜ。今にね、おれのうちへ行ったら、お姫さまみたいに大事にしてあ

げるからね。ウフフフフ」

そして、パタンと蓋ふたをすると、箱のそばに散らかっていた繩なわを集めて、蓋の上からグルグルと巻きつけた。あとは表の暗闇くらやみに待っている二人の手下を呼び入れて、人形箱を担かつぎ出すばかりだ。恩田はその手下のものに合図をするため、玄関の方へ歩き出して、二、三步も行かぬうちにハツと立ち止まった。空き家のような家じゆうに響きわたるけたたましい電話のベルだ。

彼は思わず身構えをして、しばらく耳をすましていたが、電話とわかると、チエツと舌打ちして、そのまま歩き出そうとした。だが、やがて人間豹ひようの醜い顔に狡狴こうかつな笑いが浮かんだ。燐光りんこうを放つ両眼が糸のように細くなつて、赤い唇がニツとめくれ上が

ると、牙きばのように見える白い八重歯やえばが、その隅からチラリとぞいた。

彼はその異様な表情のまま廻まわれ右をして、ツカツカと書齋へはいつて行つた。そして、その卓上電話を握ると、いきなり受話器をはずして、けもののようにピクピク動く薄い耳たぶにあてがつた。

(モシモシ、モシモシ、僕だよ、僕だよ。君は誰だい。小林君かい)

声といい、言葉使いといい、電話のぬしは明智小五郎に違いなかった。それを知ると、恩田の両眼は何か快い音楽でも聞くように、さらにさらに細められて行つた。

（モシモシ。小林君じゃないのかい。急ぎの用事なんだ。何をグズグズしているんだい。それともそちらは明智事務所じゃないのですか）

明智探偵のイライラしている様子が眼に見えるようだ。

「モシモシ、そうですよ。こちらは明智事務所ですよ。しかし、今小林君はちよつとさしつかえがあるんです」

恩田は作り声で答えた。愉快でたまらないという表情だ。

（小林じゃないとすると、君はいつたいどなたです——）

「僕ですか。ご存知のものですよ……よくご存知のものですよ」（どなたですか。誰かうちのものはいないでしょうか）

さすがの明智も電話の相手が人間豹とは気づかぬ様子である。

「ところが、どなたもいないのですよ」

（え、え、なんですって？ この夜ふけに誰もいないって？）

「そうですよ。小林君は台所でね、女中さんと一緒にグツスリ寝込んでいて、いくら起こしても起きませんしね、奥さんは人形箱の中にはいってしまつて、出てこないのですよ」

度胆どぎもを抜かれたように、明智の聲がしばらく途絶えた。

「モシモシ、どうかなすつたのですか。あなたは明智先生でしょうね」

恩田はドス黒い舌を出して、ペロペロと唇を舐なめまわした。獣人得意の絶頂である。

（ハハハハ……君は恩田君だね。誰かと思つたよ。恩田君なれ

ばちようど幸いだ。君の方は仕事はうまくいつているのかね)

突如として明智の声が快活になった。

「偉い！ さすがは明智先生だよ。びくともしないねえ。ところで、さつき君に捕えられた僕が、どうしてここにいるかわかるかね」

(護送の刑事諸君がドジを踏んだのさ。日本の警察は猛獣の捕物には慣れていないからね。お蔭で僕はとんだ目にあうところだったぜ。君はなかなか頭もいいとみえるね。それとも親父さんの方かい)

「ウフフフ……とつさのあいだに、すっかりおれたちの陰謀を悟ってしまったね。偉いよ。だが、よく生きていられたねえ。芝

浦でひどい目にあわなかったかい」

（ひどい目にあつたのは、どつかのルンペンだったよ。僕はそれを見物しただけさ。ハハハハハ）

「すると、君の方もウマく逃亡したんだねえ。お互いに無事でよかつたねえ、ウフ、ウフ、ウフ、ウフ」

そして、この稀代きだいの殺人鬼と名探偵とは、電話口に声を揃そろえて、さも面白そうに笑い合うのであつた。

「電話をかけてくるところを見ると、君は遠方だね。芝浦付近だろう」

人間豹ひょうは赤いヌメヌメした唇を意地わるくヒン曲げて、一種異様のアクセントでからかつた。

(そうだよ。芝浦の公衆電話だよ)

「ウフフフフ……おれは実に愉快だぜ、探偵さん……君は今イライラして、額から脂汗を流しているねえ。見えるようだぜ……そこで円タクを拾って、いくら急がせてみたって、ここまで二十分はかかるね。それとも警察へ電話をかけるかね。だが、おまわりさんたちが慌^{あわ}てふためいて、ボロ自動車を飛ばすとしても、あすこからは十分はかかるぜ。ところが、おれの方はというと、三十秒もあれば君の留守^{るす}宅をおさらばできるんだ。仕事はすっかりすませてしまったからね」

(……………)

「さつきもいった通り、君の雇い人たち、チンピラ探偵の小林と

女中とは、台所の板の間で、仲よく寝ているし、君の奥さんは、ほら、例の人形の箱ね、あの箱の中でスヤスヤおやすみなんだよ。表にはおれのトラックが待ち構えている。そこへ箱詰め of 文代さんを積んで、おさらばしようってわけなのさ。君にはちつとばかりお気の毒だが、美しい奥さんとも今夜限り永のお別れだねえ」

(君は僕の探偵としての力を軽蔑しているようだね)

明智の声はひどく落ちつき払って、少しも困惑の調子を帯びていなかった。

「ウン、軽蔑しているよ。探偵のくせに大事の奥さんを盗まれるなんて、軽蔑してもいいと思うよ」

(ところが、そんなことはできっこないのだ。君は夢を見ている

んだ。君は僕のほんとうの力を知らないのだよ」

電話の声に何かしら確信に満ちた威厳のようなものが感じられた。何かしら恩田をギョツとさせるような調子があつた。

「ウフフフフ、君はまだ、負け惜しみを言っているんだね。そんな遠吠えとわほなんぞ、なんの役にも立ちやしないよ」

（ねえ、君。君は僕がなぜいつまでも、こんな無駄口むだぐちをたたいて

いるかわかるかね……ばかに落ちついているじゃないか。いま女房を盗まれようとしている男とは見えんじゃないか……君、怖こわく

はないのかい。僕がいま何を考えているか、君にはわかるまいね）

「畜生ちくしょうつ、さては貴様、ここへ電話をかける前に何か細工をしたんだな。警察か。警察へ電話がかけてあるのか」

(ハハハハ……どうだい、少し怖くなつたらう。警察かもしれない。もつと別のこともかもしれない。いずれにしても、君は僕の最後の罨わなにはまつたのだよ。ハハハハハ、君、たいへん気に掛けているようだね。息遣いがここまで聞こえるよ)

「だまれ、だまれ。貴様なんかのおどかしに乗るおれじゃないぞ」
(まあ聞きたまえ。怒つたつてしようがないよ。僕はね、こうして君と愉快に話している間に、君たち親子の巢窟そうくつをつきとめたのも同然なんだよ。黒い糸がね、眼にも見えない黒い糸がね、蜘蛛もの巣のように君のからだにからみついて離れないのだよ。どこまでも、君の行く所まで、その糸がつかつて行くのだよ)

恩田はそれを聞くと、変な顔をして思わず身のまわりをキョロ

キヨロと見まわした。ほんとうに、そんな蜘蛛の糸が、どこか天井の隅からスーツと降りてきて、彼のからだにクルクルまきついているような、異様に無気味な感じに襲われはじめた。

「もうこの上貴様のよまいごと世迷言よまいごとを聞いている暇はない。じゃあアバヨ。奥さんは確かに頂ちようだい戴たいしたぜ」

（まあ待ちたまえ。ハハハハハ、そう慌あわてなくつてもいいじゃないか。ハハハハハ、まだ話があるんだよ。どっさり話があるんだよ。ハハハハハ）

ガチャンと受話器をかけてしまっても、探偵の無気味な笑い声が耳について離れなかった。彼は眼に見えぬ妖魔ようまを払いのけるように、ブルンと一つ身震みふるいして立ち上がった。

「へへん、怪談なんぞを、怖がると思つてゐるのかい」

するどい眼がまたはげしい^{りんこう}燐光を放ちはじめた。彼は野獣の歩き方で廊下へ出た。すると、たちまち、何かしら小さな影のようなものが、スーツと廊下の向こうに消えるのが感じられた。電燈は一つ折れ曲がつた玄関の方についているだけなので、そのあたりはひどく薄暗いのだが、その^{うすやみ}薄闇の中を何かえたいの知れない形のもものが、通り魔のように過ぎ去つたのである。

人間のようでもあつた。またそうでないようにも思われた。影^{かげ}法師^{げぼうし}かもしれなかつた。玄関の電燈の下を誰かが通つて、その影が映つたのではないかと、大急ぎで曲がり角からのぞいてみたが、人のけはいはない。何か大きなコウモリのようなものが、廊

下の床をスレスレに飛び去った感じであつた。

恩田は慌てないではいられなかつた。怪談を怖がつたわけではない。身辺の危険を感じたのだ。その影法師が凶事の前兆のような気がしたのだ。もうこのうちのまわりは警官たちによつて取り囲まれているのかもしれない。そいつらの影が廊下まで感じられたのかもしれない。

彼は獲物えものに忍びよる豹ひょうの静かきで、玄関の土間に飛びおけると、入口のドアを用心深く細目にひらいて、青く光る眼で、そとの闇やみを入念に見まわした。だが、ホツとしたことには、植込みにも、門前の道路にも、なんの怪しいけはいも見えぬ。そこで、彼は合図の口笛を、二た声低く吹き鳴らした。

間もなく門の方から、二つの黒い人影が、ノソノソとはいつてきた。運送屋の人夫といった風体である。

「表は大丈夫だろうね。誰もきやしなかつただらうね」

恩田がささやき声で尋ねる。

「猫の子一匹通りやしねえ。ひどく陰気な町ですねえ。いくら夜中だといって、この淋さびしさはどうだ」

「おい、念のために、あのことを言っておこうじゃねえか」

一人の男が、何か意味ありげにささやく。

「こいつ、またはじめやがった。お前の気のせいだつていうのに、臆おくびよう病びょうな野郎じゃねえか」

「おいおい、何をボソボソ言ってるんだ。何かあったのか」

恩田がきめつけると、臆病者といわれた男が、あたりの闇をキョロキョロ見まわしながら、変なことを報告した。

「なんだか小さな影みたいなのが、トラックのまわりをウロウロしていやがった。まったく小っぽけなやつでね。小人島の影法師みてえな、なんだかこうゾーツとするような、いやな物でしたよ」

「親方、気にしちやいけねえ。この野郎、今夜はどうかしているんだ。それよりも、早く荷物を運び出そうじゃありませんか」

この人夫てい体の二人は、前科者の運転手なのだが、大方何か犯罪がかったこととは知りながら、莫ばくだい大な謝礼金に眼がくらんで、一夜かぎりの恩田の手下に雇われているのであった。

「ウン、早くしてくれ。荷物はこの廊下にあるんだ。少し重い代物だよ」

恩田は先に立って人形箱に近づいた。

「これだ、あまり手荒くしないように、貴重品だからね」

「おやおや、まるで棺かん桶おけみてえですね」

「人形箱だよ、大切な人形がはいつているんだ。さあ、早く運んでくれ」

二人の男が、木箱を持ち上げている隙すきに、恩田はソツと台所のドアをひらいて覗のぞいてみた。少しも異状はない。小林少年も女中も、さいぜんと同じ姿でグツタリと眠っている。小林少年が抱いてきた、文代さんそっくりのマネキン人形は、胴体を二つに折り

曲げて、調理台の下へ首を突っ込んでころがっている。

それを見届けておいて、彼は人形箱を運んで行く二人の男を監視しながら、門外へと出て行つた。その闇やみにヘッドライトを消した一台のトラックがとまっている。荷物をのせてしまうと、二人の男は運転台についた。恩田は人形箱と一緒に無蓋むがいの箱の中に入らずにまわった。エンジンが深夜の屋敷町にけたたましく響き渡つたかと思うと、この異様な誘拐ゆうかい自動車は、たちまち明智探偵事務所の門前を遠ざかつて行つた。

結局、何事もなかったのだ。警官たちは間に合わなかったのだ。ただ、ちよつと気になるのは、廊下をさまよひ、トラックのまわりをうろついたという、例の怪しい影法師かげぼうしであつたが、それも

こうして車が走り出してしまえばなんの事もない。もしやその辺に影法師がぶら下がっているのではないかと、念入りにトラックのまわりをしらべてみたが、むろん何物も発見されなかった。恩田はやっと安堵あんどを感じた。とうとうおれが勝ったぞ。美しい文代さんは完全におれのものになったぞ。彼は揺れるトラックの上を、いとしい人形箱によりかかりながら、豹ひょうの眼を細め、豹の口をだらしなくひらいて、ゾツとするような獣類の笑いを笑うのであった。

するとさつきさつきの明智の電話は、単なるおどかしにすぎなかったのであるか。名探偵は一個の怪談師になり下がってしまったのであろうか。いやいや、そうではない。そうでない証しやうこ拠こがある

のだ。さいぜん明智は、「黒い糸」のことを言った。「黒い糸」が恩田にからみついて離れぬと言った。その黒い糸のようなものが、見よ、今恩田のトラックの尾端から、闇夜の道路に細々^{ほそほそ}と筋を引いていてではないか。赤いテイルライトの下あたりから、蜘蛛^{くも}の糸のように絶え間なく地面に繰り出されているものがあるではないか。

だが、車上の恩田はむろんそれを知らなかった。またたとえ車を降りてその部分に眼をやったとしても、闇夜の中の、あるともなき^ひ一と筋の蜘蛛の糸を、いかな豹の眼とて、到底見わけることはできなかつたに違いない。それほど細く、それほど黒く、何かしら曖昧^{あいまい}な、無気味な、魔性^{ましよう}の糸であつた。

悪魔のトラックは、なるべく淋さびしい住宅街をえらんで、深夜の東京を北へ北へと去った。われわれはしばらく姿なき眼となつて、闇の空中を飛行しながら、適度の間隔を取つて、この怪トラックの跡をつけてみることにしよう。五分、十分、二十分、車は何事もなく走りつづけた。恩田は人形箱にもたれかかったまま、一つの黒いかたまりのように身動きもしない。深夜といつても、時たますれ違う人がある。だが、彼らはこの一見なんの変てつもないトラックを怪しむようなことはなかつた。赤い電燈の交番の前も幾つとなくすぎたけれど、おまわりさんたちは、眼の前を恐ろしい殺人自動車くだんが通るのも知らないで、皆そつぽを向いていた。やがて、車が九段くだんに近い淋ほりばたしい濠端ほりばたを走っていた時、われわれの

姿なき眼は、前方の車上に、実に恐ろしい椿事ちんじを目撃したのである。

恩田の黒い姿が車上に中腰になって、しきりと手を動かすはじめた。いったい何をしているのだろう。少し眼を近づけてみよう。車とのあいだが三間ほどになるように……すると、ああ、わかった。彼は待ちきれなくなつたのだ。箱の中の恋人に会いたくなつたのだ。彼は人形箱の縄なわを解いてしまった。蓋ふたをあけて中を覗きのぞこんでいる。長いあいだ覗きこんでいる。

おや、何をしようというのだ。人間豹は箱の中から気を失つてゐる文代さんを抱き起こしたばかりではない。文代さんを小脇こわきに抱えてスツクとばかり立ち上がった。矢のように走る車の上にた

ちはだかった人間豹の精悍せいかんな黒い影と、その腰のあたりにグツタリとぶら下がっている文代さんの白い姿が、明暗二色に浮かび上がった。

するとたちまち、実に恐ろしいことが起こった。猛獣がその野性を暴露したのか。それとも彼は気が違ってしまったのであろうか、文代さんの首が飴あめでももあるようにスーッと伸びたかと感じられた。

かつての夜、猛犬の上顎うわあごと下顎に手をかけて、二つに引き裂いたばかりが、今、彼女の首を引きちぎったのだ。

奇怪な幻か悪夢のような光景であった。ハッと見る間に、白い流星やみが闇やみの空に弧こを描いて飛んだ。恩田は引きちぎった首を、悪

魔の国の鞠まり投げのように、いきなり車の外へほうり出したのだ。
野獣は口から泡あわを吹いて怒り狂っていた。物もの凄すごい唸うなり声さえも聞こえてきた。彼は餌食えじきをズタズタにしないではおかぬのだ。首の次には手が、足が、想像もつかない残ざんぎやく虐うさで、次々と引きちぎられて行つた。そしてそれらの美しい八ツ裂き死体は、まるで大根かなんぞのように、無神経に、傍若無人に、いやむしろこれ見よがしに、闇の濠ほり端ばたへ投げ捨てられたのであつた。

名犬シヤールロツク

警視庁捜査一課長恒川警部は、ちようど寝入りばなを叩たたき起こ

された。役所から帰って、坊やと遊んで、少しばかり読書をして、つい今しがた寝しんについたばかりであつた。叩き起こしたのは明智小五郎である。彼は芝浦の公衆電話を飛び出すと、タクシーを拾つて自宅に急ぐ途中、その道筋に当たる恒川氏の宅をおそつて、人間豹ひょう逮捕の助力を乞うたのである。

恒川氏はむろん床とこを蹴けつてはね起きた。そして、この商売敵がたきでもあり、親しい友だちでもある民間探偵から、事の仔細しさいを聞き取ると——彼は今宵こよいの明智の計画についてよく知っていたから、彼の醜怪な「人間豹」の変装には驚かなかつた——すぐさま本庁に電話をかけ、腕利きの刑事を選び、明智探偵事務所へ急行するよ

うに命じておいて、手早く制服を身につけると、そのまま明智の

タクシーに同乗した。

「あ、ちよつと待つてくれたまえ。君の家のシャーロックも一緒に乗せて行こう。是非あいつが必要なんだ」

明智が、出発しようとする車をとめて叫んだ。

「よし。お前、シャーロックを連れておいで」

恒川氏は一とことも反問しないで、明智の言うがままにした。

この名探偵が必要だといえは、必要にきまつているのだ。間もなく恒川夫人手ずから一頭のシェパードを引き出して、車にのせた。名犬シャーロックは少しも騒がず、何かの予感に緊張の面持おももちで、主人恒川警部の両りょうひざ膝のあいだにうずくまつた。シャーロックは生れつき嗅きゆうかく覚かくがするどい上に、恒川氏の仕込みを受けて、

その名にふさわしい探偵犬に仕上げられていた。これまでも、警部を助けて手柄を立てたこと一再ではなかった。

「君は何か見込みをつけているのかい。シャーロックなど連れ出して」

車が走り出すと、恒川氏がやっとそれを尋ねた。

「ウン、この犬が役に立つか立たないか、それが僕の運命のわかれ道だ。もしシャーロックが不用だったら……ああ、僕はそれが恐ろしいのだよ」

明智は名状できない焦慮しやうりよの色を浮かべて、不安に耐えぬもののようである。

「今も話す通り、電話ではあいつに大きな口をきいておいたけれ

ど、僕は確実な信念があつたわけではない。たった一つの空頼みなんだよ。ああ、あれがうまくやっていてさえくれたらなあ」

「あれって誰のことだい。伏兵ふくへいを忍ばせておいたとでもいうのかね」

恒川氏は相手の意味を推すいしかねて聞き返した。

「ああ、三分間……いや二分間でもいい。せめて二分間あいつの息がつづいてくれたらなあ。ねえ、恒川君、人間の息が二分間以上つづくとと思うかね」

「変なことを言い出したね。君の癖だぜ。二分間ぐらいつづく人間はいるさ。海女あまなんかその倍もつづくかもしれない。だが、普通の都会人にはとてもだめだね。三十秒だつて怪しいもんだ」

「そこが僕のつけ目なんだよ。その都会人の中に二分間も息のつづくやつがいたらどうだろう。或る場合には大へん役に立つかもしれんじやないか」

「君はそういう男を知っているのかい」

「ウン、知っているんだ。知っているんだ」

それきり名探偵はだまりこんでしまった。恒川氏も相手の癖を知っているので、深く尋ねようとしなかった。

間もなく、二人は明智探偵事務所の門前に車を捨てて、空き家のように人気のない屋内へはいつて行った。

「シャーロックのやつ、ひどく逸はやっているぜ。やつぱり犯罪におの匂いがわかるんだね」

恒川氏はそんなことを言いながら、愛犬を玄関の柱につないで靴くつをぬいだ。

明智は恒川氏を階下に待たせておいて、二階の部屋部屋を見まわって、空しく降りてきたが、そのあいだに警部は例の第六感というやつを働かせて、すばやくも廊下の奥の台所へ忍びよつていた。ドアを細目にひらいて見ると、いる、いる、小林少年、女中さん、それにマネキン人形までが、変なかつこう恰好でころがっている。「おい、君、ここだ、ここだ」

恒川氏の声に、明智も台所へはいつてきた。

「おや、君、君、あすこにいるのは、奥さんじゃないか。奥さんは誘ゆうかい拐されやしなかつたぜ」

彼は調理台の下へ首を突っ込んでいるマネキン人形を指さして、それを文代さんと思いいこんでいる。

だが、明智はそれどころではなかった。倒れた小林少年の上にかがみこんで、一所懸命にその顔を見つめている。何事かを念じるように、瞬きもせず見つめている。

すると、明智の念力が通じたのか、少年の眼が細くひらかれた。長い睫毛まつげに覆おおわれた細眼と、明智の眼とが、お互いに探り合うように見かわされた。普通なれば、そんなに手間取るわけではない、ひと眼でわかるはずであった。だが、読者も知る通り、このとき明智はまだ「人間豹ひょう」のメイク・アップを洗いおとしていなかったのだ。

「アツ、先生！」

とうとうそれがわかった。小林少年は叫びざまピヨコンと立ち上がった。おやおや、今まで気絶していた人間に、突然こんな活か澆つぽうな動作ができるものだろうか。

それを見ると、名探偵の不安にとざされていた頬ほおにも、サツと喜びの色がのぼった。

「おお、小林君、よくやった。よくやった」

明智は立ち上がった少年に飛びついていって、感謝にたえぬもののように、その肩を抱き、その手を握りしめた。

「まるで親子再会の場だね。いったいこれはどうしたわけなんだ」
恒川氏があつけにとられて尋ねる。

「いや、僕の予想が的中したんだよ。僕は決して嘘をつかなかつた。喜んでくれたまえ、もう文代は無事だ。恩田を捕える見込みも立った、シャーロックはむだにならなかつたよ」

明智は勝利に酔っているのだ。

「そいつは目出度めでたい。だが、奥さんが無事なことは、さつきからわかつているじゃないか。まさか殺されているんじゃないだろう」

恒川氏がじれったそうに、例のマネキン人形を指さす。

「ところが、僕はあれを人形だと思ひ込んでいたのだよ。君も話を聞いているだろうが、僕は今夜、文代の身代り人形を使った。着物からなにからすつかり同じ人形なんだ。そいつがころがつているとしか考えられなかつたのだよ。なぜって、本物の文代は恩

田が人形の箱へ入れて連れて行ったのだからね。しかし、小林君のこの様子では、あれはやっぱり人形じゃない。ね、そうだろう」少年を顧みると、彼はニコニコしながら、ガクンガクンと大きくうなずいて見せた。

はてな、もしそうだとすると、どうも辻つじ褻つまつまが合わなくなるぞ。

恩田は確かに文代さんを人形箱へ入れたではないか。それをトラツクに積んで運び去ったではないか。しかも、九段の濠ほり端ばたで、その文代さんを、あのむごたらしい目にあわせたではないか。もう文代さんは五体所を異にして最期さいごをとげてしまったのだ。その人が今、明智邸の台所に寝ているなんて、まるで狐きつねにつままれたような話ではないか。

だが、そこどころがつっていたのは、やっぱり人形ではなかった。何がどうあろうとも、本物の文代さんであった。まだ気を失つていたけれど、調理台の下から顔を引き出して調べるまでもなく、からだにさわってみれば、人形か人形ではないかは、たちまちわかることであつた。恒川氏と明智とは、そのグツタリとした文代さんを抱いて、とりあえず書齋の長椅子ながいすへと運んだ。ついでに女中さんのよく太つたからだもその肘ひじかけ掛椅子の柔かいクツションへ。

すぐに電話でお医者さんが呼ばれた。だが、文代さんはただ麻酔剤で眠っているばかりだ。さして心配することはない。それよりも、この際もつと大切なことがある。人間豹ひょうを捕えなければな

らないのだ。

「明智君、僕にはまだ事情がよくわからんが、これは小林君の手柄なのかい。それにしても……」

「そうだよ。この少年探偵さんの大手柄だよ。つまり、小林が僕の日頃の言いつけを、忠実に守ってくれたわけなのだ」

「すると、小林君、君が恩田の隙を^{すき}うかがって、一度箱に入れられた文代さんを、また元の人形と入れ換えておいたとでもいうわけかい」

「ええ、そうです。でも、先生が恩田のやつをあんなに長く電話口へ惹^ひきつけておいてくださらなかつたら、とてもできなかつたのです。僕は機会がないかと一所懸命待っていました。すると、

うまいぐあいに先生から電話がかかって、先生の智恵で僕に仕事をすきする隙を与えてくださったのです。僕はあの電話を聞いて、先生は暗に僕に命令をくだしていらつしやるんだなと感じたのです」

少年が林檎りんごのような頬ほおをかがやかせて、にこやかに説明した。

「だが待ちたまえ。むろん君もあいつに麻酔剤を嗅かがされたんだろう。でなければ、あいつがそんな油断をするはずはないからね」

「ええ、ですけど、僕、息が強いんです。一所懸命になれば、二分以上息をつめていても平気なんです。いつも先生に、それを利用することを忘れるなつて教えられていたもんですから、ガーゼで鼻と口をふさがれても、じつと息をつめて、気を失つたまねをしてやったんです」

さすがの恩田もこの可憐かれんな少年に、そんな大それた隠し芸があらうとは知らぬものだから、グツタリとなつたのを見て、安心してしまつたものであろう。

「へえ、君がねえ。驚いたもんだな……ハハア、これだね、明智君、さいぜん君が謎なぞみたいなことを言っていたのは」

「そうだよ。僕の勝敗はただその一点にかかっていたのだよ……だが、小林君、君はもう一つのことを忘れやしなかつただらうね。ほら、昼間は白、夜は黒のアレを」

「ええ、うまく仕掛けました。むろん黒の方です。運転台にいた手下のやつが、なんだか怪しんでいたようですが、あの仕掛けには気づかなかつたらしいです」

「恒川君、僕の発明品が役に立ったぜ」

「なんだか面白そうな話だね、いったいどんな発明なんだい。その昼間は白、夜は黒っていうのは」

警部が好奇の眼をかがやかした。

「自動車尾行器とでもいうかね。自分で直接尾行できない場合、相手の行方ゆくえをつきとめる仕掛けなんだ。車のナンバー・プレートなんてものは、替えようと思えばいつだって替えられるからね。それに番号はわかっていても、車の所在がなかなかつきとめられぬ場合がある。そこで僕の発明なんだが、それはね、クレオソートかんを一杯入れて大きなブリキ缶かんに、丈夫な取手をつけて、そいつを自動車の後尾の車体の下へちよつと、引っかけておきさえすれ

ばいいんだ。ブリキ缶の底には針で突いたほどの穴があいている。そこからポタリポタリと、大げさにいえば、細い糸のようになつて、クレオソートが地面にしたたるといふ仕掛けなのだよ」

「そして、そのしたたつたあとを、探偵犬につけさせようつてわけだね。シャーロックの役目のほどがわかつたよ。だが、白だの黒だのつていふのは？」

「昼間は色のないクレオソート、夜は光の反射をさけるために黒いクレオソート、つまりコールタールを使用するんだ。その二色の薬をつめたブリキ缶が、僕の家にはいつもちやんと用意してあったのだよ。尾行というやつは余程よほど手腕てくわんのいる仕事だからね。女子供にはむずかしい。そこで小林や文代などには、まさかの場合

は危険は冒さないで、この道具を使うように言い含めてあるんだ。今夜の場合などは、殊ことに適切だったよ。小林の機転を褒ほめてやつてもらいたいね」

「ウン、さすがに君のお弟子ほどのことはあるよ。敵が電話をかけている隙すきをうかがって、それだけの仕事をするなんて、見上げたまんだ……さあ、それじゃ小林君の手柄をむだにしないように、さっそく追跡をはじめようか」

「ウン、それには警察の自動車が一台要いるね。僕らがそれに乗って、その前をシャーロックに走ってもらうんだ」

「もう僕の方の刑事たちがやってくる時分だよ、先生たちきつと自動車に乗ってくるだろう」

間もなくその二名の腕利き刑事が、警察自動車を飛ばして来着した。

明智は文代さんのことは医者に任せておいて、恒川警部と共にその自動車に乗りこんだ。名犬シャーロックには長い綱をつけて、運転台に席を取った恒川氏が、その綱の先を握っている。

小林少年はクレオソートをたつぷり含ませた布を持ってきて、シャーロックの鼻先につきつけた。これから追跡するものの匂いにおを充分覚えさせるためである。

犬は鼻をヒクヒクさせて、薬品のはげしい匂いに親しんだ。小林少年が突然その布片を持って家の中へ駈かけ込んでしまうと、彼は方角に迷って、しばらくキョトンとしていたが、やがて、類似

の匂いを嗅ぎつけたのか、鼻面で地面をこするようにして、勢いこんで前進をはじめた。

「よし、出発だ」

恒川氏の指図に従って、車は動き出した。シャーロックは時々立ち止まっては、烈しく走り出す。そのたびごとに車の速度を調節しなければならなかったけれど、さすがに名犬は敵のあとを見失うようなことはなく、異様な追跡自動車は、寝静まった深夜の町々を、北へ北へと進んで行った。

明智がさっきの電話で、黒い糸のようなものが恩田のからだにからみついて離れないといったのは、つまりこのことであつた。彼の言葉が単なるおどし文句や怪談ではなかつたことが、今こそ

明らかになったのである。

都会のジャングル

名犬シャーロックの先導する追跡自動車は、明智のいわゆる

「黒い糸」に引かれてもするるように、少しも誤まることなく、恩

田の通過した淋しい町々を走った。そして、まもなく九段近くの

濠端ほりばたにさしかかったとき、明智の鋭い眼が、たちまち前方の路

上に異様な物体を発見した。

「おや、あれはなんだ。車をとめてくれたまえ」

その声に驚いて、恒川氏がシャーロックの綱を引きしめた。運

転手がブレーキを踏んだ。

「君、懐中電燈を持ってませんか」

同乗の刑事に尋ねると、幸い一人がそれを用意していた。明智はその懐中電燈を借りて車をおりた。

「やつぱりそうだ。恒川君、やつはこの辺で人形箱の蓋ふたをひらいてみたんだ。そして、一杯喰くわされたことを知って怒り出したんだね」

明智は路上を照らしながらだんだん先へ歩いて行つた。その移動する懐中電燈の下に、マネキン人形の首が、手が、足が、次々と現われては消えて行つた。さいぜん恩田が車上から投げ捨てたのは、この人形だった。文代さんではなかった。いくら獣類でも

本物の人間を道のまんなかであんな目にあわせるほど向こう見ずではなかつたのだ。

「ハハハハ、やつこ奴さん、大切な獲物えものが人形だとわかつたとき、どんなに憤慨したか眼に見えるようだね。この惨酷ざんこくさはどうだ。八ツ裂きだね。人形でよかつたよ」

明智は一ひと通り見おわつて自動車に戻つた。

「だが、あいつがここで真相を発見すると、そのままオメオメ帰つただろうか。また君の家へ取つて返したんじやあるまいか」

運転台の恒川氏が不安らしく眩つぶやいた。

「それは大丈夫だ。電話でウンとおどかしてあるからね。今にも警官がくるかと思つて、やつこさん泡あわを喰つて逃げ出したほどだ。

もう一度帰る元気はないよ。それに、いま念のために調べてみたんだが、クレオソートの黒い糸がちつとも停滞していない。もしやつが引き返したとすれば、車があともどりするか、少なくとも一度停車しなければならぬのだが、そういう様子が少しもないのだよ」

「先生、諦めたんだね……よし、それじゃ前進だ」

そして再び犬と車とは走り出した。

黒い糸はその辺から右折して、電車通りを避けながら、上野公園不忍池しのばずのそばを通つて、ついに浅草公園裏通りに出た。それからまたグルツと一ひと廻りまわして、二天門への入口に達したが、そこまでくると、シャーロックはヒョイと立ち止まって、しばらく

地面を嗅ぎまわっていたかと思うと、いきなり元きた方角へ引つ返しはじめた。

「おや、恩田の車はここで引つ返しているんだな。ちよつと止めてくれたまえ。なんだか、この辺が怪しいぞ」

車が止まると、明智はまた懐中電燈を手にして地上に降り立ち、その辺を調べはじめた。

「おい、見たまえ、ここに黒い水溜りができている。クレオソートが同じ場所にしばらくのあいだ滴りつづけていたんだ。つまりやつの車が停車した証しょうこ拠だよ。それから元の方へ引つ返しているところを見ると、やつだけがここで車を降りたのに違いない。とにかく一度調べてみる値打はある」

そこで、明智の言葉に従って、一同車を降りたのだが、考えてみると、実に漠然とした探しものではないか。二天門の中には何がある。観音堂がある。五重の塔がある。公園と池と樹木地帯がある。それから水族館と花やしきと華やかな映画街だ。

「浅草公園とは思いがけなかったね。まさかやつこさん公園に巢喰^くつてるんじやあるまいね。こんな賑^{にぎ}やかな場所に」

恒川氏が当惑したように言った。

「いや、そうとも限らんよ。東京じゆうでこの公園ほど、犯罪者にとつて究^{くつきよう}竟の隠れ場所はないともいえるんだ。ここは都会のジャングルだよ。和洋あらゆる種類の建物がゴタゴタと立ち並んでいる。おびただしい露店の群れがある。到^{ところ}る処に抜け裏があ

る。その上ひっきりなしの大群衆だ。それらがすべて、犯人が身を隠す叢林そうりんにも等しいのだぜ。もしあいつがこの公園を隠れがにえらんだとすれば、その着想に敬服しないわけにはいかん。人間豹ひょうと都会のジャングル、実にうまい取り合わせじゃないか」

明智は感嘆するようだというのだ。

「だが、もしそうだとすると、こいつは実に厄介やっかいだぜ。とてもこんな小人数の手に合うもんじゃない。管内の警官を総動員しても足りないくらいだ」

「だが、ともかくも調べてみよう。人の目立つ夜ふけのことだから、ひよつとして誰かがやつの姿を見ているかもしれない」

むろん興行物はハネてしまい、夜店商人たちもほとんど帰った

あとで、宵よいの明るさ賑やかさは跡形もなかったけれど、夜ふけの参詣者、お百度詣りなどの黒い人影がチラホラして、二天門をはいつたところには、これからが商売の易者のテント張りが、ポツンと、取り残されたように立っていた。

その二天門の敷石に、一人のむさくるしいぎりの乞食こじきが、夜詣りの人を目当てに、まだ店を張っていた。

「ああ、こいつに聞いてみたら、見覚えているかもしれない」
明智は独ひとりごとを言いながら、その乞食のそばへ近づいて行つた。

幸い恩田の変装を解かないでいるし、メイク・アツプもまだ洗い落としていなかったので、尋ねるのに、手数はかからぬ。

「おい、君、君、今から三十分ほど前にね、ここを、こういう男が通らなかつたかね。つまりこの僕とソツクリの男だ」

明智が前に立ちはだかつて聞くと、いざり乞食はヒヨイと顔を上げて、不意の質問者を眺めた。ながなんてひどい片輪者であろう。

両足がまつたくだめで、手に草鞋わらじのようなものをはいている上に、顔じゆうが腐れただれて、ほとんど眼鼻もわからないむごたらしさだ。その顔が破れたお釜帽子かまの下から、ヒヨイと覗のぞいたときには、明智は思わずわきを向いて、話しかけたのを後悔したほどであつた。

「ああ、旦那だんなとそつくりの人、通つた、通つた、あつち、あつちへ行つた」

乞食は呂律ろれつのまわらぬ口でそう言いながら、草鞋わらじばきの手で観音堂の方を指し示した。

「ほんとうかい。間違いないだろうね」

「ウン、ほんとうだ。旦那とそっくりだった」

乞食こじきの鈍い眼にも、明智の際立つた変装姿がわからぬはずはない。それとそっくりの男だったというからには、おそらく間違いないであろう。こんな恐ろしい形相ぎようそうの人間が、あいつのほかにあるはずはないのだから。

一同は明智を先頭に、観音堂の方へ歩いて行つた。明智はその辺にウロウロしているルンペンどもを捉とらえて、片っぱしから質問した。恒川氏は、お堂の前の交番に立ち寄つて、そこの警官にも

聞きただした。だが、誰も明確に答えるものはなかった。二天門のような狭い通路と違って、この電燈の遠い広い場所では、むしろそれが当然だと言つてもよかつた。

しばらくのあいだ、本堂のまわりから公園の池にかけて、綿密な搜索が行なわれたが、むろん、なんの獲物えものもなかつた。

「今夜は引き上げるほかないよ。警察としてはできるだけの動員をして、浅草公園そのものを囲んでしまふんだね。そんなことをしても、この入り組んだジャングルの豹ひょうが狩りは、おぼつかないと思うけれど。僕も民間探偵の力に及ぶだけはやってみるつもりだよ」

「ウン、さっそく手配をしよう。夜の明けるまでに何か君に報告

できるかもしれないぜ。われわれの仲間には、このジャングルの秘
密に通つうぎよう暁あけしているやつが、たくさんあるんだからね。だが、
君のお蔭かげで犯人が浅草公園へはいったことがわかっただけでも、
大した収穫だ」

明智と恒川氏はそんなことを言いながら、二人の刑事といっし
よに元の二天門へと引つ返した。その敷石にはさいぜんのいざ
り乞食が、まだ慾張よくばって店を出していた。明智はふと心づいて、
ポケットの小銭を探り、彼の前の面桶めんづうに投げ入れて通りすぎた。

「旦那、旦那」

おやつと立ち止まって振り返ると、いざり乞食が呼び止めてい
る。

「旦那、おとしもんだ。これ、これ」

草鞋わらじの手で指し示す地上に、二つに折った封筒が落ちていた。

「僕が落としたっていうのかい」

明智はげんらしく二、三步立ち戻って、その封筒を拾い上げた。

「ああ、その旦那だ。いま落としたんだ」

乞食がくずれた顔でお追ついで従しゅう笑いをしている。

封筒を門の天井の電燈にかざして見ると、表に「明智小五郎殿」とある。確かに明智のものに違いない。だが、彼はそんな封書などをポケットに入れてきた記憶はまったくないのだ。

「おい、恒川君、僕たちはいま公園の中で、あいつにすれ違った

のかもしれないぜ」

「えっ、あいつって、人間豹のことかひょう」

「ウン、どうもそんな気がするんだ。ともかく、こんな明かりじやだめだから、自動車まで帰ろう。そして一つこの封筒をよく調べてみよう」

明智はすぐ向こうの電車通りに待っている警察自動車へ急いだ。明るいいヘッド・ライトの前に、四人が顔をつき合わせて封書を開いた。封筒は薄いハトロン紙の安物だ。裏に差出人の名前もなく、封もひらいたままになっている。明智は急いで中身を取り出して見た。半紙型のザラ紙、それに鉛筆の走り書きで、左のような文句がしたためてある。

明智君、さすがに君は名探偵だね。おれの獲物えものは人形だった。その上、君はおれがここへきたことを知っていた。実にするどいねえ。ブルブルブル、おお怖こわい。だがね探偵さん、この手紙を読んで君がどんな顔をするか、見てやりたいものだね。おかしくつて。一体いつの間に誰がこんなものを君のポケットへ投げ込んだか、わかりますかね。探偵さん、まだちつとばかり修業が足りないようだね。それじゃまた会おうぜ。

人間豹

「フム、驚いたねえ。するとあの公園の闇やみの中で、人間豹のやつがわれわれの眼の前を歩いていたんだね。そして、こんなものを君のポケットへほうりこんで行ったんだね」

恒川氏が驚嘆した。

明智は何かじつと考えこんでいた。

そんなはずはない。おれは眼の前にいる敵を見のがすほどぼんくらだろうか。しかも、そいつにポケットへ手を突っ込まれるなんて、かつて、経験したことのない侮辱だ。だが、どうも信じられない。おれの神経はからだじゆうに行き渡っているはずだ。ポケットに物を入れられて気がつかぬなんて、おれとしてあり得ないことだ。

「ちよつと待つてくれ。なんだかわかりそうぞ」

明智の眼が昂こうふん奮ふんのためにギラギラと光つて見えた。

「何かカラクリがある。手品の種がある……そうぞ。きつとそうぞだ。おい、恒川君、僕は大変な失策をやつた。だが、まだ間に合あうかもしれない。あいつだ。あのいざり乞食こしきをふん縛しばるんだ」

言い捨すてて脱兎だつとのごとく駈かけ出した。あとの三人もそのあとに従したがつた。

一と飛びに二天門まで駈かけつけたが、案あんの定じよう、そこにはもう乞食の影もなかつた。やつぱりそうぞだ。落とし物を教えるような顔をして、実はあいつ自身が、封筒を明智の通つたあとへ投げ捨すてておいたのだ。そんなまねをするやつがほかにあるだろうか。あ

いつこそ人間豹の変装姿であつたに違いない。かたわ乞食に化けて、浅草の雑沓ざつとつに隠れていようとは、なんというズバ抜けた思いつきであろう。

人々は門の付近を歩きまわつて、乞食の姿を尋ねたが、どこにもそれらしい影は見当たらなかつた。

明智は大道易者のテントにまで首を突つ込んで尋ねていた。

「君は毎晩ここに出ているのだろうね。二天門の下のいざり乞食こじきを知っているかね、手に草鞋わらじをはいたやつだよ。あいつはいつもあすこにいるのかね」

四方をテントで張りつめて、前の方にやつと客の顔が見えるだけの窓があいている。その窓から大きなロイド目がねをかけた白

ひげのお爺じいさんが、天眼鏡片手にのぞいていた。

「へええ、いざりの乞食ですつて？ 存じませんな。この辺には、そういう乞食を見かけたことがありませんよ」

「ところが、いま僕はそいつを見たんだよ。その筋のお尋ねものなんだ。ちよつとの隙すきに逃げられてしまった。もしやそんな乞食が、君の店の前を走り過ぎはしなかつたかね」

「存じませんな。わしはつい今しがたまで客がありましたな。人相の方に夢中になっておりましたのでね」

「そうか。いや、ありがとう」

それを最後に、明智たちは一応搜索を断念して引き上げるほかはなかつた。恒川氏は警視庁に帰って浅草公園包囲の手配を講ず

るために急いでいた。人々は自動車の方へ急ぎ足に引返して行つた。

「ウフフ、もうよさそうだよ、とうとう諦めて帰つてしまつた」
あきら

易断のテント張りの中で、白ひげの易者が妙な独りごとをした。すると、その声に應じて、テーブルのような台の下から、ゴソゴソ這い出したやつがある。いざり乞食だ。

乞食はいざりでもなんでもない。いきなりニユーツと立ち上がつて、老易者と肩を並べた。そして顔じゆうに貼りつけた腫物はれものだらけのゴム仮面を、ベリベリとはぎ取つてしまった。仮面の下から現われたのは、まぎれもない人間豹の恐ろしい形相ぎようそうである。

「わしの方では明智を知っているけれど、あいつはわしの顔を見たことがないのだからね。まんまと一杯喰くわせてやったよ」

老易者は無気味なしわがれ声で言いながら、大きなロイド目がねをはずした。言うまでもなく、人間豹の父親である。息子はざり乞食に、おやじは大道易者に、そして、互いに連絡を取りながら、群衆そろうじんの叢林そうりんの中に身を隠してしようとは、なんとという奇想天外の欺瞞ぎまん手段であつたらう。

「だが、この変装も長いあいだつづけてきたが、今晚限りでよさなくちやいけまいね。あのするどい男は、今の自動車が道の半分も行かぬうちに、きつとわしたちの秘密を気づいてしまうことだらうよ」

「ウフン、だがあとの祭さ」

人間豹は吐き出すように言つて、大きなあくびをした。

「お父さんもきようはずいぶん働いてくれたね」

「ウン、麻布から、芝浦、芝浦から浅草とね、なあに、なんでもありやしない。世間を相手に戦うのが、わしには面白くてたまらぬのだからね」

そして、この世にも恐ろしい親と子は、顔を見合わせて、無気味に無気味に、ニタニタと笑いかわすのであった。

公園の怪異

人間の姿をした猛獣は、彼に最もふさわしい隠れが、都会のジヤングルに逃げ込んだのである。山あり池あり林あり、それに大小さまざまの建物が、あらゆる形態、あらゆる角度をもつて雑然ふんぜん紛然と立ち並ぶ大通り、横丁、抜け道……東京じゅうのどこを探したつて浅草公園ほどよくできた迷路があるだろうか。しかも、そこには年がら年中、おびただしい群衆が目まぐるしくウヨウヨと動きまわっている。その人工ジヤングルの中にまぎれ込んだ犯人をさがし出すなんて、火鉢ひばちに落ちた銀貨をさがすよりもむずかしいことに違いない。

その翌早朝、警視庁と所轄警察署との混成私服隊が編成された。そして、さまざまに姿を変えた刑事たちは、公園の四方から、住

宅、商店、飲食店の嫌きらいなく、ほとんどシラミつぶしに搜索の輪をせばめて行つた。ルンペンどもは狩り立てられるし、浅草寺本堂の天井から床下、五重の塔は申すに及ばず、仁王門の大提ちようち燈んの中まで調べるといふ綿密さであつたが、二日間はなんの収穫もなく過ぎ去つた。

二日目には、恒川警部の発案になる、奇妙なポスターが浅草界か隈いの辻つじ々に、ベタベタと貼はり出された。ポスターのまん中には画家に描かせた人間豹ひよう恩田の似顔が、実物の二倍の大きさで印刷してある。その下に「これは近頃世間を騒がせている殺人犯人恩田の似顔です。こういう人物を発見されたかたは猶予ゆうよなくもよりの交番へ知らせてください」とわかりやすい文章で振り仮名つ

きでしるしてあるのだ。その似顔絵は、かつて大都劇場で人間豹の形ぎょうそう相を目撃した一洋画家が、明智夫妻の口添えで描いたものであったが、非常に特徴のある獣人の似顔は、記憶によつて充分に表現することができたのである。

警察としては実に思い切つたこのポスター戦術は、辻々に人の黒山を築いた。恐怖におびえた眼が醜悪な似顔絵に集中された。人間豹に関する恐ろしい噂うわさばなし話は、輪に輪をかけて、大衆のあいだに流布るふされていた。

「ワア、すげえ。こいつの眼は、暗いところでもまっ青に光るんだつてよ」

「牙きばがあるぜ」

「ほんとだ。牙がありやがる。犬でもなんでもモリモリ食つちまうつてじゃねえか」

「違うよ、犬じゃねえ。人間の女を食うんだよ」

「いやなものを見ますね。こんなものがはいつてきたんじゃ、公園もさびれますねえ」

「僕は、こいつを見たことがありますよ。ほら大都劇場の例の騒ぎのときですよ。この絵とそっくりです。いや、こんなおとなしい顔じゃなかった。こいつがね、レビューの舞台のまん中に立って、見物席を睨にらみつけて、この牙をむき出して、ウオーツと吠ほえたときには、実にどうも、なんといいか、生きたそらはなかったですよ」

「へええ、あなたは、あれをござんなすった？ 私も話は聞いてますが、江川蘭子が舞台の上で血みどろにされたっていうじゃありませんか」

「そんな古いことよりも、おいら、たったゆうべこいつにお眼にかかったんだぞ」

「どこで？ どこで？」

「お堂の裏の大銀杏いちしようですよ。おいら、あの下に寝ていると、誰だか頭を踏んづけやがった。びっくりして飛び起けると、あの大銀杏を、まっ黒なものが、スルスルツと、猫ねこみてえに登ってくじやあねえか。ヤイツてどなりつけてやると、そいつが木の上から、おいらを睨みつけやがった」

「こんな顔だったか」

「そうよ。まつ青な眼がお星さまみてえに光りやあがるのさ。おいら、あとも見ねえで駈^かけ出しちやったよ」

「おまわりさんに言えばいいじゃないか」

「言ったよ。言ったんだけど、おまわりが大銀杏を探しに行ったときには、もうなんにもいやあしなかつたよ」

ルンペンも、新聞売りの小僧も、中学生も、青年団員も、商店の御隠居も、通りがかりの会社員も一つになって、恐ろしいポスターの主人公について論じ合った。

床屋でも、銭湯でも、映画館の見物席でも、人さえ寄れば、

「人間豹^{ひょう}」の噂^{うわさ}であった。さまざまの怪談が創作され、それが尾

ひれをつけてひろがって行つた。

どこかのおかみさんが、共同便所のドアをひらくと、その中にまつ青な眼の人間豹がしやがんでいたという怪談もあつた。

真夜中に、仁王門の高欄こうらんの上から、まるで石川五右衛門みたいに、人間豹が頬杖ほおづえをついて、仲見世なかみせの通りを見おろしていたという怪談もあつた。

毎夜観音さまへお詣りする若い芸者が、友だちと二人づれで、仁王門を通りすぎたとき、その一人がなにげなく門の天井を見上げたのだが、すると、例の奉納の大提燈ちようちんの上に、なんだか人間の首らしいものが、まるで獄門みたいに、ヒョイと覗のぞいているのが、仲見世の遠明かりに、ぼんやり見えていたという。

一人が天井を見上げて立ち止まったので、もう一人もいつしよになつて、その方を見ると、確かに人の首、しかも両眼が燐りんのよううに青く燃えていた。

二人とも、喉のどがつまって、足がしびれて、そのまま氣絶しそうになるのを、やつとの思いで抜き足さし足、門の下を離れたかと思つと、いきなりキヤーツと悲鳴を上げて、仲見世の方へ駈け出したというのである。

警察が仁王門の大提燈の中まで搜索したのは、そういういきさつからであつた。そのあいだに逃げてしまつたのか、最初から若い女の幻覚にすぎなかつたのか、調べたときには、むろん提燈の中は空っぽであつた。

怪談は怪談を生んで、歓楽境はたちまち恐怖の巷ちまたと化して行った。昼間とはかく、夜にはいつては、一步映画街を離れると、あの広い公園が、墓場かなんぞのようにまったく人影を見ないと、いうさびれ方で、今や浅草公園は、遊覧客の代りに、私服刑事と、青年団員と、物好きな野次馬やじうまとで占領されたといつてもよいほどであった。

ポスターの貼はり出された翌朝、それらの辻つじ々々は、又別の意味で、黒山の人ばかりであった。というのは、実に異様なことには、その一夜のうちに、ポスターの似顔絵がまったく一変してしまつたからである。

「変だね、誰がこんないたずらしたんだろう。あつちのポスター

にも同じのが貼りつけてあるよ」

「人間豹ひょうの代りに、今度はばかに色男じゃないか。どつかで見たような顔だね」

そういう意味の言葉が、人だかりの中であちこちに取りかわされていた。

人間豹の似顔の上から別の紙を貼りつけて、それに肉筆でなかなか好男子の顔が書いてある。どのポスターも皆同じ顔の絵と変っているのだ。何者かが夜のあいだに、丹念に歩きまわって、ポスターというポスターに、そういう同じ似顔絵を貼りつけておいたのに違いない。

「ああ、わかった。この似顔はアレだぜ、人間豹の敵かたきの顔だぜ」

群衆の中に、やがて、それと気づいたものがあつた。

「敵^{かたき}つて、誰だい？」

「わかつてるじゃないか。明智小五郎さ。人間豹は明智のためにひどい目にあつたつていうじゃないか」

「ウン、そういえば、明智さんだ。明智さんにそっくりだ」

いかにも、それは明智小五郎の似顔に違いなかつた。ひげのない瘦^やせた顔、モジャモジャした頭髪、特徴のある濃い眉毛^{まゆげ}、なかなかよくできた名探偵のカリカチュアであつた。人々は新聞の写真で、この顔にはおなじみになつていたので。

「おい、こいつは滑稽^{こっけい}だぜ。下の文句を読んでごらん。つまり明智小五郎がお尋ねものの殺人鬼つてことになるんだぜ。ひどい

じゃないか。一体だれがこんなまねをしやあがつたんだろ」

「まさか警察じゃないやね」

「明智さんに恨みうらのあるやつしわざの仕業かもしれない」

「恨みのあるやつっていえば、つまり、人間豹じゃないか」

誰かがそれをいうと、黒山の群衆がシーンと静まり返ってしまった。あまりに恐ろしい、しかも的確な推定であつたからだ。

寢静まつた真夜中、あのまつ青に光る眼の怪物が、呪いのろの独りひとごとをつぶやきながら、黒い風のように歩きまわって、仇敵きゆうてき、

明智小五郎の似顔絵を貼りはつけて行つたという、そのなんともえたいのしれぬ光景が、人々を心底からゾツとさせたのである。

やっぱりあいつは、浅草公園のどこかの隅に身を潜ひそめていたの

だ。もしかしたら別の方面に逃げ出してしまったのではないかと
いう空頼そらだのみも仇あだとなった。地元の人々は警察の無能を叫び出し
た。刑事や青年団員の戸別訪問が又くり返された。だが、その日
も別段の収穫もなく暮れて行った。

ひょう
豹盗人

その夜ふけのことである。

千束町に店を出している、俗に豪傑ごうけつ床屋といわれる大山理髪
店の主人が、愛犬の土佐犬を連れて、人気のない浅草公園へ運動
にやってきた。

おかみさんは物騒だからといって、さんざん止めたのだけれど、何しろ豪傑と名を取った床屋の親方だから、承知するものではない。第一、人間豹の噂などにビクビクしていたら、大切な土佐犬が運動不足で病気になつてしまふじゃないか。それに、おれだつてこの二、三日腹のぐあいが変わるくつてしようがない。今夜はなんとといったつて出掛けるんだ。というので、まるで銅像の西郷さんみたいな恰好で、太い手綱のような犬の紐を引っぱつて、公園の広場へと踏み込んだのである。

「ホオ、驚いたね。やつら一人もきちやあいねえ」

団十郎の銅像のあたりから、池の端まで歩いてみて、親方は感心したように呟いたものだ。

ふだんなれば、映画館がハネてしばらくすると、浅草界隈かいわいの犬持ちどもが、朱や紫の房のついた紐を、自慢そうに肩にかけ、どうもう獯猛な和洋さまさまの犬どもを引きつれて、運動にやってきているのだが、今夜は一匹の犬の影さえも見えぬ。

「いくじのねえ野郎どもじゃねえか。ノウ熊」

顔なじみの連中の姿が見えぬので、愛犬に話しかけでもするほかはなかった。熊と呼ばれた土佐犬は、いかにもその名にふさわしいかつぶく恰幅である。

「だがこいつあ静かでないや」

どうも少し静かすぎるのだ。映画街はと見れば、昼間の雑沓ざつとうに引きかえて、まるでローマの廃墟はいきよみたくに死に絶えているし、

飲食店や茶店なども、すっかり大戸を閉めて、空き家のように静まり返っている。池をとりまく小山の樹木が、思い出したような夜の風にザワザワと鳴るほかには、なんの物音もない。いつもなれば、本堂の前の敷石道には、夜通し駒下駄こまげたの音が絶えないのだが、そういう信仰家たちも人間豹には恐れをなしたものとみえる。

大山理髪店主は、やつぱり西郷さんの恰好で、無人の境をノツシノツシと歩いて行った。通り過ぎるベンチというベンチが空っぽだ。ルンペンどもも命は惜おしいのである。これがあの浅草公園だろうか。戸惑とまどいをして飛んでもないところへ来たんじゃないかしら。それともおれは、今わるい夢を見ているのではなからうか。ふとそんな疑いが起こるほどであった。

池をひとまわりして、樹立こたちのあいだの狭い道を通り抜けると、眼の前に円形の広っぱがひらけた。たった一つの常夜燈が、その全景を朧月夜おぼろづきよほどにボンヤリと照らしている。

向こう側の樹立は、闇に溶け込んでほとんど見分けがたいほどであったが、その樹立のあいだをチロチロと動く人影がある。よく見ると、その人は犬を連れている。しかもどうやら二匹らしいのだ。

「おや、感心なやつじゃねえか。熊公見ろよ。おまえの友だちがやってきたぜ」

親方はその方へ近づいて行こうとした。この勇敢ゆうかんな愛犬家の顔を確かめて、一とこと口がききたかったのである。だが、どう

したことが、熊公は、しりごみをして動こうともしない。

「おい、どうしたつていうんだ」

振り向いて見ると、彼の愛犬はまるで狼おおかみのように、背中の毛を

逆立て、上唇に恐ろしい皺しわを寄せ、歯をむき出して、喉のどの奥で遠

んんらい

雷らいみたいな音を立てている。どうも不思議だ。老犬熊公がこんなそぶりをするなんて、めったにないことであつた。

親方は力の強い犬のために、だんだんうしろへ引きずられながら、樹立のあいだへ身を隠すようにして、前方の人影を見つめた。

二匹の犬を連れした異様の人物は、樹蔭こかげを出て常夜燈の薄明かり

の下を右から左へと横ぎつていた。黒い詰襟つめえりの服を着た瘦やせたお爺じいさんだ。まっ白な頭髮、それに房々とした白ひげが胸まで垂

れている。親方はこれまで、こんな妙な爺さんをついぞ見かけたことがなかった。

老人は傍目わきめもふらず、しずしずと歩いて行く。何かしら気違いめいた、この世の人ではないというような感じが、身边にただよっている。不思議なことには、二匹とも犬は綱がつけてない。動物どもは老人の歩くまにまに、眼に見えぬ糸で引かれるように、彼のあとに従っているのだ。

だが、なんて大きな犬だろう。それにあの歩きかたのしなやかさはどうだ。犬ではなくて猫ねこみたいじゃないか。やがて、その妙なけだものからだ一面に、まつ黒な美しい斑はんでん点のあることがわかってきた。犬じゃない。といって、あんなでっかい猫なんて

いるはずはない。すると、すると、あいつは、いつたい……

見つめていると、そのものの正体は一と息ごとに明らかになつて行つた。あざやかな斑紋はんもん、がっしりと太い四肢しし、生きているような長い尻尾しっぽ、まつ青に光る両眼、もう見違ひはない。豹ひょうだ。

だが大山親方は、このあまりに非常識な光景を俄にわかに信ずることができなかつた。公園の中を猛獣を連れた老人がノコノコ歩いて行くなんて、おれの眼がどうかしているのじやあるまいか。それとも夢でも見ているのかしら。

ところが、ふと気がつくつと、その豹のうしろからついて行くも一匹のけだものは、さらに一そう驚くべき怪物であつた。実に

不思議千万なことには、そいつは洋服を着ていた。まっ黒な洋服を着ていたのだ。そして、前脚よりも後脚が二倍も長くて、それが普通の動物とは反対に曲がっている。しかもその脚の先には靴くつをはいていたではないか。大ききといい、恰かっこう好こうといい、どうやら人間らしいのだが、人間が豹と一緒に四つん這ばいになって歩いているなんて、これはまあどうしたことだ。

親方がほとんど虚脱の状態におちいって、身動きする力さえなく、汗を流してそこにたたずんでいるあいだに、恐ろしい一行は空き地を横ぎり終って、左手の茂みの中へ姿を隠して行つたが、そのとき最後の洋服を着た怪物がヒョイとこちらの方を振り向いた顔、ああ、その顔の恐ろしさを、親方はいっしょうがい一生涯忘れること

ができなかつた。

そいつはまぎれもない人間豹であつた。例のポスターの似顔絵とそつくりのやつであつた。まん丸い両眼は、本物の豹よりも一そう烈しく^{はげ}燐光^{りんこう}に燃えていた。そして、その恐ろしい眼の下で、まっ赤な口をキューツと三日月型にして、白い牙を^{きば}むき出して、何がおかしいのか、ニヤリと笑つたのである。

そのあいだ、熊公は恐ろしい形^{ぎようそう}相^{のど}で喉を鳴らしつづけていたが、洋服を着た四足獣が茂みに隠れるか隠れないに、もう我慢ができなくなつて、烈しく^{はげ}咆哮^{ほうこう}しながら、いきなり親方の手を振り切つて、怪物のあとを追つて飛び出して行つた。鞆^{まり}のように駈^かけて、一瞬間に空き地を横ぎり、向こうの茂みに見えなくなつ

てしまった。

だが、床屋の親方は愛犬のことなど構っていられなかった。彼自身の命の問題であった。無我夢中で反対の方角に駈け出した。走りに走って、本堂の前の交番へころがり込んだ。

「豹が、豹が……」

彼は交番のドアにすがりついて、遥か池の方を指さしながら、気違いのように叫びつづけた。

「豹」という言葉が警官を異様に刺戟しげきした。急いで聞きただしてみると、果たして「人間豹」の出現であった。いや「人間豹」以上の大奇怪事であった。

たちまちこの事が本署に電話された。間もあらせず一隊の警官

が、ピストルをたずさえて現場に急行した。だが、いかに手早く運ばれたといつても、そのあいだに相当の時間が経過している。ものものしい警官隊が駆けつけたころには、広い公園内を隅から隅まで探しまわつても、もうそれらしいものの影さえ見えなかつた。

しかし床屋さんの申し立てが、決して夢や幻でなかつた証^{しやうこ}拠には、彼が猛獣の姿を見た現場からほど遠からぬ木立の中に、愛犬熊公の無残に食い裂かれた死骸^{しがい}が、まっ赤な布^{ぬのくず}屑みたいになつて横たわっているのが発見された。

それにしても、いくら都会のジャングルだといつて、東京の浅草公園を、熱帯動物の豹がノコノコ歩いていたなんて、あまりに

とつびょうし
突拍子もない話ではないか。人間豹の方はともかくとして、本物の豹だけは、見かけによらず臆おくびょう病びょうな床屋さんの幻覚であつたに違いない。警官たちをはじめ、この噂うわさを聞き知つた人々は、そんなふうと考えていた。

ところが、その翌日になると、その幻の豹が、なんと正真正銘の猛獣に違ひなかつたことが判明した。その朝浅草名物「花やしき」の支配人が青くなつて警察署に出頭した。そして、同園秘蔵の牝めすひょう豹ひょうがゆうべのうちに檻おりの中から姿を消してしまつたと申し出でた。それも決して動物自身が檻を破つたわけではなくて、何物かが合鍵あいかぎを手に入れて、檻とびらの扉をひらいた形跡があるというのだ。

檻をひらいた曲者くせものというのは、例の白髪はくはつ白髯はくぜんの老人、つまり「人間豹」恩田の父親に違いない。だが、一体全体なんの目的で、そんなむちやなことをしたのであろう。ただわけもなく猛獣を巷ちまたに放して、市民を恐怖せしめて快哉かいさいを叫ぶためであらうか。それとも、もつと別の深いわけがあつたのではなからうか。まさか「人間豹」がお友だちを欲しがつたというような、ばかばかしい動機からではないであらう。

とらおとこ
虎男

「人間豹ひょう」だけでも充分な上に、今度は本物の猛獣までが野放し

になつているとわかつては、浅草人種のきようこう恐慌は察するにあま
りがあつた。映画も、レビューも、飲食店も、露店業者も、ほと
んど店を閉めんばかりのさんじょう惨状を呈した。こと殊に夜などは、公園
じゆうが広漠たるはいぎよ廢墟であつた。

しかし、さすがは浅草公園の魅力である。昼間だけは人足が途
絶えなかつた。広い東京には、このうわさ噂をまつたく知らないで、公
園に足を向ける人々も少ない数ではなかつたし、どこからともな
く集まつてくる、向こう見ずのやじうま野次馬連が、おびただしい群れを
なして、公園全体にわたつて一種異様な「陰気なざつとう雑沓」を呈し
ていた。その群衆を縫うようにして、さしこ刺子姿の兄いたちや、団服
に身をかためた青年団員たちが、右往左往しているのだ。

さて、あの深夜の怪異があつた翌々日の午後のこと、そういう「陰気な雑沓」の公園の中を、明智小五郎とその新妻の文代さんとが肩を並べて歩いてゐた。むろん生地きじの顔をさらしてではない。「人間豹」の餌食えじきと狙ねらわれている当の文代さんが、あいつの巢そうく窟つともいふべき場所へ、素顔のままノコノコはいりこむなんて考えられないことだ。

野次馬にまじつて当てもなくさまよい歩いているかと思える二人の男女、男は薄よごれた職工風の菜なっぱ服に、器械油で黒く染まった烏打帽子をまぶかにかぶり、板裏草履ぞうりという扮装ふんそう、大きなロイド目がねを掛けて、黒々として立派な口ひげをたくわえてゐるのだが、その顔じゆうが器械油で手習い小僧みたいに汚れて

いる。

女は髪を櫛くし巻きにして、洗いざらした手てぬぐい拭の頬ほ被り、紺こん飛すり白の半纏はんてんのようなものを着て、白い湯文字がまる出した。しかも足には男みみたいな長靴ながぐつ下にゴム底足袋たびという思い切ったいでたち、見たところ職工と「よいとまけ」の道連れ、といった感じである。

その薄ぎたない職工、実は名探偵明智小五郎、「よいとまけ」はすなわち文代さんであった。

文代さんを明智探偵事務所に置いては、いつ「人間豹」の襲撃を受けるかしたるものではない、どこか安全な場所へ避難させてはという意見が多かったけれど、あの魔物にかかつては、江川蘭

子の場合でもわかる通り、避難が避難にならないのだ。それよりも、いつそ主人明智の行く所へついて歩いて、その保護を受けるのが何よりも安心だし、そうすれば探偵のお手伝いもできるのだからと、文代さんのけなげな思い立ちに、明智も賛成して、かくの次第となったわけである。

「吸血鬼」の物語を読まれた読者諸君はご存知であるが、文代さんは前身が女探偵、顔は美しく姿はやさしくとも、決して明智の足手まといとなるような弱い人ではなかった。むしろ名探偵にはなくて叶^{かな}わぬ名助手であったかもしれないのだ。

この二人の変装者は、野次馬^{やじうま}の流れにまじって歩いてはいたけれど、むしろ野次馬ではない。殺人魔搜索の使命を帯びていたの

だ。それに加うるに、かさなる個人的怨恨えんこんがある。明智としては、死力を尽しても魔人「人間豹」の行方ゆくえを突きとめないではないられぬ立場であつた。

ハンチングの下から、頬被りの下から、二人の眼は寸時も休まず働いていた。両側の家並は一軒一軒、道行く人々は一人余さず、するどい探偵的凝視を受けた。二人はジャングルの中に猛獣におの匂いを追う精悍せいこんな獵りょうけん犬であつた。どんな些細ささいな一物も彼らの眼をのがれることはできなかつた。

六区の映画街の中ほどに、コンクリートの大映画館はきに挟まれた、谷底のように薄暗くて狭い抜け道がある。どんな雑沓ざつとうの日でも、この陰気な抜け道を利用する者はごく稀まれであつた。薄気味わるい

ほど静かな谷底だ。ただ、その中途に地底のカフェがあつて、そこへの客が時たま通るのと、細道にあいている映画館の裏口から係員が出たりはいったりするほかは、ほとんど人通りがないといつてもよいほどであつた。

職工と「よいとまけ」の明智夫妻は、なにげなくその抜け道へはいつて行つた。別に意味があつたわけではない。ただそこを通過つて裏通りへ近道をしようとしたのである。だが、一步谷底へ踏み入ると、彼らはそこにハツとするようなものを発見した。

一匹の巨大な虎が、ノコノコと立つて歩いていたではないか。

だが、そうそう本物の猛獣が現われてたまるものではない。それはむろん本物ではなかつた。虎斑とらふのシャツを着て、頭にはスツ

ポリと、張りぼてのでっかい虎の首をかぶり、肩には赤地に白く染め抜いた広告旗、手には赤紙のビラの束、つまりそれは異様ないでたちをしたチンドン屋にすぎなかつたのである。

旗の文字を読むと、「乙曲馬団」とある。どっかにサーカスがかかっている、その広告ビラを撒いて歩くチンドン屋に違いない。それにしても、虎の扮装ふんそうとは珍しい。多分は乙曲馬団に虎の見世物があつて、それを呼び物としているのもあろうか。

明智はそう考えて、一応は気を許したものの、しかし、なにかしら心の隅に、胸騒ぎのようなものをおぼえないではいられなかつた。

とらおとこ
虎男、こいつは謂わば虎男なんだ。それと「人間豹」と、

偶然の類似とは言いながら、異様に意味ありげではないか。それに、あいつは、なぜあんな張りぼての虎の首なんかかぶっているのだ。眼の部分だけくり抜いてある様子だが、そのほかは顔全体がまったく隠れてしまっているではないか。まるで顔を見られまいための巧みな工夫みたいに邪推じやしういされるではないか。あのおどけた張りぼての中に隠れているものは、もしや、もしや、探しに探している「人間豹」の無気味な顔なのではあるまいか。

先方は抜け道の向こうの出口に近い場所を、ノロノロと歩いていたのだが、明智たちがこちらの角を曲がって、姿を見せたとき、そいつは振り返って、じつと彼らを見つめていたように感じられる。それからというもの、なぜか一そう歩度をゆるめながら、ほ

とんど一と足ごとに、さもうさんらしく、こちらを盗み見ている様子である。ただのチンドン屋が、職工と「よいとまけ」にこんなに関心を持つというのは変ではないか。あの魔物のことだ。先方ではとつくにこちらの素すじょう姓を見破つて、張りぼての中で、燐りん光こうの眼を光らせて、せせら笑っているのではあるまいか。

それを確かめないでは気がすまなかつた。もしこの突飛とつぴな想像が的中して、かくもやすやすと怪人「人間豹」を捕えることができたら……と考えると、日頃冷静を誇る名探偵といえども、さすがに胸躍らないではいられなかつた。

明智は足を早めて虎男のチンドン屋に近づいていった。すると不思議なことには、相手の虎男は、何か明智をさそいでもするよ

うなそぶり、虎の頭で振り返り振り返り、裏通りへと曲がって行く。

明智は一ひと飛びでその角に達した。逃げようとて逃がすものかと、勢い込んで裏通りへ踏み出すと、そこに、虎とら男おとこがボンヤリと立ち止まっていた。

「おい、ちよつと君、その虎の被かぶりものを取つて、君の顔を見せてくれないか」

明智はチンドン屋に近寄ると、いきなり呼びかけた。

虎に化けた男は、少しのあいだ、その意味がわからなかつたらしく、だまつていたが、やつとして、

「エへへへへ、わたしの顔がごらんになりたいておっしやる

ので？」

と追ついで従しゅう笑いをしながら、至極しごくお手軽に張り子の被りものをヒヨイと持ち上げて見せた。

その下から現われた顔は、あの恐ろしい「人間豹」であつたか。いやいや、そうではなかつた。明智は思い違いの恥かしさに冷汗を流した。そいつの顔は恐ろしいどころか、実に突拍とつぱ子しょうしもない滑稽こっけいなものであつた。

黒々とした毬いがぐり栗頭の下に五十年配に見える骨張つた黒い顔、西郷さんの肖しょうぞう像画みたいなまっ黒な太い眉まゆ、そして、鼻の下には、何々將軍とでも言いたい、実に立派やかな太い八の字ひげが、両方の耳の辺まで、二た振りふの大だんびらのように、物々し

くはね上がっていた。

「や、失敬失敬、人違いだったよ。もういいからそいつをかぶつて、商売をはじめてくれたまえ」

明智がお詫^わびをして立ち去ろうとすると、チンドン屋は又エへへへへと笑いながら、「どうか、これを一枚」と、曲馬団の広告ビラをさし出すのであった。

明智はなにげなくそれを受け取ったが、ふと気がつくと、石版刷りの広告文の裏に、何か鉛筆でなぐり書きがしてあった。おや、変だぞ。新しいはずの広告ビラにこんなものが……と裏返して、そのいたずら書きに眼をそそいだかと思うと、明智の表情はみるみる緊張して行った。

明智君、文代さんは大丈夫かね。

おれは一度思い立った事は、あくまでやりとげる性分だよ。

見覚えのある筆癖、果たして虎と豹とはどっかで結びついていて。例によつて奇抜な「人間豹」の通信手段であつた。

「おい、君、これはまさか君が書いたんじゃあるまいね」

明智のするどい眼に睨にらみつけられて、虎男はオドオドしながら、また例のお追ついで従しよう笑いをした。

「エへへへへ、わたしじゃござんせん。つい今しがた、見知らぬかたにこう頼まれたんですよ。あの路地に待っていると、これ

これこういう風采ふうさいの人が今に通りかかるから、その人に渡してくれって、鉛筆でもってビラの裏へ何か書きつけて行つたのですよ」

「そいつの風体ふうていは？」

明智は啖かみつくように聞き返した。

「立派な旦那だんなでしたよ。洋服を着た三十くらいの……」

「顔は？ 顔は見覚えているだろうね」

「エへへへへへ、そいつはどうもハッキリしませんね。その旦那だんなは妙でしたよ。わたしに顔を見られたくないとみえて、面めんと向かうときには、必ずハンカチでもって鼻から下を押えてましたからね」

チンドン屋は、いかめしい將軍ひげにも似合わぬボンヤリ者らしく見えた。いくらか掴つかまされて、喜んでご用を勤めたのに違いない。

「チエツ、君は人間豹ひょうわさの噂を知らないと見えるね」

「えっ、人間豹ですって」

虎男はたまげた声を出した。いかにボンヤリ者でも、あの恐ろしい獣人の名を知らぬはずはないのだ。

「そうだよ。君が頼まれた男が、つまりその人間豹だったのさ」
明智は吐はき出すように言つて、

「そいつはどちらへ曲がつて行つたのだい」

「こつちですよ」

チンドン屋はオドオドしながら、ずっと見通しの町筋を指さした。

「急いでいたんだね」

「ええ、走るようにして曲がって行きましたっけ。すると、あいつが噂の人間豹だったのですかねえ。ブルブルブル、ああ、おっかない」

「その辺に自動車が待たせてあったのかもしれない」

「ええ、そうかもしれませんね。そんなこつてすね。ですが、自動車でなくったって、もう大分時がたっていますからね。この辺にグズグズしているわけはありませんよ。エヘヘヘヘ、じゃごめんなさい」

とらおとこ
虎 男 はいかにも愚鈍ぐどんな調子でそんなことをつぶやくと、虎の首をスツポリかぶり直して、ノロノロと立ち去って行つた。

明智小五郎は次にとるべき手段を、急速に考えなければならなかつた。だが、それを考えながら、ふと彼は背後の空虚を感じた。ゾクゾクと背筋を襲つてくる空虚の感があつた。

彼はそれが何を暗示するかを悟ると、思わずギョツとして振り返つた。すると、ああ、果たして彼の背後にいるべき人の姿が見えなかつた。「よいとまけ」姿の文代さんは、まるで蒸発でもしてしまつたように、谷底の抜け道から姿をかき消していた。

「何かあつたのだな」

明智はたちまちそれと直覚した。でなくて、文代さんがことわ

りもなく、彼の眼界から消え去るわけはなかったのだ。

赤い広告ビラの裏に、「文代さんは大丈夫かね」と書いてあったが、明智がそれを読んでいたその瞬間に、文代さんはもう「大丈夫」ではなかったのだ。

それにしても、一体全体どんな手段によつて、白昼雑沓ざつとくのただ中に、そのことが行なわれ得たのであろう。

「人間豹」いかに大胆不敵の魔術師とはいえ、これが果たして可能のことであつただらうか。

熊

明智がチンドン屋の跡を追って谷底の抜け道から裏通りへと曲がって行ったとき、「よいとまけ」姿の文代さんは、一と足ひおくれで、ちょうど抜け道の中ほどを歩いていた。

道の片隅に、低い鉄の欄干らんかんがあつて、そこから狭くなるしいコンクリートの階段が、建物の地下へと、陰気なほら穴のようにくだつていた。映画館の地階を区画した地底カフェの入口である。

文代さんが今その欄干のそばを通りすぎたとき、ほら穴の階段から、サツと黒いものが飛び出してきたかと思うと、いきなり彼女の背後から組みついて行った。

文代さんが両手を上げるのが見えた。だが、声を立てる暇はなかった。黒いハツピを着た男と「よいとまけ」の女とが、一とか

たまりになつて、異様な生人形のように動かなかつた。男の手はうしろから女の口へ、そこに白い布屑ぬのくずみたいなのが、猿ぐつわのようにお圧しつけられていた。

やがて、男はグツタリとなつた文代さんを、軽々とあつかつて背中におぶつたかと思うと、傍若無人にもその異様な姿で、映画街の表通りの雑沓ざつとうの中へと歩いて行つた。

男はきたないハツピ姿の人夫のような風体であつた。破れたお釜帽子かまの鍔つばが鼻の頭まで垂れ下がつて、その下から五分も伸びた顔じゆうの無精ぶしようひげが黒々とのぞいていた。それが女房とも見える「よいとまけ」女をおぶつて、人波をかき分けながら急ぎ足に歩いて行く。しかも背中の女は氣を失つてグツタリとなつてい

るのだ。女の両手が男の胸のあたりにブランブランと揺れているのだ。これが道行く人の注意を惹かぬわけはなかった。何百という顔が一いっせいに彼のうしろ姿にそそがれた。

だが、男はそんなことをまるで気にもとめない様子で、ドンドン歩いて行った。眼の前に六区の交番があつて、色の白い美男のおまわりさんが立ち番をしている。男は**ず**ば抜けた機智をもつて、そのおまわりさんの真正面に立ち止まつて、声をかけた。

「女房のやつがテンカンを起こしやあがつて、しようがねえんです。どつかお医者さんをお世話願えませんかでしょうか」

おまわりさんはそれを聞くと、迷惑そうな顔をした。

「医者つて、かかりつけの医者はないのか。お前どこのもんだ」

「へえ、三河島みかわしまのもんですが」

「三河島？ フン、そうか。この辺に知合いもないんだな。テンカンなら心配したことはないだろう。しばらくほうっておけばなおるんだろう」

「でも、なんとか手当てがしてやりたいんで。わっしの身になっちゃ、ほうっておくわけにもいきませんからね」

男はちよつと憤慨して見せた。

「そうか、それじゃ、実費診療所へでも担かつぎこむがいい。実費診療所知つてるだろう。本願寺の裏手にある」

おまわりさんはそれ以上取り合つてくれなかつた。そして、それが男の思つう壺ぼであつたのだ。彼は女をおぶつたまま、走るよう

にして映画街を抜け、いずこともなく姿を消してしまった。

文代さんが麻醉の夢からさめたとき、彼女はどこもしれぬ赤茶けた畳の、薄ぎたない部屋にころがっていた。

「気がついたかね。明智の奥さん、とうとうおれは君を手に入れたぜ」

ハツピ姿のひげもじやの男が、顔の上へのしかかるようにして、毒々しく呼びかけている。

「ハハハハハ、まだ頭がハツキリしないとみえるね。さア、もう眼をさますがいい」

男の一種異様の匂いにおを持った温かい息が、ムンムンと顔にかか

つてきた。

「まあ、ここはどこですか？　そして、あなたはいつたい……」
文代さんがギョツとして起き上がろうとあせりながら、詰問きつもんするようにならんだ。

「おれかね？」

すると男は、相手の苦惱を玩味がんみしながら、ゆっくりゆっくり答えた。

「おれは君のよく御存知の者だよ。ほら、この声に聞き覚えはな
いかね。ついこのあいだ、君の家の書齋で話し合ったばかりじゃ
ないか」

文代さんは、青ざめて、眼を大きく見ひらいて、だまつたまま

の男の顔を見つめている。

「ハハハハハ、顔が違うというのかね。それじゃ今見せてあげよう。さあ、この顔だ。まさかこの顔を忘れやしまいね」

男は眼を隠していたお釜帽子かまを叩き捨てるようにぬぐと、顔じゆうに伸びた無精ぶしようひげをモリモリと剥はぎ取って行つた。

「ああ、恩田……」

文代さんは男のそばを飛びのきながら、悲鳴を上げた。

「わかつたかね。その恩田だよ。もう一つの名は人間豹ひようつていうのだそうだね。君たちはうまい名をつけてくれた。フフフフ、おつと文代さん、逃げようたつて逃がしやしないよ。それから、君がいくら大きな声を立てたつて、ここには近所というものがな

いんだから、なんの役にも立ちやしないよ……気の毒だが観念するほかはあるまいぜ」

醜悪なけだもののくせに、まるで芝居のせりふみたいなことを言いながら、人間豹は身を縮めた餌食えじきの上にジリジリと迫ってきた。

野獣のように骨ばった黒い顔、ギラギラと青く光る巨大な眼、まつ赤な唇、ドキドキと研ぎすましたようなすどい歯、それが徐々に徐々に、文代さんのおびえた眼界一杯に、途方もない大写しになって接近した。

事実逃げようとして逃げる余裕はなかった。といって、この強力無双の怪物に打ち勝つなど思いも及ばぬことであった。多くの女

性は多分泣きわめきながら獸人の餌食となるほかはなかったであろう。だが、文代さんはそうはさせなかつた。

長い無残な悪戦苦闘であつた。文代さんの美しい顔は拳闘選手のように傷つき、着物はズタズタに裂け破れた。あばら骨が浮き上がるほどの息遣いに、喉は涸れ、舌は黒コゲのように干からびてしまつた。人間豹さえも、顔じゆうに脂汗を浮かべていたほどの戦いであつた。

むろん文代さんは死ぬほどの目にあわされた。だが、最後の線を譲ることはなかつた。それを死守する余力だけは残つていた。さすがの悪魔もあまりにも頑強な女性の力にあきれ果てて、愛慕から逆転して憎悪へと、第二の手段に移るほかはなかつた。

「へへへへへ」

悪魔のまつ赤に充血した口から、昂奮こうふんのあまりの調子はずれな笑い声がほとばしった。

「貴様、それじゃ早く殺されたいんだな。おれの方ではそれも望むところだよ。ちゃんと計画してあるんだ。思い切り奇妙な死刑の方法が考えてあるんだ。フフフフ、文代さん、恐ろしくはないかね……それとも思い直しておれの大事なお客様になるか。え、その気になれないのかね」

「……………」

「へへへへへ、怖い顔こわをして睨にらみつけたね。だが、今にそいつが泣きつ面つらに変わるんだ。その時になって後悔しないがいいぜ」

人間豹は倒れ伏した文代さんに顔を向けたまま、ニタニタ薄気味わるく笑いながら、横歩きに押入れの前に近づくと、その襖ふすまをガラリとひらいた。

押入れの中に大きな木箱が見えた。器械を送る荷造り箱のような厚い板の頑丈な箱だ。恩田はその蓋ふたをひらいて、中から何かを掴つかみ出した。

文代さんは明智の力を信じきっていた。相手が魔物なれば、彼女の夫は超人である。決して殺されることはない。必ず助けられる。名探偵明智小五郎は意想外の手段によって、不可能を可能にするのだ。最後の最後まで力を落とすことはない、固く信じきっていた。

だが、人間豹の怪しげな言葉を聞き、さも自信ありげなせせら笑いを耳にすると、さすがに脅おびえないではいられなかった。ちやうど外科患者が手術台やメスの棚たなをドキドキして盗み見るように、押入れの中の異様な箱に、そこから取り出された一物いちもつに、眼を注がないではいられなかった。

人間豹が魔術師のようなゼスチュアで箱の中から引きずり出したものは、ひどく嵩張かさばった黒くてグニヤグニヤした、何かしらゾツとするようなものであった。

はじめのうちは、薄暗い押入れの中で、その正体を見届けることができなかつたけれど、やがて、それがズルズルと明るみに持ち出されるに従って、そのものに顔のあることがわかってきた。

尖^{とが}つたまつ黒な顔だ、キラキラ光る眼、ガツクリひらいたまつ赤な口、ニヨキと覗^{のぞ}いた大きな牙^{きば}、そして、深々として黒い毛むくじやらの胴体、するどい爪^{つめ}のはえた四本の足。

熊だ。人間豹が熊を掴^{つか}み出したのだ。しかし、あんなにグニヤグニヤしている様子では、生きてはいない。では熊の死骸^{しかい}なのかいやいや、死骸^{しかい}にしてはお腹がひどくペチャンコだ。すると剥^{はく}製の毛皮^けなのかしら。だが、どこやら毛皮とも違うところがある。毛皮ならああまで生きものの感じが残っているはずはない。「へへへへへ、怖^{こわ}がることはない。まだ喰^くいつきやしないよ」人間豹は毛皮をムクムクもてあそびながら、文代さんに近づいてきた。彼は「まだ喰^くいつきやしないよ」と言った。では、いつ

かはこの熊が生き返って彼女を喰い殺すというのだろうか。まさかそんなばかばかしいことが起こるはずはない。そういう意味ではなかったのだけれど、あとになって考えると、このなにげない言葉の中に、実に身の毛もよだつ恐ろしい暗示が含まれていたのである。

「これは熊の衣裳いしやうだよ。人間がこの中へは行って、四つん這ばいになって、熊のまねをするんだ。おれがはいるんじゃない。むしろ君がこれを着るんだよ。そして、君はたった今から、熊になるんだ。恐ろしい猛獣になりきってしまうんだ。死んでしまうまで、もう二度と人間世界には戻れないのだ」

人間豹の語調はだんだんやさしく変って行った。そして、それ

と反比例して言葉の内容は恐ろしくなりまされた。

「さあ、いい子だから、おとなしく着更えきがをするんだよ。先まずそのバッチイのをぬいでと……」

恩田の無気味な指先が、文代さんのからだから裂け破れた半は纏んなどを、一枚一枚とはがしていった。最初のうちは抵抗をこころみたけれど、相手の目的が一変してしまったのだから、さいぜんのように死力を尽す必要も感じなかったし、それに第一からだじゆうの力という力が絞りしぼ尽されて、これ以上の抵抗はまったく不可能であった。彼女はほとんど夢心地ゆめごころちのうちに着物をはぎとられ、その上から温かい熊の毛皮をスッポリとかぶせられてしまった。

毛皮の腹部を切りひらいて、シャツのように隠しボタンがついてあるので、それを着てボタンをかけてしまおうと、どこにも継ぎ目のない完全な生きた熊が出来上がる。人間の足と熊の後足とはむろん形が一致しないのだけれど、その部分に巧妙な細工がほどこしてあつて、そこから見たところでは、少し後足が太い感じがするくらいで、そっくり本物の熊である。

「さあ、お熊さん、あんよだよ。あんよをするんだよ」

恩田は猫ねこなで声で言いながら、いつの間にも用意していたのか、猛獣使いの短い鞭むちを取り出すと、恐ろしい勢いで、可哀かわいそうな熊のお尻しりを叩たたきはじめた。しなやかな鞭が空気を切つて、パン、パンと部屋じゆうに鳴りわたった。

熊の中の文代さんは、むろん這^はい出す気持などなかったけれど、じつとしてみると、恩田が両手で腰を持ち上げて、グングン押すものだから、その惰性で二た足三足は這うことになる。それを何度も何度も繰り返しているうちに、この奇妙な人間熊は、とうとう部屋を一周してしまったのであった。

実におかしいとも恐ろしいとも名状のできない光景であった。空き家のように道具のないガランとした部屋の中、赤茶けた畳の上で、猛獣使いがはじまったのだ。大きな熊が芸当を仕込まれているのだ。

使われているのはほんとうの人間、皮一枚の下は美しい文代さんの丸はだかだ。そして、猛獣使いの方はというと、ハツピを着

て二本の足で立ってこそいるものの、彼自身一匹の猛獣なのだ。

豹の眼と豹の牙きばと豹の舌と、それから豹の心を持った獣人なのだ。

途方もない漫画まんがである。世にも恐ろしい残虐ざんぎやくな漫画である。

だが、「人間豹」は一体全体なにをしようというのであろう。

ただ熊の皮を着せてもてあそぶのが最後の目的ではないらしい。

文代さんの行く手には、もつともつと恐ろしいことが待ち構えて

いるのに違いない。恩田は「死刑」という言葉を使った。それは

果たしてどのような残虐を意味するのであろうか。

「では、きようはこのくらいにしておきましょうね。さあ、さあ、

お熊さんは檻おりの中でおとなしくしているんですよ」

恩田は熊を押し入れに追い込んで、例のがんじょうな木箱の中へ

抱き入れ、上から蓋ふたをしてしまった。

「お熊さん、お腹がへったでしょうね。いま持ってきて上げますよ。お前の好物の兎うさぎの生きたやつをね。しばらく待っているんですよ」

そして、ピシヤンと押入れの襖ふすまがしまった。

文代さんはもう身動きすることも、見ることも、聞くこともできなかつた。ただ地獄の暗闇くらやみと、墓場の静寂があるばかりであつた。墓場といえ、身じろぎもできない木箱の中は、なんとやら棺桶かんおけを連想させた。しかも地底に埋められた棺桶を。

だが、まさか文代さんをこのままにしておいて餓死がしさせるといふのではあるまい。「人間豹」の死刑はそんな生やさしいもので

はないであろう。ああ、いったいあいつは何を考えているのだ。熊の皮がそれにどんな関係を持っているのだ。早く知りたい。いかほど恐ろしいことにせよ、知らないよりはました。想像の届かぬ恐怖には耐えられぬ。

恐ろしき借家人

お話は元に戻る。

愛妻文代さんの姿を見失った明智小五郎の狼ろうばい狽は無理もないことであつた。名探偵だとして人間である。時には失策もすれば、狼狽もする。ただ彼の偉さは、精神的打撃を長引かせないことで

あつた。たとえ失策をすればとて、結局においてはその失策を取り返してあまりあるほどの、智力と活動力を持っていることであつた。かくのごとき人物にあつては、失策も失策ではない、狼狽も狼狽ではない。

彼は現場付近を走りまわつて、何かの手掛りを掴つかもうと力つとめたが、見込みがないと悟ると、最寄りの商店の電話を借りて、事の次第をK警察署の捜査本部に急報した。ちやうど警視庁の恒川警部も来合わせていたので、充分手配を依頼することができた。

それから少し落ちついた気持になつて、彼は例の六区の交番にも立ち寄つたが、運のわるいことには、「人間豹」と応対した美男のおまわりさんは、ちやうど少し前に別の人と交替して、

テンカン女の事を聞き知るすべもなかつた。もし明智があゝの奇妙な出来事を耳にしたならば、たちまち何事かを悟り、正確な捜査方針を立てることもできたのであろうが、ほんの一分か二分の喰い違いのために、思いもよらぬ結果を惹き起すこととなつた。

文代さん捜索のことは、すでに恒川警部が手配してくれているのだけれど、明智ともあろうものが、愛妻の事件をお上まかせにしておくはずはなかつた。彼は映画街を中心に、或いは表通り裏通りと、足にまかせて歩きまわつた。それがもう日頃の冷静を失つてゐる証拠しょうこでもあつた。彼は元來「足の探偵」ではなかつたのだから。

それからしばらくして、彼はとある裏通りの八百屋やおやの店の前に、

なにげなくたたずんでいた。青物を並べた店先に、近所のおかみさんらしいのが三、四人買い物をしている。ふと気がつくとき、その中の一人が妙なことをしゃべっていた。

「それが変なのよ、あんた。まるで顔も姿も見せないんですもの。あたしの所から三度の御飯を運んで行くでしょう。それをね、だまって台所の障子をあけて、板の間へ置いて帰るのよ。そうしてくれっていう固い約束なのさ。しばらくしてお膳を取りに行くでしょう。すると綺麗きれいに中身がなくなつて、空のお櫃ひつとお膳とが、ちやんと元の場所に出してあるのよ」

「まあ、いやだわねえ。そして、お前さん、その人を見たことがあるのかい」

「それがないんだよ。最初引越してきた人は、まあ立派な紳士だったんだけどね。どうもその人じゃないらしいの」

「へええ、なんだか気味がわるいみたいな話だね。でも、あんた、どうして人が違うってことわかって？」

「手を見たのよ。顔は見ないけど手だけを見たのよ」

「手がどうしたっていうの？」

「けさね、あいたお膳を取りに行つて、障子をあけるとね、少しあたしの行き方が早かつたのさ、ちようど御飯がすんだところと見えて、茶の間とのあいだの障子が細目にあいて、そこから空からのお膳を板の間へ出している二本の手が見えたんだよ。その手がね、あたしのあけた障子の音にびっくりして、サツと引つ込んだかと

思うと、いきなりピシヤツと茶の間の障子をしめて、ガタピシニ階へ逃げて行く足音がしたんだよ」

「まあ、よっぽど人眼を忍んでいるのねえ。でも、その手だけを見て人違いとわかったの？」

「ええ、あたしや、あんな気味のわるい手は見たことがないわ。

薄黒くつて毛むくじやらで、いやに筋張っていて、指が長くつて、指の先にはまつ黒になった爪つめが三分も伸びているのさ。最初あの家を借りた紳士は、決してそんな人柄じゃなかったのよ」

「いやねえ。じゃあその人、家にとじこもってて、そとへ出ないんだわね」

「ところが、時々はそとへ出るらしいのよ。それもこっそり出掛

けるとみえて、ついぞ見かけたことはないんだけれど、でも、出掛けている証^{しょうこ}拠には、いつの間にか二人になつてゐるんだものね。どっかから女でも引つ張り込んだらしいのよ。そして、おかしいじゃないか。おひるのお膳の上に手紙がのつかつてゐるのさ。晩から二人分持つてきてくださいって」

「あんた、それをほうつておくつもり？」

聞き手のおかみさんが、声をひそめて、まじめな顔になつて尋ねた。

「どうしようかと思つてゐるのさ。うかつなことをしては、あとが怖いしね」

「でも、それがもしや、あれだったら」ぐつと顔を近づけてささ

やき声になつて「人間豹ひょうだつたら大変じゃないの？」

ここまで聞けばもう充分であつた。明智はいきなり話し手のおかみさんに近づいていって、彼の本名を名乗つた。すると、おかみさんは、近頃評判の名探偵の名をよく知つていたので、スラスタと話が運んだ。

そのおかみさんは付近の仕出し屋の主婦であつた。お膳を運ぶ先というのは、つい四、五日前からふさがつた小さな借家で、あんまりひどいあばら家なのと、裏は堀へいひとえで「花やしき」の動物小屋だし、両隣はどつかの物置き場になつていて、なんとなく気味のわるい場所なものだから、長いあいだ借り手がつかなくなつたというのである。

借り手は独身ものの立派な紳士であつたが、おかみさんのところから三度の食事を運ぶこと、うちに人がいようといまいと、必ず一定の場所へお膳を置いて帰ること、決して台所から中へはいつてはならぬことなどを固く約束して、一か月分の前金を支払つた。しかし、現在住んでいるのは、今もいうとおり、決してその紳士ではないといふのであつた。

「僕が一度その家をしらべてあげよう。もし怪しいやつだったらすぐ警察に引き渡すし、そうでなかつたら君のうちに迷惑のかからぬように、僕がうまくしてあげるから。どうだね。そこへ案内してくれないだろうか」

明智が説き聞かせると、おかみさんはすぐさま承知して先に立

った。そして家主にも諒解^{りようかい}を得てもらった上、問題の借家の台所口につくと、おかみさんを帰して、明智はただ一人、相手に悟られぬよう注意に注意して、ソツと屋内に忍びこんで行った。

家の中はガランとして道具も人氣^{ひとけ}もなかった。音を立てぬように階下を調べ終ると、次には二階であった。おかみさんの話にもあつたとおり、怪しい男は二階に住んでいるらしいのだ。

明智は変装などする場合には、殊^{こと}さら探偵七ツ道具を忘れなかった。小型ピストルもそのうちの一つである。彼はポケットの中でそのピストルを握りしめながら、ヤワな段梯子^{だんぼしご}を少しも音を立てないように、カタツムリみたいな速度でのぼって行った。

だが、そうして長い時間を費やして、やっと階段の上に首を突

き出してみると、案外なことには、二階も同じようにガラんとして、いつこう人のいるけはいがしない。二た間きりの二階なのだが、開け放した襖ふすまのこちら側も向こう側も、まったく空っぽのように見えるのだ。

ひよつとしたら怪人物は外出したのかもしれない。だが二人連れのはずはない。少なくとも一人だけは、女の方だけは、ここに居残っているはずだ。いや、とじこめられているはずだ。

明智はだんだん気を許しながら、畳の上を這はうようにして、奥の八畳へはいつて行った。道具も何もない黴かびくさ臭い部屋、赤茶けた畳、障子の向こうに狭い縁側があつて、ガラス戸が閉まつている。

明智はその縁側まで行って、障子の蔭をかげしらべてみるつもりだった。そうすればあんなことは起こらなかつたのだ。ところが、部屋の中ほどまで行つたとき、彼をギョツとさせた異様の物音が響いてきた。

何か大きな物体がどこかでうごめいている感じだ。決して鼠ねずみなんかではない。ふと気がつくとき、右手の押入れの襖が、物音のたびごとに、かすかに揺れ動いていることがわかつた。

押入れの中に何かがある。むろん人間に違いない。だが、当とうの怪人物でないことは確かだ。もし彼なれば、明智の侵入を察しないはずはなく、敵に悟られるような物音を立てる気づかいはないからだ。

すると、この押入れの中にとじこめられている人物こそ、あの女に違いない。人間豹が誘拐ゆうかいした「よいとまけ」姿の文代さんに違いない。

明智はもうためらっていられなかった。彼はさいぜんもいう通り、愛妻を気づかうあまり、日頃の冷静を失っていたのだ。いきなり押入れの前に立ち寄ると、サツとその襖をひらいた。

すると、案あんの定じょう、そこには手足を縛しばられ、猿ぐつわをはめられた一人の人間がころがっていた。だが、明智にとつても、おそらくは読者諸君にとつても、実に意外なことには、それは文代さんではなかった。女ではなくて男であった。しかも明智がよく知っている人物。そもそも彼をこの怪事件の渦中に引き入れる最初の

きつかけとなつた人物、読者はむろん記憶されているであろう。それはかつての犠牲者レビュー・ガール江川蘭子の恋人、神谷青年のみじめな姿であつたのだ。

さすがの明智も、まったく予期しなかつた人物との、突拍子もない再会に、愕然がくぜんとしないではいられなかつた。

「アツ、君は」

神谷君じゃないかと言おうとしたのだ。だが、皆まで言う暇はなかつた。

その時、縁側の障子の蔭かげに身を潜ひそめていた男が、小豆色あずきのジャケツにカーキ・ズボンの拳けんとう闘選手けんとうみたいな大男が、すばやく明智の背後に忍び寄つて、手にした棍棒こんぼうを勢いこめて振りおろし

た。

明智は不覚にも不意を突かれて、身をかわず暇もなく、脳天に烈しい一撃を受けた。グラグラと天地が揺れるような感じ、たちまち眼界が闇に包まれて、地の底へ地の底へと落ちて行く。彼は気を失って、その場に倒れてしまったのだ。

「ウフフフフ、ざまあ見ろ、名探偵さん、意気地がねえじゃねえか」

大男は足先で、明智のからだを突つつきながら毒口を叩いた。
「お二人さんお知合いと見えるね。ちょうどいいや、仲よくここで寝んねをしているんだね」

彼は用意の細引を取り出すと、死人のような探偵のからだを、

グルグル巻きに縛り上げ、手拭を丸めて嚴重な猿ぐつわをほどこした。

「こうしてね、あすの晩方まで我慢するんだ。あすの晩には万事O・Kってわけだからね」

男は二人のとりこを見おろしながら、さも得意らしくつぶやくのであった。

何が万事O・Kなのだ。あしたの晩にはこの二人が処分されるというのであろうか。それとも、もつと別な、一そう恐ろしい事柄を意味するのであろうか。

この大男は一体なにものであろう。むろん「人間豹」の手下には違いないのだが、大敵明智小五郎をこんな男に任せておくところ

ろをみると、人間豹自身には、何かのつぴきならぬ仕事があるのかもしれない。いや、しれないではない。読者諸君はよくご存知だ。彼は熊娘の番人を勤めている。どこかしら別の場所で熊の檻を見張っている。そして、今にも恐ろしい死刑に着手しようと、あの赤い唇をなめずりながら 哄笑 しているに違いないのだ。

ああ、文代さんの運命はいかになりゆくことであろう。可哀そうな彼女は、明智がこのような目にあっているとも知らず、檻の中で、くらい熊の毛皮の中で、一日千秋の思いをして、名探偵の奇蹟的な出現を待ち望んでいるのだ。

それにもかかわらず、当の名探偵は、いつさめるともなく、昏々と眠っている。眠った上にご丁寧にも身動きもできず縛ら

れている。ああ彼は果たしてこの愛妻の期待を満たしてやること
ができるのであろうか。いかな明智の精神力をもつてしても、機
智をもつてしても、この難局を切り抜けるのは、ほとんど絶望的
なのではあるまいか。

明智小五郎よ。今こそ君の力をためす絶好の機会なのだ。そう
して、うちのめされて、縛られて、君の魂がこの世のほかの暗くらや
闇みをさまよっている今こそ、君の超人的精神力、魔術的機智を、
根こそぎ動員しなければならぬのだ。

喰くうか喰くわれるか

明智は、まっ黒な重い水の中をもがき廻まわっていた。もがけばもがくほど、泥沼の底へ底へと落ちて行く。助けなければならぬ。文代さんがはだかにされて、からだじゆうに血を流して泣き叫んでいるのが、黒い水をとおしてハッキリと見える。早く助けなければ、早く、早く。だが、あせればあせるほど、グングンと水底深く落ちて行くばかりだ。

実に長い長い時間、死にもの狂いの悪戦苦闘であった。烈はげしい意志と眠れる脳細胞との汗みどろの戦いであった。そして、ついに彼はまっ黒な水の中から、軽やかな水面へと浮かび上がることができた。ふと現実の物音がよみがえった。何か非常に大きな物音であった。だが、間もなく、それは彼自身の耳鳴りであること

がわかった。耳鳴りは徐々にその音を低めていって、やがて、耳鳴りのほかにはなんの物音もない静寂の中にいることがわかった。音ばかりではない。眼をひらくと、まだ悪夢のつづきのよう、あたりは黒暗々こくあんあんの闇やみであった。

次に彼はからだじゆうに異様な圧迫感をおぼえた。闇の中に横たわったまま、手も足も動かなかった。いや、身動きばかりではない。口をきくことさえもできなかつた。妙な錯覚が起こつた。おれは死んでしまつたんじゃないか。そして、重い墓石の下に埋められているんじゃないか。

だが、そのうちに、だんだん意識がハッキリしてくるにつれて、事の次第が判明した。あまりにもみじめな現在の立場が明らかと

なつた。

明智小五郎ともあろうものが、からだじゆうをグルグル巻きに縛しばられて、その上固い猿ぐつわをはめられて、あかりもない暗黒の部屋の中ころがさされているのだということが、ハッキリとわかった。

眼をこらしてじつと見つめていると、やがて、闇の中にも少しずつ濃淡ができてきて、ボンヤリと物の形が見分けられるようになった。たぶん昼間彼が昏倒こんとうした部屋であろう、家具も何もない六畳ほどの畳敷きだ。ズーツと見て行くと、隣の部屋との境に、何か生きもののけはいがした。呼吸をしている。かすかにうごめくのが感じられる。

突如として、そのものが、押えつけられたような声で、かすかにうめくのが聞こえた……人間だ。誰かが自由を失って倒れているのに違いない。

だが、たちまち事の次第がわかった、ああ、そうだった。ここには神谷青年が縛られて監禁されていたのだ。昼間、思いもかけぬ神谷の姿に、ふと気を取られていた隙に、あの一撃をくらって、そのまま昏倒してしまつたのに違いない。そして、知らぬ間に、彼も神谷と同じ縄目なわめにかかつて、こうしてころがされていたのに違いない。

「神谷君」

うっかり声をかけたが、それはみじめな唸りうな声でしかなかった。

猿ぐつわだ。口一杯の猿ぐつわだ。

では、せめて神谷のそばまでころがって行って、縄を解く工夫をしようと思をもがいたが、縄の端が柱にくくりつけてあると見えて、もがけばもがくほど、縄目が喰い入るばかりだ。

くろうと 玄人の縛りかただ。玄人の手にかかつては、一本の縄がいかに偉大な力を發揮するかを、明智はよく知っていた。これを解くのは智恵の問題ではない。腕力も玄人の縄目にかかつてはせんすべがないのだ。彼はもうむだにもがくことをやめて、なるべく楽な姿勢で仰臥ぎようがしたまま、眼をつむってしまった。

長い長い一夜であった。

そのあいだに二度ほど、梯子段はしごだんをギシギシいわせて、階下か

から見知らぬ大男が、監禁者を見廻りにやつてきた。

その都度天井からぶら下がっている電燈が点ぜられた。

そいつは、派手な色のアンダー・シャツを着た、六尺もあろうかと思われる大男であつた。顔じゆうに無精ひげがモジャモジャした熊みたいなやつであつた。むろん「人間豹」に頼まれた無頼漢らいかんに違いない。

「気がついたかい」

男は明智の顔を見おろして、ニヤニヤ笑いながら言つた。

「フフン、探偵さん命拾いをしたね。じゃあ、まあ、おやすみ」
彼は無慈悲にそんな事をいつて、パチンと電燈を消した。

やがて夜が明けて、雨戸の隙間すきまから明るい光がさしはじめた。

部屋の中が夕暮ほどの明るさになった。それからまた長い時間がたつて行つた。見張りの男は夜が明けてからも二、三度上がつてきたが、ジロジロと二人の監禁者を眺める^{なが}だけで、無言のまま降りて行つた。彼の右手には思わせぶりなピストルが、スワと言え**ば**ぶつ放すぞと、威嚇^{いかく}するように光つていた。

先にもしるした通り、その空き家は浅草公園に接してはいるものの、不思議と淋^{さび}しい場所にあつた。うしろは煉瓦^{れんが}塀^{べい}を隔てて動物園だし、両隣は人も住めないほど荒れ果てた小屋同然の建物だし、前の往来も、片側は大きな料理屋の裏手になっていて、遊覧客の通るような道ではない。少しくらい大きな声を立てたとて、雨戸とガラス戸を越えて、うまく通りがかりの人の耳にはいるか

どうかも疑わしい。しかも監禁者は二人とも嚴重な猿ぐつわをはめられている。そのすき間から叫んでみたところで、瀕死ひんしの病人の唸うなり声ほどにしか響きはしないだろう。

やがて、正午近くとおぼしきころ、例の猛獸みたいな大男が、一方の手にはピストル、一方の手には二本の牛乳の瓶びんを持って、ギシギシと上がってきた。

「探偵さん、それから、そつちの兄ちゃん、君たちにちよつと相談があるんだよ」

男は部屋のまん中にしゃがんで、二人の顔をジロジロ見おろしながら、しわがれ声ではじめた。

「おれは何も君たちを干し殺すつもりはないんだよ。さぞ腹がへ

つただろうね。君たちが案外おとなしくしていたのに免じて、ご馳走ちそうをしようと思うんだ。ところで、言っておくがね、猿ぐつわを取ったからといって、無闇むやみに大きな声を立てたりするんじゃないぜ。もつとも、君たちがそんなことをすりやあ、こいつがズドンとお見舞い申すんだから、いっこうかまわないようなもんだが、おれだつてなるべくなら人殺しはしたくねえ。円満にやりたいからね。どうだい、声なんか立てないと誓うかね。そうすりやあ、このミルクを飲ませてやるんだが」

明智も神谷も、残念ながらお腹がペコペコだった。男の慈悲を受けるほかはない。それに、明智としては、猿ぐつわをはずした機会に、この男に尋ねてみたいことがあつたのだ。

「フン、二人とも声を立てないというんだね。ヨシ、それじやいま猿ぐつわをとってやるぜ」

男は二人を抱き起こして、それぞれ彼らの括くられている柱に上半身をよりかからせ、猿ぐつわをはずしてくれた。

「ハハハハハ、そんなに心配しなくつてもいい。僕は大声なんか出しやしないよ。僕はこんなみじめなざまを人に見せたくはないんだからね。助けになんかこられちやあ、僕の方こそ困るんだよ。安心したまえ」

明智は相手の男が油断なくピストルを構えているのを見て、ニコニコしながら言った。

「ウン、そうか。なるほど、そういやそんなもんだな。明智とも

あろうものが、このざまじゃあね」

男は憎々しく言つて、ピストルを下げた。

「僕は君に二つ三つ尋ねたいことがあるんだが、その前に先^まずそいつを飲ませてくれたまえ。なにしろ喉^{のど}が乾いて仕方がないんだ」
明智と神谷とは、次々に、男の手から一本ずつの牛乳を取つて、うまそうにゴクゴクと飲み終つた。神谷青年は、グツタリとして、物をいう気力もない。口をきくのは明智ばかりであつた。

「やあ、ありがとう。うまかつたよ。ところで先ず第一に尋ねたいんだが、きのう僕をここへ案内した飯屋のおかみさんとかいう女は、たぶん君たちの仲間だつたんだらうね。君たちというのは、つまり『人間豹』の一味のことなんだが」

それを聞くと大男は唇の隅で嘲笑あざわらった。

「フン、それを今気づいたのかね。遅かったねえ。するとお前さんはゆうべじゆう助けのくるのを心待ちにしていたんだね。フン、そいつは虫がよすぎらあ」

事実、明智はそれを不思議に思っていた。彼がこの空き家にはいったまま、いつまでも出て行かないのを知ったら、あのおかみさんはこの事を警察へ訴え出るに違いないと思っていた。だが、いつまで待っても救いのこないところを見ると、あのおかみさんそのものが賊の一味であつて、明智をこの空き家へ誘い込むために、巧みなお芝居をうったとしか考えられぬ。あのととき家主に断わってきたというのも、でたらめだったに違いない。

「ホウ、なかなかやるねえ。あの女は名優だよ」

明智は感に堪^たえて言った。

「すると、このうちの借り主というのは君だったのかい。僕は恩田自身がここにいるんだと思つたが」

「そう見せかけたのよ。でなくつちやあ、けだものは罊^{わな}にかからないからね。おれがこのうちの主^{あるじ}だよ。おれのほかには猫^{ねこ}の子一匹いないのさ」

「ホウ、君一人か。それで怖^{こわ}くないのかい。いくら縛^{しば}られていたつて、僕は明智小五郎だよ」

「アハハハハ、おどかすない。おらあ一人じゃねえよ。ここにもう一人、ちつちやいけれど、恐ろしく強い味方がいらあね。いく

ら名探偵だつて、身動き一つさせるこつちやあない……おらあ命
しらずの権ごんてえもんだよ」

男は小型のピストルを、手の平の上で、ピヨイピヨイと踊らせ
ながら、ふてぶてしく答えた。

「ところで、君は僕たちを一体どうしようっていうのだい。恩田
は君に何を命令したんだい。二人とも殺してしまえとでもいいつ
けられたのかい」

明智がからかうように尋ねた。

「ウン、いずれはそういうことになるらしいんだ。だが、今じゃ
ない。まあ、夕方までは大丈夫らしいよ」

男は歯をむき出して、憎々しく宣告した。

「ホウ、夕方まで？」

「ウン、それまでは、人間豹の方で手の離せないことがあるんでね。喰くうか喰くわれるかっていうやつだよ」

「喰くうか喰くわれるかだつて？」

明智が妙な顔をして、するどく尋ねた。「喰くうか喰くわれるか」、その言葉に何かしら記憶があつたのだ。

「アババババ、こいつは言うんじやなかつたつけ。なあにね、ともかく夕方まではお前たちの命に別状はないっていう話さ。それだけのことよ」

急いでごまかそうとしたが、この重大な言葉を迂闊うかつに聞き流す明智ではなかつた。彼はその奇妙な文句が、もしかしたら愛妻文

代さんの運命を暗示しているのではないかと考えた。どうもそう
としか思えない。だが、いったいどんな運命を？

彼はじつと空間を見つめたまま、頭の芯しんへ錐きりをもみ込むように
して、何かを思い出そうとあせった。長い沈黙がつづいた。今に
も思い出せそうでいて、すぐにも手が届きそうでいて、なかなか
浮かび上がってこない一いち物もつを、必死になつて考え出そうとした。

金口の巻煙草まきたばこ

だが、やがて、青ざめていた明智の顔にサツと血がのぼった。

何かしら悟るところがあつたのに違いない。そして次の瞬間には、

彼の眼に恐ろしい焦慮しょうりよの色が浮かんだ。こうしてはいられない。文代さんが危ないのだ。しかし、この嚴重な監禁をどうして脱出することができらるだろう？

「ところがね、君、僕は夕方までここにはいないつもりだよ」

突然、明智はニコニコした表情になって言い放った。

「おいおい、から威張りいばはよせよ。いないつもりだって、おれの方でいさせておくんだからしようがないじゃないか」

「この縄なわかね？」

「ウン、それもあらあ、どんな縄抜きの名人だって、その縄だけは、ちよいと抜けられめえよ」

「それから、そのピストルかね」

「ウン、そうよ、そうよ。この小つちやい仲間、まことに気持ちのいいやつでね。貴様たち二人くらいの命を取るのなんの造作ぞうさきもありやしないのさ」

「ブルブルブル、おお、怖い怖い。それじゃあ、まあおとなしくころがっているとしようかね」

明智はおかしそうに笑い出して、ゴロリと横になった。

「なんだか薄気味のわるいやつだなあ……だが、そうおとなしくしていりやあ、こつちも別に文句はねえ。じゃあまた窮きゆうくつ屈くつだろうが、こいつをはめさせてもらおうかね」

男は固く丸めた手拭てぬぐいを取って、再び猿ぐつわをはめる用意をした。

「おい、君、そいつをはめる前に、一つ頼みがあるんだがねえ」
明智がやっぱりニコニコして言い出した。

「なんだ」

「君は煙草を持っていないかい。腹がくちくになると、今度は一服吸いたくってねえ。面倒ついでに、一つ煙草もくわえさせてくれないか」

「ウン、煙草か。感心だよ。さすがに度胸が据すわっているねえ。
お安いご用だ。だが、おあいにくと、切らしたよ。おれもさいぜ
んから一服やりたくってしようがねえんだが、君たちをほうつて
おいて買いに出るわけにもいかずねえ。気の毒だが我慢してくん
な」

「やれやれ、そいつは残念だなあ……待てよ。おい、君、あるよあるよ。僕の内ポケットにシガレット・ケースがはいつているんだ。その中にまだ二、三本残っているはずだよ。君、すまんがこのポケットへ手を入れて、そいつを出してくれないか。むろん君にも一本進呈するよ。M・C・Cだぜ」

「ウン、M・C・Cとは、聞き捨てにならねえな。久しくお眼にかからねえよ。よしよし、いま出してやるよ」

男はよほどの煙草好きとみえて、相好をくずしながら、明智の職工服の内ポケットへ手を入れた。きたない職工服から銀のシガレット・ケースだ。それからもう一ひと品、大型の万能ナイフがチカチ音を立てて一緒に引っ張り出された。

「おや、こんなものを持っていやあがる。危ない危ない。こいつはこつちへ預かっておいてと」

男は万能ナイフをわきに置いて、それからシガレット・ケースをパチンとひらいた。

「あれ、金口だぜ、今時流行はやらねえじゃねえか。それに、二本ぽつちだぜ」

「二本でもいいじゃないか。僕が一本、君が一本」

「ウン、まあ我慢して仲よく一本ずつ分けるか。二本とも没収しちゃつてもいいんだが」

さいぜんからの話しぶりでもわかる通り、この拳けん闘とう選手みたいな大男は、悪人に似合わぬお人よしとみえる。

彼は寝ころんでいる明智の口へ、一本の金口の巻煙草をくわえさせて、マツチをすつてやった。

「いや、ご苦労ご苦労、実にうまいよ。さあ、君も遠慮なくやりたまえ」

明智は青い煙をフーツと天井へ吹きつけながら、くわえ煙草で、ほがらかに勧める。

男はなかなかの煙草好きとみえて、かお薫りのよい煙を感じると、もう我慢できないといった調子で、自分も一本の金口を取って、火をつけ、いきなりスパスパとやり出した。

「ところでねえ、君、君は乙曲馬団というのを知らないかね」
明智はなにげない世間話のようにはじめた。

見ていると、妙なことに、彼はM・C・Cの煙を、惜しげもなくフーフーと吐き出すばかりで、深く吸い込む様子がない。ほんとうに煙草がほしかった人とも思われぬ仕草だ。しぐさ

乙曲馬団と聞くと、男はなぜかドギマギして、あまりうまくな
い答え方をした。

「知らないよ。そんな曲馬団なんて」

「そうかい。たぶん知ってるだろうと思つたがねえ」

明智は眼を細くして、睫毛のあいだから、じつと男の様子を見
つめていた。

男はだまり込んで、むやみに煙草を吸っている。あまりにのん
びりとしたテンポののろい会話、敵味方とも思われぬほがらかな

情景、何かしら物憂い生暖かい空気が部屋を包んでいた。睡ねむけ気をもよおすような一時が経過した。

「ハハハハハ、さて大将、いよいよお別れの時がきたようだね」
突然、明智が煙草の吸いさしを吐き出して、低く笑いながら言
った。

だが、相手の男はこの暴言になんの答えをする力もなかった。
彼は煙草を持った手をダランと垂れて、ポカンと口をあいて、
物憂い春霞はるがすみの中に、さも心地こころよく舟を漕こいでいた。コクリコ
クリと、居眠りの最中であつた。

「神谷君、ご挨拶あいさつはあとです。僕らは助かりましたよ。こいつ
は眠ってしまったのです」

明智が今までとはうって変った緊張した声で、かたわらの青年に呼びかけた。

疲労のために、いくじなくグツタリしていた神谷青年は、この明智の声にハツと身を起こした。

「では、今の煙草に何か……」

「そうですよ。僕はいざという時の用意をおこたつたことはありません。僕の内ポケットには、どんな時でも必ず二本のウエストミンスターかM・C・Cの、強い麻酔剤を仕込んだ巻煙草が、ちやんとはいつているのですよ。僕はそれをちつとも吸い込みはしなかつた。ところが、先生は煙草に餓えていて矢鱈やたらに吸い込んだのですからね。たちまちこの有様です。もう踏んでも蹴けつても

眼をさますことじやありませんよ」

「ああ、そうでしたか」

神谷は名探偵の用意に感嘆して、

「ですが、この縄なわをどうして」

と、まだ不審顔。

明智は「あれ」と眼で教えておいて、いきなり腹はらば這いになると、

さいぜん男が彼のポケットから掴つかみ出して畳の上に置いた万能ナイフの方へにじり寄って行き、やつとのことで、それを口にくわえた。

それから、ナイフの柄えを柱の角に当てて、器用にその刃をひらくと、柄の方を奥歯でしっかりと支えて、われとわが胸の縄をゴ

シゴシこすりはじめた。

恐ろしき猛獣団長

たちまちにして主客顛倒てんとうであった。明智は苦心して彼自身の縄を解くと、神谷青年も自由にしてやり、次には、そこにうづくまつて寝込んでいる大男を、あべこべにグルグル巻きに縛り上げしば、猿ぐつわさえかませてしまった。

それがすむと、明智はさいぜんから、一ひと眼見たくてウズウズしていた一いちもつ物を、右のポケットからつまみ出した。ほかではない。きのう文代さんを見失う直前、將軍ひげいかめしいチンドン

屋から受け取った、赤い広告ビラをクチャクチャに丸めたものであった。その広告ビラの裏面に、例の「人間豹」の挑戦状が鉛筆で書きなぐってあったのだ。

彼は「人間豹」の手下の大男が「喰うか喰われるか」という妙な言葉を口走った時、どこかで読んだ文句だがと、薄れた記憶を辿りに辿って、やっとそこへ思い当たった。その文句は、一と眼見てなにげなく丸めてしまった赤い広告ビラの表面に、初号活字でデカデカと印刷してあった文句なのだ。明智はクチャクチャになつた広告ビラを、丁寧にひろげてそれを確かめた。そこには下手な文句で次のような文章が印刷してあるのだ。

喰うか喰われるか!!

印度インドの猛虎と北海の大熊の大血闘!!

わが乙曲馬団は愈々いよいよ数日中に東京市民諸君に訣別致すこととなりましたが、訣別にのぞみ御愛顧御礼として、来る×月×日午後一時より、特別番外猛獣団長大山ヘンリー氏の出演を乞い、印度産猛虎と北海の大熊との、喰うか喰われるか、血を見ざればやまぬ、猛獣大格闘を御覧に供します。何を申すも猛獣同士の闘いの事なれば、何れか傷つき斃たおれますは必ひつじよう定、この一回を御見逃しあつては二度と見られぬ凄絶せいぜつ惨絶の大場面、当日は全市民各位の御来観御声援を切望致す次第で御座います。

とあつて、紙面の上欄に、一個奇怪な人物の写真が、大きく印刷され、その下に「世界的猛獣団長大山ヘンリー氏の肖像しょうぞう」
としるしてある。そして左下の隅に、虎と熊との大格闘の挿絵さしえまではいっているのだ。

明智はきのう、裏の挑戦文ばかりに気を取られ、広告の方はよくも見なかつたし、猛獣団長の写真などいっそう注意もしなかつたが、いま見ると、これは不思議、そこに大山ヘンリー氏として掲げられている人物は、ほかでもない、きのうの將軍ひげのチンドン屋その人ではないか。世界的団長自ら広告幟のぼりを担かついで、ピラを配つて、浅草界隈かいわいを歩いているなんて、なんとまあインチキな、人を喰つたしわざであるう。

明智はじつと穴のあくほど、その奇妙な写真を見つめていたが、やがて、何を悟ったのか、いきなり神谷青年の眼の前に、広告ビラをさし出して、あわただしく尋ねた。

「神谷君、これ、この写真をよく見てください。君はこの写真から何か感じませんか。この人物に見覚えはありませんか」

神谷は明智の権幕にびっくりして、広告ビラを手に取ると、その写真をしばらく見つめていた。

「そういえば、なんだか見たような顔ですね。しかし……」

「思い出せませんか。それじゃね、そのピンとはねた黒い将軍ひげを取って、その代りに白い口ひげと、それから、房々した白い顎^{あご}ひげを想像してごらんなさい。そういう爺^{じい}さんを見たことはあ

りませんか」

「白い口ひげ、白い顎ひげ……おや、そうだ。あいつとそっくりだ」

神谷は愕然^{がくぜん}として色を変えた。

「恩田の父親ですか」

「そうです。そうです。あいつに違いありません。だが、どうして……」

「たぶんそんなことだろうと思っただけです。僕は恩田の父親というものにはまだ対面したことがないので、君に尋ねてみたのですが、やっぱりそうだ。神谷君、こいつは、きのうチンドン屋に化けて浅草の映画館の横で僕たちを待ち受けていたのですよ。そし

て、こいつが僕を裏通りへ誘って、こんな挑戦状みたいなものを渡して暇取っているあいだに、息子の『人間豹』のやつが、僕の家内を引っさらって行ったのです」

「ああ、そんな事があったのですか。とうとう先生の奥さんまで……それじゃ早く救い出さなければ」

「僕もそれを考えているのです」

「どこへ連れて行ったのか、お心当たりは？」

「この乙曲馬団の中だと思っております」

明智が青い顔をして答えた。

「エ、曲馬団の中ですか？」

「しかも、僕は今、ふと恐ろしいことを考えたのです。ハハハハ

ハ、なあに、僕は少し神経衰弱になつて居るのかもしれない。
だが、ひよつとしたら、ああ恐ろしい……」

明智ともあろうものが、この恐怖、この戦慄せんりつは何事であろう。
「なんです。どうなすつたのです」

神谷青年が心配して、探偵の顔をのぞきこむ。

「いや今は聞かないでください。お話するさえ恐ろしいのです。
しかし、僕は急がなければならぬ。だが、間に合うかしら」

明智は腕時計を見た。幸い破損せず動きつづけていた。

「一時五分前だ。こうしてはいられない。神谷君、わけはあとで
話します。僕と一緒に来てください」

言うなり、彼はもう梯子段はしごだんを駈かけ降りていた。神谷青年もあ

とにつづく。表に出ると浅草公園へと急いで、その入口にある公衆電話へ、呼び出した先はむろんK署の捜査本部。折よく恒川警部が居合わせて電話口に出た。明智はそこで文代さんの行方ゆくえについて、「人間豹」の本拠ほんきよについて、それを攻撃する手段について、手短かに打ち合わせをすませると、公衆電話を飛び出し、大通りに駈かけつけて、一台のタクシーを呼び止めた。

乙曲馬団

東京市民生活の触手が、田園農民生活の中へ突入し、市民と農民とそれから小工場労働者とが渦を巻いて入れまじっているよう

な、大東京西南の一隅M町の、ほこりっぽい古道具市で有名な広場に、一か月ほどもうちつつづけている大サーカスがあつた。その名は乙曲馬団。

その曲馬団の大テントの正面に、きのうから、突如として無気味な絵看板が掲げられた。三間四方もある大看板一杯に、黄色に黒く斑はんもん紋美しい猛虎もつこと、まつ黒な大熊とが、双方後あとあし肢で立ち上がつて、お互いの肉に鋭い爪つめをうち込みながら、まつ赤な口、まつ白な牙きばを咬かみ合わせ、血みどろになつて格闘している凄惨せいさんの場面が、毒々しい泥絵具で描いてある。

「虎とらと熊とがどつちか死ぬまで戦うんだつて」

「喰くうか喰くわれるかだよ」

絵看板の前の人だかりは、恐ろしい見世物の刻限午後一時が近づくとつれて、刻一刻その数を増して行った。

「さあ、お早くお早く、虎と熊の格闘がいよいよはじまる。これを見落としたら二度と再び見られぬ。孫子の末までの語り草だ」

木戸口に半纏姿の男が、顔をまっ赤にしてどなっている。

その木戸口には、ゾロゾロと数珠つなぎの入場者だ。そこをはいると、いつもの見物席のほかに、曲馬の馬場の中まで一面に蓆むしろを敷いた臨時見物席、見渡す限り頭、頭、頭、ギツシリのお客さんだ。それが、シーンと鳴りを静めて、やがてはじまろうとする異常の見世物に、期待の胸をときめかせている。

正面の一段高い舞台には、古びたビロードのドンチョウが、そ

のうしろにいるに違いない激情的な生きものを隠して、なにげなく下がっていた。赤茶けた色のドンチョウには、金モールで乙という巨大な文字が浮き出している。

「ゴーン、ゴーン、ゴーン……」

突如として耳を聳ろうするドラの響き。

一としきり、稲穂の波打つような客席のざわめき。あちこちに起こる咳せきばら払いの音。やがてそれもピッタリと静まって、水をうったような広いテントの下。

スルスルとドンチョウが上がった。

舞台中央に立った一人の異様な人物、金モールの飾りいかめしい赤ビロードの上衣うわぎ、ズボン、同じくピカピカ光るビロード帽子、

スペインの闘牛士そのままの扮装ふんそうである。しかもその人物の顔のまん中には、これはこれとは驚くばかり立派やかな、ピンと耳のそとまではねかえった、まつ黒な將軍ひげが、物を言うたびごとに、ピョコピョコと動いていた。これぞ猛獸団長大山ヘンリー氏その人である。

彼は猛獸用の鞭むちを両手にもてあそびながら、將軍ひげにふさわしいもつたいぶつた口調で、しきりと前口上を述べ立てている。

「……さて、いよいよあれなる二つの檻おりを、ピツタリと密着いたし、あいだの扉とびらをひらきまして、虎とらと熊とを一つにいたしまする」

彼が鞭で指さす舞台後方には、車のついた二つの檻が、奥深く、薄暗く見えて、その一方の檻には、さも精悍せいかんな一匹の虎が、狭

い鉄棒のあいだを、ノソリノソリ、往ったり来たりしながら、時々「ウオー」とすさまじい咆哮ほうこうを発している。もう一つの檻の中には、虎に比べて二倍もあるような黒い大熊が、これはまあなんといくじのないことか、さもさも相手が怖こわくてたまらないという恰好かつこうで、隅つこの方に身をすくめ、すっかりおびえきつてい
るようすだ。

「……熊は臆おくびよう病者でござりまする。だが、観客諸君、決してご心配には及びません。ああ見えましても、いざ敵の襲撃を受けますると、彼はたちまちその本性をあらわし、猛然と立ち上がるのでござります。熊はおそらく最初まず張りの一ひと手を用いるで
ありましよう。しかして虎は低く喰くい下がって、そのするどい牙きば

と爪つめを存分に揮ふるうでありましょう。さてしばらく揉もみ合いまするうちに、猛獸のいずれかが傷つくは必ひつじよう定、さあ、一たん血を見ますると、肉に餓うえたる彼らは、俄がぜん然としてその兇きようぼう暴性を増しきたり、ついには敵の喉のどぐえ笛ふえを、バリバリと喰くい裂かずしてはやまぬのでござりまする」

將軍ひげの猛獸使いは、そこでちよつと言葉を切つて、彼の弁舌の効果を確かめるように、静かに場内を見まわした。

「観客諸君、皆さんは実に果報者でいらせられまするぞ。一頭一万円もしまする猛獸が、傷つき、倒れ、皮を破られ、肉を食い裂かれ、骨となるまでの、身の毛もよだつ光景を、今まざまざとごらんなさるのでござります。いやいや観客各位、そればかりでは

ありませんぞ。猛獣は泣き叫ぶのです。狂乱して逃げまどうのです。ああ、まるで、それは人間のように、か弱い美しい女のように、助けを求めて泣きわめくのです。皆さんの前に、どんなむごたらしい光景が展開いたしますことやら。凄絶せいぜつ、惨絶、奇絶、怪絶、おそらくは観客諸君の夢にも想像されぬところでござりましょう」

ひげの猛獣使いは、何かしらわけのわからぬことを口走った。ただ観客を怖こわがらせるための誇張にすぎないのであろうか。それとも、彼のこの異様な言葉の裏には、真実何か恐ろしい意味が隠されていたのではあるまいか。

「さて、長口上はこれにとどめ、いよいよ、喰うか喰われるか、

猛獣血闘の実演をごらんにご供するでござりましょう」

鞭むちを斜しやに構えて、気取ったお辞儀をすると、金ピカ猛獣使いは、舞台の隅にしりぞいて、道具方に合図をした。

「ゴーン、ゴーン、ゴーン……」

またしても鳴り響くドラの音。

舞台に走り出た八人の男は、二つの檻おりに四人ずつ、ゴロゴロとそれを滑らせて、舞台前方に引き出し、檻と檻とをピッタリ合わせ、嚴重な金具をはめた。

大山ヘンリー氏が、またしても一步前に進んで、丁寧ていねいな御挨拶おあいさつ。すると、男どもの手で、檻と檻とのあいだの二枚の扉とびらが、ガラガラと引き上げられた。たちまちにして、二つの檻は一つと

なった。

明智小五郎と神谷青年とが、浅草公園横の大通りで、タクシーを呼び止めたのが、ちょうどその時分であった。

「M町の三つまただ。料金はいくらでも出す。五分間で飛ばしてくれたまえ」

明智が車上の人となるや、運転手にどなった。

「五分間ですって！ いやあ、そいつあ無理ですよ。どんなに飛ばしたって、十分はかかりまさあ」

だが、運転手はまだ若いすばしっこそうな男だった。

「速力の規定なんか無視しても構わん。僕は警察関係のものだ。」

決して面倒はかけない」

「だって、市内ではいくら飛ばそうたって、先がつかえてまさあ
運転手はもうスピードを出しながら、どなり返す。

「よし、それじゃ、懸賞つきだ。前の自動車を一台抜くたびに十
円だ」

「十円？ 心得たつ。だが、旦那だんな、何十台抜くかわかりませんぜ。
あとで冗談だなんて言いつこなしだぜ」

たちまち車は矢のように飛んだ。

道行く人々が急流のように後方に流れ去る。ああ、一台又一台、
電車も、自動車も、トラックも、すれ違つてはあとに残されて行
く。十字路の信号燈を無視したことも一度や二度ではなかった。

「コラ、待てっ！」

大手をひろげてどなっているおまわりさんのまつ赤な顔が、しかし、みるみる小さく小さく遠ざかって行く。

舞台では一つになった檻おりの中で、二匹の猛獣の睨にらみ合いがつづいていた。睨み合いといっても、熊の方はさいぜんの姿勢のまま、首を垂れてじつとうずくまったまま、死んだように動かない。それに反して精悍せいかんな猛虎もうこは、長い尾をクルツクルツと表情たつぷりに廻かいてん転させながら、首を低く、身を縮めて、襲撃の前奏曲、低い唸うなり声をゴロゴロと鳴らしている。

「熊あ、熊あ、しっかりしろっ！」

へんてこなかけ声が客席の一隅に起こった。

「虎公とらこう、やっつける。ほらっ、飛びかかれっ」

また別の声援が、突拍子とつぴょうしもない声で響きわたった。

だが、猛獣はなかなかおだてに乗らず、睨にらみ合いをつづけたまま動かない。ただ、徐々に徐々に、猛虎もうこの唸うなり声が高まって行くのが感じられた。

たまりかねた観客席から、ついに怒濤どとうのような喊かんせい声せいが湧わき起こった。

「やれ、やれえ……」

「やっつけるい……」

「ワツシヨイ、ワツシヨイ、ワツシヨイ……」

猛獸よりも先に、見物が昂奮こうふんしてしまった。大テントの下は、今や汗みどろの激情のルツボであつた。

満を持して動かなかつた猛虎も、この騷擾そうじょうに刺戟しげきされないではいられなかつた。彼は一刹那いつせつな、弓のように身を縮めたかと思つと、たちまち一発の巨大な弾丸となつて、熊を目がけて飛びかかつていった。

「ワーツ……」

と上がる喊声、見物席は総立ちとなつた。だが、なんとというあつけなさ。大熊はまったく無抵抗であつた。虎の一撃にゴロリと倒されるとそのまま、四肢ししを上にして、仰臥ぎようがしてしまつた。

「熊あ、すっかりしろつ」

虎は相手の無抵抗に、かえつておびえたように、又もとの位置にしりぞいて、第二の襲撃の姿勢を取り、じつと敵の動静をうかがっている。

すると、その時まで、まるで眠っているか死んでいるとしか思えなかつた大熊が、仰臥のままモガモガと、四肢ししを動かしはじめた。そして、やつこのことでまともに起き直ると、じつと虎の方を見つめていたが、ああ、これはどうしたというのだ、熊はまるで気でも違つたように檻おりの隙間すきまからそとへ逃げ出そうと、みじめにもがきはじめるのであつた。それと同時に、どこからか、かすかにかすかに身の毛もよだつ女の悲鳴が、客席にひろがって行った。

だが激情の見物たちは、まだその悲鳴に気づかなかつた。騒そうじ擾ようの中で聞き取るには、あまりにもかすかな声であつたから。

熊は檻のそとへ出られぬことがわかると、いきなり後足で立ち上がり、飛んだり跳ねたり、氣違い踊りをはじめた。踊りながら、広くもあらぬ檻の中を、縦横無尽に駈かけまわつた。

そのあいだ、いぶかしい女の悲鳴は切れてはつづいていた。一ひと声、一と声とその悲しさを増してつづいていた。

「おい、どつかで女が泣いてるじゃねえか」

「ウン、そうよなあ、おれもさつきから不思議に思っていたんだよ」

見物席の騒擾の中に、あちらでもこちらでも、ボソボソと、そ

んなささやきが取りかわされた。

しばらくは熊の狂態にあっけに取られて、攻撃を忘れていたかにみえる猛虎もうこも、そうそうはじつとしていなかった。そればかりか、敵の狂態が烈はげしい昂奮こうふん剤となつて彼の闘志を刺戟しげきした。

「ウオーツ……」

ただ一と声、凄惨せいさんな咆哮ほうこうが響いたかと思うと、虎は矢のよ
うに第二の突撃をこころみた。

黄色と黒とが、一瞬にして一団となり、クルクルと檻おりの中をこ
ろがりまわつた。

「ワーツ、ワーツ」

と上がる喊声かんせい、だが、その喊声を縫うようにして、さつきか

らの哀れな女の叫び声が、かん高く、細く細く、見物たちの耳の底に突き通った。

ああ、一体どんな女が、どこで泣き叫んでいるのであろう。ともすれば、それは可哀かわいそうな大熊が、救いを求めて、悲鳴を上げているのではないかとさえ幻覚された。でも、まさか、あの凶体の猛獣が人間の若い女みたいな泣き声を立てるはずもないのだが。

「キーツ」

と悲鳴のようなブレーキの音を立てて、明智たちの乗っている自動車が急停車した。

「チエツ、ご丁寧ていねいに貨物列車ときてやがらあ」

運転手が憎々しげに舌うちしたのももつともであつた。彼らの前には、黒と黄のんだら染めの交通遮断機しやだんきが長々と横たわり、その向こうを、まつ黒な機関車が、ゼイゼイ息を切らしながら、何十台という長い長い貨物車を引っぱって、ゴットンゴットン、さも呑気のんきらしく通過していたのである。

「あつ、しまった。神谷君、運の尽きだ。見たまえ、もう一時を十五分も廻まわっている。ひよつとしたら間に合わないかもしれん」
明智がまつ青な顔をして、眼を血走らせて、うめくように言つた。

だが、神谷青年にはその意味がよくわからなかつた。

「さつきから聞こう聞こうと思つていたのですが、いったい僕た

ちはどこへ行くんですか。間に合わないというのは何に間に合わないのですか」

「僕の家内の命の瀬戸ぎわです。殺されかけているんです。探偵のくせに女房一人救えないなんて……畜ちくしやう生、どんなことがあっても、救ってみせるぞ」

彼は燃えるような敵意をこめて言い放ったが、次の瞬間には、
又しても不安と焦しやうりよ慮にくずおれていた。

「ああ、しかし、だめかもしれない……この長い長い貨物列車が、僕の悪運を象徴しているのかもしれない」

美しき半人半獣

サーカスの舞台では、ピシーン、ピシーンと鞭むちが鳴る。檻おりの横手にピカピカ光る金色のいちもつ一物。それは名にしおう猛獣団長大山ヘンリー氏の闘牛士そっくりの扮装ふんそうであつた。彼の右手がサツと空を切るごとに、血に餓うえた猛獣たちをいやが上にも狂乱せしめる鞭むちの音が、檻おりの上空に鳴りはためくのだ。

「虎とらこ公！ 虎公！ なにをグズグズしてるんだよう。くつちまえ！ やつつけちめえ」

酔っぱらっているような胴間声どうまごえが響きわたつた。

「のしちまえ……」「しつかりしろ……」

などのかん高い声々が、コーラスのように湧わき起こつた。

だが、不思議に堪えぬのは、その怒号を縫って、まるでその場の情景にそぐわない女の悲鳴が絶え絶えに、今にも死にそうな不吉感をもつて、どこからともなく聞こえてくる事であった。

黄色と黒の一団の玉となつて檻の中をころげまわっていた二匹の猛獣は、やがてサツと離れた。と言つて、大熊の方は、まるで失神でもしたように、不恰好ぶかつこうに倒れたまま動かなかつた。ただ虎の方で勝手に飛びかかり、勝手に飛び退いているように見えた。猛虎もうこを一匹の猫ねことすれば、凶体はその二倍もある熊の方が、一匹ねずみの鼠にすぎなかつた。彼は身をすくめてしまつて、相手の思うがままにもてあそばれているのだ。

虎は青く光る眼で、さも楽しげに大きな敗北者を眺めながら、

グルグルとそのまわりを歩いていった。歩きながら、まつ赤な口をギヤツとひらいて、嵐あらしのように咆哮ほうこうした。

猛獣団長のしなやかな鞭が何かの意味をこめて、つづけさまに鳴り響いた。その、今までとはまったく違った、まるで奇妙な笛のように聞こえる空気切断の音響が、見物席を昂奮こうふんの絶頂に導いた。物狂おしい喊声かんせいが、津波のように舞台の檻を目がけて押しよせた。

とら 虎の眼が刻一刻 兇暴きようぼうの輝きをまして行つた。口辺の醜い皺しわがさらに醜く醜くゆがんで行つた。そして、血に餓えた白い牙きばが、徐々にその長さ鋭さをまして行くかとさえ思われた。

アツという、眼にも止まらぬ素早さであつた。仰向きあおむに倒れて

もがいている熊の喉のどぶえ笛ふえに、虎の牙が突き刺さっていた。強きょうじ
鞞んな肩の筋肉がムクムクと盛りあがって、太い首が鋼鉄の器械
のように左右に振り動かされた。

「ワツ、やられたっ！」

という感じで、見物席は又しても総立ちとなった。敗北者熊へ
の声援が、一としきり大テントをゆるがした。

だが熊は、不甲斐ふがいなくも、あくまで無抵抗であった。なんて弱
虫な猛獣だろう。今にこいつが本気に怒り出したらと、そればか
りを待ち構えていた見物たちは、あまりのことに失望しないでは
いられなかった。

「おい君、変だぜ。あの熊はあんなにひどく喉くを喰い破られてい

るのにちつとも血が出ないじゃないか」

最前列の見物の中に、そんなつぶやきが聞こえた。いかにも、熊の喉からは一滴の血も流れてはいなかった。虎の牙は月の輪のあたりに食い込んで、首を振るたびごとに、その皮がメリメリと裂けてゆくのがハッキリ見えているのに、血の流れ出すけはいさえないのは、実に不思議というほかはなかった。あれは剥はく製せいの熊だったのかしら、いやいやそんなはずはない。剥製はくせいの動物があんなにもがいたり、逃げまわったりできるものか。

だが不思議はそれにとどまらなかった。やがて、前列の見物たちのあいだに異様などよめきが起こった。大熊の喉のどのあたりに集中された百千の眼が、物狂おしいギラギラした光を放ちはじめた。

誰も彼も気が狂いそうであった。恐ろしい悪夢にうなされているような、なんとも形容できない戦慄せんりつに襲せわれた。

「なんででしょう？ え？ あれはいつたいなんででしょう？」

最前列の商人ていの男が隣の青年にしがみつくようにしてワナふる震えながら口走った。そこにも、ここにも、ゾツとするつぶやきが湧わき起こった。

見よ、熊の喉のあたり、するどい牙きばに引き裂かれた表皮は虎の顎あごの後退につれて、メリメリとめくれ上がって行つたではないか。しかも、一滴の血が流れるでもなく、赤い肉が現あらわれるでもなく、その下からは意外ともなんとも、まっ白な、いや、むしろ蒼白そうはくな、何かスベスベしたものが、一寸一寸と、見物の眼に暴露され

てきたではないか。

虎は案外造作ぞうさくなく熊の皮がめくれて行くので、無邪氣むじやきに面白がつて、グングンあとじさりをつづけた。すると、その力につれて、まるであらかじめ裂け目がこしらえてでもあつたように、熊の皮は喉から胸、胸から腹へと、一文字に引き裂かれて行つた。引き裂かれるに従つて、皮の中の白いなめらかなものが、みるみる大きく現われてくる。

総立ちになつた見物たちは、もう咳せき払いするものさえなく、化石したように動かなかつた。さいぜんからの喧騒けんそうに引きかえて、大テントの下は、失神したように静まり返つてしまった。ただ彼らの百千の手のひらに、ネットリとした脂汗が、ジワジワにじみ

出すばかりであつた。

明智小五郎と神谷青年の同乗した自動車の前を、長い長い貨物列車がやつとのことで通過した。踏切りのだんだら染めの遮断しゃだん機きがスーツと空に上がったかと思うと、待ちかねていた自動車、自転車の一群が、先を争つて動きはじめた。

「チエツ、かつきり三分も待たせやがったぜ」

運転手は舌打ちをして、スターターを踏んだ。ガリガリというやけな音と一緒に、ガソリンの煙が車内に逆流した。そして、車は邪魔つけない自転車どもを押しよけるようにして、でこぼこの鉄道線路を乗り越えて行つた。

明智は青ざめた顔で前方を凝視したまま、もう物を言わなかった。全身がワナワナ震ふるえているのは自動車の震動のせいばかりではないように見えた。ポケットに突っ込んでいた右手が、ほとんど無意識に膝ひざの上に飛び出してきた。その手は、一いっちょ挺ようのホルト拳けん銃じゆうを汗ばむほど握りしめていた。

神谷青年は横眼遣いに、この無気味な飛び道具をジロジロと眺ながめたが、何も言わなかった。彼は、さいぜん明智が「人間豹ひょう」の部下の大男を縛しばり上げたとき、そのポケットからこのピストルを抜き取って、明智自身のポケットへすべり込ませたのを記憶していた。

車は又しても恐ろしい速度を出して、前方の自動車どもを一台

一台と追い越して行つた。眼の届く限り、たんたん坦々たる一直線の大道路、その遥はるか彼方かなたの空に、大気の中のクラゲのように、ポツカリと浮き上がったアド・バルーンが小さく眺められた。

丸い気球の下に、何か赤い点々のようなものが、ヒラヒラしている。広告文字に違いない。だが、自動車は疾風の早さである。みるみる、その赤い点々が七ポイント活字ほどの小ささに、それから、八ポイント活字、九ポイントと徐々に大きくなって、やがて動揺する車からも、はつきり読み取れるほどに拡大した。

「猛獣大格闘……乙曲馬団」

ああ、それは目ざす乙曲馬団のアド・バルーンであつた。あの風船の下にテント張りの見世物が興行しているのに違いない。

舞台の檻おりの中では、熊の皮がほとんど剥はげるだけ剥はげてしまっていた。まるで蜜柑みかんの皮でもむくように、なんの造作ぞうさもなく……これはまあ一体何事がはじまったのだ。

鳴りを静めた大群集は、彼ら自身の眼を疑わないではいられなかった。これは今ほんとうに起きているのかしら。それとも、何か飛んでもない幻覚を見ているのではあるまいか。こんなベラ棒ちんじな椿事ちんじが、果たして現実世界に起こり得るのであるだろうか。

檻の中では、そういう椿事を惹ひき起こした当とうの虎さえも、あつげにとられて、むしろ恐れをなして、一方の隅へ逃げ込んだまま、身をすくめてしまった。

ただ見る、檻の中央には、上半身がまっ白で下半身がまっ黒な、お化けのような一物が、スツクと立ち上がっていた。だが、それはなんと艶め^{なま}かしくも美しいお化けであったか。熊の皮の中から現われた白くてなめらかなものは、人間の皮膚であったのだ。しかも若くて美しい女の皮膚であったのだ。

乱れた髪の毛、泣き濡^ぬれた顔、胸も腕も、上半身はあますところなく露出していた。ただ、幸いにも下半身には厚ぼったい熊の毛皮がまといついたまま離れぬので、女はその上の恥をさらすま^までは至らなかつた。やっぱり熊は剥^{はく}製^{せい}も同様であつたのだ。その中に生身の美女を包んだ拵^{こしら}えものにすぎなかつたのだ。

しかし、見物たちは、この白昼のあやかしに魂を奪われて、急

にはそれと気づくこともできなかつた。陸の人魚というものがあ
るならば、それは文字どおり陸の人魚であつた。美女と野獣との
混血児、怪しくも美しき半人半獣の妖怪としか感じられなかつた。

美しき妖怪は、艶つややかに笑つていた。いや、笑うような口つき
で泣き叫んでいた。彼女は最初立ち上がるまでは、麻酔剤によつ
て意識を失つていたのだが、突如として眼ざめたとき、熊のかぶ
りものの二つのガラス玉に写つたものは、彼女に向かつて襲いか
かる一匹の猛虎もうこであつた。彼女は半狂乱となつて逃げまどつた。
逃げまどいながら助けを求めて泣き叫んだ。そのかぶりものの中
での泣き声が、ずっと遠方からのように感じられ、先刻以来、見
物たちに一種異様の不安を与えていたのであつた。

群集はそれを悟ったものもあり、悟らないものもあつた。だが、一様に思い出したのは、さいぜんの大山ヘンリー氏の不思議な口上であつた。

「猛獣は泣き叫ぶのです。狂乱して逃げまどうのです。ああ、まるで、それは人間のように、か弱い美しい女のように、助けを求めて泣きわめくのです。皆さんの前にどんな美しくむごたらしい光景が展開いたしますことやら。凄絶せいぜつ、惨絶、奇絶、怪絶、おそらくは観客諸君の夢にも想像されぬところでござりましょう」

何かそんなふうな意味のとれない奇怪至極しごくの文句があつたのを思い出した。あれだ。あれはつまりこの事を意味していたのだ。すると、熊の皮が剥はがれたのも、中から美人が飛び出したのも、

すべてあらかじめ計画されていたことに違いない。「喰うか喰われるか」などと、こけおどしの広告をして、その実は、こういうなま艶めかしいお茶番を見せるのが、この呼び物の思いつきであったのかもしれない。

だが、この半人半獣に扮ふんしている女猛獣使いは、なんてすばらしい女優であろう。あの真に迫った恐怖の表情はどうだ。あのソプラノの泣き声の美しさはどうだ。

見物はもう夢中であつた。ものを言うこともできなかつた。手を叩くことさえ忘れていた。なまつば生唾を呑み込み呑み込み、眼をみはつて、口をあけて、名女優の命がけの演技に見とれていた。

かようにして、艶めかしき半人半獣の驚くべき恐怖舞踏がはじ

まった。彼女の足はよろめき、胸は烈はげしい呼吸に波打ち、声はすでに噎かれがれであつた。

「助けてえ……助けてえ……」

恐れに飛び出した両眼と調子を合わせて、真底から救いを求める叫び声がほとばしつた。

猛虎もうこはいつまでも身を縮めてはいなかつた。彼はやつと隅つこから立ち上がると、何かいぶかしげに、この美しい人獣のまわりを、グルグルと歩きはじめた。裸女は防ぐように両手を前へ突き出し、虎の歩く方へと顔を向けて、よろめきながらからだを廻まわしている。もう泣き叫ぶ力もなかつた。ただ、恐ろしいけどものから眼を放すことができないのだ。猫ねこに魅入みいられた鼠ねずみのように、相

手の恐ろしい形ぎようそう相を見つめたまま、視線をそらす力がないのだ。

虎とらの描く円周は、だんだん狭せばめられていった。そして、時々立ち止まると、ちよつかいを出すように、その前脚を上げて、女人のからだにさわろうとする。そのたびごとに身の毛もよだつ叫び声きこが、見物の胆きもにこたえて響きわたるのだ。

何度もそれを繰り返しているうちに、とうとう、虎のするどい爪つめが美人の肩に触れた。たちまちにじみ出す鮮血が青白い肌をツルツルとすべりおちた。そして、その長い毛糸のような真紅が半人半獣の肌の白さを、眼もさめるばかり際立たせた。

大空の爆笑

見物たちはまだおしだまっていた。大テントの下はまるで墓場のように静まり返っていた。だが、その沈黙の中に、何かしらお化けみたいな^{はげ}烈しい疑惑がただよいはじめているように見えた。

「これがお芝居なのかしら。お芝居にあれほど真に迫った恐怖の表情ができるものだろうか。第一いくら商売といっても、美しい肌、あんなひどい傷をつけられて、平気でいるなんて、常識では考えられないことだ」

「ひよつとしたら、あの女は猛獣使いでもなんでもない、素人^{しろうと}娘かもしれないぞ。すると、これはまあなんて恐ろしいことがは

じまつたものだろう。大群集の面前での人殺しじゃないか。しかも、猛獣の牙きばにかけて、一寸だめし五分だめしの、無残この上もない人殺しじゃないか」

見物たちの頭の中に、そんな判断力が、ぼんやりとよみがえりかけていたとき、突如として、どこかしら高い所から、男の笑い声が降ってきた。カラカラという乾ひからびたような、しかし、ひどく傍若無人な高笑いであつた。

千百の顔が、一いっせい齊せいに天井を見上げた。

天井には、曇り日の空のような白っぽいテントがあつた。テントのすぐ下には、荒あんなわ縄なわでくくつた丸太棒まるたんぼうが縦横無尽こうさくに交錯こうさくしていた。その丸太棒の一本に、ポツツリと雀すずめのようにとまつて

いる人の姿があつた。そいつが、舞台の惨劇を見おろして、さも
おかしくて堪たまらないというふうに、ゲラゲラと笑つてゐるのだ。

その男の顔立ちは、遠くではつきりしなかつたけれど、見物たち
は、彼のつぶらな両眼がまるでけだもののように、青く燃え立っ
てゐるのを見のがさなかつた。燐りんのように光る眼だ。とうとう、
あいつが姿を現わしたのだ。

群集はそれを見ると、一そう氣違いいじみた昏迷こんめいにおちいらな
いではいられなかつた。氣の弱い人々は、一目散にテントのそと
へ逃げ出したい衝動を感じた。

舞台の檻おりの中では、美しい半人半獸が、今は氣力も尽きはてて、
グツタリと倒れたまま動かなかつた。氣を失つたのであろう。虎

の鼻はなづら面めんがすぐ眼まなこの前に迫せまつても、声こゑも立てなければ、身動みぶきさ
 えもしなかつた。その白蠟はくろうのようように美うつくしい肌はだの上に、一条いちじょうの血ち
 汐しおが、赤あかい蛇へびとなつてからみついてついていた。

檻いの横手よこてにたたずむ猛獸まうじゆ団長だんぢやうの顔かほはドス黒くろく昂かう奮ふんして、その
 偉大ゑいたいなる将軍しやうじゆんひげは激情げきじやうにうち震ふるえ、つぶらな両眼りやうがんはまっかまに充み
 血ちしていた。彼は手てにする鞭むちを、物狂ものぐるわしく空中くうぢゆうに振りつづけた。
 ヒューツ、ヒューツという嵐あらしのようような音響おんきやうが、血ちに餓うえた虎こを、
 いやが上うへにもいらだたせた。彼は見物けんぶつ席せきに向かむかつて一ひと声高こゑたかく咆ほ
 哮うこうしたかと思おもうと、いきなり二本にほんの前脚ぜんきゃくを倒たおれている美女みよめの胸むね
 にかけて、その喉笛のどぶえに、今度こんどこそは生なきた人間にんげんの喉笛のどぶえに、牙きばを
 突き立てようとした。

ガブリ、ただ頸くびと顎あごの筋肉が一と縮みすれば事は終るのだ。一個の人命が断たれるのだ。

見物たちのうちに、これをしもお芝居と考えるものは、一人もいなかった。千百の顔が、一刹いっせつな那ハツと色を失って思わず舞台の上から眼をそらした。次に起こるべきあまりにもむごたらしい光景を、正視するに忍びなかったのだ。婦人客は両手で眼を覆おおつた。

読者諸君、われらのヒロイン明智文代さんの一命は、かくして猛虎もうこの筋肉の一と縮みにかかっているのだ。諸君もすでに推察されたように、人間豹ひょう親子は、美しい明智夫人を誘ゆう拐かいして、熊の毛皮をかぶせ、大胆不敵にも、公衆の面前で、見るもむごたらし

い悪魔のリンチを行なおうとしているのだ。

天井の丸太棒につかまった「人間豹」恩田と、猛獣使い大山ヘンリーになりすまして、鞭をうち振るその父親とは、数丈の上と下とで、ひそかに顔を見合わせて、わが事成れりと肯うなずき合つた。そして、父親の鞭は、いよいよその音を高め、「人間豹」の笑い声はますます傍若無人になりまさるのであつた。

その時である。

観客たちは、何かしら頭の芯しんを貫くような、一瞬の衝動を感じた。おやつ、どうしたんだ。ああ多分やられたのに違ちがいがない。彼らは、鮮血にまみれた虎とらの顎を想像しながら、でも怖こわいもの見たさに、そらしていた眼を、一いっせい齊に舞台に向けた。

すると、これは一体何事が起こつたのだ。殺されていたのは、人間ではなくて虎の方であつた。彼は脳天から一と筋の血を滴したたらして、グツタリと横たわつていた。もう身をもがく力もない。おそらく一瞬にして息絶えたものであろう。

美しい半人半獣の方は、やっぱり失神したままであつたけれど、肩の搔かき傷のほかにはなんの別状もなく、危くも虎の顎をのがれたのである。

丸太棒の上の笑い声がパツタリとやんだ。大山ヘンリー氏の鞭むちが動かなくなつた。彼は何がなんだかわからず、キョトンとして見物席を眺ながめていた。

すると、彼の視線の中を、見物席をかき分けながら前に進んで

くる人物があつた。職工姿の明智小五郎だ。神谷青年だ。それから制服私服の一団の警察官だ。言うまでもなく、危機一髪さかいの境さかいに猛虎もうこを射殺した名射撃手は明智であつた。彼の右手に握られたコルト拳銃けんじゆうから、名残りの白煙がかすかに立ち昇つていた。

彼のあとにつづく警官は、明智の電話によつて恒川警部が手配してくれた、K警察署からの先発隊であつた。明智が乙曲馬団の木戸口に着いた時には、彼らはもう自動車を降りて明智の到着を待ち構えていた。

「明智さんだ。明智さんだ」

変装はしていたけれども、さすが大衆の眼早さで、見物席のどこからともなく、名探偵讚美の声が起こつた。彼らは新聞記事に

よつて、明智小五郎と「人間豹」^{ひょう}との対立をよく知っていた。明智夫人誘拐^{ゆうかい}事件についても、けさの新聞を読んだばかりだ。その明智探偵が、物々しい警官隊と共に乗り込んできたからには、怪人「人間豹」がこの小屋の中に潜^{ひそ}んでいることは十に一つも間違いはない。いや、それどころか、あの檻^{おり}の中で虎の餌食^{えしき}になるうとした美しい人は、きつと明智夫人文代さんにきまつている。ああ、なんとという恐ろしい場面に出くわしたものだろう。敏感な人々は、たちまち事の真相を悟^{みづる}つて身震いを禁じ得なかつた。

大山ヘンリーに変装した「人間豹」の父親は、明智の姿を認めると、サツと顔色を変えて逃げ出そうと身構えたが、すばやい警官隊は、むろんその余裕を与えず、ドカドカと舞台に駈^かけ上がった。

て、彼のまわりを取り囲んでしまった。

するとさすがは老怪物、逃げ腰になっているのをシャンと立て直して、將軍ひげを震わせながら、声のない笑いを笑った。そして、ゆっくりゆっくりズボンのポケットに手を入れると、いっちょよ一挺うの小型ピストルを取り出して、警官たちの鼻の先につきつけるのであった。

その頃、場内は津波のような混乱におちいつていた。木戸口に殺到する群集のわめき声、しょうぎ将棋倒しの下敷きになって悲鳴を上げる老人、泣き叫ぶ女子供、その騒然たる物音の中にひ一ときわ高い怒号の聲が、かなたこなた彼方此方に響きわたっていた。

「人間豹だ」

「人間豹があすこにいる」

「ああ、逃げ出した。人間豹は屋根の上へ逃げ出したぞ」

見上げると、天井に交錯こうさくした丸太棒まるたんぼうの上を、さいぜんの笑い声のぬしが、一匹の黒猫くろねこのように、眼にも見えぬ早さで走っていた。或いは縦あるによじ登り、或いは斜めにすべり、或いは横に綱渡りをして、丸太棒から丸太棒へと、伝い伝って、彼はついに、テントの裂け目から屋根の上に出てしまった。

透き通って見える白い帆布ほぬのの上を、動物とも人間とも見分けのつかぬ奇怪な黒影が、丸くなつて、飛ぶがごとく跳ねるがごとく走って行く。

今や場内に居残った大群集は残らず「人間豹」の敵であつた。

彼らは声を揃そろえて、逃げ行く悪魔を囓はし立てた。気の早い兄いたちは、二人三人と、勇敢ゆうかんにも丸太棒をよじ登って、「人間豹」を追っかけはじめた。乙曲馬団の人たちもおくれはしない。道具方の青年、空中曲芸の軽業師かるわざしなどが四人五人、明智小五郎の指図を受けて、猿のように天井へと駈かけ上って行った。

乙曲馬団と「人間豹」親子とは、別に深い関係があるわけではなかった。ただ二匹の猛獣をつれた親子のものが、西洋帰りと称して、乙曲馬団に取っては非常に有利な条件で、臨時加入を申し込んだものだから、殺人犯人とは夢にも知らず、その申し込みに応じて、宣伝などをしたまでであった。したがって、乙曲馬団の全員も、今は決して「人間豹」の味方ではなかった。

「そとへ廻れ、そとへ廻れ、そとへ廻れ、人間豹は屋根から飛び降りて逃げる気だぞ」

群集の叫び声に教えられるまでもなく、明智はすでにその手配をしていた。警官隊の一部と曲馬団の男たちが、テントのそとへ飛び出して、小屋の周囲に散兵線を敷いた。明智自身も彼らのあとにつづいてそとに出ようとした。そとの広場に立って、屋根の上の捕物とりものを監視したいと思ったのだ。だが、彼がそうして木戸口へ急いでいるとき、うしろの舞台で、突如として一発の銃声が聞こえたかと思うと、人々の烈はげしい罵り声ののしが爆発した。

ハツとして振り向く眼の前に、一つの悲劇が終っていた。将軍ひげいかめしい鬪牛士は、金モールの胸から血を流して不恰好ぶかつこう

にくずおれていた。彼は包圍の警官たちを威嚇いかくしていた。ピストルで、われとわが胸を射貫いぬいたのだ。運の尽きを悟つてか、悪魔に似合わぬいさぎよい最期さいごであつた。

ちようどそのとき、又しても一隊の警察官が、木戸口からなだれ込んできた。

「おお、明智君、奥さんは大丈夫か」

先頭に立つた恒川警部が、先まずそれを尋ねた。

「ウン、やつと間に合つた」

明智は舞台の一方を顎あごでしやくつて見せた。そこには、曲馬団の人たちの手で、檻おりから助け出された文代夫人が、まだ意識を失つたまま、座蒲団ざぶとんを積みかさねた上にグツタリとなつていた。

「だが、残念なことに、犯人の一人が自殺してしまつた」

「ああ、そこに倒れている……するとあれが恩田のおやじだね」

「そうだよ。猛獣使いに化けていたんだ」

「で、息子むすこの方は？」

「屋根の上へ逃げ出した。あれを見たまえ」

明智が指さす大テントの天井には、右往左往する捕物とりものの人々

が、異様な影絵となつて入り乱れていた。

「そとへ出てみよう」

明智と恒川警部と新来の警官たちとは、大急ぎで木戸口を出ると、見世物小屋のうしろの広場へ駈かけつけた。そこは、先に配置された警官や、曲馬団員や、帰りそびれた見物たちで、黒山の人

だかりであった。

明智たちは、それらの群集のうしろの小高い場所に立って、テントの屋根の斜面上での、はげ烈しい捕物を監視した。

まっ黒な背広を着た「人間豹」ひょうは、彼の本性の四つん這いばになつて、広いテントの白地の上を、縦横無尽に跳ねまわっていた。

だが、おって追手の中には、野獣にも負けぬ軽業かるわざの名手が、二人も三人もまじっている。その上、逃げるのは一人、追つ駈かけるのは十人に近い人数だ。さすがの「人間豹」も徐々に徐々に、屋根の隅へと追いつめられて行つた。

「いよいよあいつも運の尽きだね。飛び降りるか、でなきやあ：
…」

恒川警部がそんなことをつぶやいた時、まるで言い当てでもしたように、空の黒豹は、屋根の端からすばらしい跳躍をしたのである。

四つん這いの黒いからだ、尺とり虫のように縮んだかと思うと、やにわにサツと延びて、空中に見事な弧を描いた。

それを見ると、地上の群集は「ワーツ」と叫んで、逃げ足立つたが、不思議なことに、いつまでたっても、黒^{くろひょう}豹は墜落してこなかった。

「アツ、風船だ。風船へ逃げた」

誰かのどなり声に、人々は又一^{いっせい}斉に空を見上げた。すると、

これはどうだ。逃げる場所もあろうに、「人間豹」はアド・バル

ーンの綱にすがりついて、屋根のそとの空中にぶら下がっていたのである。

広告風船は、風にゆらめきながら、銀色の巨体を、遙かはるの空に浮かべていた。風船の下には「猛獣大格闘……乙曲馬団」の紅文字が、ヒラヒラとひらめいて、そこからスーツと流れた一条の綱が、ちょうど明智たちの立っている広場の片隅、風船昇降用の口クロまでつづいていた。

「ロクロを捲まけ、ロクロを捲まけ」

人々は叫びながら、ロクロに駈かけ寄って、三人四人五人と力を合わせ、ヨイトマケ、ヨイトマケ、ヨイトマケ、広告風船の綱を捲きとりはじめた。

あわれ稀代きだいの殺人魔「人間豹」も、もはやのがれるすべはなかつた。ロクロの廻かいてん転につれて風船の綱はみるみる縮まつて行く。そして結局風船が地上におろされたとき、「人間豹」も逮捕の運命をまぬがれることはできないのだ。この大捕物の大団円も、もはや五分、三分の後に迫っていた。

だが、綱につかまつた「人間豹」は、諦あきらめわるく上へ上へと昇つて行く。ロクロが一尺捲きとれば、彼も一尺昇るのだ。そして、巨大な風船が、テントの屋根とすれすれまで引きおろされた時にも、黒豹は依然として元の空中にただよっていた。すでに「乙曲馬団」の四文字を昇りつくし「大格闘」の大的字のあたりにしがみついていた。

「オーイ、むだな骨折りをさせるな、早く降りてこい」

地上の警官たちが業をにやして、空中の犯人に呼びかけた。

「ワハハハハハ、諸君、君たちこそむだ骨折りはよしたまえ」

空中からの応答が、風に吹き飛ばされながら、かすかに聞こえてきた。

「ああ、明智君、恒川君もそこにいるんだね。ご苦労さま。だが、君たちは又むだ骨折りをするばかりだぜ」

「人間豹」は赤い「大」の字の前にぶら下がって、傍若無人の憎まれ口を叩いたたた。

「馬鹿野郎、文句はあとでゆつくり聞いてやる。早く降りてこい。往生ぎわがわるいぞう」

警官が負けずに応酬した。

「アハハハハハ、君たちおれをつかまえた気でいるのかい。ハハハハハ、こいつはお笑い草だ。なぜと行ってね、おれは決してつかまらないからな」

叫ぶかと思うと、空中の恩田の右手にキラリと光るものがあつた。大型ナイフだ。そのナイフが彼の腰のあたりの綱の上を^{はげ}烈しく左右に動くよと見る間に、たちまち綱はプツツリと切断された。切断されるが早いか、今までロクロと数人の力とで地上に引きつけられていた風船は、まるで鉄砲玉のように恐ろしい早さで天空に舞い上がって行つた。

「ワハハハハハ明智君、あばよ。恒川君、あばよ。ワハハハハハ」

飛び上がる風船と共に、悪魔の哄こう笑しょうは、スーツと、尾を引くように、遙はるかの天空へと消えて行つた。しばらくのあいだは、銀色の風船の下に、片手と両足でつかまつた、小さな黒い人の姿が、地上の群集に向かつてしきりと手を振っているのが眺ながめられたが、やがてそれも見えなくなつて、ただゴム毬まりほどの銀色のものが、風のまにまに白い雲のあいだを縫つて、東京湾の方角へ流れ流れて行くのを見るばかりであつた。

その翌日、相模半島の漁船が、沖合遙かの海上に、銀色の大ダコのような怪物がただよっているのを発見した。調べてみると、それは乙曲馬団のアド・バルーンに違いないことがわかつたが、

「人間豹^{ひょう}」恩田の死体は、ついにどこの海岸に打ち上げられたという報告にも接しなかった。彼は風船と悪運を共にして海底の藻^も屑^{くず}と消えたのであろうか。それとも、運命強く通りがかりの船などに救われ、まだこの世のどこかの隅に、あの燐^{りん}光^{こう}の眼を光らせて、再度の悪事を計画しているのであろうか。

だが、それから一年以上のあいだ、われわれは彼の消息をまったく耳にしないのである。たとえ生き永らえているにせよ、人間獣の害悪は一^ひと先^まずこの世から除き去られたと言わねばならなかった。

かくして、私立探偵明智小五郎の名声は独^{ひと}り高く、彼の美貌^{びぼう}の妻文代さんの奇^くしき運命の物語はいたるところの話題にのぼり、

長く人々を感動せしめたのである。

ただここに一つ、永遠に解きがたき謎が残されていた。その眼は無気味な燐光を放ち、その牙は野獣のごとく鋭く、その舌は猫属のささくれを持つ怪物「人間豹」が、いかにしてこの世に生を享けたかという疑問である。事件の後、世間には人獣混血の説が喧伝された。恩田は生るべからざるに生れた地獄の子であったというのだ。彼らの論拠は、恩田の父親がなぜあれほど豹を愛したか。その豹を射殺しなければならなかった時、なぜあれほどまでに悲しんだか、そして、寵愛の豹を失った彼が、一年の後、浅草の動物園から、又しても同じ動物を盗み出さなければならなかった理由はなんであるか、というような漠然とした事柄に

すぎなかつた。言うまでもなく、単なる臆測^{おくそく}である。科学^{がえん}の肯じない臆測である。

そこには、恩田の父親だけが握っている、恐ろしい秘密があつたのかもしれない。だが、その父恩田はもはやこの世の人ではなかつた。彼の自殺と共に、「人間豹」の奇怪事は、千古に解きがたき謎として残されたのである。

では、あの浅草の動物園から盗み出した豹は、いったいどうなつたのか。読者諸君は、それをいぶかしく思われるに違いない。だが、あの豹は父恩田と運命を共にして、サーカスの舞台で最期^{さいご}をとげたのだ。檻の中の虎^{とら}と見えたのは、実はお化粧をした豹であつた。犯人たちは盗み出した豹の始末に困じ果てたに違いない。

あのような眼立ちやすい生きものを連れて、人眼をくらましていることはまったく不可能であった。豹を隠さなければならぬ。だがどうして？ 魔術師はそれについて実に奇想天外な手段を思いついたのであった。

彼らは人間の白毛染め薬を用いて、豹の斑紋はんもんを巧みに染めつなぎ、動物のからだ一面に虎斑とらふを描き上げたのだ。人々は豹を探している。虎を探しているのではない。それゆえ、虎を連れだした猛獣使いが突如として東京に現われたとしても、ただちにそれと疑われる気遣いはなかったのだ。

彼らはその虎と、文代さんを包んだにせ物の熊とを連れて、伝つ手を求めて乙曲馬団に加入した。むろん彼らの虎にも、熊にも、

曲馬団の人たちを決して近寄せなかつた。かくして二重三重の目的が達せられた。恩田父子と豹とが安全に身を隠し得た上に、誘拐ゆうかいした文代さんまでも、まったく人眼のとどかぬ熊の檻おりの中に監禁しておくことができたのだ。いや、そればかりではない。猛獣格闘の見世物と称して、はれがましい大群集の面前で、その文代さんを豹の餌食えじきにして見せるという、無残きわまる大芝居さえ演じることができたのである。彼らはこの悪魔の虚栄心に、殺人演技の魅力に、なかば狂せるがごとく、ついにはわが身の危険をさえ忘れ果てたかのように見えた。

「人間豹」事件は、明智小五郎が取り扱った多くの犯罪事件の中でも、最も奇怪な色彩のものであつた。当の被害者が、愛妻の文

代さんであったという意味だけでも、彼には長く忘れがたい印象となつて残つた。

「僕はね、あの風船に乗つた恩田のやつが、空の上から僕たちをあざ笑つた気味のわるい笑い声が、いつまでも耳に残つて離れないのだよ。夢に見るのだよ。おそらく一生涯あの声は忘れないだろうね」

明智はそののち恒川警部に会うごとに、きまつたようにそれを言い出すのであつた。

青空文庫情報

底本：「屋根裏の散歩者」角川ホラー文庫、角川書店

1994（平成6）年4月10日改訂初版発行

2003（平成15）年8月25日改訂17版発行

初出：「講談倶楽部」大日本雄辯會講談社

1934（昭和9）年1～2月、5月～1935（昭和10）年5月

※「ありやしない」と「ありやしない」、「あっし」と「わっし」、「喰《く》いつきやしません」と「喰《く》いつきやしない」の混在は、底本通りです。

※表題は底本では、「人間豹《にんげんひょう》」となっている

す。

※誤植を疑った箇所を、「江戸川乱歩全集 第9巻 黒蜥蜴」光文社文庫、光文社、2003（平成15）年10月20日発行の表記にそつて、あらためました。

入力：入江幹夫

校正：nami

2019年9月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

人間豹

江戸川乱歩

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>